京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告　二〇二一－一六　長岡京跡・淀水垂大下津町遺跡　公益財団法人　京都市埋蔵文化財研究所

長岡京跡・淀水垂大下津町遺跡

2023年

公益財団法人　京都市埋蔵文化財研究所

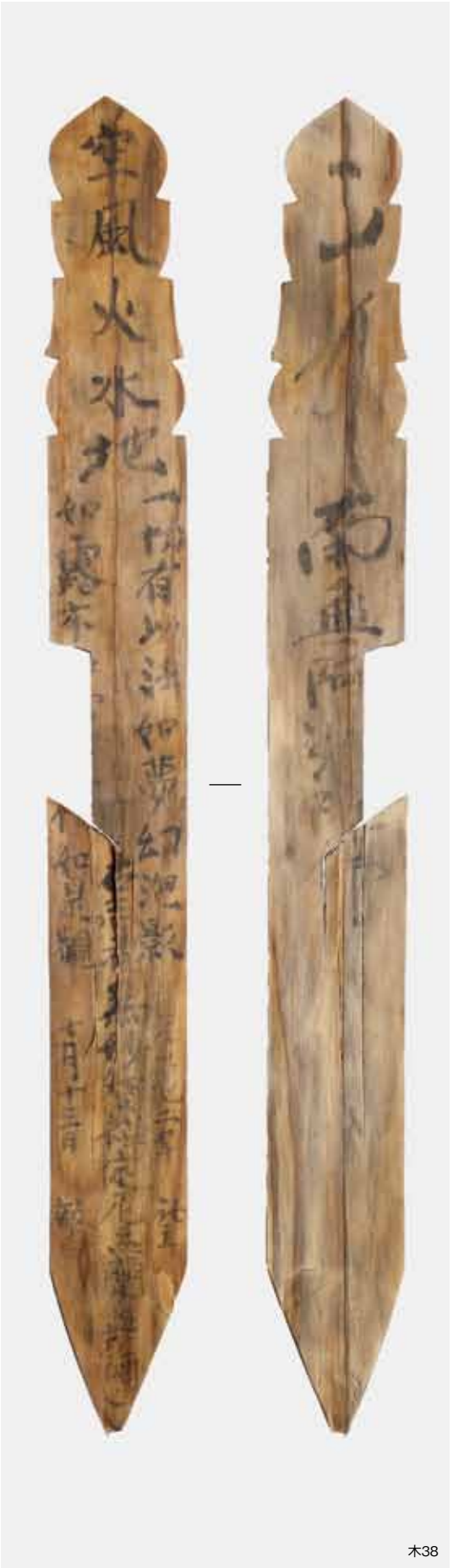
長岡京跡・淀水垂大下津町遺跡

2023年

公益財団法人　京都市埋蔵文化財研究所

調査区遠景（北西から）

1　護岸2125（東から）

2　護岸2125（北東から）

木38

木39

卒塔婆 1

木36

木40

木44

卒塔婆2

序　　文

京都市内には、いにしえの都平安京をはじめとして、数多くの埋蔵文化財包蔵地（遺跡）が点在しています。平安京以前にさかのぼる遺跡及び平安京建都以来、今日に至るまで営々と生活が営まれ、各時代の生活跡が連綿と重なりあっています。このように地中に埋もれた埋蔵文化財（遺跡）は、過去の京都の姿をうかびあがらせてくれます。

公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所は、遺跡の発掘調査をとおして京都の歴史の解明に取り組んでいます。その調査成果を市民の皆様に広く公開し、活用していただけるよう努めていくことが責務と考えています。現地説明会の開催、写真展や遺跡めぐり、京都市考古資料館での展示公開、小中学校での出前授業、ホームページでの情報公開などを積極的に進めているところです。

このたび、桂川大下津地区他掘削工事に伴う長岡京跡・淀水垂大下津町遺跡の発掘調査について調査成果を報告いたします。本報告の内容につきましてお気づきのことがございましたら、ご教示賜りますようお願い申し上げます。

末尾になりましたが、当調査に際しまして多くのご協力とご支援を賜りました関係各位に厚く感謝し、御礼を申し上げます。

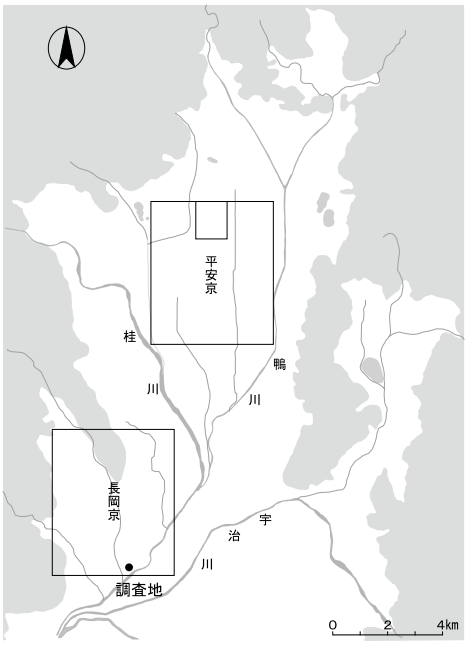
令和５年２月

公益財団法人　京都市埋蔵文化財研究所

所　長　　井　上　満　郎

例　　言

1	遺　跡　名	長岡京跡・淀水垂大下津町遺跡　（京都市番号　21NG269） 長岡京跡左京第656次調査（７AN-YMM-２）
2	調査所在地	京都市伏見区淀水垂町地内
3	委　託　者	分任支出負担行為担当官　近畿地方整備局 淀川河川事務所長　波多野真樹
4	調 査 期 間	2021年11月15日～2022年３月31日
5	調 査 面 積	１区：103㎡、２区：1,537.5㎡　計1640.5㎡
6	調査担当者	松永修平・鈴木康高・伊藤　潔・柏田有香・中谷正和・渡邊都季哉
7	使 用 地 図	京都市発行の都市計画基本図（縮尺１：2,500）「神足」・「納所」・「円明寺」・「淀」を参考にし、作成した。
8	使用測地系	世界測地系　平面直角座標系Ⅵ（ただし、単位（m）を省略した）
9	使 用 標 高	T.P.：東京湾平均海面高度
10	使用土色名	農林水産省農林水産技術会議事務局監修『新版　標準土色帖』に準じた。
11	遺 構 番 号	通し番号を付し、遺構の種類を前に付けた。
12	遺 物 番 号	種類ごとに通し番号を付し、写真番号も同一とした。
13	本 書 作 成	松永修平・柏田有香・中谷正和
14	執 筆 分 担	松永修平：１、２、３－（１）・（３）、４－（１）・（３）～（７）、５ 柏田有香：３－（２）、４－（２）・（８）・（９） 中谷正和：３－（３）、４－（２） 付章：株式会社パレオ・ラボ
15	備　　考	上記以外に調査・整理ならびに本書作成には、調査業務職員及び資料業務職員があたった。



（調査地点図）

目　　次

１．調査経過 …… 1
２．位置と環境 …… 4
（１）地理的環境 …… 4
（２）歴史的環境 …… 4
（３）周辺の調査 …… 7
３．遺　　構 …… 10
（１）基本層序 …… 10
（２）１区の遺構 …… 12
（３）２区の遺構 …… 14
４．遺　　物 …… 25
（１）出土遺物の概要 …… 25
（２）土器類 …… 26
（３）瓦類 …… 34
（４）木製品 …… 34
（５）石製品 …… 38
（６）土製品 …… 39
（７）金属製品・銭貨 …… 39
（８）製鉄関係遺物 …… 40
（９）種実・貝類 …… 41
５．ま と め …… 45
付章　自然科学分析 …… 53

図　版　目　次

巻頭図版１　遺構　調査区遠景（北西から）
巻頭図版２　遺構　１　護岸2125（東から）
２　護岸2125（北東から）
巻頭図版３　遺物　卒塔婆１
巻頭図版４　遺物　卒塔婆２

図版１　遺構　１区第２面〔Ⅳ期〕平面図（１：100）
図版２　遺構　１区第１面〔Ⅱ期〕平面図（１：100）
図版３　遺構　１区西壁断面図（１：100）
図版４　遺構　２区第５面〔Ⅹ・Ⅸ期〕平面図（１：300）
図版５　遺構　２区第４面〔Ⅷ・Ⅶ・Ⅵ期〕平面図（１：300）
図版６　遺構　２区第３面〔Ⅴ・Ⅳ・Ⅲ期〕平面図（１：300）
図版７　遺構　２区第２面〔Ⅱ期〕平面図（１：300）
図版８　遺構　２区第１面〔Ⅰ期〕平面図（１：300）
図版９　遺構　２区下段西壁断面図（１：100）
図版10　遺構　２区上段西壁断面図１（１：100）
図版11　遺構　２区上段西壁断面図２（土色）
図版12　遺構　２区北壁断面図１（１：100）
図版13　遺構　２区北壁断面図２（土色）
図版14　遺構　竪穴建物2240・2356実測図（１：60）
図版15　遺構　竪穴建物2410実測図（１：60）
図版16　遺構　竪穴建物2368実測図（１：60）
図版17　遺構　竪穴建物2400実測図（１：60）
図版18　遺構　土坑2404・2492・2440実測図（2404・2492は１：40、2440は１：50）
図版19　遺構　掘立柱建物2154実測図（１：80）
図版20　遺構　井戸2178、柱列2182実測図（１：50）
図版21　遺構　流路2353東壁断面図（１：50）
図版22　遺構　井戸2225実測図（１：50）
図版23　遺構　井戸2225瓦・板検出状況実測図（１：50）
図版24　遺構　堀2123・2299・2350断面図（１：50）
図版25　遺構　柱列2263・2275・2280実測図（１：50）
図版26　遺構　護岸2125実測図１（１：100）
図版27　遺構　護岸2125実測図２（１：100）
図版28　遺構　護岸2125断面図１（１：60）
図版29　遺構　護岸2125断面図２（１：60）
図版30　遺構　井戸2001・2138実測図（１：50）
図版31　遺構　地業2010・2012実測図（１：50）
図版32　遺構　地業2135実測図（１：80）
図版33　遺構　地業2135掘り下げ状況実測図（１：60）
図版34　遺物　土坑2440・2492、落込2392下層出土土器実測図（１：４）
図版35　遺物　落込2392上層、竪穴建物2356、竪穴建物2400出土土器実測図（１：４）

図版36　遺物　竪穴建物2240出土土器実測図（１：４）

図版37　遺物　竪穴建物2410、土坑2404、竪穴建物2368、溝2325、流路2353、２区断割、掘立柱建物2154、土坑2326、溝2187、井戸2178出土土器実測図（１：４）

図版38　遺物　流路1017、流路1017（最上層）、井戸2225出土土器実測図（１：４）

図版39　遺物　堀2123古段階出土土器実測図（１：４、159のみ１：８）

図版40　遺物　堀2123新段階（下層）・（上層）出土土器実測図（１：４）

図版41　遺物　堀2123新段階（上層～最上層）、堀2123合流部古段階～中段階出土土器実測図（１：４、248のみ１：６）

図版42　遺物　堀2123合流部新段階（下層～上層）・（最上層）出土土器実測図（１：４）

図版43　遺物　堀2123合流部新段階（最上層）、堀2299出土土器実測図（１：４）

図版44　遺物　堀2350（下層）・（上層）、第１面整地層、地業2010、護岸2125出土土器実測図（１：４）

図版45　遺物　溝2140、井戸2001、地業2135出土土器実測図（１：４、404・411のみ１：６）

図版46　遺物　瓦類拓影及び実測図１（１：４）

図版47　遺物　瓦類拓影及び実測図２（１：４）

図版48　遺物　瓦類拓影及び実測図３（１：４）

図版49　遺物　瓦類拓影及び実測図４（１：５）

図版50　遺物　木製品実測図１（１：４）

図版51　遺物　木製品実測図２（１：４）

図版52　遺物　木製品実測図３（１：４）

図版53　遺物　木製品実測図４（１：４）

図版54　遺物　木製品実測図５（１：４）

図版55　遺物　石製品実測図１（１：４）

図版56　遺物　石製品実測図２（１：６）

図版57　遺物　金属製品実測図（１：４）、銭貨拓影（１：２）

図版58　遺構　１　１区第２面全景（北から）
２　炉1013（北東から）
３　土坑1014鉄滓検出状況（北から）

図版59　遺構　１　１区第１面全景（北から）
２　護岸1001（北から）
３　護岸1001断割状況（北東から）

図版60　遺構　１　２区第５面〔下段〕、第３面〔上段〕全景（北から）
２　２区第４面〔下段〕、第２面〔上段〕全景（北から）

図版61　遺構　１　第５面 竪穴建物2240（北東から）
２　竪穴建物2240土器出土状況（北東から）

3　第５面 土坑2440土器出土状況（南から）
図版62　遺構　1　第５面 竪穴建物2368（北から）
2　第５面 竪穴建物2400（北西から）
図版63　遺構　1　第５面 竪穴建物2410（南西から）
2　竪穴建物2410土器出土状況（東から）
3　第５面 土坑2404土器出土状況（西から）
図版64　遺構　1　第４面 掘立柱建物2154（南西から）
2　柱穴2162土器出土状況（北から）
3　第４面 土坑2326土器出土状況（西から）
図版65　遺構　1　第３面 堀2123・2299・2350（北東から）
2　堀2123下段部（南西から）
3　堀2123柿経出土状況（北西から）
図版66　遺構　1　第３面 井戸2225（東から）
2　井戸2225瓦検出状況（北東から）
3　井戸2225板検出状況（東から）
4　井戸2225木枠（北から）
図版67　遺構　1　第２面 護岸2125（北から）
2　護岸2125南部転落石除去後（北東から）
図版68　遺構　1　護岸2125南部裏込断割状況１（北から）
2　護岸2125南部裏込断割状況２（北東から）
3　第２面 井戸2100（北から）
4　井戸2100木枠検出状況（南から）
図版69　遺構　1　２区第１面全景（北から）
2　井戸2001（北西から）
3　井戸2001井戸瓦・多角形縦板（東から）
図版70　遺構　1　井戸2138（北から）
2　地業2010（北から）
3　地業2012（南西から）
図版71　遺構　1　地業2135（西から）
2　地業2135掘り下げ状況（北東から）
3　地業2135詳細（北東から）
図版72　遺物　土器類１
図版73　遺物　土器類２
図版74　遺物　土器類３
図版75　遺物　土器類４

図版76　遺物　土器類５
図版77　遺物　土器類６
図版78　遺物　土器類７
図版79　遺物　土器類８
図版80　遺物　土器類９
図版81　遺物　瓦類１
図版82　遺物　瓦類２
図版83　遺物　１　石製品
　　２　製鉄関係遺物
図版84　遺物　柿経

挿　図　目　次

図１　調査位置図（１：5,000）　…… 1
図２　調査区配置図（１：1,000）　…… 2
図３　１区調査前全景（北から）　…… 3
図４　２区調査前風景（南西から）　…… 3
図５　１区作業状況（北西から）　…… 3
図６　２区作業状況（北西から）　…… 3
図７　柿経取り上げ状況（北西から）　…… 3
図８　オルソ測量風景（南西から）　…… 3
図９　ドローン撮影風景（北西から）　…… 3
図10　埋め戻し終了状況（北西から）　…… 3
図11　調査地周辺遺跡分布図（１：50,000）　…… 4
図12　律令時代における京南の地形と交通路の概要　…… 6
図13　周辺調査位置図（１：5,000）　…… 8
図14　土層模式柱状図（１：40）　…… 11
図15　炉1013、土坑1011・1014実測図（１：20）　…… 12
図16　護岸1001、流路1017断面図（１：50）　…… 13
図17　竪穴建物2355実測図（１：60）　…… 15
図18　土坑2326実測図（１：20）　…… 17
図19　井戸2100実測図（１：50）　…… 20
図20　柱列2210実測図（１：50）　…… 21

図21　護岸2125使用石材（１：80）　…… 22
図22　土製品実測図（１：４）　…… 39
図23　製鉄関係遺物実測図（１：４）　…… 40
図24　炉1013、土坑1014出土鍛造剥片・粒状滓　…… 41
図25　遺構変遷図１（１：1,000）　…… 46
図26　遺構変遷図２（１：1,000）　…… 47
図27　堀2123・2299・2350の変遷模式図（１：1,000）　…… 48
図28　遺構変遷図３（１：1,000）　…… 49
図29　「桂川筋四郡買収地図」（トレース）と調査区の合成図（１：5,000）　…… 50
図30　「淀川本支流川平面図」（トレース）と調査区の合成図（１：5,000）　…… 50

表　目　次

表１　遺構概要表　…… 10
表２　遺物概要表　…… 25
表３　柿経概要表　…… 35
表４　堀2350出土種実同定結果一覧表　…… 42
表５　堀2350出土貝類同定結果一覧表　…… 43

付　表　目　次

付表１　土器類一覧表　…… 84
付表２　瓦類一覧表　…… 97
付表３　木製品一覧表　…… 99
付表４　石製品一覧表　…… 100
付表５　土製品一覧表　…… 101
付表６　金属製品一覧表　…… 101
付表７　銭貨一覧表　…… 102

長岡京跡・淀水垂大下津町遺跡

１．調査経過

本調査は、国土交通省 近畿地方整備局 淀川河川事務所による桂川大下津地区他掘削工事に伴う埋蔵文化財調査である。工事に先立ち、京都市文化市民局文化芸術都市推進室文化財保護課（以下、「文化財保護課」とする）による試掘調査が行われ、工事計画地の一部（約15,000㎡）に遺構の存在が確認された。そのため国土交通省 近畿地方整備局 淀川河川事務所から委託を受けた公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所が調査を実施した。なお、調査期間が非出水期に限定されることから、調査は複数年にわたって行う計画で、令和３年度の調査はその初年度である。

調査区は宮前橋の北と南に１箇所ずつ設定し、南側を１区、北側を２区とした。調査面積は１区が103㎡、２区が1,537.5㎡の計1640.5㎡である。調査は、２区は令和３年11月15日から、１区は12月20日から開始した。まず、重機を用いて現代盛土および河川堆積層を除去した後、人力で遺構の検出・掘り下げを行った。また、各整地層も一部重機を用いて掘り下げを行い、遺物の採取に努めた。

調査の結果、１区では室町時代（Ⅳ期）と江戸時代（Ⅱ期）の２面、２区では弥生時代中期（Ⅹ期）から明治時代（Ⅰ期）までの10時期の遺構面を確認し、各時期の遺構・遺物が存在しているこ

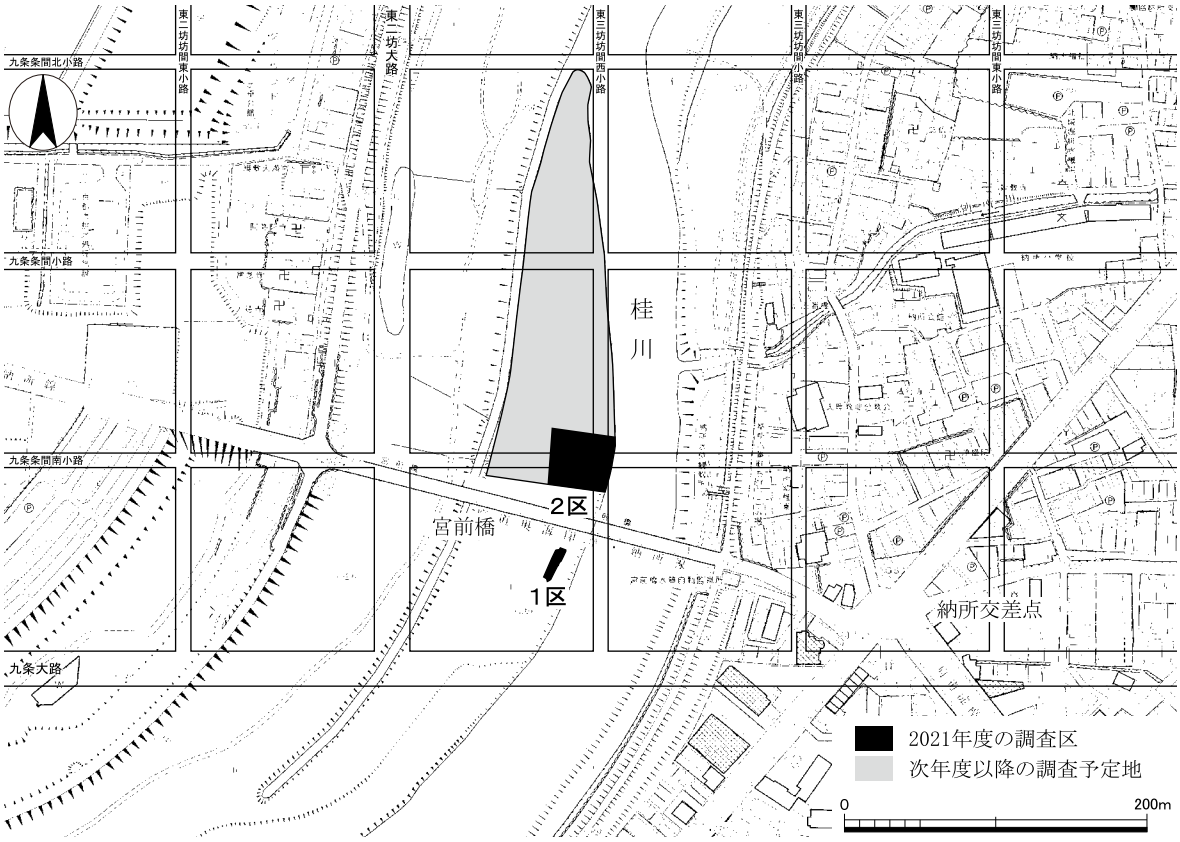


図１　調査位置図（１：5,000）

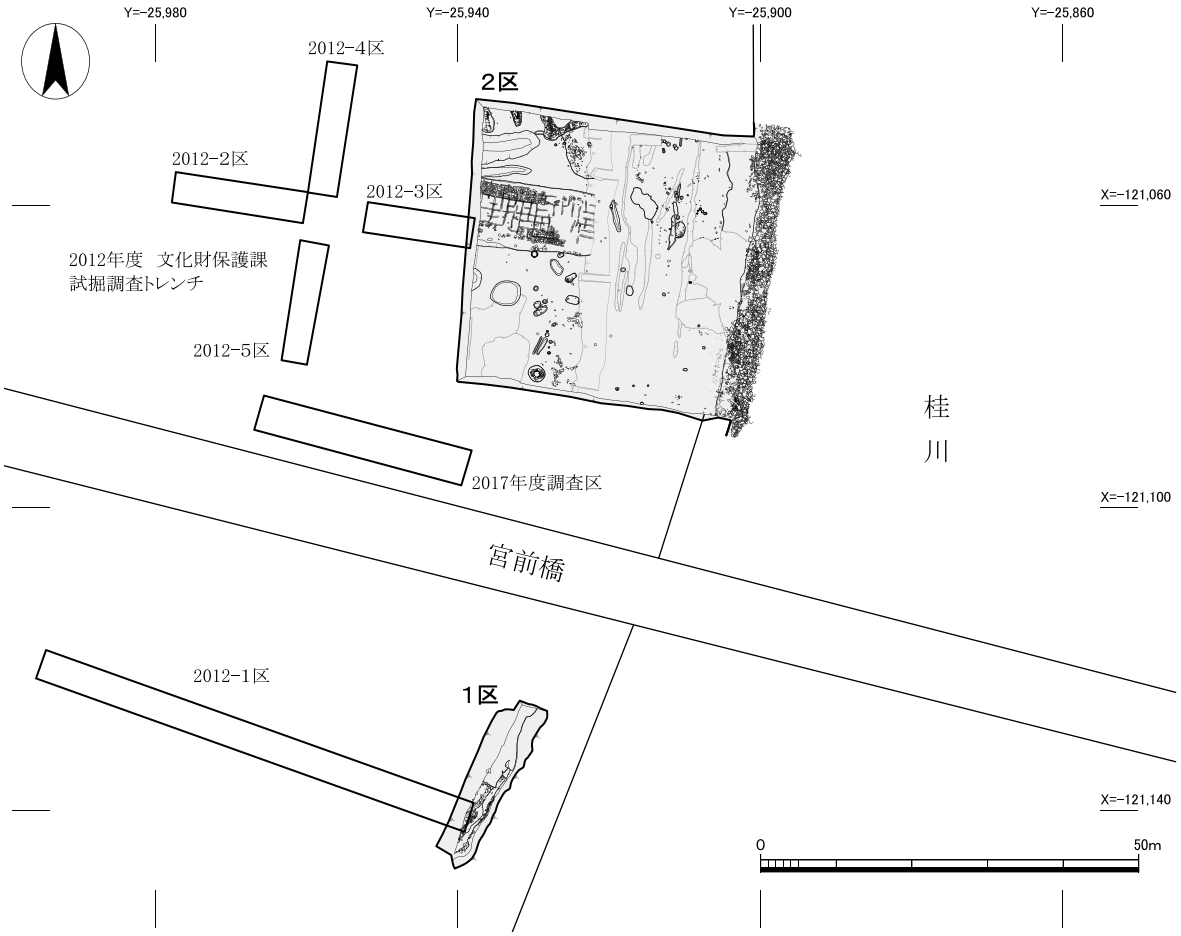


図２　調査区配置図（１：1,000）

とが明らかとなった。ただし、２区の東半は近代以降に人工的に削平されて低くなっており、東半と西半では検出面が異なる。西半では第１面・Ⅰ期から、東半ではⅥ期から調査を開始した。また、調査開始前の想定より遺構面数が大幅に多いことが判明したため、西半部では調査が途中の第３面・Ⅲ期で終了しており、令和４年度に続けて調査を行うこととなった。

検出した遺構は、実測・写真・オルソ測量による記録を行った。記録作業の終了後、安全面を考慮して堀や井戸などの深い遺構の埋め戻しを行い、令和４年３月31日をもって全ての作業を終了した。

調査中は、適宜、文化財保護課の検査を受け、また検証委員である京都大学の伊藤淳史助教と龍谷大学の國下多美樹教授の検証を受けた。

また、調査中および報告書作成にあたり、以下の方々から御指導・御教示を得ました。記して感謝申し上げます。（五十音順・敬称略）

網　伸也、伊藤淳史、植村善博、大道和人、小野映介、桐井理揮、國下多美樹、鋤柄俊夫、高野陽子、辻　康男、中井　均、西山良平、能芝　勉、橋本清一、森岡秀人、横内裕人、淀川資料館

図３　１区調査前全景（北から）

図４　２区調査前全景（南西から）

図５　１区作業状況（北西から）

図６　２区作業状況（北西から）

図７　柿経取り上げ状況（北西から）

図８　オルソ測量風景（南西から）

図９　ドローン撮影風景（北西から）

図10　埋め戻し終了状況（北西から）

2．位置と環境

（1）地理的環境（図11）

調査地は、京都市伏見区淀水垂町地内に位置し、現在は桂川右岸の河川敷である。調査地から南西約2.5㎞のあたりで、北東から流れる桂川、東から流れる宇治川、南東から流れる木津川が収斂・合流し、淀川となり大阪湾へと続く。また、調査地の位置する桂川の右岸は、西には標高200～400m前後の西山山地がそびえ、それから派生する丘陵[1)]が東へのび、段丘や扇状地、後背湿地を経て桂川となる。調査地は京都盆地の最低部に位置する後背湿地であり、三川が合流する地点という条件に加え、巨椋池の影響も受けていたことから、調査地周辺は水害頻発地ともなっていた[2)]。こうした水害の対策として複数回の河川の付替え・引提工事などが行われ、現在の姿となっている。

（2）歴史的環境

調査地は、山背国乙訓郡（以下、乙訓地域と呼ぶ）の地にあたる。乙訓地域では、旧石器時代以降の遺跡が数多く存在している。ここでは、おもに本報告に関連する弥生時代以降の遺跡に注目する。

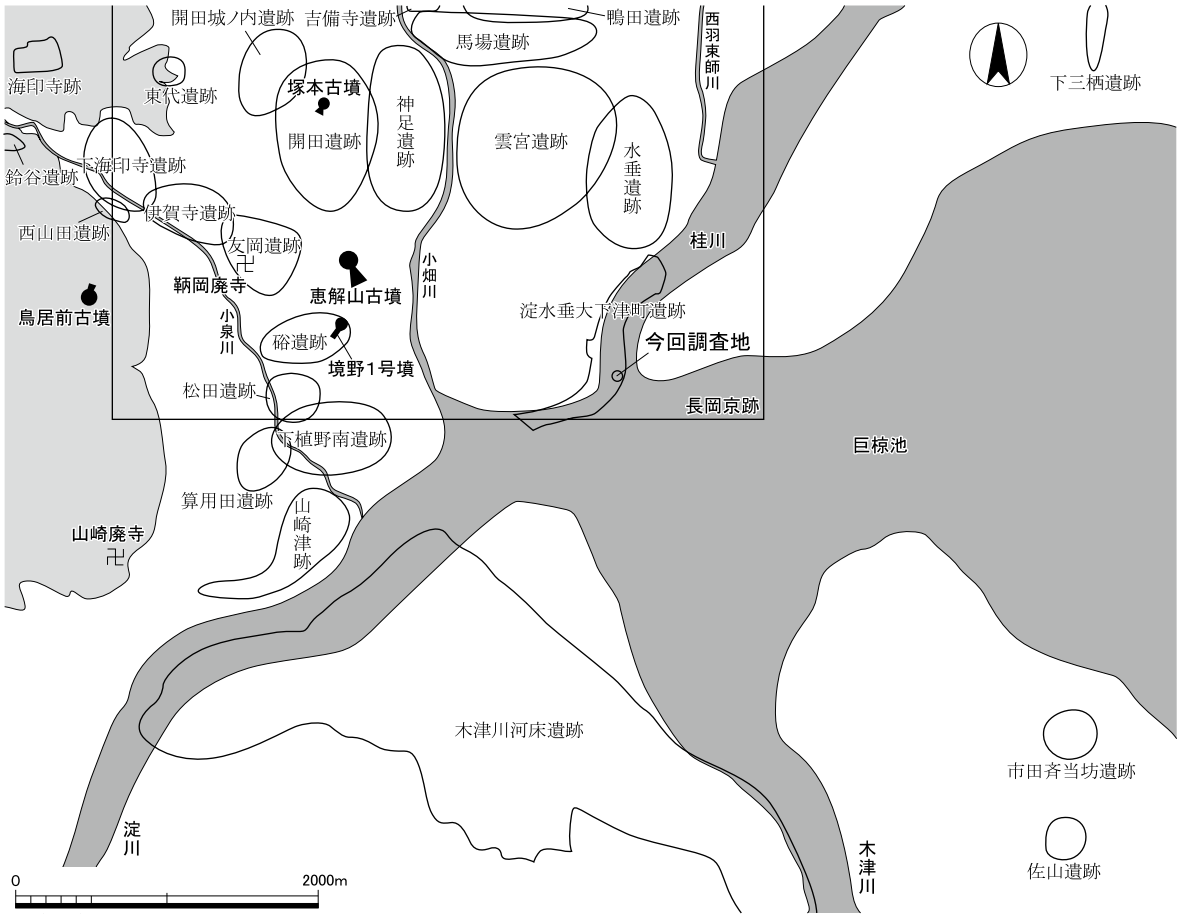


図11　調査地周辺遺跡分布図（1：50,000）
（古代学研究会編『古墳時代から飛鳥時代へ　集落遺跡の分析からみた社会変化』　六一書房　2017　図5を参考に作成）

弥生時代から古墳時代

今回の調査地の約1.5㎞北西に位置し、弥生時代前期から居住が続く雲宮遺跡[3)]では、庄内式期から布留式期初頭の外来系の土器が大量に出土している他、石釧が出土しており、流通の結節点であったと考えられている[4)]。また、雲宮遺跡に隣接する水垂遺跡は、古墳時代から飛鳥時代まで継続的に集落が営まれ、他地域系の土器が多量に出土していることや桂川近傍という立地条件から「津」的な機能が想定されている[5)]。木津川右岸、調査地の約４㎞南東、現在の久御山町に位置する市田斉当坊遺跡や佐山遺跡でも弥生時代から古墳時代前期の竪穴建物が多数検出されており、やはり外来系土器が多量に出土している。市田斉当坊遺跡では、未完成の勾玉、石包丁なども出土しており、拠点的な集落であったと考えられている[6)]。木津川左岸から淀川左岸に広がる木津川河床遺跡も同様に庄内式期から布留式期の遺構・遺物が多数検出され、外来系土器の出土が目立つ。以上のように、今回の調査地の周辺では、多くの遺跡で、桂川・宇治川・木津川の三川合流地という立地の特性を生かし、他遺跡・他地域との交流が行われていたと考えられ、特に古墳時代初頭にその動きが活発になる。

古墳時代前期には、桂川右岸域では大型古墳の造営が始まる。この地域での古墳の造営は、畿内政権との関係や庄内式期から定着していた在地集団とその生産力を基盤として達成されたと考えられている[7)]。古墳時代中期以降も乙訓古墳群の恵解山古墳にみられるように大型古墳の造営が活発に行われ、山城全域では集落数が大幅に減少するが、雲宮遺跡・水垂遺跡では、集落が継続している。この時期は古墳の造営と集落の立地は対応関係が失われる。これは、被葬者の支配領域の拡大によるものという考えもある[8)]。

飛鳥時代・奈良時代・長岡京期

飛鳥時代になると寺院の造営が始まる。向日市域の宝菩提院廃寺、長岡京市域の乙訓寺、鞆岡廃寺などがある。長岡京の条坊区割りでは、今回の調査区は、左京九条三坊三・四・五・六町と九条条間南小路・東三坊坊間西小路に該当する。これまでの発掘調査では、七条大路付近までは道路側溝が確認されているが、これより南では確認されておらず、今回の調査地付近まで条坊が及んでいたかは不明である。

平安時代

当地の地名でもある「淀」が文献資料において初出するのは、延暦23年（804）７月24日、桓武天皇が与等（淀）津に行幸する、という記事である（『日本後紀』延暦23年７月24日条）。平安京造営以前の長岡京期では、当地から約４㎞南西の大山崎の地が、陸路・水路の要地であることから山崎津が開かれた。山崎津は、平安京遷都後も淀津（与等津など表記は様々あるが、以下「淀津」と統一する）と共に交通の要衝として栄えた。山崎津がどのように衰退したのかについての詳細は分からないが、少なくとも室町時代以後の文献では多くが「山崎津」ではなく、「山崎」「大山崎」と記されていることから、港湾機能はほとんど停止したと考えられている[9)]。大同５年（810）の平城太上天皇の変（藤原薬子の変）の際には、与渡市津に頓兵が置かれ（『日本紀略』大同５年９月11日条）、要衝として有事の際に重視されていたことがわかる。このように当地周辺は、平安時代

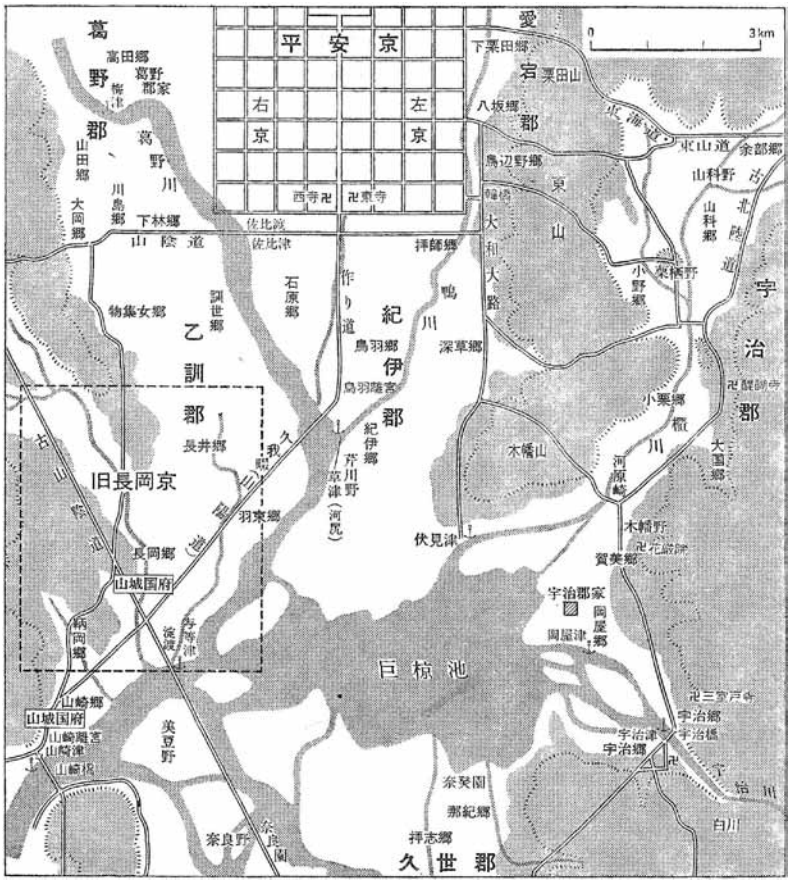


図12　律令時代における京南の地形と交通路の概要
（『史料 京都の歴史 第16巻 伏見区』平凡社 1991年 図２より）

初頭にはすでに上記に見られるように「津」と呼ばれる場所であったことがわかる。その「淀」や「淀津」に関して、文献資料から、與杼神社が９世紀中頃には鎮座していたこと（『日本三大実録』貞観元年（859）正月二十七日条）、その場所が桂川右岸であること、11世紀以降に「東西淀」・「東淀」という表現が登場することなどから、古代において「淀」とは桂川右岸の大下津・水垂付近を指していた、と考えられている[10]。また、淀姫大明神（與杼神社）の神宮寺である大徳寺も、寺伝では村上天皇（926－967）の勅許による千観内供の開基とされ、少なくとも10世紀には当地に存在していたようである[11]。

中世

淀津は、平安時代以降、平安京・京都の玄関口として栄えていた。暦応４年（1341）には下津に園城寺領の関が置かれており[12]、中世においても引き続き交通等の要衝として繁栄していたことがわかる。また、下津には園城寺領の関だけでなく、高野山領と春日社領・興福寺領の関も置かれており、鎌倉時代後期から南北朝期にかけては、下津が中継機能の主要な部分を担い、中世後期になると対岸の島之内・納所が主要な中継機能を担うようになったと考えられている[13]。淀津の中継機能の管理は、石清水八幡宮の神人などが担っていたようである[14]。

淀の地は、大同５年に頓兵が置かれたように、古くから軍事上の要地としても注目されていた。城の存在が文献資料上確認できるのは永徳元年（1504）であるが、以後永禄２年（1559）の細川氏

綱の淀城入城や、本能寺の変後に明智光秀が勝竜寺城とともに陣の両翼とするなど、「淀城（淀古城）」は度々拠点とされていたことがわかる。さらにその後は、豊臣秀吉が淀殿の産所とするために、天正16年（1588）に淀城（淀古城）の修築を行った。文禄３年（1594）に伏見城建設が決まると、淀古城は破却される。豊臣秀吉は、伏見城建設に伴う伏見港の整備、槙島堤など太閤堤の建設を行い、淀は地形的にも大きく変貌した。槙島堤の建設により宇治川が分離、流路が変わったことで、納所は桂川と宇治川に挟まれ、納所の西でこの２川が合流するようになった。宇治川を通じて伏見の水運が発達するのに伴い、桂川右岸「西淀」よりも左岸「東淀」の納所が港湾宿駅の地として賑わうようになった[15)]。

近世以降

当地が位置する淀水垂大下津町遺跡の範囲内では、おおよそ現在の宮前橋の北側が近世以降の水垂集落、南側が大下津集落にあたる。「水垂」という地名表記の初出は、正和４年（1315）である[16)]。17世紀後半に描かれた笹井家本『洛外図屏風』には集落の様子が描かれている。水垂村と下津村（現在の大下津）の間に與杼神社（原図には「大あらき明神」と記される）が鎮座し、うき田の森や大徳寺が描かれている。寛永２年（1625）の淀城築城以降、水垂集落は大下津や納所とともに城外町として江戸時代を通じ、二十石（荷）船の基地として活況を呈し、淀川河川交通の拠点として栄えていた[17)]。対岸の納所との間には渡し舟が運行されていた。また、納所町には、「唐人雁木」と呼ばれる船着き場があり、これは朝鮮通信使が上陸した船着き場であった。このように水垂集落を含む当地域は依然として交通の要衝としての役割を果たし続けていたことがわかる。明治４年（1871）の淀藩廃藩後は、郡別に分散し、京都府の所属となった。その後、明治31年（1898）から行われた淀川改修工事に伴い、水垂町は、約200ｍ西の新堤防上へ移転することとなった。また、宇治川で分断されていた納所と淀が陸続きとなった。平成18年（2006）には、国土交通省による桂川引堤事業に伴い、さらに100ｍ西に移転し、現在に至る。

（３）周辺の調査（図13）

今回の調査地である桂川右岸の河川敷では試掘調査と発掘調査が各１回行われている。

2012年には、今回の調査地近辺で試掘調査が行われている[18)]。調査では近世の石列などを検出している。３区では、今回の調査で検出した地業2135の延長部を確認し、これらの結果を元に、今回の調査指導がなされた。

2017年には、今回の調査地１区と２区の間で発掘調査が行われている[19)]。調査では、江戸時代前期の溝と道路を検出している。この道路は2012年の試掘調査で検出された石列と同一線上にあり、水垂集落内の道路と考えられている。

また、対岸の桂川左岸では今回調査地の南約400ｍ南で2015年に発掘調査が行われている[20)]。調査の結果、淀城の内高嶋に築かれた池、暗渠、石垣を確認している。これらの遺構は、江戸時代の淀城を描いた『山州淀御城府内之図』や『洛外図屏風』の内容と一致する。

その他、桂川左岸では今回調査地の約700ｍ北東の地点で2007年に納所排水樋門改築工事に伴

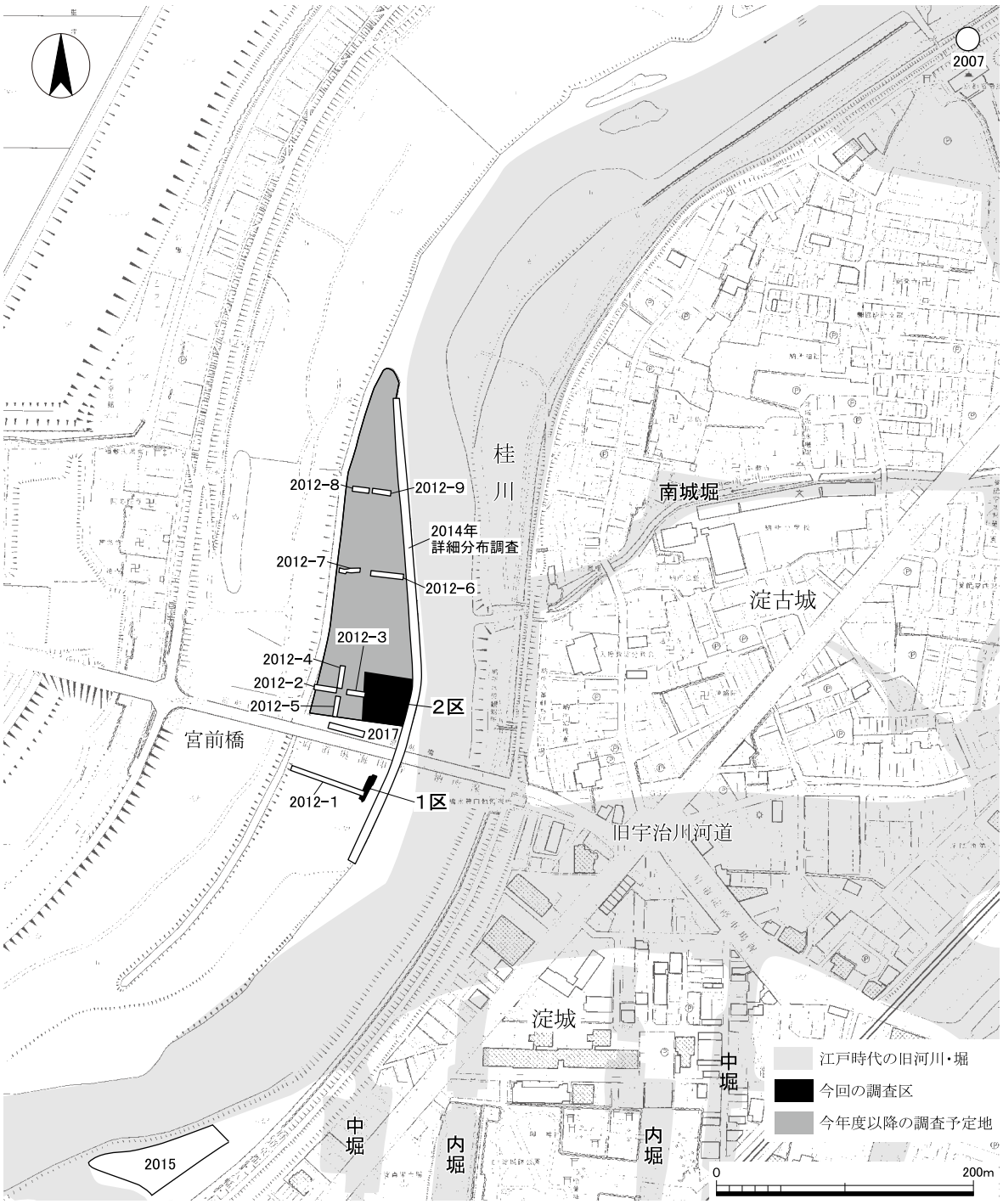


図13　周辺調査位置図（1：5,000）

い立会調査が行われている[21)]。その際、時期不明の石垣と飛鳥時代（7世紀中頃）の竪穴建物を検出している。

註

1）　地形分類については、『長岡京市史』資料編一　1991年　付図2　長岡京市域地形分類図を参照した。

2）　淺井良亮・大邑潤三・植村善博「京都市淀、水垂・大下津地域における治水・水害史と淀川改良工事」『京都歴史災害研究』第14号　立命館大学歴史都市防災研究所　2013年　29～39頁

3） 『京都府遺跡調査報告書 第22冊 雲宮遺跡』 財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター 1997年

4） 古川 匠「桂川右岸地域における古墳時代集落の動向（3）」『京都府埋蔵文化財情報 第118号』 2012年

古川 匠「山城地域の古墳時代集落の動態」『木津川・淀川流域における弥生～古墳時代集落・墳墓の動態に関する研究』同志社大学歴史資料館調査研究報告第14集 同志社大学歴史資料館 2017年

5） 古代学研究会編『古墳時代から飛鳥時代へ 集落遺跡の分析からみた社会変化』 六一書房 2021年

6） 『京都府遺跡調査報告書 第36冊 市田斉当坊遺跡』 財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター 2004年

7） 宇野隆志「京都盆地における古墳と集落の動態」『木津川・淀川流域における弥生～古墳時代集落・墳墓の動態に関する研究』同志社大学歴史資料館調査研究報告第14集 同志社大学歴史資料館 2017年

8） 古川 匠「山城地域の古墳時代集落の動態」『木津川・淀川流域における弥生～古墳時代集落・墳墓の動態に関する研究』同志社大学歴史資料館調査研究報告第14集 同志社大学歴史資料館 2017年

9） 木村 宏「淀津の盛衰と港湾機能の変遷」『人文地理』８巻６号 1957年 30～41頁

10） 田良島 哲「<研究ノート>中世淀津と石清水神人」『史林』第68巻第４号 1985年 613～638頁

11） 大徳寺は、現在は桂川の引堤事業に伴い山科区へ移転している。

12） 『園城寺文書』暦応四年二月廿八日左近次郎助忠・南保三郎兵衛入道連署淀関務請文

13） 前掲註10に同じ

14） 『疋田家本離宮八幡宮文書』永徳三年八月十一日など

15） 『京都市の地名 日本史地名大系27』平凡社 1979年

16） 「十一月付兵庫関悪党交名注進状案」『東大寺文書』

17） 植村善博・大邑潤三編『京都南、移転集落水垂の歴史と生活』 文理閣 2015年

18） 「Ⅵ 試掘調査一覧」№125・126『京都市内遺跡試掘調査報告 平成24年度』 京都市文化市民局 2013年

馬瀬智光「Ⅳ－７ 長岡京左京九条三坊三・四・六町跡・淀水垂大下津町遺跡（14A004）」『京都市内遺跡詳細分布調査報告 平成27年度』 京都市文化市民局 2016年

19） 金島惠一『長岡京左京九条三坊四町跡・淀水垂大下津町遺跡・與杼神社旧境内』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告2017－９ 公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所 2018年

20） 鈴木久史「Ｘ 長岡京跡第583次・淀城跡」『京都市内遺跡発掘調査報告 平成27年度』 京都市文化市民局 2016年

21） 『京都市内遺跡立会調査報告 平成20年度』 京都市文化市民局 2009年

3．遺　　構

（1）基本層序

遺構番号は、整理作業を行うにあたり１区のものは1001～、２区のものは2001～と振り直した。

１区　現地表面の標高は10.8～11.2ｍである。調査区西壁のX=−121,140を基準にすると、地表下約2.2ｍまで現代河川堆積の砂層と現代盛土の互層、その下に約0.1ｍの変形のみられる近代河川堆積層がある。その下は厚さ約0.2ｍの近世の護岸1001構築土、その下に室町時代の極細砂の堆積層が0.4～0.5ｍ堆積する。それより下は、粗～極粗砂に礫が混じる砂礫主体の流路1017堆積層となる。調査区北半では近代河川堆積層直下が室町時代の堆積層または鎌倉時代の流路1017堆積層となる。近世の護岸1001構築土上面を第１面、室町時代の堆積層上面を第２面として調査を行った。第１面の標高は8.5～9.2ｍ、第２面の標高は7.9～8.7ｍで、いずれも南から北に傾斜する。２区との関係では第１面はⅡ期、第２面はⅣ期となる。

２区　現地表面の標高は、西側が約11.3ｍ、東側が約9.0ｍと大きく異なる。以下、西側を上段、東側を下段として基本層序について述べる。

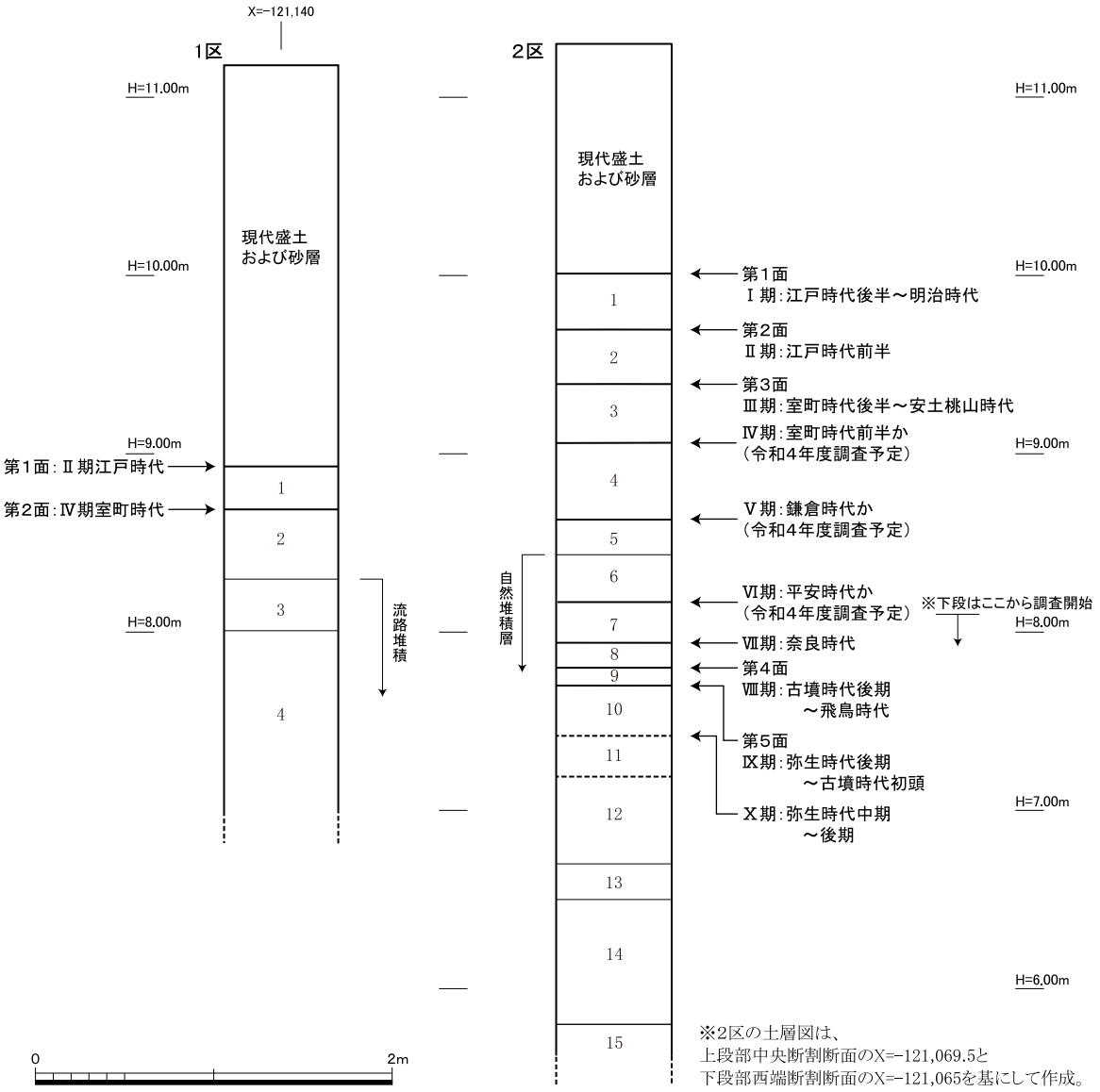
上段では中央部断割のX=−121,069.5を基準とする。まず、地表下1.3ｍまで現代盛土・砂層（河川堆積）があり、その下に約0.3ｍのⅠ期整地層（江戸時代後半、上面が第１面）、その下に約0.3ｍのⅡ期整地層（江戸時代初頭、上面が第２面）、その下に約0.3ｍのⅢ期整地層（室町時代から安土桃山時代、上面が第３面）がある。その下に約0.4ｍのⅣ期整地層、約0.2ｍのⅤ期整地層があり、そこから下は自然堆積層が堆積している。Ⅳ期整地層以下は、今回は未調査である。令和４年度に引き続いて調査を行う予定であり、断割時の出土遺物などから、Ⅳ期を室町時代前半、Ⅴ期を鎌倉時代、Ⅵ期を平安時代と想定している。

下段では西断割のX=−121,065を基準にする。現代河川堆積の砂層が約0.85ｍあり、その下に順

表１　遺構概要表

時　　代	遺　　構		備考
	１区	２区	
弥生時代中期 ～古墳時代前期		竪穴建物2240・2355・2356・2368・2400・2410、落込2392、土坑2404・2440・2492、溝2364	X・Ⅸ期
古墳時代後期 ～飛鳥時代		流路2353、溝2180・2325	Ⅷ期
奈良時代 ～平安時代		掘立柱建物2154、柱列2182、井戸2178、溝2187、土坑2326	Ⅶ・Ⅵ期
鎌倉時代		井戸2225、溝2090	Ⅴ期
室町時代 ～安土桃山時代	流路1017、炉1013、土坑1011・1014、ピット1007	堀2123・2299・2350、柱列2263・2275・2280	Ⅳ・Ⅲ期
江戸時代 ～明治時代	護岸1001	井戸2001・2100・2138、地業2010～2012・2135、柱列2210、溝2140・2200、ピット2037、護岸2125	Ⅱ・Ⅰ期

に約0.2ｍのⅥ期基盤層（上面が第３面）、約0.15ｍのⅦ期基盤層（奈良時代）、約0.1ｍのⅧ期基盤層（古墳時代後期から飛鳥時代、上面が第４面）、約0.3ｍのⅨ期基盤層（弥生時代後期から古墳時代前期、上面が第５面）が堆積する。さらにその下に、上面の土壌化が進む層があり、この層や落込・土坑などから弥生時代中期の遺物が出土していることから、弥生時代中期から後期（Ｘ期）の遺構面の存在を想定している。



1区
1　10YR4/4褐色極細砂（第1面・Ⅱ期：江戸時代、護岸1001構築土）
2　10BG6/1青灰色極細砂（第2面・Ⅳ期：室町時代）
3　10Y3/1オリーブ黒色極細砂10YR4/4褐色砂礫の互層状 ┐
4　7.5YR5/6明褐色砂礫 ┘ 流路1017堆積

2区
1　10YR4/3にぶい黄褐色シルト　炭・土師器片含（第1面・Ⅰ期：江戸時代）
2　2.5Y5/4黄褐色シルト　炭・土師器片含（第2面・Ⅱ期：江戸時代）
3　10YR4/6褐色シルト　炭・土師器片含（第3面・Ⅲ期：室町時代）
4　10YR4/3にぶい黄褐色シルト　炭・土師器片含（Ⅳ期：室町時代か）
5　10YR5/4にぶい黄褐色シルト（Ⅴ期：鎌倉時代か）
6　2.5Y4/4オリーブ褐色シルト　土師器片含
7　2.5Y5/4黄褐色シルト　奈良時代頃の土師器出土（Ⅵ期：平安時代か）
8　2.5Y4/6オリーブ褐色粘土（Ⅶ期：奈良時代）
9　2.5Y4/3オリーブ褐色細砂　炭中量含（第4面、Ⅷ期：古墳時代後期～飛鳥時代）
10　5Y4/1灰色粘土（第5面、Ⅸ期：弥生時代後期～古墳時代初頭）
11　5Y2灰オリーブ色シルト～粘土（Ⅹ期：弥生時代中期～後期）
12　2.5Y4/3オリーブ褐色細砂　炭少量含
13　5Y4/2灰オリーブ色シルト　炭少量含
14　2.5Y4/4オリーブ褐色シルト
15　5Y4/1灰色シルト（土壌化層）

図14　土層模式柱状図（１：40）

（2）１区の遺構

１）１区の概要

宮前橋の南側に位置する調査区である。桂川の現流路によって東側を大きく削平され、調査面積は103㎡である。江戸時代の護岸構築土上面を第１面、室町時代の堆積層上面を第２面として調査を行った。２区との対比では第１面がⅡ期、第２面がⅣ期となる。第２面では、下層の鎌倉時代の遺物を包含する流路1017堆積層から吹き上がる噴砂を平面的に確認した。また、流路1017については、安全面を考慮し断割調査で標高6.2ｍまで堆積を確認するにとどめた。なお、現桂川の渇水期水面の標高は約6.1ｍである。

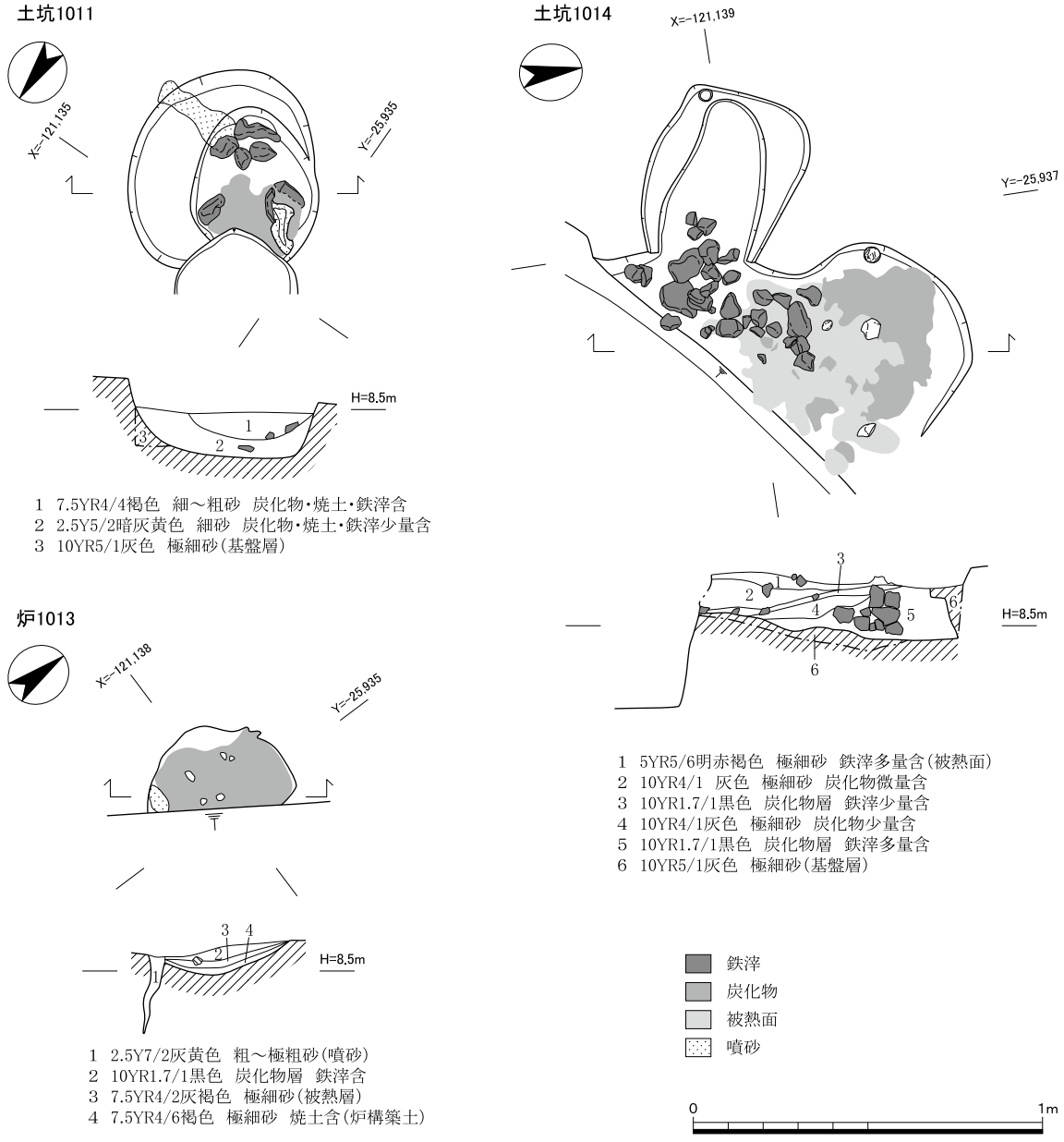


図15　炉1013、土坑1011・1014実測図（１：20）

2）第２面〔Ⅳ期〕の遺構（図版１・58）

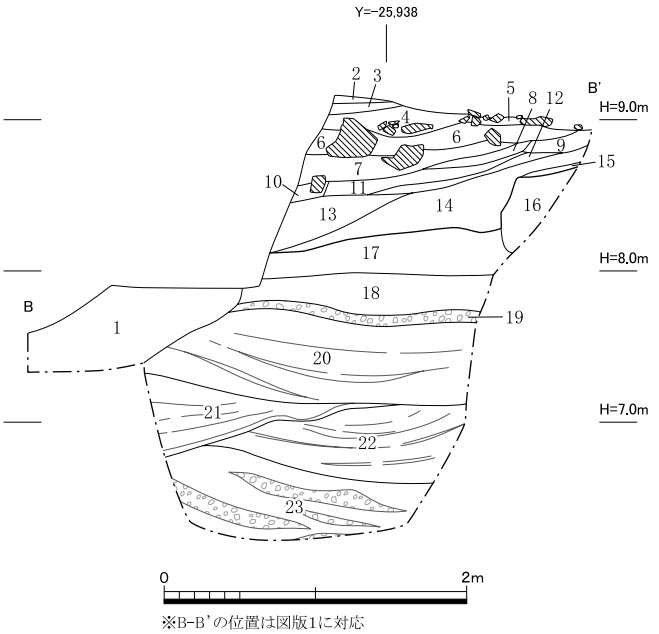
流路1017（図16） 第２面の断割調査で確認した。南北方向の流路と考えられるが、東は現代の桂川河川に削平され、西は調査区外へ延びるため、規模は不明である。深さは検出面から約２m、標高6.2ｍまで掘り下げたが、底面は確認できなかった。砂、シルト、径４㎝以下の礫層が互層となり堆積する。堆積層中には鎌倉時代の遺物が含まれる。最上層は室町時代の遺物を含む極細砂の堆積層である。この流路堆積物から室町時代の堆積層上面まで噴砂が吹き上がることを断面と平面で確認した。

土坑1011（図15） 調査区中央部で検出した。平面形は円形で、径約0.6ｍ、深さは検出面から約0.2ｍある。噴砂により一部削平される。埋土には炭化物・焼土・鉄滓を含む。

土坑1014（図15、図版58） 調査区中央部で検出した。南東部は削平され、平面形は不整形である。検出長約1.1ｍ、検出幅約0.7ｍ、深さは検出面から約0.2ｍある。上面は被熱により明赤褐色に焼き締まる。埋土は極細砂層と炉壁・鉄滓などを含む炭化物層が互層となる。炭化物には黒鉛化木炭は含まれない。炭化物層からは、鍛造剥片や粒状滓が抽出された。炭化物の^{14}C年代測定では、室町時代前期から江戸時代初期の年代が得られた（付章参照）。円筒形の竪形炉の一部と考えられる炉壁と輔羽口が一体化したものがまとまって出土した。

炉1013（図15、図版58） 調査区中央部で検出した。南西部は削平され、平面形は半円形である。径約0.4ｍ、深さは検出面から約1.5ｍある。噴砂により一部削平される。埋土は、最下層が極細砂層、中層が被熱層、上層は鉄滓を含む炭化物層である。炭化物層からは鍛造剥片や粒状滓が抽出された。近接する土坑1014から、円筒形の竪形炉の一部と考えられるものがまとまって出土しており、鉄精錬炉の基底部の可能性が考えられる[1)]。

ピット1007 調査区中央部で検出した。径約0.3ｍ、深さ約0.3ｍ。鉄滓が少量出土した。



1 10YR4/3にぶい黄褐色 粗砂(現代河川堆積)
2 10YR7/6明黄褐色 極細砂φ～2㎝の礫微量混
3 10YR7/4にぶい黄橙色 粗砂
4 2.5Y4/6にぶい黄色 粗砂 φ～20㎝の礫多量混
5 2.5Y5/4黄褐色 粗砂 φ～15㎝の礫多量混
6 2.5Y4/4オリーブ褐色 粗砂 φ～12㎝の礫多量混
7 2.5Y4/6オリーブ褐色 粗砂 φ～7㎝の礫多量混
8 2.5Y/3黄褐色 粗砂
9 2.5Y5/3黄褐色 粗砂(西壁9層)
10 2.5Y5/3黄褐色 粗砂
11 2.5Y5/2暗灰黄色 粗砂
12 7.5Y5/6明褐色 極粗砂と2.5Y5/2暗灰黄色 粗砂の互層
13 2.5Y6/2灰黄色 粗砂
14 2.5Y7/2灰黄褐色 粗～極粗砂 φ～3㎝の礫多量混(西壁10層)
15 2.5Y7/4浅黄色 シルト(西壁11層)
16 10Y4/1灰色 極細砂(西壁13層)
17 10YR3/1オリーブ黒色 極細砂と 10YR4/4褐色 極粗砂の互層(西壁15層)
18 7.5YR5/6明褐色 粗～極粗砂(西壁16層)
19 7.5YR4/3褐色 φ2～4㎝の礫(西壁17層)
20 2.5Y5/2暗灰黄色 粗～極粗砂 φ～1㎝の礫多量混(西壁18層)
21 2.5Y8/2灰白色 極粗砂と粗砂の互層 最下部にシルト堆積 φ～1.5㎝以下の礫多量混
22 2.5Y7/1灰白色 粗砂 φ～3㎝の礫多量混
23 2.5Y6/2灰黄色 粗～極粗砂とφ～4㎝の礫の互層

護岸1001
流路1017

図16 護岸1001、流路1017断面図（１：50）

3）第１面〔Ⅱ期〕の遺構（図版２・59）

護岸1001（図16、図版59） 調査区南半で検出した桂川の護岸である。護岸の本体部は現在の桂川河道によって削られており、裏込め部のみが残る。検出長約12ｍ、検出幅は最大約2.3ｍである。深さは検出面から約1.0ｍある。径0.1～0.7ｍの主に自然石を混ぜた細砂と粗砂を互層に積む。径0.5ｍ以上の大振りの石材は、列状に並んで検出した。江戸時代の遺物が出土した。２区の護岸2125と連続する遺構と考えられる。

（３）２区の遺構

１）２区の概要

宮前橋の北側に位置する調査区である。調査区は南北40ｍ、東西40～42ｍで、面積は1537.5㎡である。２区東半は近代以降に人工的に削平されて低くなっていることから、西半の上段と東半の下段では調査開始面が異なる。上段はⅠ期の整地層上面から調査を開始し、Ⅲ期整地層上面まで、下段はⅥ期の基盤層から調査を開始し、Ⅸ期基盤層上面までの各面で遺構の検出を行った。上段のⅣ期以前については今回調査を行っていない。整理作業では、これらを５面に整理した。以下で面ごとに主要な遺構について述べる。

２）第５面〔Ⅹ・Ⅸ期〕の遺構（図版４・60）

竪穴建物を全６棟検出した。時期はいずれも庄内式期である。

竪穴建物2240（図版14・61） 調査区東端中央で検出した平面隅丸方形の竪穴建物である。竪穴建物2356・2410と重複しており、重複関係から2356→2410→2240の順で建てられたことがわかる。建物の主軸方位は、北に対して約45°西に振る。

竪穴建物2240は、東西約5.3ｍ、南北約5.9ｍと南北に長い長方形を呈し、深さは約0.2ｍある。北東部は護岸2125により削平される。周囲には壁溝が巡り、幅0.2～0.3ｍ、深さは0.05～0.1ｍある。厚さ約0.05ｍの貼床を行う（Ａ－Ａ’、Ｂ－Ｂ’の５～８層）。床面直上と埋土から庄内式期の土器がまとまって出土した。主柱穴は３基検出した（柱穴2244～2246）。径0.35～0.5ｍ、深さは約0.5ｍある。東辺では貯蔵穴と考えられる土坑2391を検出した。長径約0.8ｍ、短径約0.7ｍで深さは約0.1ｍある。埋土から土器が多量に出土した。

竪穴建物2410（図版15・63） 調査区東部で検出した平面隅丸方形の竪穴建物である。規模は、一辺約５ｍのほぼ正方形で、深さは約0.4ｍある。建物の主軸方位は、北に対して約28°西に振る。周囲には細く浅い壁溝が巡る。床面直上で完形に近い古式土師器の甕２個体が並んで出土した。床面上では柱穴５基と炉2471、土坑2470を検出した。柱穴は径0.3～0.5ｍ、深さは0.3～0.5ｍある。炉2471は平面不整円形で、径約0.2ｍ、深さは約0.05ｍある。埋土には炭・焼土を含む。土坑2470は隅丸長方形で、長径約0.6ｍ、深さは約0.2ｍある。

竪穴建物2356（図版14） 調査区東端中央で検出した。大半を竪穴建物2240に削平され、南西

部は竪穴建物2410に削平される。平面形は隅丸方形と考えられ、検出規模は、北辺約２m、南北西辺約４m、深さは約0.2mである。西辺では壁溝を検出した。幅約0.1m、深さは約0.05mある。主柱穴と考えられる柱穴2462は、径約0.25m、深さは約0.1mある。竪穴建物2240と重複する炉2390は、位置関係や出土遺物の時期から竪穴建物2356に伴う炉と考えられる。径約0.5m、深さは約0.3mある。

竪穴建物2355（図17） 調査区南部で検出した平面隅丸方形の竪穴建物である。南東隅部のみを検出した。残りの部分は未調査であり、次期調査で確認する。検出規模は、南辺約２m、東辺約4.2m、深さは約0.2mある。建物の主軸方位は北に対して約27°西に振る。周囲には壁溝が巡り、幅0.1～0.25m、深さは約0.1mある。厚さ約0.05mの貼床を行う。床面上で、土坑2361・2506、柱穴2365を検出した。土坑2361は平面円形と考えられ、検出規模は径約0.8m、深さは約0.4mある。土坑2506は楕円形で、検出規模は長径約0.9m、深さは約0.2mある。柱穴2365は、径約0.4m、深さは約0.2mある。

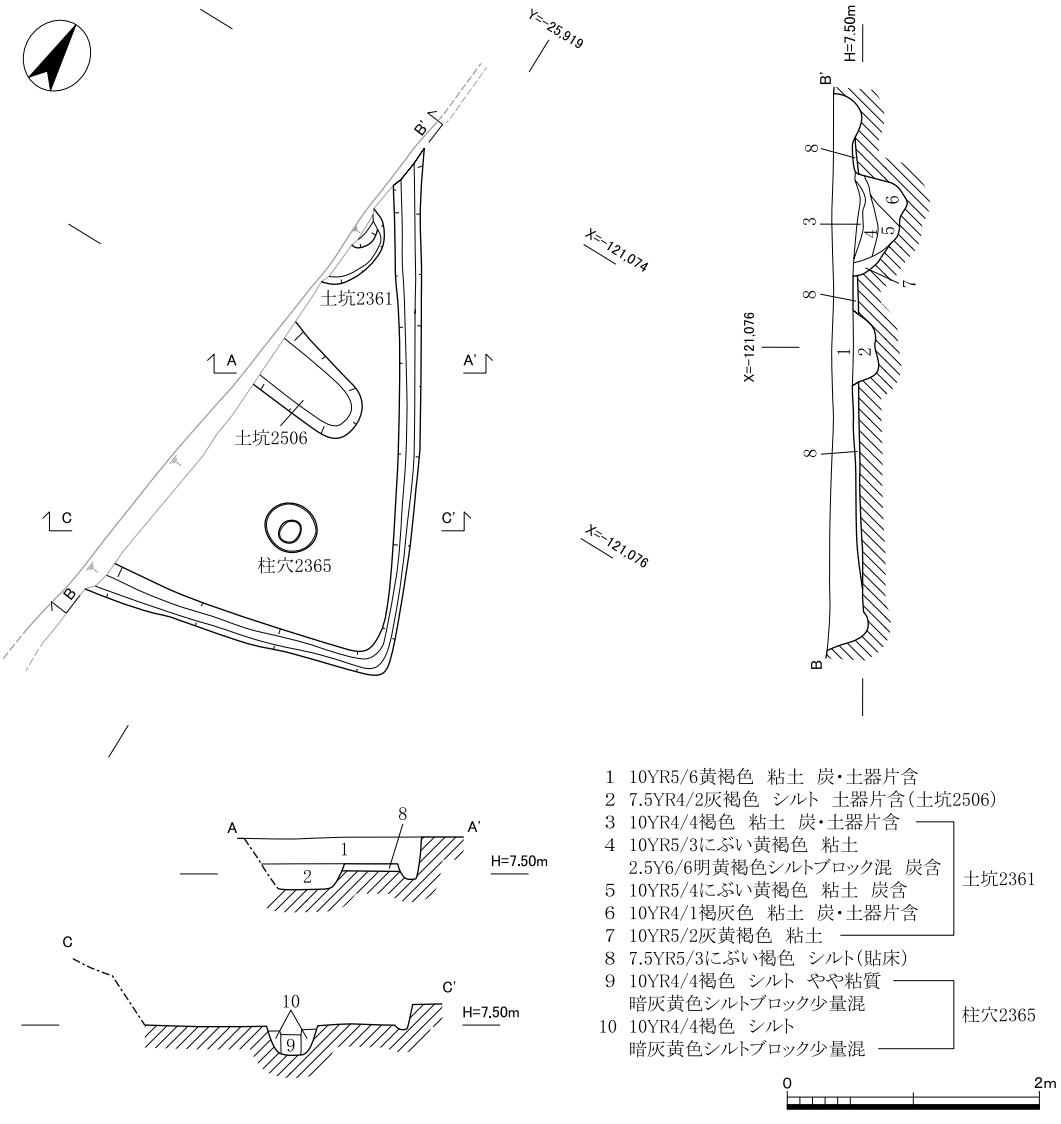


図17 竪穴建物2355実測図（１：60）

竪穴建物2368（図版16、図版62） 調査区南部で検出した平面隅丸方形の竪穴建物である。竪穴建物2400と重複する。重複関係から2400→2368の順で建てられたことがわかる。

規模は、東西約4.0ｍ、南北約4.2ｍで、深さは約0.2ｍある。北東隅部がわずかに流路2353に削平される。建物の主軸方位は、北に対して約４°西に振る。主柱穴を４基検出した。径0.3～0.4ｍ、深さは約0.2ｍある。壁溝や貼床は確認できなかった。埋土から磨製石鏃が１点出土した。

竪穴建物2400（図版17・62） 調査区南部で検出した。竪穴建物2368と重複する。規模は一辺約５ｍのほぼ正方形で、深さは約0.5ｍある。建物の主軸方位は、北に対して約26°西に振る。周囲には壁溝が巡り、幅約0.2ｍ、深さ約0.05～0.1ｍある。厚さ0.05～0.15ｍの貼床を行う。埋土からは土器に加え、緑色凝灰岩の剥片や鉄鏃が出土した。床面上では主柱穴を４基を検出した、径約0.3ｍ、深さは0.7～0.8ｍある。建物中央では炉2467を検出した。径約0.6ｍ。深さは約0.25ｍある。南東辺中央では貯蔵穴と考えられる土坑2469を検出した。長径約1.2ｍ、深さは約0.2ｍある。建物北西隅では土坑2477を検出した。長径約0.9ｍ、短径約0.6ｍの隅丸方形で、深さは約0.35ｍある。埋土から土器片がややまとまって出土した。

落込2392（図版９） 調査区の北部で検出した東西方向に長い落込である。検出規模は、幅約9.4ｍ、長さ約14ｍ、深さは最大約１ｍで、東側は一部護岸2125に削平される。調査区外北と上段部の西側へ延長する。遺構の主軸方位は、東に対して約23°北に振る。断面観察から複数時期の溝状の落込が重複して存在していることが明らかとなった（図版９－17～24層）。埋没後に南肩部に溝2364が掘り直される（15・16層）。落込を覆う13層と落込埋土上層（17層）からは庄内式期の土器が出土し、落込埋土下層（18層）からは弥生時代中期の土器が出土した。

土坑2404（図版18・63） 調査区北東部で検出した平面隅丸方形の土坑である。規模は、一辺約0.9ｍ、深さは約0.35ｍある。遺構の主軸方位は、北に対して約20°西に振る。庄内式期のほぼ完形の甕１点のほか、土器片や拳大の石が出土した。

土坑2440（図版18・61） 調査区南部で検出した土坑である。平面形は円形と推測され、西半は上段部へ延びる。検出規模は、南北約3.3ｍ、東西1.6ｍ、深さは約0.5ｍある。断面観察から少なくとも３時期の掘り直しが行われたことを確認した。いずれも埋土は、炭を多量に含む層と炭を少量含む粘土層の互層となっている。弥生時代中期の土器や石器が出土した。

土坑2492（図版18） 調査区南東部で検出した平面楕円形の土坑である。竪穴建物2400に削平される。検出規模は、短径約１ｍ、長径約1.4ｍ、深さは約0.5ｍある。埋土には炭が含まれる。弥生時代中期の土器が出土した。

３）第４面〔Ⅷ・Ⅶ・Ⅵ期〕の遺構（図版５・60）

掘立柱建物2154（図版19・64） 調査区北東部で検出した掘立柱建物である。東西３間（約7.2ｍ）×南北２間（約4.2ｍ）で北に庇（庇の出約2.7ｍ）をもつ。南東隅は護岸2125により削平される。遺構の主軸方位は東に対して約22°北に振る。柱間は、梁行・桁行ともに等間で、梁行が約2.4ｍ、桁行が約2.1ｍ、庇は不等間で1.8～2.7ｍである。身舎の柱掘形の平面形は隅丸方形を呈し、

最大のもので一辺が約0.9ｍである。庇の柱掘形の平面形は円形ないしは隅丸方形を呈し、径約0.6ｍである。身舎の柱穴2162から、ほぼ完形の東海地方産の須恵器の長頸壷が出土した。時期は７世紀末から８世紀初頭と考えられる。

柱列2182（図版20） 調査区中央で検出した南北方向の柱穴列である。２間分を検出し、柱間は1.8ｍ等間である。柱列の主軸方位は、北に対して約12°西に振る。北西に延長する可能性がある。柱掘形の平面形は、円形ないしは楕円形を呈し、径0.5～0.6ｍ、深さは約0.15ｍある。出土遺物は土師器細片のみで、詳細な時期は不明である。

溝2180 調査区中央で検出した東西方向の溝である。検出規模は、長さ29ｍ、幅1.5～1.65ｍ、深さは約0.3ｍある。東は護岸2125に削平され、西は調査区外へ延びる。遺構の主軸方位は、東に対して約25°北に振る。出土遺物は細片のみで詳細な時期は不明だが、遺構の重複関係から掘立柱建物2154よりも古いものと考えられる。

溝2187 調査区南東部で検出した南北方向の溝である。南東方向に向かって緩い曲線を描く。検出規模は、長さ約６ｍ、幅約1.4ｍ、深さは約0.5ｍある。検出時は認識できなかったが、流路2353の断面（図版21）で流路2353を削平し調査区東端部まで延びることを確認した。北側は井戸2178に削平される。井戸2178より北側では溝の延長部は確認できなかった。平安時代前期の灰釉陶器の壷が出土した。

溝2325 調査区北端で検出した東西方向の溝である。検出規模は、長さ約5.2ｍ、幅約0.7ｍ、深さは0.3～0.4ｍある。西は調査区外へ延びる。遺構の主軸方位は、東に対して約17°北に振る。古墳時代中期の須恵器が出土した。

土坑2326（図18、図版64） 調査区北東部で検出した楕円形を呈する土坑である。検出規模は、

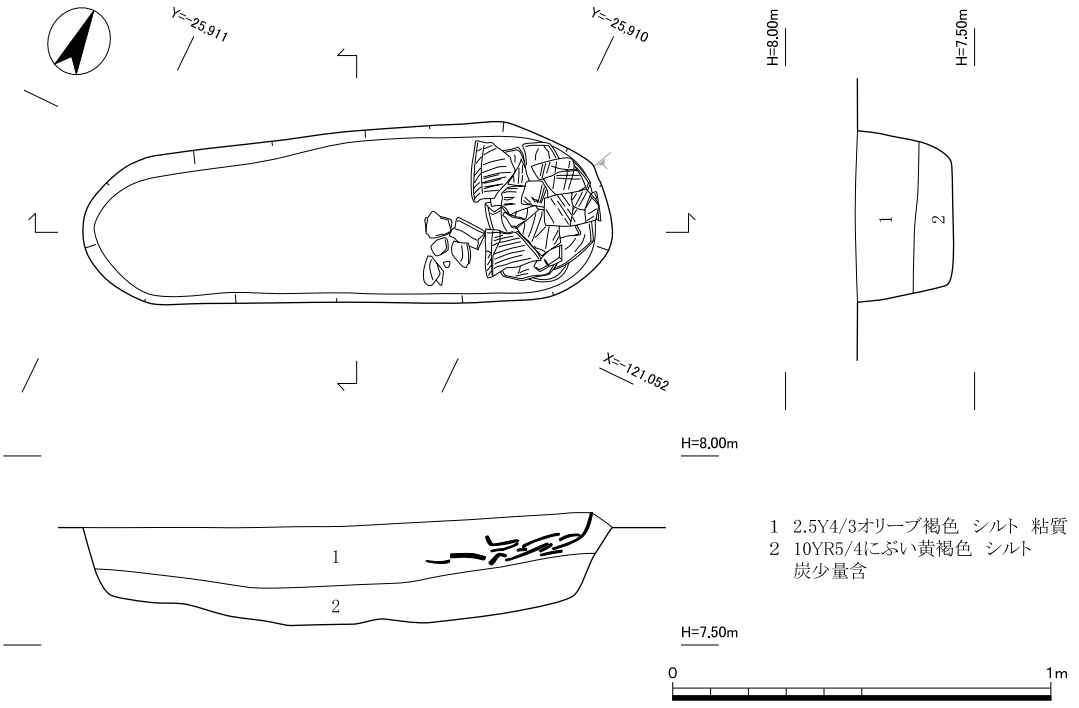


図18 土坑2326実測図（１：20）

東西約1.4ｍ、南北約0.45ｍ、深さは約0.3ｍある。遺構の主軸方位は、東に対して約25°北に振る。東端部で、ほぼ完形に復元できる平安時代前期の土師器の皿と甕が出土した。掘形の形状や遺物の出土状況から土壙墓の可能性が考えられる。

井戸2178（図版20） 調査区中央東部で検出した楕円形の土坑で、形状から井戸と考えられるが、木枠の痕跡などは確認できなかった。検出規模は、東西約3.9ｍ、南北約2.9ｍ、深さは約2.4ｍある。出土遺物は須恵器の甕の一部と管玉石材のみで、詳細な時期は不明である。重複関係から平安時代前期の土器が出土した溝2187よりは新しい。

流路2353（図版21） 調査区南東部で検出した東西方向の流路である。東は護岸2125に削平されれ、西は調査区外南側へ延びる。遺構の主軸方位は、東に対して約25°北に振る。検出規模は、長さ約16ｍ、幅約10.7ｍであるが、南肩は調査区外に位置するため未確認である。また、深さは約1.7ｍまで掘下げたが、現桂川の水面（標高約6.1ｍ）より低くなり、川の水が浸水してきたため、これより下層を確認することができなかった。７世紀代の土師器椀が出土した。

４）第３面〔Ⅴ・Ⅳ・Ⅲ期〕の遺構（図版６・60）

井戸2225（図版22・23・66） 調査区南東部で検出した方形縦板組の井戸である。掘形の平面形は隅丸方形で、検出規模は、東西約4.7ｍ、南北4.7ｍ、深さは約3.6ｍあり、掘形底面の標高は約4.2ｍである。南側は調査区外へ延びる。遺構の主軸方位は、北に対して約13°西に振る。作業の安全性を考慮し、標高5.8ｍ以下は重機で断ち割り、一部を確認するにとどめた。井戸枠の一辺は約１ｍで、縦板を横桟で止める構造を持ち、横桟は４段分確認できたが、大半が痕跡を残すのみで、最下部の材だけが良好に残存していた。縦板は二重の構造となっており、外側の板の大きさは、縦約2.5ｍ、横約0.4ｍである。内側の板は、縦約1.1ｍ、横約0.3ｍである。縦板は緩く湾曲するものもあり、屋根材などの建築部材を転用した可能性が考えられる。縦板の樹種はヒノキである。また、掘形の中位、標高約6.2ｍ付近では、井戸枠の北側と東側の一部に板を敷き、その上に丸瓦・平瓦・軒平瓦が縦方向に並べられていた（図版23・66）。井戸枠側に向かってやや傾斜する。用いられた瓦は平安時代後期のものである。掘形埋土の沈下を防ぐことを意図した可能性がある。井戸枠内からは13世紀前半頃の土器類が出土した。

溝2090 調査区南東部で検出した東西方向の溝である。東側は護岸2125に、西側は土坑2087に削平される。検出規模は、長さ約11ｍ、幅約１ｍ、深さは約0.3ｍある。遺構の主軸方位は、東に対して約15°北に振る。埋土から13世紀代の土器類が出土した。

柱列2263（図版25） 調査区中央で検出した東西方向の柱穴列である。５基の柱穴を確認した。検出長は約3.3ｍである。主軸方位は、東に対して約20°北に振る。柱間は不等間で重複するものもある。柱掘形の平面形は円形ないしは楕円形で、径0.2～0.4ｍ、深さは0.1～0.4ｍある。後述する堀2123に平行し、堀に伴う柵などの区画施設の可能性がある。

柱列2275（図版25） 調査区中央で検出した南北方向の柱穴列である。７基の柱穴を確認した。検出長は約９ｍである。主軸方位は、北に対して約15°西に振る。柱間は不等間で重複するものも

ある。柱掘形の平面形は円形ないしは楕円形で、径0.3～0.5ｍ、深さは0.1～0.4ｍある。後述する堀2299・2350と平行し、堀に伴う柵などの区画施設の可能性がある。

柱列2280（図版25） 調査区中央で検出した南北方向の柱穴列である。1間分を検出したが、南側は削平されており、さらに延長する可能性がある。遺構の主軸方位は、北に対して約7°西に振る。柱間は約２ｍである。柱穴2280は、掘形が歪な隅丸方形を呈し、長径約0.75ｍ、短径約0.5ｍ、深さは約0.4ｍある。掘形底部に拳大の石が敷かれ、柱痕跡周囲には平瓦が立てて埋められていた。瓦類の他に土師器砕片が出土したが、詳細な時期は不明である。柱穴2351は、掘形が円形を呈し、径約0.5ｍ、深さは約0.1ｍある。拳大の礫が敷かれる。

堀2123・2123合流部・2299・2350（図版24・65） 堀2123は調査区北部で検出した東西方向の堀、堀2299・2350は調査区西半で検出した南北方向の堀である。これらは調査区北西部で合流しており、図版６のＡ－A’セクション以東を堀2123、Ａ－A’セクション以西は堀2123合流部とする。

堀2123は、検出長約25ｍ、幅約4.2ｍ、深さは約2.1ｍある。遺構の主軸方位は、東に対して約15°北に振る。東は護岸2125に削平される。断面観察から、大きく４時期（古段階・中段階・新古段階・新新段階）に分けられる。堀2299は検出長19ｍ、幅4.3ｍ以上、深さは約２ｍある。堀2350は検出長約19ｍ、幅約5.9ｍ、深さは約２ｍある。遺構の主軸方位はいずれも、北に対して約８°西に振る。断面観察から、堀2299は大きく２時期（古段階・新段階）、堀2350は大きく３時期（古段階・中段階・新段階）に分けられる。Ａ－A’セクション、Ｂ－B’セクション、西壁断面では珪藻分析・花粉分析を行っている。詳細な分析地点や分析結果については付章を参照されたい。また、堀2350の13層の土を一部洗浄し、種実同定を行った（表４参照）。

以下では、各堀の出土遺物の時期と断面の層位的関係について述べる。

各堀から出土した遺物の時期は、大きく15世紀代・15世紀末から16世紀初頭・16世紀中頃から後半・16世紀後半・16世紀末から17世紀初頭の５時期のまとまりがある。15世紀代の遺物は、図版24の堀2123の18～20層（堀2123古段階）と堀2299の41～44層（堀2299古段階）から出土した。下段部の堀2123東半からもこの時期の遺物が出土した。下段部では16世紀代の遺物は認められず、新しい段階の堀は削平により失われたものと考えられる。堀2123の東端では柿経が出土した。堀2123古段階では、ラミナなどの滞水の痕跡は認められず、埋土にブロック土を含むことから人為的な埋め立てが行われたと考えられる。一方、堀2299古段階では珪藻分析の結果から、洪水などの一時的な滞水時に埋没したことが明らかとなり、通常時は空堀であったと考えられる。また、堀2123の14～17層（堀2123中段階）と堀2299の31～40層（堀2299新段階）は、堀底が前者は標高約7.2ｍ、後者が標高約7.3ｍと近いことや層位的関係から対応関係にあると推測している。この段階に該当する遺物を抽出することができなかったので詳細な時期は不明であるが、層位的関係から15世紀代と考えられる。

15世紀末から16世紀初頭の遺物は、堀2123の12・13層（堀2123新古段階）、と堀2123合流部（図版10西壁断面）の88～98層（堀2123合流部古段階）、堀2350の16～27層（堀2350中段階）か

ら出土した。堀2123の13層ではラミナが確認でき、堀2350の19・21・23層は砂礫層であることから、一時的な洪水などがあったと考えられる。また、堀2350の南端では木杭を検出しており、これは洪水などに対して法尻の洗堀を防ぐ護岸の役割を意図したものである可能性がある。砂礫層が複数確認できることや護岸の杭の検出に加え、珪藻分析の結果から、この段階以降の堀は、河川などの流路に接続しており、通常時は空堀であったものの、洪水などの影響を受ける環境だったと考えられる。

16世紀中頃から後半の遺物は、堀2123の９～11層（堀2123新古段階）、堀2123合流部の82～87層（堀2123合流部新段階）、堀2350の８～15層（堀2350新段階）である。堀2123合流部の84層と堀2350の13層は、タニシや二枚貝などの貝殻を多量に含む。堀2123では、珪藻分析の結果から、洪水による堆積物の供給があったことがわかった。堀2350の11層は砂礫からなる洪水堆積である。堀2123合流部の84層で「元亀二年」の紀年銘が記された卒塔婆が出土している。

16世紀後半の遺物は、堀2123の６～８層（堀2123新新段階）と堀2123合流部の76～81層（堀2123合流部新段階）から出土した。堀2123の６～８層は、埋土にブロック土を含むことから人為的な埋め立てが行われたと考えられる。

16世紀末から17世紀初頭の遺物は堀2123の２～４層と堀2350の１～７層から出土した。いずれも滞水の痕跡は確認できなかったことから、人為的な埋め立てを行った堀の最終整地層と考えられる。

５）第２面〔Ⅱ期〕の遺構（図版７・60）

井戸2100（図19、図版68） 調査区北部で検出した円形石組の井戸である。検出規模は、掘形径1.5～1.9ｍ、内法径約0.6ｍ、深さは1.5ｍある。井戸の底面標高は約6.4ｍである。石組の石材

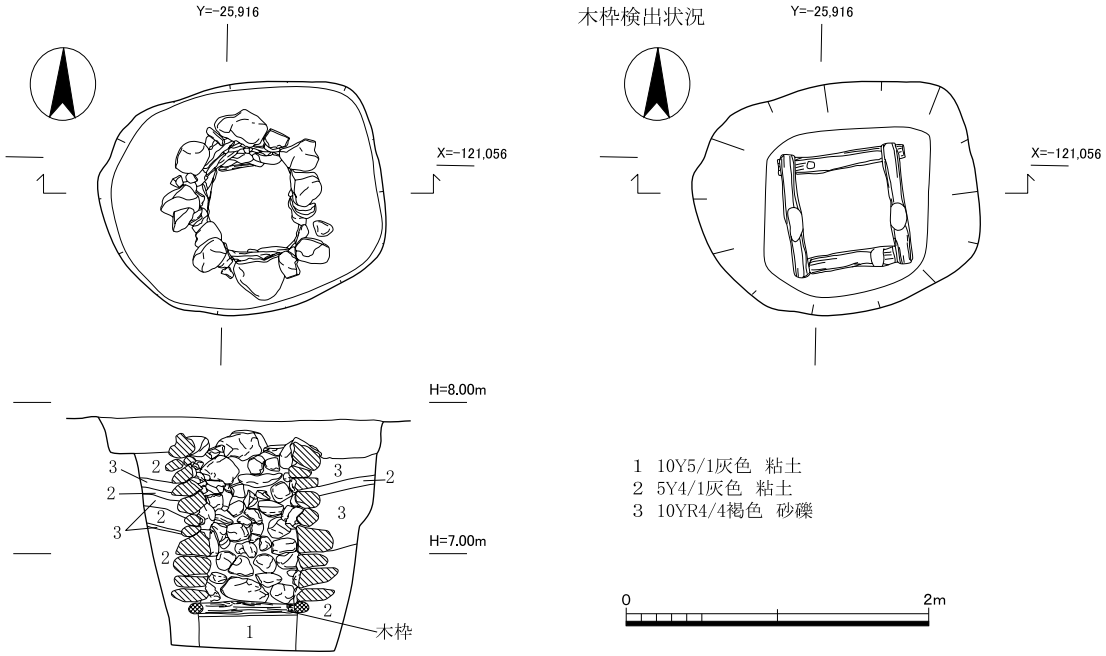


図19 井戸2100実測図（１：50）

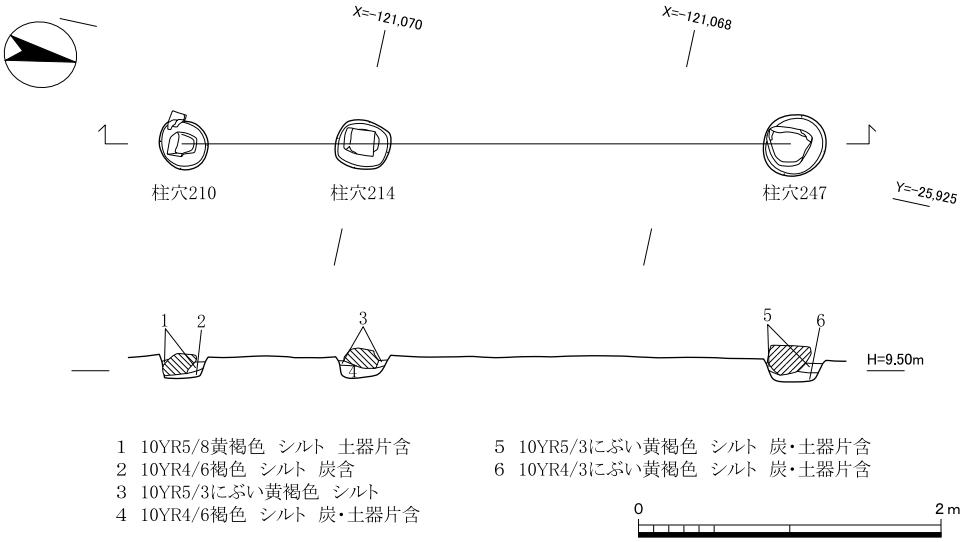


図20　柱列2210実測図（１：50）

は、径0.2～0.3ｍのものが大半で、小口面を内側に向けて積み上げる。石組の下には木材１段分を方形に組んでいる。出土した土器類は少量かつ全て混入によるもので、詳細な時期は不明である。重複関係から、第３面の堀2123よりは新しいものと考えられる。

柱列2210（図20）　調査区中央で検出した南北方向の柱穴列である。２間分を検出した。柱間は南側が約1.2ｍ、北側が約2.8ｍである。遺構の主軸方位は、北に対して約12°西に振る。柱掘形の平面形は円形で径0.3～0.4ｍ、深さは約0.15ｍある。いずれも礎石を有する。出土した土器類はいずれも細片で、詳細な時期は不明である。

溝2200　調査区南西部で検出した南北方向の溝である。検出規模は、長さ約14ｍ、幅0.2～0.4ｍ、深さは0.2～0.3ｍある。南側は調査区外へ延長する。遺構の主軸方位は、北に対して約10°西に振る。17世紀前半の土器類が出土した。

護岸2125（巻頭図版２、図版26～29・67・68、図21）　２区東端で検出した桂川の護岸である。検出規模は南北約37ｍ、東西約9.6ｍ、高さ約2.0ｍである。桂川の水面（標高約6.1ｍ）までを調査対象としたため、護岸東端の法尻部は確認していない。また、標高8.0ｍ以上が削平されている可能性があるため、天端部を含めた護岸構築時の全体規模は不明である。調査では、護岸を構成する石積み・石垣・杭列を確認した。

護岸法面は石積みで構築している。法面の傾斜は護岸北側（A－A'・B－B'）が15～20°、護岸中央（C－C'・D－D'・E－E'）が19～29°、護岸南側（F－F'）が約20°を測る。長径0.2～0.8ｍ×中径0.1～0.6ｍ×短径0.1～0.5ｍの角礫が密に集積している。石材の面を揃えることはなく、法面に凹凸がある。使用石材は砂岩・頁岩ないし粘板岩、ホルンフェルスを主体としており、チャートと花崗岩を少量含む。

石垣は２区北端と南側（X=-121,078～-121,082）で確認した。２区北端石垣は断面でのみ検出した。規模・構造は不明である。南側石垣は南北5.3ｍを検出した。石垣東面は、上から見て中央部が東に向かって弧状に張り出す。高さは約1.1ｍ。使用石材は長径0.2～0.9ｍ×中径0.2～0.5ｍ

×短径0.1～0.4ｍの自然石（砂岩・頁岩ないし粘板岩・チャート、ホルンフェルス）を主体とするが、下段に長径1.0～1.4ｍ×中径0.5～0.6ｍ×短径0.2～0.3ｍの割石（花崗岩）を長手積みした個所もある。

杭列は南北約37ｍを検出した。今回検出した杭がすべて同時施工されたものであるかは不明である。主軸方位は、北に対し約11°東に振る。杭の直径は0.15～0.2ｍである。杭の樹種は不明である。

今回の調査では、護岸の構造を確認するため、構築土の一部を掘り下げて堆積状況を観察した。

構築土は、上から護岸Ⅰ層・Ⅱ層・Ⅲ層の順に堆積している。

護岸Ⅰ層は、護岸法面の石積み構築土である。褐色・灰色系シルト混じりの砂礫層を主体としており、一部に灰黄色系シルト・細砂層が狭在する。

護岸Ⅱ層は、護岸Ⅰ層下層に堆積した級化構造を持つ砂礫層である。護岸北側から中央（A－A'・B－B'・C－C'・D－D'・E－E'）にかけて確認した。各層を構成する砂礫は淘汰が進み、粒径や形状が近似している。氾濫堆積層の可能性がある。層相から、黄色・褐色系砂礫・細砂を主体

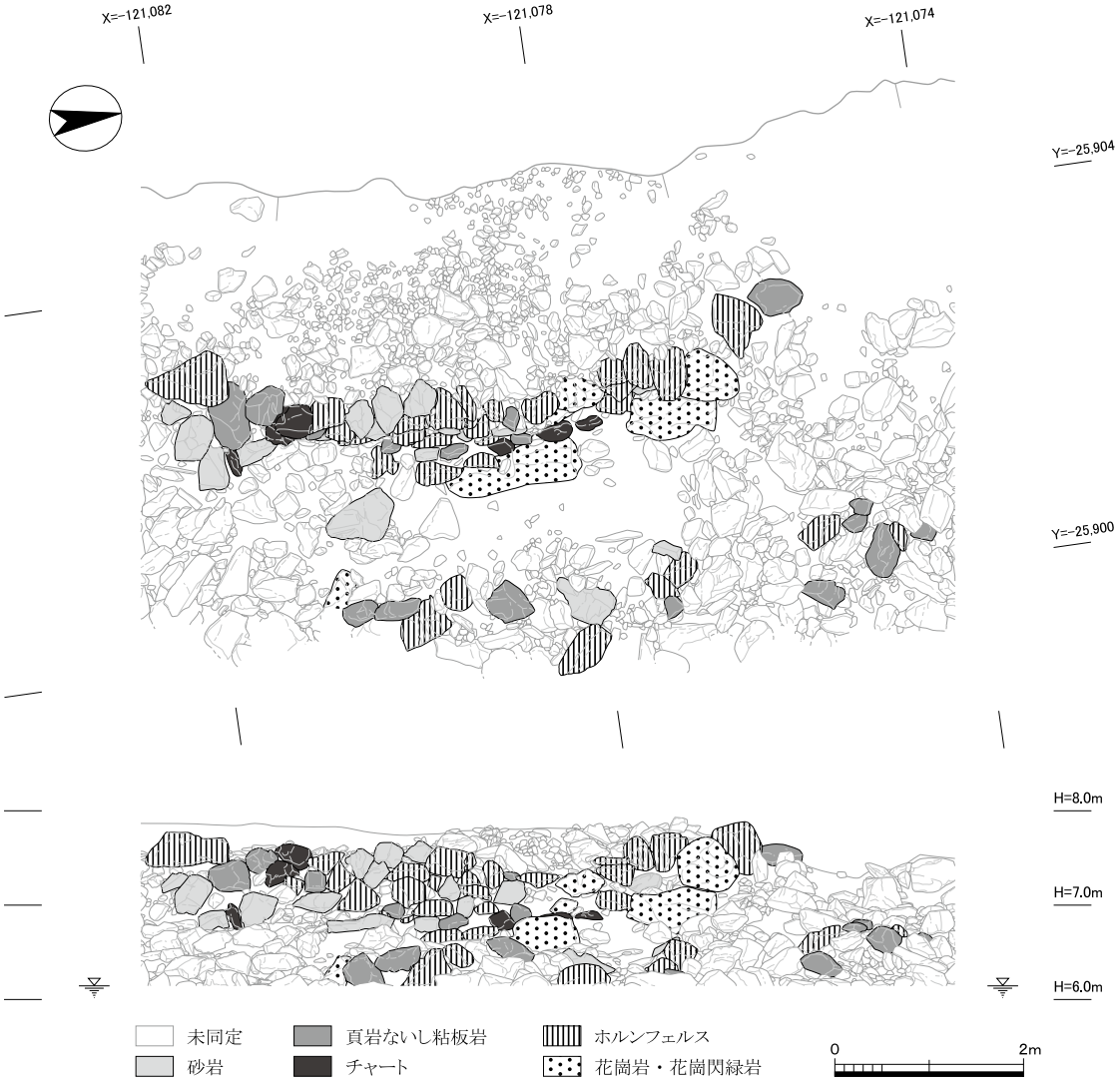


図21　護岸2125使用石材（1：80）

とするⅡa層、赤褐色・褐色系砂礫と灰色系砂礫を主体とするⅡb層、褐色系粗砂・細砂を主体とするⅡc層に細分できる。Ⅱa層からは17～18世紀の染付などの土器類、Ⅱc層からは土師器皿Sbが出土した。Ⅱb層からの出土遺物はない。

護岸Ⅲ層は、石垣構築土である。２区北端と南側（A－A'・F－F'）で確認した。北端部石垣の構築土は径0.1～0.3ｍの角礫と灰色系シルトを主体とする。南側石垣の構築土は径0.1ｍ以下の円礫と灰色系シルトを主体とする。遺物は出土していない。

６）第１面〔Ⅰ期〕の遺構（図版８・69）

井戸2001（図版30・69） 調査区南端で検出した円形の井戸である。検出規模は、掘形径約2.2ｍ、内法径約0.8ｍである。深さは検出面から約３ｍ（標高7.1ｍ）まで掘り下げたが底部は確認できなかった。井戸枠は、上部約1.3ｍは円形石組、石組の下には井戸瓦を３段積み上げ、さらにその下は円形縦板組構造である。縦板の木材はスギである。井戸瓦と縦板は、ともに外周を枘でつなぐ。石組の石材は、径0.2～0.3ｍほどのものが大半で、小口面を内側に向けて積み上げている。18世紀後半の土器類や瓦類、石製品などが出土した。

井戸2138（図版30・70） 調査区中央西部で検出した円形縦板組の井戸である。検出規模は、掘形径約0.9ｍ、縦板は二重で内側は径約0.6ｍ、外側は径約0.8ｍ、深さは約1.1ｍある。底面の標高は約8.6ｍである。遺物は軒桟瓦や井戸瓦などが出土したが、土器類は細片のみで、詳細な時期は不明である。後述する地業2135との重複関係から、これよりも新しいため、明治時代以降と考えられる。

地業2010（図版31・70） 調査区北西隅で検出した南北方向の地業である。掘形の検出規模は、幅約1.1ｍ、長さ約3.3ｍ、深さは約0.6ｍある。北側と西側は調査区外へ延長する。遺構の主軸方位は、北に対して約９°西に振る。掘形内に径0.3～0.5ｍの石を上が平坦面となるように並べる。南端の石は掘形が一段深く、同規模の石を積み重ねる。18世紀半ばの土器類が出土した。

地業2011 調査区北端で検出した南北方向の地業である。掘形の検出規模は、幅約1.3ｍ、長さ約2.0ｍ、深さは約0.5ｍある。北側は調査区外へ延長する。遺構の主軸方位は、北に対して約９°西に振る。掘形内に径約0.5ｍの石と栗石を入れる。

地業2012（図版31・70） 調査区北端で検出した地業である。検出状況から方形もしくはＬ字型の地業が想定され、その南西隅部にあたる。検出規模は、幅0.8～1.4ｍ、深さは0.2～0.5ｍある。北側東側ともに調査区外へ延長する。遺構の主軸方位は、北に対して約９°西に振る。掘形内に径0.4～0.6ｍの石を外側に面を揃えて並べ、その裏側に栗石と土を充填する。17世紀末から18世紀の土器類が出土した。

溝2140 調査区北西部で検出した溝である。検出規模は、長さ約７ｍ、幅約４ｍ、深さは約1.5ｍある。西側は調査区外へ延長する。埋土の大半は砂である。18世紀代の土器類や木製品・漆器などが出土した。

地業2135（図版32・33・71） 調査区西半中央で検出した東西方向に延びる地業である。検出

規模は、幅約９ｍ、長さ約15ｍ、深さは約１ｍある。東側は削平され、西側は調査区外へ延長する。遺構の主軸方位は、東に対して約５°南に振る。構造は、木の枝を一定数束ねた連柴を一辺0.6～0.8ｍ程の格子状に組み、各格子の内側に粗朶を敷き詰めたものを一連の単位とする。木質は形が残るものもあるが、多くは痕跡が残るのみである。使用された木材はツツジ科・コナラ属・ツブラジイ・アセビ・アカガシ属である。連柴の格子は一段分を確認した。格子の南北２列には最大で径0.6ｍを超える人頭大の石を詰める。その後、おおよそX=−121,057.8～−121,063.7の間の約６ｍに土を堤状に盛り、南北端には一部砂を充填する。Y=−25,928付近を境界に、それより西側ではより入念な工事を行っている。南北端に砂を充填するのも、この範囲とほぼ同一である。これは、下層に第３面の堀2123・2299・2350が存在していることから、地盤が悪く、より強固にする必要があったためと考えられる。埋土から、明治時代の磁器が出土した。いわゆる粗朶沈床（単床）工法とよばれる地業の工法と近似する工法である。ただし、通常、粗朶沈床は河床に設置されるものであることから、性格については検討を要する。

註

１）　炉の構造については、大道和人「古代の溶解炉の復元－鍛冶屋敷遺跡の事例から－」『考古学は何を語れるか』同志社大学考古学シリーズX　同志社大学考古学シリーズ刊行会　2010年、大道和人「鍛冶屋敷遺跡の銅精錬・溶解炉と東日本の半地下式竪形炉について」『鋳造遺跡研究資料2021』鋳造遺跡研究会　2021年を参考にした。また、大道和人氏からご教示をいただいた。

４．遺　　物

（１）出土遺物の概要（表２）

遺物は整理箱にして214箱出土した。内容は、土器類・瓦類・土製品が197箱、石製品５箱、木製品７箱、金属製品５箱である。

土器類には弥生土器・土師器・須恵器・灰釉陶器・瓦器・焼締陶器・施釉陶器・磁器・輸入陶磁器がある。瓦類には軒丸瓦・軒平瓦・丸瓦・平瓦・軒桟瓦・菊丸瓦・鳥衾瓦・板塀瓦がある。

遺物の帰属時期は、弥生時代から明治時代まで各時期のものがある。出土量では、室町時代から安土桃山時代のものが最も多く、次いで弥生時代から古墳時代、江戸時代、鎌倉時代と続く。飛鳥時代・奈良時代・平安時代・明治時代の遺物は少量である。

なお、平安時代以降の土師器の型式・年代観については平尾政幸氏の編年[1)]に拠った。各遺物の個別の詳細については、巻末の付表１～７にまとめた。

表２　遺物概要表

時　代	内　　容	コンテナ箱数	Ａランク点数	Ｂランク箱数	Ｃランク箱数
弥生時代	弥生土器、石製品		弥生土器24点、石製品８点		
古墳時代	土師器、須恵器、金属製品		土師器61点、須恵器２点、鉄鏃１点		
飛鳥時代～奈良時代	土師器、須恵器		土師器２点、須恵器１点		
平安時代	土師器、須恵器、灰釉陶器、瓦類、金属製品		土師器２点、須恵器１点、灰釉陶器１点、軒丸瓦２点、軒平瓦７点、銭貨１点		
鎌倉時代	土師器、瓦器、焼締陶器、輸入陶磁器、瓦類、木製品、石製品、土製品、金属製品		土師器16点、瓦器13点、焼締陶器１点、輸入陶磁器２点、軒丸瓦４点、軒平瓦４点、丸瓦２点、木製品３点、石製品１点、土製品２点、銭貨１点		
室町時代～安土桃山時代	土師器、瓦器、焼締陶器、施釉陶器、輸入陶磁器、瓦類、木製品、石製品、土製品、金属製品、製鉄関係遺物		土師器202点、瓦器21点、焼締陶器６点、施釉陶器５点、輸入陶磁器12点、軒平瓦２点、木製品33点、石製品６点、土製品６点、金属製品４点、銭貨20点、製鉄関係遺物８点		
江戸時代～明治時代	土師器、瓦器、焼締陶器、施釉陶器、磁器、輸入陶磁器、瓦類、木製品、石製品、金属製品		土師器５点、瓦器１点、焼締陶器４点、施釉陶器14点、磁器14点、輸入陶磁器３点、軒平瓦２点、菊丸瓦１点、鳥衾瓦１点、軒桟瓦３点、板塀瓦１点、木製品８点、石製品９点、金属製品16点、銭貨10点		
合　計		251箱	579点（54箱）	５箱	192箱

※　コンテナ箱数の合計は、整理後、Ａ・Ｂランクの遺物を抽出したため、出土時より37箱多くなっている。

（２）土器類（図版34～45・72～80、付表１）

１）弥生時代から古墳時代初頭

弥生時代の土器は２区の土坑2440・2492、落込2394下層から出土した。古墳時代初頭の土器は２区の落込2394上層、竪穴建物2356・2400・2240・2410・2386、土坑2404などから出土した。

土坑2440出土土器（図版34　１～15）　弥生土器の壷・甕・鉢・高杯が出土した。時期は中期中葉～後葉[2)]の幅を持つ。

１～６は壷である。１は無頸壷である。口縁端部を折り返し肥厚させる。外面の口縁部直下から櫛描の波状文、簾状文、扇形文、直線文を施す。２は広口壷の肩部と考えられる。櫛描直線文が２帯確認できる。３は有段口縁広口壷の頸部である。頸部に粘土紐を貼り付け、刻目を施す。４は広口壷の頸部から口縁部である。調整は摩滅のため不明。５は壷底部、６は壷体部である。無頸壷か。櫛描の直線文と波状文が確認できる。体部過半はミガキを施す。７～10は甕である。７は甕口縁部で、端部は受口状に直立する。８は外面に煤が付着する。９は口縁部上端に刻目を施す。10は底部で、底面に木の葉圧痕が付く。11・12は鉢である。11は口縁部がくの字に開くもので、口縁端部に刻目を施す。12は腰部に屈曲点を持つ大型の鉢で、腰部に櫛描直線文を施す。口縁部外面に粘土紐を付加し肥厚させる。搬入品か。13～15は高杯である。13は椀形高杯の杯部で、口縁端部外面に粘土紐を付加し肥厚させる。瀬戸内地方からの搬入品か。14・15は脚部である。14は内面に横方向のケズリを行う。

土坑2492出土土器（図版34　16・17）　弥生土器の壷が出土した。時期は中期中葉。

16は広口壷で口縁端部を垂下させる。頸部直下に櫛描直線文と波状文を施す。17は条痕文系土器の広口壷である。口縁部外面は縦方向、体部は斜め方向の条痕が施される。胎土や調整技法から東海地方東部からの搬入品と考えられる。

落込2392下層出土土器（図版34　18～24）　弥生土器の壷・壷蓋・甕・鉢が出土した。時期は中期中葉～後葉。

18～21は壷である。18は細頸壷の頸部と考えられる。外面にヘラ描き波状文を施し、２個１対の突起が付く。19は小型壷の体部で、外面を丁寧にヘラミガキする。20は広口壷である。摩滅のため内外面ともに調整不明。21は大型広口壷の肩部である。外面ヘラミガキののち櫛描直線文と波状文で飾る。22は壷用蓋の摘み部分と考えられる。外面を丁寧にヘラミガキする。23は甕の底部である。断面の胎土色調が黒色で近江地域からの搬入品と考えられる。24は鉢である。外面を櫛描波状文と扇形文で飾る。

落込2392上層出土土器（図版35・72　25～43）　古式土師器の壷・甕・鉢・手焙形土器・高杯が出土した。時期は古墳時代初頭の庄内式併行期である[3)]。

25～27は壷である。いずれも広口壷で、25は口縁端部が受け口状を呈する。断面の胎土色調が黒色で搬入品の可能性がある。28～30は生駒西麓産の庄内式甕である。31は有段口縁をもつ北近畿系の甕である。32～36はいわゆるくの字状口縁の甕である。35・36は口縁端部を摘み上げる。

37は甕底部である。38～40は鉢である。38の底部はわずかな凹み底で外面をヘラケズリする。近江からの搬入品と考えられる。41は手焙形土器、42・43は高杯である。42は深い杯部をもつ有稜高杯で、脚部接続は円盤充填技法による。北陸系の搬入品と考えられる。

竪穴建物2356・炉2390出土土器（図版35・72　44～48）　古式土師器の壷、甕、鉢が出土した。時期は庄内式併行期古段階である。

44は小型の直口壷である。外面と口縁部内面に横方向のヘラミガキを施す。45はタタキ甕である。ナデにより口縁端部外側に面をもつ。46は鉢である。47は広口壷の肩部である。櫛描の直線文、波状文、直線文を施す。48は受け口状口縁の甕である。

竪穴建物2400・土坑2477出土土器（図版35・72　49～54）　古式土師器の甕、器台が出土した。時期は庄内式併行期古段階である。

49はくの字状口縁の甕、50は生駒西麓産の庄内式甕である。底部はわずかな平底。51は受部端部が垂下する器台、52は直線的な脚をもつ中空の小型器台、53・54は中空の器台脚部である。

竪穴建物2240・土坑2391出土土器（図版36・72・73　55～78）　古式土師器の壷、甕、鉢、高杯、小型器台などがまとまって出土した。時期は庄内式併行期新段階。

55～58は壷である。55は短頸壷である。底部は凹み底で、外面を縦方向にヘラミガキする。56は加飾の広口壷口縁部である。端部を上下に拡張し櫛描波状文を施す。57は広口壷または二重口縁壷の頸部から肩部である。頸部に突帯をめぐらせ刻目を入れる。外面は密に縦方向にヘラミガキする。58は壷の体部から底部。体部上半に櫛描波状文を施す。59～70は甕である。59～62は胎土に角閃石を含む生駒西麓産の庄内式甕である。63・64は胎土色調がにぶい褐色またはにぶい橙色を呈する在地産の庄内式甕と考えられる。65～70はいわゆるくの字状口縁のタタキ甕である。71～73は鉢。71・72はくの字状口縁の小型甕の形状を呈する。73は無頸の鉢である。74・75は有孔鉢である。76は高杯である。杯部に段をもち、口縁部が大きく斜め上方に開くタイプの有段高杯と考えられる。77・78は小型器台である。77は受部のみ残存するが、直線的な脚をもつ中実の器台と考えられる。受部の口縁端部は摘み上げる。78は直線的な脚をもつ中空の器台である。

竪穴建物2410出土土器（図版37・73　79～81）　古式土師器の甕、小型器台が出土した。時期は庄内式併行期新段階。

79は胎土に角閃石を含む生駒西麓産の小型の庄内式甕である。80はS字状口縁をもつ東海系の台付き甕である。口縁部の屈曲は弱い。肩部に横ハケを施す。器壁は薄い。81は小型器台の脚部である。直線的に大きく開く。胎土は精良で、外面には横方向のヘラミガキが密に施される。

土坑2404出土土器（図版37・73　82）　ほぼ完形の古式土師器の甕が出土した。時期は庄内式併行期古段階。くの字状口縁の甕で、口縁端部を摘み上げる。

竪穴建物2368出土土器（図版37・74　83～85）　古式土師器の甕、壷、小型器台が出土した。時期は庄内式併行期新段階。

83はくの字状口縁の甕である。内面はヘラケズリする。84は壷底部。85は中実の小型器台である。受部は浅い皿状で、脚部は直線的に延び、裾部でわずかに広がる。

２）古墳時代中期から平安時代

古墳時代中期から平安時代の土器は少量で、すべて２区の遺構から出土した。

溝2325出土土器（図版37・74　86・87）　須恵器の杯蓋（86）、杯身（87）が出土した。時期は５世紀後半。

流路2353出土土器（図版37・74　88）　土師器の椀（88）が出土した。時期は７世紀後葉か。

２区断割トレンチ出土土器（図版37・74　89）　土師器杯（89）が出土した。時期は８世紀前葉。

掘立柱建物2154出土土器（図版37・74　90）　掘立柱建物を構成する柱穴2162から須恵器の長頸壷（90）が出土した。口縁部以外は完形である。口縁部と頸部の境に１条、頸部中央、頸部と体部の境、肩部に２条１対の凹線をめぐらす。東海地方産。時期は７世紀から８世紀。

土坑2326出土土器（図版37・74　91・92）　完形に近い土師器皿（91）と土師器甕（92）が出土した。時期は９世紀後半。92の甕の体部は、粗いハケメを一部ナデ消す。内面は指ナデとオサエ痕が明瞭に残る。

溝2187出土土器（図版37・74　93）　灰釉陶器の把手付瓶子（93）が出土した。時期は９世紀代。口縁部と把手部以外はほぼ完存。底部は糸切りする。

井戸2178出土土器（図版37　94）　須恵器の甕（94）が出土した。外面は格子目タタキ、内面は同心円状の当て具痕が明瞭に残る。共伴土器がなく詳細な時期は不明だが奈良時代から平安時代頃のものと考えられる。

３）鎌倉時代から安土桃山時代

鎌倉時代から安土桃山時代の土器には、土師器・瓦器・須恵器・焼締陶器・施釉陶器・輸入陶磁器がある。最も出土量が多いのは土師器であり、器形は皿が多数を占める。土師器皿には京域主流形の皿と乙訓在地形の皿があり、後者が主体である[4)]。本報告では乙訓在地形の皿は以下のように分類して記述した[5)]。

乙訓在地形皿Ａ群

口縁部から体部にかけてヨコナデを施し、口縁端部を丸く収めるもの。底部内面も丁寧にナデ調整を施す個体が多い。器壁は厚手で胎土に雲母や赤色粒を含む[6)]。

乙訓在地形皿Ｂ群

口縁部にヨコナデを施し、体部から底部外面にオサエによる指や当て布の圧痕が残るもの。内面にハケメを残すものを確認できる[7)]。製作技法は粘土板結合法である[8)]。器壁は厚手で胎土に雲母や赤色粒を含む。器形から細分する。

１類：口縁部から体部にかけて緩やかに外反するもの。口縁部は丸く収める。

２類：体部から口縁部の断面は緩やかなＳ字状を呈し、口縁部が外反するもの。口縁端部が上方にやや肥厚するもの、口縁部外面が面取り状を呈するもの、口縁部内端面に面を持つものがある。

３類：底部と体部の境界が不明瞭で口縁部の外反が弱く、半球状の器形を呈するもの。口縁端部の肥厚は明瞭ではない。

流路1017出土土器（図版38　95～108）　土師器・瓦器・輸入陶磁器が出土した。13～14世紀頃の土器群である。

土師器は乙訓在地形皿Ａ群（95～99）がある。口径8.8～9.4㎝の小皿（95～97）、口径11.0～13.8㎝の中皿（98・99）がある。瓦器は皿（100）・椀（101～103）・羽釜（104）・鍋（105・106）がある。椀は楠葉型がある。102は外面にミガキを施し、口縁部内端に浅い沈線をもつ。輸入陶磁器は白磁椀（107・108）がある。

流路1017（最上層）出土土器（図版38　109）　焼締陶器の備前産の擂鉢（109）が出土した。内面に放射状の擂目とともに斜め方向の擂目がある。

井戸2225出土土器（図版38・75　110～126）　土師器・瓦器が出土した。

土師器は乙訓在地形皿Ａ群（110～119）と鍋（120）がある。口径8.4～9.4㎝の小皿（110～115）、口径11.4～12.8㎝の中皿（116～119）がある。瓦器は皿（121・122）と椀（123～126）がある。121・122の皿は内底面にジグザグ状の暗文をもつ。椀は楠葉型がある。口径11.4～12.8㎝×底径4.4～4.6㎝の中椀（123～125）、口径14.2㎝×底径5.5㎝の大椀（126）がある。いずれも外面にミガキは無く、内面に粗いミガキを施す。簡略化された高台は断面三角形を呈するもの（123・124）、接地面がつぶされ台形状を呈するもの（125・126）がある。125は口縁部内端に浅い沈線をもち、内底面に連続長楕円状の暗文を施す。

堀2123古段階出土土器（図版39・75・76　127～159）　土師器・瓦器・焼締陶器が出土した。京都９段階に相当する[9)]土器群である。

土師器は乙訓在地形皿Ａ群（127～133）とＢ群（134～150）、皿Sh（151・152）がある。Ａ群は口径7.4～8.3㎝の小皿（127～130）、口径10.2㎝の中皿（131～133）がある。Ｂ群は口径6.4～7.7㎝の小皿（134～143）、口径10.3～11.4㎝の中皿（144～146）、口径13.7㎝の大皿（147）、口径14.5～14.7の特大皿（148・149）がある。小皿は１類、中～特大皿は２類がある。中皿の口縁部形態は、口縁部がわずかに内湾して端部が上方にやや肥厚するものが主体を占める。大皿と特大皿は、内外面に丁寧なナデを施した精製品である。145は胎土に雲母や赤色粒を含まず、他地域産の可能性がある。146～148・150には墨書があるが、判読不能である。皿Shは口径6.6～7.0㎝。瓦器は椀（153～156）と杯（157）がある。椀は楠葉型がある。口径10.4～12.2㎝×底径3.6～4.4㎝の中椀がある。いずれも外面にミガキは無く、内面にのみ粗いミガキを施す。内底面にジグザグ状の暗文を施す。高台は矮小化している。158は瓦質の灯篭である。笠部の頭頂部が疑宝珠状を呈し、四方を穿孔する。胴部に開口部を持つ。焼締陶器は備前産の甕（159）がある。頸部から口縁部はほぼ垂直に立ち上がり、口縁部の断面形が細長い玉縁状を呈する。

堀2123新段階（下層）出土土器（図版40・76　160～180）　溝2123南北セクション12層から出土した、比較的一括性の高い土器群である。土師器と瓦器が出土した。京都９Ｃ段階から10Ａ段階に相当する土器群である。

土師器は乙訓在地形皿Ｂ群（160～178）と皿Sh（179）がある。Ｂ群は口径6.9～7.3㎝の小皿（160～169）、口径9.4～10.8㎝の中皿（170～177）、口径14.6の特大皿（178）がある。小皿は１

類、中・特大皿は２類がある。小皿は平面形が楕円形を呈し、口縁部のナデが内面まで及ばないもの（167～169）がある。中・特大皿の口縁部形態はわずかに内湾して端部が上方にやや肥厚する。皿Shは口径7.3㎝である。瓦器は、無鍔の鍋（180）であり、蓋受け部から口縁部が上方へ大きく開く。搬入品と考えられる。

堀2123新段階（上層）出土土器（図版40・76・77　181～205）　土師器・瓦器・焼締陶器・輸入陶磁器が出土した。京都10A段階から10B段階に相当する土器群である。

土師器は乙訓在地形皿Ｂ群（181～194）と皿Ｓ（195～200）がある。Ｂ群は口径6.4～7.2㎝の小皿（181～185）、口径8.0～9.2㎝の中皿（186～192）、口径12.6～13.8㎝の大皿（193・194）がある。小皿は１類、中・大皿は２類がある。小皿は口縁部の外反が弱いもの（184・185）がある。中皿は口縁部の外反が弱く、端部外面が面取り状のものが主体を占める。器形は杯状を呈するもの（186～189）のほか、浅い皿状を呈するもの（190～192）が確認できる。皿Ｓは口径9.0～9.2㎝の小皿（195・196）、口径11.2㎝の中皿（197）、口径13.4㎝の大皿（198・199）、口径15.2㎝の特大皿（200）がある。196は口縁部内端に弱い面をもつ。大皿・特大皿（198～200）は内面に「２」字状ナデ上げを施す[10]。瓦器は風炉（201）がある。肩の張った切掛風炉で袋状の長い乳足を三方に配し、上部立ち上がりに透し文、肩部に香狭間透しを施す。いわゆる「朝鮮風炉」である。焼締陶器は備前産の擂鉢（202）と壷（203）がある。202は口縁部が上方に大きく拡張し、上端に面をもつ。口縁部下端は突出する。203は小型壷で口縁部は欠損する。茶入の可能性がある。輸入陶磁器は白磁（204）と青磁（205）がある。204は閩湾窯系の抉高台皿で体部下半が露胎する。底部内面に重ね焼き痕がある。205は龍泉窯系の無鎬蓮弁文椀である。高台内は露胎する。底部内面見込み部分に削出圏線を巡らし、内部に牡丹文を陰刻する。

堀2123新段階（上層～最上層）出土土器（図版41・78　206～222）　土師器・瓦器・輸入陶磁器が出土した。京都10B段階から11A段階に相当する土器群である。

土師器は乙訓在地形皿Ｂ群（206～215）と皿Ｓ（216～218）がある。Ｂ群は口径6.9～7.2㎝の小皿（206～209）、口径8.0～10.2㎝の中皿（210～214）、口径13.0㎝の大皿（215）がある。小皿は１類、中皿は２類（210・212～214）・３類（211）、大皿は２類がある。小皿は口縁部の外反が弱いもの（207～209）が主体を占める。中皿２類（210・212～214）は口縁部の外反が弱いものがある。器形が杯状を呈するもの（210・214）のほか、浅い皿状を呈するもの（212・213）を確認できる。皿Ｓは口径9.0～10.0㎝の小皿がある。218は底部内面に浅い凹線状の圏線が認められる。瓦器は鍋（219）がある。輸入陶磁器は白磁（220）と青磁（221・222）がある。220は華南沿岸窯系の白磁皿で削出高台である。青磁はいずれも龍泉窯系で、221は無文端反皿、222は無文直口椀である。いずれも高台内は露胎し、底部内面に劃花文を陰刻する。

堀2123合流部 古段階～中段階出土土器（図版41・78　223～251）　土師器・瓦器・焼締陶器・輸入陶磁器が出土した。京都９段階から10B段階に相当する土器群である。

土師器は乙訓在地形皿Ｂ群（223～239）と皿Sh（240～244）、皿Ｓ（245）がある。Ｂ群は口径7.0～8.0㎝の小皿（223～229）、口径9.5～11.2㎝の中皿（230～236）、口径13.2㎝の大皿（237）、

口径14.2～14.5cmの特大皿（238・239）がある。小皿は１類、中皿～特大皿は２類がある。小皿は口縁部の外反が弱いもの（228・229）がある。中皿は口縁部の外反が明瞭なもの（234～236）と弱いもの（230～233）が混在する。皿Shは口径6.2～7.2cmである。240～243は胎土に雲母や赤色粒を含む。皿Sは口径14.4cmの特大皿がある。底部内面に泥漿の圏状の溜まりが認められる。瓦器は小型壷（246）と羽釜（247）と浅鉢（248）がある。248は平面楕円形の浅鉢で四脚を付す。焼締陶器は備前産の杯（249）と信楽系の擂鉢（250）がある。輸入陶磁器は景徳鎮の青花皿（251）がある。口縁部がやや外反しており、高台の接地面に離砂が付着する。

堀2123合流部 新段階（下層～上層）出土土器（図版42・79　252～283）　土師器が出土した。京都10段階に相当する土器群である。

乙訓在地形皿Ｂ群（252～280）と皿Sh（281・282）、皿S（283）がある。Ｂ群は口径6.7～7.4cmの小皿（252～260）、口径8.4～10.4cmの中皿（261～275）、口径13.8～14.0cmの大皿（276～278）、口径14.8～15.2cmの特大皿（279・280）がある。小皿は１類、中皿は１類（261～263）・２類（264～271）・３類（272～275）、大・特大皿は２類がある。小皿は口縁部の外反が弱いもの（258～260）がある。中皿の２類は口縁部の外反が比較的明瞭で器高が相対的に深いもの（269～271）と、口縁部の外反が弱く器高が浅いもの（264～268）がある。皿Shは口径6.8～7.4cmである。皿Sは口径14.5cmの特大皿がある。内面に「２」字状ナデ上げを施す。

堀2123合流部 新段階（最上層）出土土器（図版42・43・79　284～314）　土師器・瓦器・焼締陶器・施釉陶器・輸入陶磁器が出土した。京都10段階に相当する土器群である。

土師器は乙訓在地形皿Ｂ群（284～296）と皿S（297～299）、系統不明の皿（300・301）がある。Ｂ群は口径6.7～7.8cmの小皿（284～291）、口径9.0～10.0cmの中皿（292・293）、口径14.2～14.6cmの特大皿（294～296）がある。小皿は１類、中・特大皿は２類がある。小皿は口縁部の外反が弱いもの（289～291）がある。中皿は口縁部の外反が弱いものが主体を占める。皿Sは口径9.2cmの小皿（297・298）、口径13.6cmの大皿（299）がある。系統不明の皿は口径9.4～10.3cmである。301は粘土紐巻き上げ法による成形である。瓦器は擂鉢（302・303）と羽釜（304・305・308・309）、浅鉢（306）がある。306は胴部が内湾する浅鉢である。外面に凸帯が２条巡り、その間にスタンプを押捺する。焼締陶器は備前産の擂鉢（307）がある。口縁部が上方に大きく拡張し、上端に面をもつ。口縁部下端は突出する。施釉陶器は皿（310・311）がある。310は瀬戸・美濃系の折縁皿である。底部内面に圏線と菊花文を陰刻する。311は肥前系の丸皿である。体部下半は露胎する。削出による三日月高台で、高台内中央を兜巾状に残す。輸入陶磁器は白磁（312・313）と青花（314）がある。312は華南沿岸窯系の白磁皿。口縁部は外反し、底部内面に圏線と劃花文を陰刻する。313は閩湾窯系の白磁杯である。口縁部は外反し、体部下半が露胎する。高台内に「○と＋」を墨書する。314は景徳鎮の青花皿。口縁部は内湾し、高台の接地面に離砂が付着する。

堀2299出土土器（図版43・80　315～344）　土師器・瓦器が出土した。京都９段階に相当する土器群である。

土師器は乙訓在地形皿Ａ群（315～326）とＢ群（327～333）、皿S（334～343）がある。Ａ群は

口径7.6～8.0㎝の小皿（315・316）、口径8.7～11.0㎝の中皿（317～326）がある。B群は口径7.2㎝の小皿（327）、口径9.6～11.8㎝の中皿（328～332）、口径15.4㎝の特大皿（333）がある。小皿は１類、中・特大皿は２類がある。中皿の口縁部形態は、口縁部がわずかに内湾して端部が上方にやや肥厚するものが主体を占める。皿Sは14.2～15.6㎝の特大皿がある。瓦器は羽釜（344）がある。

堀2350（下層）出土土器（図版44・80　345～359）　土師器・輸入陶磁器が出土した。京都10段階に相当する土器群である。

土師器は乙訓在地形皿A群（345）とB群（346～354）、皿S（355・356）、壷（357）がある。A群は口径7.0㎝の小皿がある。混入品の可能性が高い。B群は口径7.0～7.6㎝の小皿（346・347）、8.2～10.8㎝の中皿（348～352）、口径12.6㎝の大皿（353）、口径14.8㎝の特大皿（354）がある。小皿は１類、中～特大皿は２類がある。中皿の口縁部形態は、口縁部外面が面取り状を呈し、端部が上方にやや突出するものが主体を占める。皿Sは口径15.0～15.5㎝の特大皿がある。内面に「２」字状ナデ上げを施す。壷は小型の無頸壷（357）がある。内面に煤が付着する。輸入陶磁器は白磁（358・359）がある。358は閩湾窯系の抉高台皿である。口縁部は内湾する。359は八角杯である。口縁部は外反する。抉高台をもち、高台内中央部が突出する。底部内面見込みに重ね焼きの目跡がつく。体部下半は露胎している。

堀2350（上層）出土土器（図版44・80　360～372）　土師器・瓦器・施釉陶器・輸入陶磁器が出土した。京都10段階に相当する土器群である。

土師器は乙訓在地形皿B群（360～363）と皿S（364～367）がある。B群は口径6.8～8.0㎝の小皿がある。１類である。皿Sは口径7.8～9.5㎝の小皿（364～366）、口径11.3㎝の中皿（367）がある。367は内面に「２」字状ナデ上げを施す。瓦器は羽釜（368）がある。施釉陶器は瀬戸・美濃系の天目椀（369）と内禿皿（370）、肥前系の皿（371）がある。輸入陶磁器は龍泉窯系の線刻細蓮弁文青磁椀（372）がある。弁先端の剣頭部は退化して直線となり、そこから高台方向に縦線を下すことで蓮弁文を表現する。高台内は露胎する。

４）江戸時代

江戸時代の土器には、土師器・瓦器・焼締陶器・施釉陶器・輸入陶磁器がある。

第１面整地層出土土器（図版44・80　373～379）　瓦器・施釉陶器・輸入陶磁器が出土した。17世紀初頭の土器群である。

瓦器は小型浅鉢（373）がある。三方に脚を付し、体部外面に花文のスタンプを押捺する。施釉陶器は肥前系の皿（374）、杯（375）、椀（376）、瀬戸系の天目椀（377）がある。輸入陶磁器は灰青沙器の皿（378・379）がある。

地業2010出土土器（図版44　380）　施釉陶器の皿（380）が出土した。17世紀前半。

護岸2125出土土器（図版44・80　381～393）　土師器・焼締陶器・施釉陶器・磁器が出土した。17世紀第２四半期から18世紀前半頃の土器群である。

土師器は乙訓在地形皿Ｂ群（381）と皿Sb（382）、皿Ｓ（383）がある。Ｂ群は口径6.8㎝の小皿がある。１類である。皿Sbの口径は9.5㎝、皿Ｓの口径は12.6㎝である。皿Ｓの内面には凹線状の圏線が認められる。焼締陶器は信楽系の筒形香炉（384）と伊賀の擂鉢（385）がある。施釉陶器は肥前系の皿（386）と壷（387）がある。386は底部内面の見込みに重ね焼きの目跡が残る。磁器には肥前系の椀（388～392）と皿（393）がある。いずれも染付で、高台外面に圏線を巡らす。390・391は口縁部外面に二重圏線を配する。388・389は外面に花弁文、390は山水文を施す。391は網目文を区画とした笹文を描く。392は二重網目文を施す。393は底部内面に牡丹唐草文を施す。

溝2140出土土器（図版45・80　394～403）　土師器・焼締陶器・施釉陶器・磁器が出土した。17世紀頃の土器群である。

土師器は皿Ｓ（394・395）が出土した。皿Ｓの口径は10.7㎝を測る。内面に凹線状の圏線が認められる。焼締陶器は信楽系の擂鉢（396）がある。体部下端に３条の沈線を巡らす。施釉陶器は信楽系の椀（397）と鉢（398）、産地不明の鉢（399）がある。397は削出高台の端反椀である。高台接地面に重ね焼き時の溶着痕が残る。398は把手付の鉢で火皿と考えられる。399は片口鉢である。鉄釉を漬け掛けしている。体部下半は回転ヘラケズリ調整。底部内面に重ね焼き痕が残る。磁器には肥前系の椀（400～402）と皿（403）がある。400は染付の天目椀。口縁部直下をやや内側に凹ませ、鋸歯文を外周に巡らす。体部は縦方向に鎬を入れ、その間に「福」を配する。401は白磁椀。口縁部はやや外反し、やや高い高台をもつ。402は染付の椀。二重圏線を口縁部外面と高台、底部内面の見込みに施す。内面中央部に梅文。高台内に「大明」の文字銘をもつ。403は染付の皿である。口縁部はやや外反する。内面に菊文を施す。

井戸2001出土土器（図版45　404～412）　焼締陶器・施釉陶器が出土した。18世紀から19世紀の土器群である。

焼締陶器は堺・明石系の擂鉢（404）がある。施釉陶器は京・信楽系の蓋物身（405）と銚子（406）、瀬戸・美濃系の急須（407）、肥前系の皿（411）がある。411は刷毛目皿。二彩で巴文を描く。内面見込みに重ね焼き時の目跡が残る。磁器は肥前系の椀（408・409）と皿（410）、壷（412）がある。408は白磁椀である。409は染付の椀。外面に花文を配し、高台に二重圏線を巡らす。410は染付の蛇目釉剥ぎ五寸皿。外面に蛇行した唐草文、内面に二重斜格子文と半菊文を描く。底部内面にコンニャク印判による五弁花文を付す。412は染付の鶴首瓶。口縁端部がわずかに外反する。外面に蘭文を施す。

地業2135出土土器（図版45　413）　輸入陶磁器の椀（413）が出土した。413は景徳鎮の端反椀。いわゆる「郡中十錦」と呼ばれる粉彩の小椀である。18世紀末から19世紀初頭。

（３）瓦類（図版46～49・81・82、付表２）

瓦類は整理箱にして約50箱分出土した。種類は、軒丸瓦・軒平瓦・丸瓦・平瓦・軒桟瓦・菊丸瓦・鳥衾瓦・板塀瓦がある。時期は、平安時代後期・鎌倉時代・室町時代・安土桃山時代・江戸時代のものがある。軒丸瓦と軒平瓦は全部で42点出土した。その他に、菊丸瓦３点、鳥衾瓦１点、軒桟瓦３点、板塀瓦1点がある。その内、瓦当部の残りが良い27点を図化した。平安時代後期のものが12点（瓦１・２、７～13)、鎌倉時代のものが９点（瓦３～６、14～18)、安土桃山時代のものが１点（瓦19)、江戸時代のものが８点（瓦20～27）である。個々の瓦の文様的特徴・手法の特徴などの詳細については付表２に記載した。

平安時代後期の瓦は、大半が井戸2225から出土した。播磨産、山城産、讃岐産、丹波産のものがある。尊勝寺や金剛心院出土瓦と同笵のものもある。同じく井戸2225からはほぼ完形の丸瓦が２点出土した（瓦28・29)。いずれも播磨産である。

鎌倉時代から室町時代の瓦は、堀2123・2299・2350からまとまって出土した。比較的小ぶりの瓦が多く、塀などに用いられた可能性が考えられる。

江戸時代の瓦は、地業2135、井戸2001、井戸2138などから出土した。軒桟瓦のほかに、菊丸瓦（瓦22）や鳥衾瓦（瓦23)、片切り彫りで唐草文様を描いた板塀瓦（瓦27）がある。

（４）木製品（巻頭図版３・４、図版50～56・84、表３、付表３）

木製品は整理箱にして７箱分出土した。漆器椀・蓋、下駄、櫛、箸、木球、曲物、卒塔婆、柿経などがある。出土遺構や詳細については付表３に記載した。

木１～12は漆器で、椀と蓋がある。木３は、高台内に「Ｔ」字型の刻印が施される。木13～15は、一木造りの連歯下駄である。木13・14は方形、木15は楕円形を呈する。木13の上面は使用により摩耗している。木14・15は、上面に使用時の圧痕が残る。木16～18は、台と歯を別々に作り取り付けた差歯下駄である。木16・17は先端が幅広の方形、木18は楕円形を呈する。木19～27は箸である。長さや太さには差異がある。長軸方向に加工し、端面を切り落とす。木28は横櫛である。24本の歯が残る。棟は緩やかな弧を描き、両端は欠損している。木29は不明木製品である。縦長で片方の端部は櫛状に加工される。歯は４本で１本欠損する。木30は木球である。円筒形の上下辺の端部を削り球形にしている。３箇所に深い切り込みがある。木31・32は曲物である。側板は、樺紐で綴じられ、側板と底板は木釘で固定される。木32は、底板の中央に径約0.2㎝の孔があけられる。木33は鋤である。一木造りである。先に刃が装着するものと考えられるが、刃は残っていない。柄尻は欠損しており、二股に分かれていたかなどの形状は不明である。

木34～44は卒塔婆である。卒塔婆の分類は、頭部と下端の形状によって分けられる[11)]。頭部はＡ（五輪塔形）・Ｂ（山形頭部で切込みのないもの）・Ｃ（山形頭部で左右に一段の切込みのあるもの）・Ｄ（山形頭部で左右に二段の切込みのあるもの）・Ｅ（山形頭部で左右に三段の切込みのあるもの）の５つ、下端はⅠ（先端が尖るもの）・Ⅱ（先細りするが先端が尖らないもの）・Ⅲ（細くならない

もの）の３つである。木34は、頭部はＡ、下端は欠損しており不明。木35は、頭部はＤ、下端は欠損しており不明。木36は、頭部はＡ、下端はⅠ。木37は頭部、下端ともに欠損しており不明。木38は、頭部はＡ、下端はⅠ。木39は頭部は側面が欠損しており不明、下端はⅡ。木40は、頭部はＡ、下端はⅠ。木41は、頭部はＡ、下端は欠損しており不明。木42・43はともに頭部はＡ、下端はⅠ。木44は、頭部はＢ、下端はⅢ。木36・37・38・39・40・41には墨書が残る。木44は、墨は

表３　柿経概要表

巻数	品題	確認できた行（括弧内は枚数、？は計測に含めない）	各品小計	各巻小計
巻第一（全510行）	序品第一	該当なし	0	23
	方便品第二	283～298(16)、418(1)、435～438(4)、487･490(2)	23	
巻第二（全594行）	譬論品第三	55(1)、59～62(4)、278～280(3)、302～304･307(4)、349･351･353～355(5)、358(1)、369～377(9)	27	59
	信解品第四	405～415(11)、463(1)、502？(0)、506～508(3)、510～516(7)、531～540(10)	32	
巻第三（全557行）	藥艸論品第五	該当なし	0	14
	授記品第六	該当なし	0	
	化城論品第七	537～539(3)、542～552(11)	14	
巻第四（全487行）	五百弟子受記品第八	該当なし	0	8
	授學無學人記品第九	該当なし	0	
	法師品第十	206(1)	1	
	見寶塔品第十一	354～360(7)	7	
巻第五（全531行）	提婆達多品第十二	1～9(9)、16～22(7)、25～27(3)、30～34(5)、57･58(2)	26	26
	勸持品第十三	該当なし	0	
	安樂行品第十四	該当なし	0	
	從地涌出品第十五	該当なし	0	
巻第六（全514行）	如來壽量品第十六	53･54(2)、56～62(7)、64～100(37)	46	108
	分別功德品第十七	181(1)、203～210(8)、216･218(2)、223(1)、246～255(10)	22	
	隨喜功德品第十八	327～341(15)	15	
	法師功德品第十九	399･400(2)、412～416(5)、422～427･429(7)、437～439(3)、474～478(5)、507･508･510(3)	25	
巻第七（全475行）	常不輕菩薩品第二十	2～6(5)	5	57
	如來神力品第二十一	該当なし	0	
	屬累品第二十二	該当なし	0	
	藥王菩薩本事品第二十三	該当なし	0	
	妙音菩薩品第二十四	365･366(2)、379～387(9)、422～431･433(11)、440･441(2)、446(1)、448～474(27)	52	
巻第八（全418行）	觀世音菩薩普門品第二十五	1･3･4(3)、17～19(3)、21～24(4)、26(1)、30～34(5)、37～40(4)	20	74
	陀羅尼品第二十六	148～157(10)、171(1)	11	
	妙莊嚴王本事品第二十七	304･307(2)	2	
	普賢菩薩勸發品第二十八	316～339(24)、355･356(2)、359～361(3)、380･381(2)、384･386･387(3)、401～403(3)、409～412(4)	41	
全巻4086行		合計	369	369

※ 巻の全行の数は推定である。
※ 行の数は各巻文頭の品題を1として数えた。
（例：巻第一では巻頭「妙法蓮華経序品第一」と書かれる札を1枚目とし、巻の最終行「妙法蓮華経第一巻」が510枚目とした）
※ 経文中から特定できた文のみを示したため、複数箇所で確認できる文字は含めておらず、最低枚（行）数である。

卒塔婆釈文

木３６

「　　帰命大智慧虚空蔵菩薩　　永禄十年　施主
・　空風火水地　　右意趣者妙奉禅定尼三十三回□
　　一稱一禮者成就自然□□　七月二日　敬白　」

・「　　南無阿□〔弥陀仏ヵ〕□□　」　585×70×12　061

形状はＡ―Ⅰ。表の頭部以下浮き上がり文字、体部に墨痕あり。
裏の上部右端に擦り傷あり。下部左端に擦り傷多数。

木３７

　　一切□□大慈悲□□一身□□
・　□□　　□〔右ヵ〕□□□□
　　□　　□□□大悲□

・　　□□□□陀□□□□□□　(497)×(79)×8　061

上端・下端折損のため、形状不明。表は右・中央・左三行。右行・左行は浮き上がり文字。
裏は十字程度カ。中央に「陀」。

木３８

　　一切有〔為〕法如夢幻泡影　元亀二年　施主
・　空風火水地　　右志者為妙智禅定尼盂蘭盆功徳也
　　如露亦□□□〔作ヵ〕如是観　七月十三日　敬白

・〔バン〕𑖪　南無阿弥陀仏　(553)×58×3～4　061

形状はＡ―Ⅰ。表は鳩摩羅什訳『金剛般若波羅蜜経』の一部。元亀二年は一五七一年。
裏の「𑖪」は大日如来。

木３９

□〔以カ〕智慧光普照一切　　永禄拾一年　□□

・「空風火水地　　右志者為浄俊禅定門小祥忌追善之也
令離三〔塗〕途得無上力　　六月廿日　敬白　　」

・「□〔ゔ カ〕　南無阿弥陀□〔仏カ〕　　」　　577×79×6　061

形状はＡ―Ⅱ。表は『仏説観無量寿経』の一部。永禄十一年は一五六八年。「小祥忌」は「人の死後満一年目命日の法要。一周忌。小祥。」（『日本国語大辞典』）。
裏の梵字上半は【木３８（裏）】上半と同じ。

木４０

「　　□□□□

・空風火水地　　右志者為□□□□□□
□□身□□　　」

・「□　　南無阿□陀　　」　　511×(59)×6　061

形状はＡ―Ⅰ。表の頭部に墨痕と浮き上がり文字で「空風火水地」。体部以下に右・中央・左の三行の墨痕また浮き上がり文字がある。
裏に浮き上がり文字で、「南無阿□陀」。頭部に浮き上がりあり。

木４１

□

・

若□□□者□□□

・□　　□□　　(657)×78×8　061

上端はＡ、下端は不明。表の体部左行に浮き上がり文字。
裏の頭部に浮き上がり。ゔカ。

木４４

「奉□稱　超世之果名一。百萬遍衆病悉除身心安穏之為也
二月如意□〔吉カ〕日　」　　650×70×10　061

形状はＢ―Ⅲ。すべて浮き上がり文字。穿孔あり。百萬遍（念仏）による衆病消除を祈念し、他の卒塔婆と異質である。

残っていないが、浮き上がり文字が確認できる。釈文については、京都大学名誉教授の西山良平氏・京都府立大学教授の横内裕人氏に依頼した。木44は、百萬遍による衆病消除を祈念したもので、故人の追善供養のための他の卒塔婆とは異質である。

その他、柿経が堀2123から出土した（図版84）。表３に、出土枚数、法華経のどの部分が記載されているかについて判明した分を記載した。詳細については次年度報告する。

（５）石製品（図版55・56・83、付表４）

石製品は整理箱にして５箱分出土した。石剣、石鏃、石斧、剥片、石鍋、硯、砥石、石臼、五輪塔などがある。出土遺構や寸法などの詳細は付表４に記載した。

石１は大型の磨製石器である。刃部の大半を欠損するが石鏃または片刃石斧か。土坑2440と竪穴建物2400から出土した破片が接合した。石材は粘板岩系。石２は磨製石剣である。先端部・基部ともに欠損する。石材は粘板岩系。石３は扁平片刃石斧である。小型の長方形で、狭端面の一方に刃を付ける。表面には剥離痕が見られるが、両面とも研磨して仕上げている。石材は粘板岩系。石４は磨製石鏃である。鏃身の先端は鋭利に尖る。基部は欠損する。石材は粘板岩系。石５・６は、緑色凝灰岩（グリーンタフ）の剥片である。石５は割りとった際の剥離面や加工痕が残る。石６は施溝分割の溝と剥離面が残る。管玉製作時の剥片と考えられる。石７・８は、サヌカイトの剥片である。石７は、二次加工痕がある。石鏃の未製品か。

石９～11は、滑石製石鍋である。石９・10は、鍔付石鍋である。口縁直下に突帯をもち、工具による上下方向の加工が見られる。石９は内外面ともに煤が付着する。石11は鍋底部で、外面に煤が付着する。石12は、長方形の硯である。両面とも墨が付着している。石13～18は砥石である。石13は長辺の３面が砥面である。石14は右・上・下側面の３面が砥面である。石15は上下面・片側面（断面図左側面）の３面が砥面として使用され、いずれの面も使用痕が残る。石16は側面が砥面と考えられるが使用痕は残っていない。上面・下面は自然面である。石17は上面が砥面で側面・下面には加工痕が残る。石18は全面が砥面として使用されたと考えられる。石19～20は石臼である。石19は上臼である。上面は皿状に凹み、中心からやや外れた位置に供給口の孔が貫通する。下面は円形の軸受が設けられる。目のパターンは８分画で、直線で粗い。石20は下臼である。中央の芯棒孔は上面は方形で、上面から約２㎝下方からは円形となり、貫通する。目のパターンは８分画で、直線で細い。受け皿が付く。石21は、不明石製品である。「U」字型の抉り込みがある。その逆端部は欠損している。石材は花崗岩。石22は五輪塔などの台座である。四隅に単弁、各辺中央に複弁の蓮弁を彫り出す。石23・24は五輪塔である。石23は水輪である。上面・下面にほぞが設けられる。石24も五輪塔の水輪と考えられる。23と比べると扁平で、ほぞなどの加工は認められない。

（６）土製品（図22、付表５）

土製品は８点出土した。出土遺構や詳細は付表５に記載した。

土１は性格不明である。円錐状で上部に径1.1㎝の孔をあけるが貫通していない。

土２～８は土錘である。いずれも管状で、平面形は楕円形を呈する。形状、大きさにばらつきがあるが、獲物に合わせた機能に基づくものと考えられる[12)]。

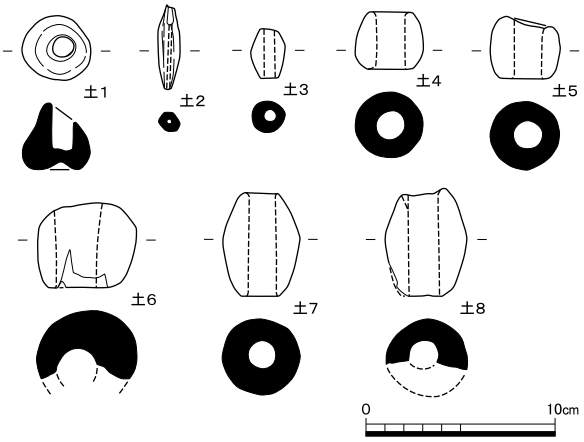


図22　土製品実測図（１：４）

（７）金属製品・銭貨（図版57、付表６・７）

金属製品と銭貨は、整理箱にして５箱分が出土した。金属製品には鉄鏃、鉄製鉢・蓋、鉄釘、銅製飾金具や煙管、鉛玉などがある。銭貨には、宋銭や明銭、寛永通寶のほか、鉄銭や煙管銭、明治時代の銅貨などがある。金属製品、銭貨ともに堀2123と護岸2125からの出土が多い。護岸2125からは寛永通寶が多量に出土した。出土遺構や詳細は付表６・７に記載した。

金１は有茎式鉄鏃である。鏃身部は圭頭形を呈し、茎部の厚みは鏃身部と同じである。全体的に厚みがあり、0.6～0.7㎝ある。重さは8.3ｇあり、弥生時代中期から古墳時代の鉄鏃の多くが６～７ｇにおさまるのに対して、こちらはやや重い[13)]。金２は不明銅製品である。平面円形で中心に孔が貫通する。上面には文様が施される。金３は鉄製の鉢もしくは鍋と考えられる。底部の一部のみ残存している。平面形は円形を想定でき、下面には脚がつく。金４は鉄製の蓋である。頂部にツマミが付く。金５・６は鉄釘である。金６は頭部が扁平に加工される。金７～９は銅製の煙管である。金７・８は煙管の雁首である。金９は吸口と考えられるが、羅宇との接続部が潰されている。金10は銅製の紐金具である。円形の鐶に鐶座がつく。金11は銅製の飾金具である。平面形は菱形を呈し、表面には４箇所、裏面には中心の１箇所に孔があけられる。金12～14は鉛玉である。金12は突出部があり、未製品の可能性がある。金14は金12・13と比較して径が大きく、孔が貫通する。錘の可能性がある。金15は銅製の挟と考えられる。いわゆるピンセットのような形状をしている。先端部はやや屈曲し、反対側の端部は円形を呈する。金16・17は銅製の鋲である。金17は、頭部が半球状を呈し、胴部は周囲を面取りし、八角形を呈する。金18は銅製の目釘か。胴部断面は長方形を呈する。金19は不明鉄製品である。下面は平坦に仕上げる。上面は一部が隆起する。金20は細い棒状の銅製品である。金21は、銅製の火箸と考えられる。

銭貨は、全部で170枚出土しており、銭文が確認できたものの大半が寛永通寶で計125枚あり、その多くが護岸2125から出土した。その他の内訳は、咸平元寶３枚、景祐元寶２枚、皇宋通寶５枚、元豊通寶２枚、元祐通寶５枚、聖宋元寶２枚、その他各１枚である。各種残りが良いものを１点ずつ図示する。銭１～20は北宋銭、銭21は南宋銭、銭22は明銭、銭23～25は寛永通寶で、銭

24は裏に「文」がある。銭26～28は鉄銭、銭29は煙管銭、銭30は無文の模造銭か。銭31は一銭銅貨、銭32は二銭銅貨である。

（８）製鉄関係遺物（図23・24、図版83）

１区の土坑1011・1014、炉1013、ピット1007から、整理箱３箱分の製鉄関係遺物が出土した。そのうち約９割が土坑1014からの出土である。炉壁、羽口、鉄滓のほか、土坑1014と炉1013出土の炭化物の洗浄篩別で抽出した鍛造鉄片・粒状滓などの微細遺物がある。

鉄１～３は炉壁と羽口が一体化したものである。すべて土坑1014出土。炉壁部の胎土は粗く、径0.5～３㎝程度の砂粒を多量に含む。内外面ともに被熱し、気泡を含むガラス質滓が付着する。羽口はいずれも斜め方向に接続する。胎土は精良で、熱により赤変する。円筒形の竪形炉の一部と考えられる[14]。羽口と炉壁の接続角度や羽口の厚み、復元径が異なることから、一つの炉に複数の送風口が伴うものか、炉が複数個体存在したと考えられる。鉄４は羽口である。土坑1014出土。胎土は精良で、内面は被熱により赤変する。最大外径は約11㎝、内径は約５㎝に復元できる。鉄５は円柱状の粘土塊で、半分が被熱し、気泡を含むガラス質や炭化物が付着する。出滓口の栓か。土坑1011出土。鉄６・７は椀型滓である。いずれも土坑1014出土。鉄６は最大径16.0㎝、厚さ5.2㎝、重量は665ｇである。鉄７は最大径11.4㎝、厚さ5.0㎝、重量は340ｇである。その他、炉壁と滓が

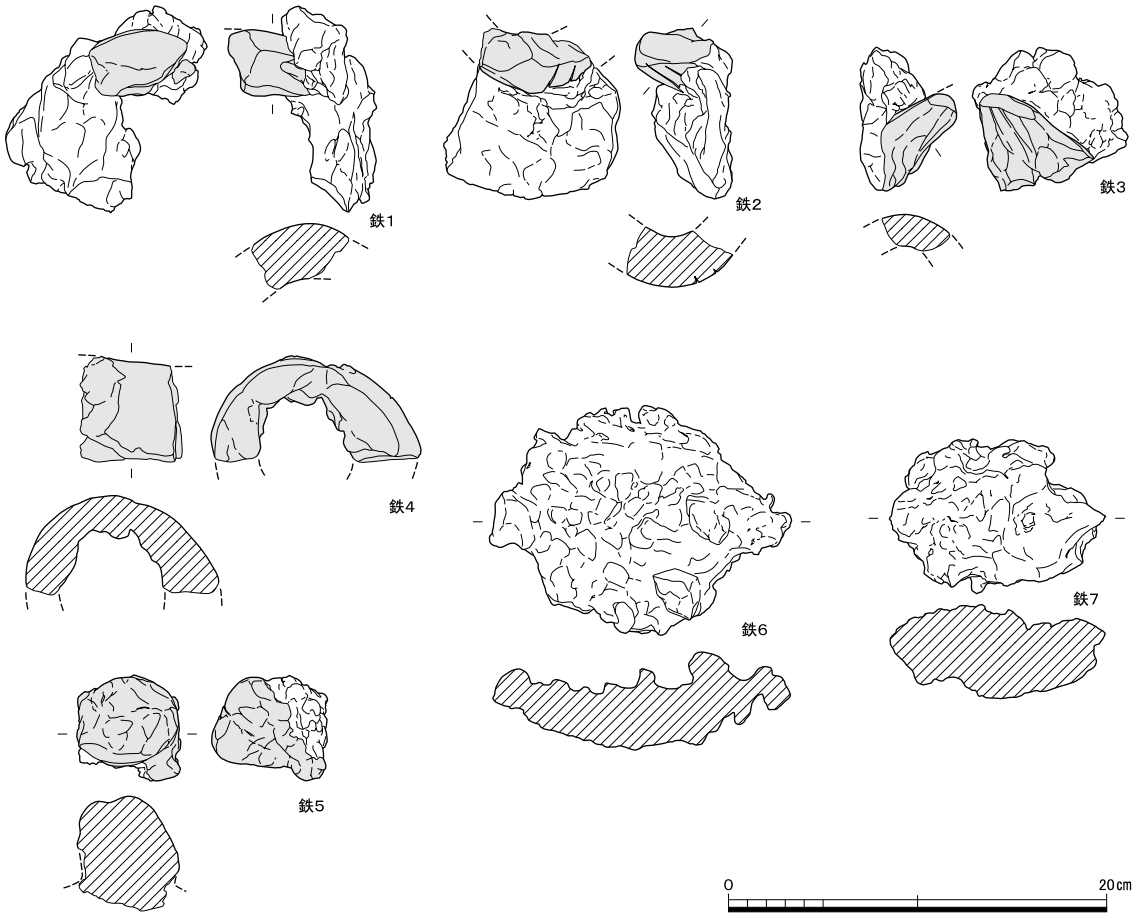
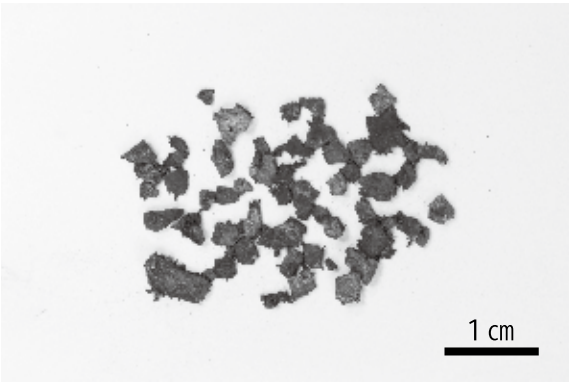
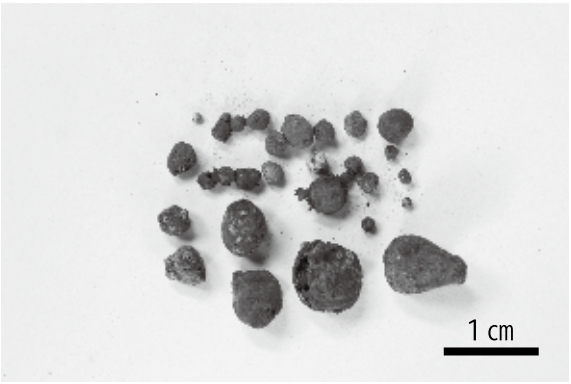


図23　製鉄関係遺物実測図（１：４）

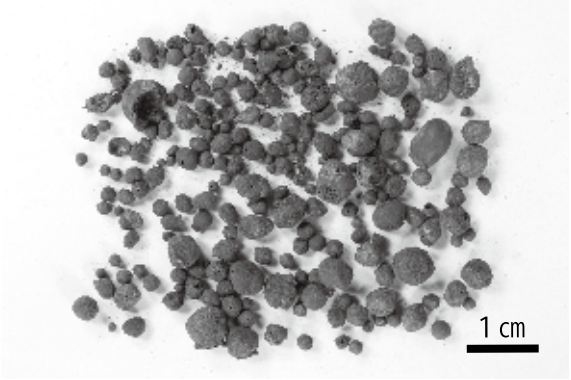


鍛造剥片（炉1013）



粒状滓（炉1013）

鍛造剥片（土坑1014）



粒状滓（土坑1014）

図24　炉1013、土坑1014出土鍛造剥片・粒状滓

融着したと考えられる塊や鉄滓が主に土坑1014から出土した。大型の鉄滓（図版83－鉄８）は径22.0cm、重量は2480ｇである。

また、炉1013と土坑1014埋土の炭化物層の一部をサンプリングし、0.25㎜の篩を用いて水栓篩別し、１㎜以上の鍛造剥片と粒状滓を抽出した。その結果、炉1013では重量1303ｇ・体積1284mlの炭化物層から0.249ｇの鍛造剥片と1.236ｇの粒状滓、土坑1014では重量4024.5ｇ・体積3399mlの炭化物層から8.763ｇの鍛造剥片と5.212ｇの粒状滓が得られた（図24）。

（９）種実・貝類（表４・５）

第３面で検出した堀2350新段階の13層（図版24のＢ－Ｂ’）からは多量の貝類が出土したため、一部の土をサンプリングし、５㎜→２㎜→１㎜の篩と0.25㎜のシルクスクリーンを用いて水栓篩別し、種実類と貝類の抽出を行った。サンプリング土壌は、目視において13層の下部と上部で貝類の種類が異なる傾向を確認したため、下部と上部に分けて抽出を行った。種実については実体顕微鏡を用いて同定を行い、貝類を抽出した土壌から得た可食植物及び、木本などと併せて表４にまとめた。また、貝類については成貝のみを同定対象とし表５にまとめた。下部ではオオタニシが多くを占め、上部では二枚貝のイシガイが多数を占める。その他、堀2350からはヒョウタンの果皮１個体分と種子111点も出土した。

表４　堀2350出土種実同定結果一覧表

	分類群	部位	科名	生育場所	検出個体数			
					貝層種実抽出土		貝層貝類抽出土	
					貝層上部	貝層下部	貝層上部	貝層下部
木本	ムクノキ	種子	ニレ	山地			2	
	クワ属	果実	クワ	山地・庭木・栽培		1		2
	コウゾ属	果実	クワ	山野・栽培・庭木		1		
	マタタビ	種子	マタタビ	山野	2			
	ウメ	核	バラ	栽培・庭木			1	
	キイチゴ属	核	バラ	山野・道端	1	1		1
	コバンノキ近似種	種子	トウダイグサ	山地			1	
	アカメガシワ	種子	トウダイグサ	山野			1	
	サンショウ	核	ミカン	山野			1	
	ブドウ属	種子	ブドウ	山地・山野・栽培			3	
草本	ミズ属	種子	イラクサ	山野	17	19		
	イラクサ科	種子	イラクサ	—		5		
	タデ科（三稜形）	果実	タデ	水辺・湿地・道端	1	4		
	タデ科（扁平形）	果実	タデ	水辺・湿地・道端		2		
	ザクロソウ	種子	ザクロソウ	道端・畑	42	51		
	スベリヒユ	種子	スベリヒユ	道端・畑	5	2		
	ノミノツヅリ	種子	ナデシコ	道端・畑・水田	7	11		
	ノミノフスマ	種子	ナデシコ	水田・畑・野原	12	8		
	ツメクサ	種子	ナデシコ	道端	16	1		
	ハコベ属	種子	ナデシコ	道端・畑	22	7		
	ナデシコ科	種子	ナデシコ	—	43	27		
	アカザ属	種子	アカザ	道端・荒地	37	11		
	ヒユ属	種子	ヒユ	畑・道端	13	7		
	タガラシ	果実	キンポウゲ	水田	1	4		
	キンポウゲ属	果実	キンポウゲ	山野・道端		1		
	イヌガラシ属	種子	アブラナ	野原・道端	2	3		
	アブラナ科	種子	アブラナ	水田・水辺・道端	4	2		
	キジムシロ属	果実	バラ	野原・河原	4	1		
	カタバミ属	種子	カタバミ	道端・畑	13	8		
	エノキグサ	種子	トウダイグサ	道端・畑	1	2		
	スミレ属	種子	スミレ	道端・山野	1	2		
	ゴキヅル	種子	ウリ	水辺		1		
	ウリ類（モモルディカメロン型）	種子	ウリ	栽培			（破片）1	
	ウリ類（マクワ・シロウリ型）	種子	ウリ	栽培		1		1
	チドメグサ属	果実	セリ	道端・庭・野原	1			
	セリ科	果実	セリ	湿地・山野	1	1		
	トウバナ属	果実	シソ	山野	2	4		
	イヌコウジュ属	果実	シソ	山野	2	3		
	シソ属	果実	シソ	道端	2			
	ニガクサ属（ツルニガクサ近似）	果実	シソ	山地・山野	1	1		
	ウツボグサ属	果実	シソ	山野		1		
	ナス	種子	ナス	栽培		1	2	1
	ナス科	種子	ナス	山野・道端		1		
	クワガタソウ属	種子	ゴマノハグサ	畑・道端・水田・沼・山地	4	2		
	タカサブロウ	果実	キク	湿地・水田	1	2		
	キク科	果実	キク	野原・湿地		1		
	サジオモダカ属	果実	オモダカ	水田・溝	1			
	コナギ	種子	ミズアオイ	水田		1		
	ツユクサ	種子	ツユクサ	畑・道端		1		
	イボクサ？	種子	ツユクサ	水田・沼		（破片）1		
	イグサ属	種子	イグサ	湿地	1	2		
	ホシクサ科	種子	ホシクサ	水田・湿地	2	3		
	オヒシバ	果実	イネ	原野・道端		5		
	オオムギ（炭化）	果実	イネ	栽培	1	1	3	2
	イネ（炭化）	果実	イネ	栽培				1
	イネ科	果実	イネ	道端・野原			3	
	コムギ（炭化）	果実	イネ	栽培			7	1
	アゼガヤツリ近似種	果実	カヤツリグサ	湿地		2		
	ホタルイ属	果実	カヤツリグサ	水田・溝・湿地		4		
	テンツキ近似種	果実	カヤツリグサ	湿地		3		
	カヤツリグサ科（三稜形）	果実	カヤツリグサ	湿地・山野・水田・湿地・道端	9	27		
	カヤツリグサ科（扁平形）	果実	カヤツリグサ	湿地・山野・水田・湿地・道端	3	2		
その他	シャジクモ属	卵胞子	シャジクモ	湖・沼・池	1	3		
	コケムシ類	休芽	—	湖・沼・池・河川	12	67		
	ハエ類	蛆殻	—	—	4	1	11	12
	ミジンコ類	耐久卵	—	湖・沼・池・河川	2	1		
	バラ	棘	バラ	—		3	1	2

表５　堀2350出土貝類同定結果一覧表

出土層	分析土壌　重量/体積	種	部位	数量	最小個体数	備考
堀2350貝層 13層下部	10,741.4g/約10,650ml	イシガイ	合弁	1	11	
			右殻	9		
			左殻	10		
		オオタニシ成貝	殻	265	265	
		マルタニシ成貝	殻	16	16	
		カワニナ類成貝	殻	1	1	ハベカワニナか
堀2350貝層 13層上部	11,024g/約11,000ml	イシガイ	合弁	13	154	
			右殻	134		
			左殻	141		
		マツカサガイ	合弁	1	1	
		イシガイ科（大型）	殻	1	1	
		オオタニシ成貝	殻	31	31	
		マルタニシ成貝	殻	10	10	
		カワニナ類成貝	殻	2	2	ハベカワニナか

※タニシ・カワニナ類の幼貝を除く

註

1）　平尾政幸「土師器再考」『洛史　研究紀要　第12号』　公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所　2019年

750年			840年			930年			1020年			1110年	1170年		1260年			1350年	1410年		1500年			1590年			1680年	1740年	1800年	1860年
1			2			3			4			5	6		7			8	9		10			11			12	13	14	
A	B	C	A	B	C	A	B	C	A	B	C	A	B	A	B	C	A	B	A	B	C	A	B	C	A	B	C	A	B	A	B	A	B

2）　弥生土器の形式・年代については、『弥生土器の様式と編年』近畿編Ⅱ、國下多美樹「山城地域の中期弥生土器編年－搬入土器と地域色を中心に－」『第11回近畿地方埋蔵文化財研究会資料』　財団法人大阪文化財センター　1993年を参考にした。

3）　古式土師器の形式・年代については、高野陽子「第５章総括」『京都府遺跡調査報告書第33冊　佐山遺跡』　財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター　2003年、吹田直子「山城地域」『古式土師器の年代学』　財団法人大阪府文化財センター　2006年を参考にした。

4）　乙訓在地形・京域主流形という用語は伊藤2016に基づく。なお、本報告で京域主流形の皿としたものは、①京域で確認できる土師器皿との共通性が強く、かつ②乙訓在地形としては分類できないものを包括した土器群を指す。小森俊寛の類Ｎ・類Ｓ等もここに含む（小森2011）。

5）　土師器皿の分析における系統（系列）理解の重要性を平尾政幸や赤松佳奈が指摘しているが（赤松2019、平尾2019）、今回の分類では十分に検討できていない。今後の課題としたい。

6）　伊野近富のＤタイプ（伊野1980）、加納敬二の乙訓在地形（加納2004）、小森俊寛のLoN（小森前掲）、原秀樹の乙訓在地産（原2019）、山口均の在地系（山口2006）にほぼ相当する。

7）　小森俊寛のLoS（小森前掲）、原秀樹の京都産白色系を模倣した乙訓在地産（原前掲）、山口均の在地系および洛中白色系（山口前掲）にほぼ相当する。

8）　土師器皿の製作技法は橋本2018を参照した。

9）　溝2123古段階と溝2299の時期は、土師器の乙訓在地形皿Ｂ群の器形や法量から推定した。乙訓在地形皿Ａ群や楠葉型瓦器椀が共伴関係するのか、それとも混在するのかの判断は、今後良好な一括資料の増加を待って検討したい。

10）「２」字状ナデ上げは中井2011を参照した。

11）西本安秀「木製卒塔婆の変遷と用途に関する一考察」『網干善教先生古稀記念　考古学論集』下巻　網干善教先生古稀記念会　1998年　1231～1256頁

12）土屋治雄・高梨友子「房総における管状土錘について」『研究連絡誌』第61号　公益財団法人千葉県教育振興財団文化財センター　2001年　１～７頁

13）戸田 智「古墳時代の鉄鏃および弓の機能的分析」『古代学研究』79号　1976年　１～16頁

14）製鉄関係遺物については、大道和人氏に御教示いただいた。

参考文献（土器類）

赤松佳奈「京都・土師器皿研究の歩み」『洛史 研究紀要 第12号』 公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所 2019年

石井 啓・重根和弘『備前窯詳細分布調査報告書』備前市埋蔵文化財調査報告11 備前市教育委員会 2011年

伊藤淳史「いわゆる“乙訓在地形土師器”と呼称される中世土師器皿について」『京都大学構内遺跡調査研究年報』2014年度　京都大学文化財総合研究センター　2016年

伊野近富「平安京跡（左京内膳町）昭和54年度発掘調査概要」『埋蔵文化財発掘調査概報1980－3』 京都府教育委員会　1980年

上田秀夫「14～16世紀の青磁椀の分類」『貿易陶磁研究』第２号　日本貿易陶磁研究会　1982年

大橋康二『古伊万里の文様 初期肥前磁器を中心に』 理工学社　1994年

小野正敏「15、16世紀の染付椀、皿の分類とその年代」『貿易陶磁研究』第２号　日本貿易陶磁研究会　1982年

海邉博史『企画展 人とモノが行き交う中世・堺 －流通の考古学－』 堺市博物館　2022年

加納敬二「乙訓在地形の土師器皿について」『平安京左京北辺四坊　第１分冊（公家町形成前）』京都市埋蔵文化財研究所調査報告第22冊　財団法人京都市埋蔵文化財研究所　2004年

九州近世陶磁学会事務局編『九州陶磁の編年』九州近世陶磁学会10周年記念　九州近世陶磁学会　2000年

小森俊寛「出土遺物」『石清水八幡宮 発掘調査報告書』八幡市埋蔵文化財発掘調査報告第56集　八幡市教育委員会　2011年

中世土器研究会編『概説 中世の土器・陶磁器』 真陽社　1995年

中井淳史「京都系土師器の展開と流通」『考古学と室町・戦国期の流通　瀬戸内海とアジアを結ぶ道』 高志書院　2011年

永井正浩「遺跡出土史料からみた蕎麦」『中近世土器の考古学』第３巻　雄山閣　2016年

橋本久和『概論 瓦器椀研究と中世社会』 真陽社　2018年

原 秀樹『勝龍寺城跡 外郭土塁・空堀の調査』長岡京市文化財調査報告第73冊　公益財団法人長岡京市埋蔵文化財センター　2019年

平尾政幸「土師器再考」『洛史　研究紀要　第12号』 公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所　2019年

山口 均「乙訓地域の中世土器（土師器皿）編年について」『長岡京跡　修理式遺跡・中海道遺跡』向日市埋蔵文化財調査報告書第71集　財団法人向日市埋蔵文化財センター　2006年

山本信夫・森田レイ子・宮崎亮一『大宰府条坊跡ＸＶ－陶磁器分類編－』太宰府市の文化財第49集　太宰府市教育委員会　2000年

5．まとめ

今回の調査では、１区で２面、２区で５面の調査を行い、明治時代から弥生時代中期までの10時期（Ⅰ～Ⅹ期）の遺構・遺物の存在を確認した。2000年以上にわたり、比較的安定した地盤が形成され、その上に遺跡が遺されていることが判明した。また、当地は文献資料で確認できる平安京・京都の外港として栄えた「淀津」の推定地にあたる。今回出土した遺構や遺物の内容から当地が「淀津」の一画である可能性が高まったことは大きな成果である。

なお、当初の想定より遺構面数が増加したため、２区西半についてはⅢ期の室町時代後期で一旦調査を終了し、2022年度にⅣ～Ⅹ期の調査を行うこととなった。

次項から各時期の遺構変遷をみていく。

１）弥生時代中期から古墳時代前期〔Ⅹ・Ⅸ期〕（図25）

この時期の遺構は、２区のみで検出した。西半は未調査である。

弥生時代中期の遺構は、土坑2440・2492、落込2392下層があり、古墳時代初頭の遺構は竪穴建物６棟（2240・2355・2356・2368・2400・2410）、落込2392上層がある。また、２区北端の溝2325からは古墳時代中期の須恵器が出土している。

弥生時代中期の遺構からは、多量の弥生土器や磨製石剣が出土した。弥生土器には、在地産の土器の他に、東海地方など他地域で生産された土器も含まれる。

古墳時代初頭の竪穴建物からは、生駒西麓産の庄内式甕のほか、東海や近江など他地域産の土器が出土した。また管玉の原材料である加工痕のある緑色凝灰岩（グリーンタフ）の剥片も出土しており、当地で生産を行っていた可能性も考えられる。

以上のように、他地域産の土器が多数運び込まれていることから、他の三川合流地帯に立地する遺跡群と同様、当遺跡においても淀津が成立する以前から遠隔地との交流が盛んに行われていたことがわかる。

２）飛鳥時代から奈良時代〔Ⅷ・Ⅶ期〕（図25）

この時期の遺構は、２区のみで検出した。西半は未調査である。

飛鳥時代の遺構は溝2180、流路2353がある。遺構には伴わないが、７世紀代の遺物は他にも出土している。

奈良時代の遺構は掘立柱建物2154がある。東西３間、南北２間で北側に庇を有する。乙訓地域では、飛鳥時代以降、掘立柱建物が主体となる集落が見られるようになることから[1)]、当地もその傾向にある可能性が考えられる。この建物については、庇を有することから、有力者の居館や集落の中心的な建物の可能性があり、今後の調査で当該時期の遺構の広がりを明らかにしたうえで改めてその性格について考えたい。

また、当地は長岡京の条坊では、左京九条三坊四・五・六・七町および九条条間南小路・東三坊

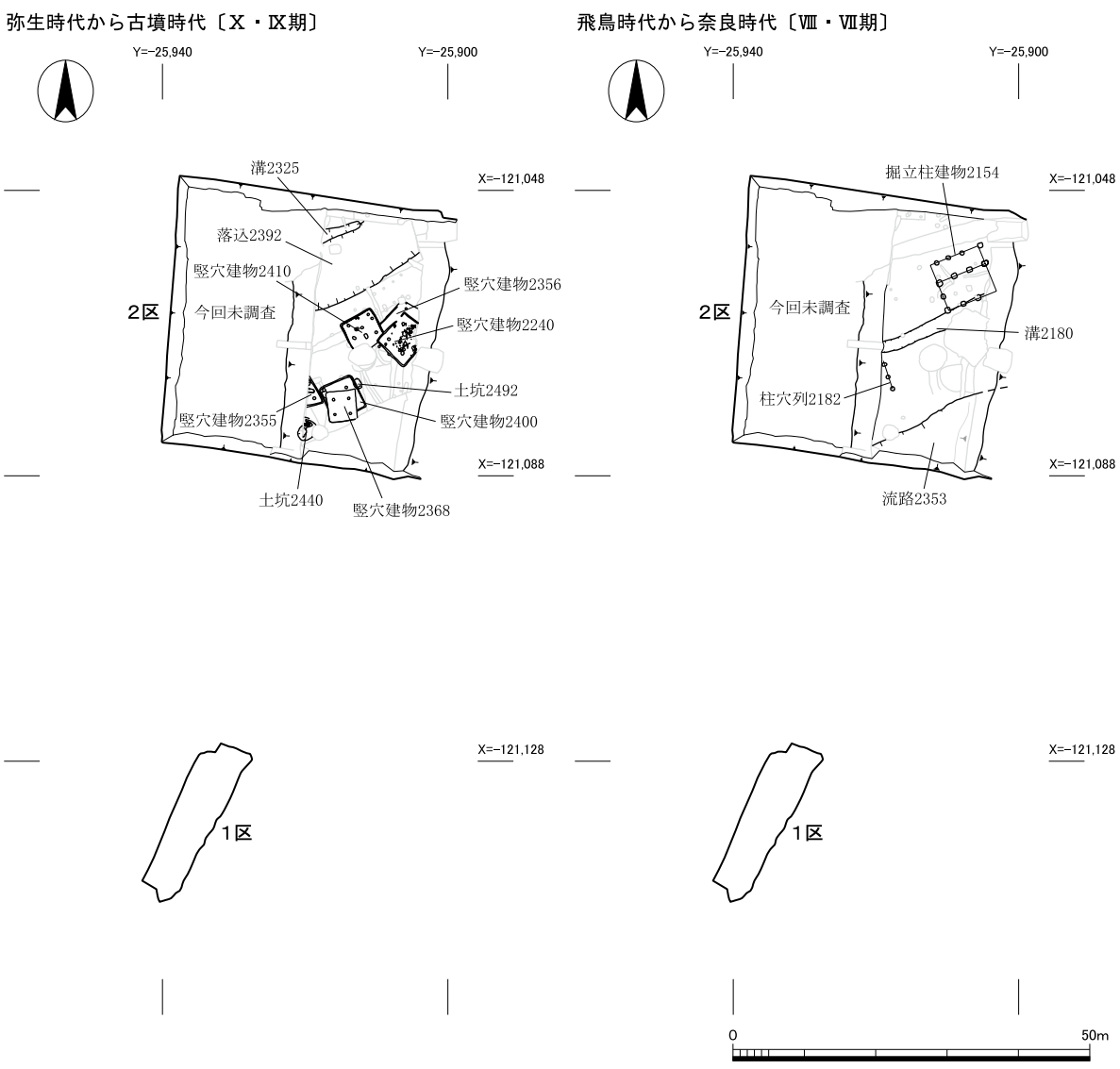


図25　遺構変遷図１（１：1,000）

坊間西小路の交差点に該当するが、道路側溝などの遺構は確認することができなかった。この時期の遺構だけでなく、江戸時代以前の遺構の大半が北に対して西に振れており、正方位を示す遺構は確認していない。このことから、当地には長岡京の条坊が施工されていなかった可能性が高いが、今後の調査で検証していく必要がある。

３）平安時代から鎌倉時代〔Ⅵ・Ⅴ期〕（図26）

この時期の遺構は、平安時代は２区のみ、鎌倉時代は１区と２区で検出した。

平安時代については、２区西半が未調査であり、面的な調査が実施できていないため全容は不明であるが、２区東半で平安時代前期の土坑2326と奈良時代から平安時代と考えられる井戸2178、溝2009・2187を検出した。また、鎌倉時代の井戸2225から平安時代後期の瓦がまとまって出土しており、平安時代に瓦葺の建物が存在した可能性が考えられる。

鎌倉時代についても面的な調査が実施できていないため全容は不明であるが、１区では流路

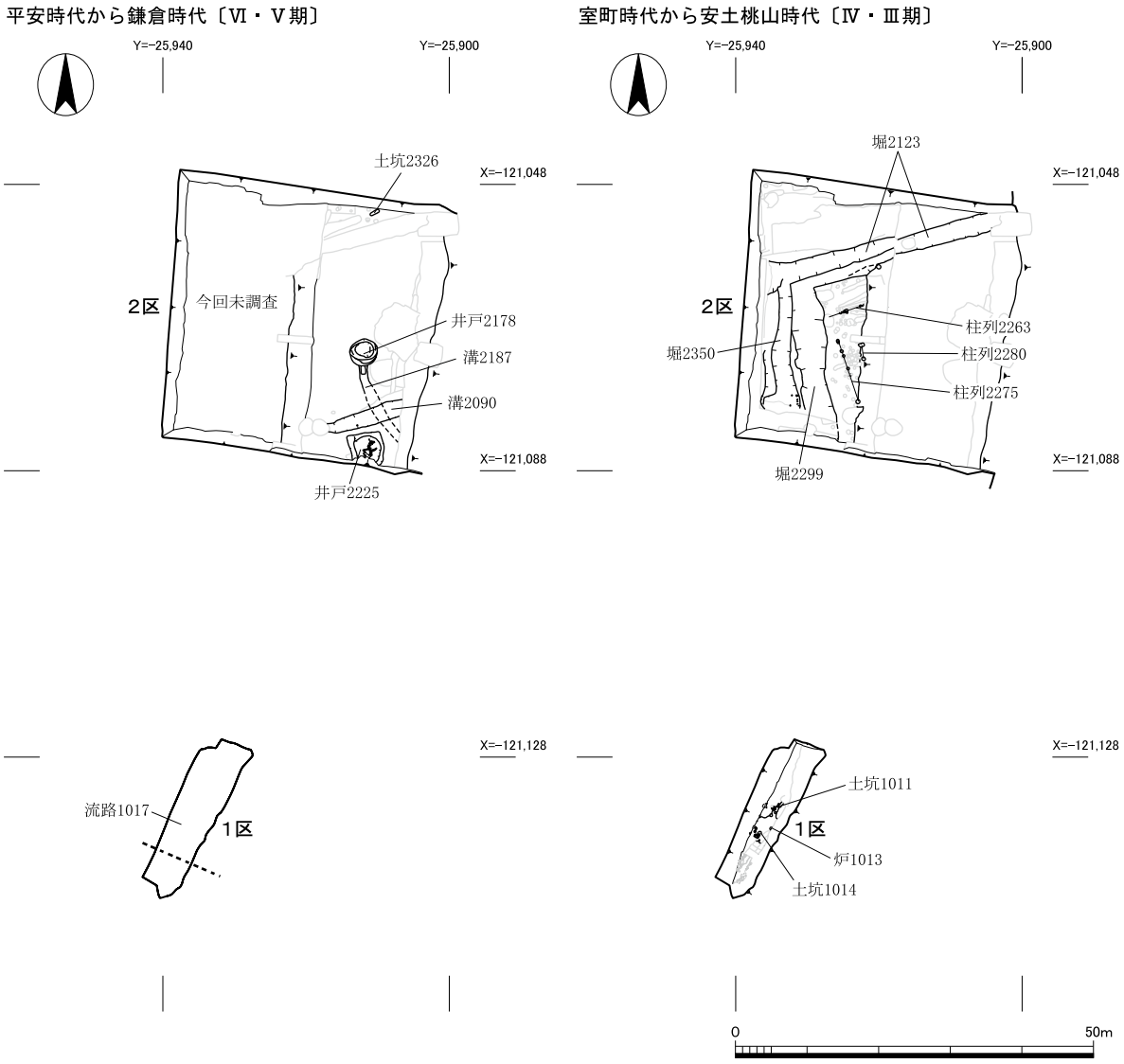


図26　遺構変遷図２（１：1,000）

1017を検出した。断割調査のみで確認しており、その規模は不明である。２区の井戸2225は、掘形が一辺４ｍ以上、深さも検出面からで3.6ｍ以上あり、掘形には平安時代後期の瓦が多数埋められていた。規模や瓦の出土状況は、一般的な集落に存在する井戸とは様相が異なる。また、室町時代から桃山時代の堀2123・2299・2350からは鎌倉時代の瓦が多量に出土した。鎌倉時代にも、瓦葺きの建物が存在した可能性が考えられる。

４）室町時代から安土桃山時代〔Ⅳ・Ⅲ期〕（図26・27）

この時期の遺構は、１区と２区で検出した。１区では炉1013、土坑1011・1014がある。これらは鉄精錬に関する遺構と考えられ、炉壁と羽口が一体化した円筒形の竪形炉の一部と考えられるものや鉄滓、鍛造剥片などが多量に出土した。精錬とは、不純物の多い金属から純度の高い金属を抽出する工程であり、流通の拠点などで行われることもある[2)]。淀は、中世以降、木材・鉄材の中継拠点としても繁栄したとされており、鉄製錬炉の存在はそれを裏付けるものと考えられる。

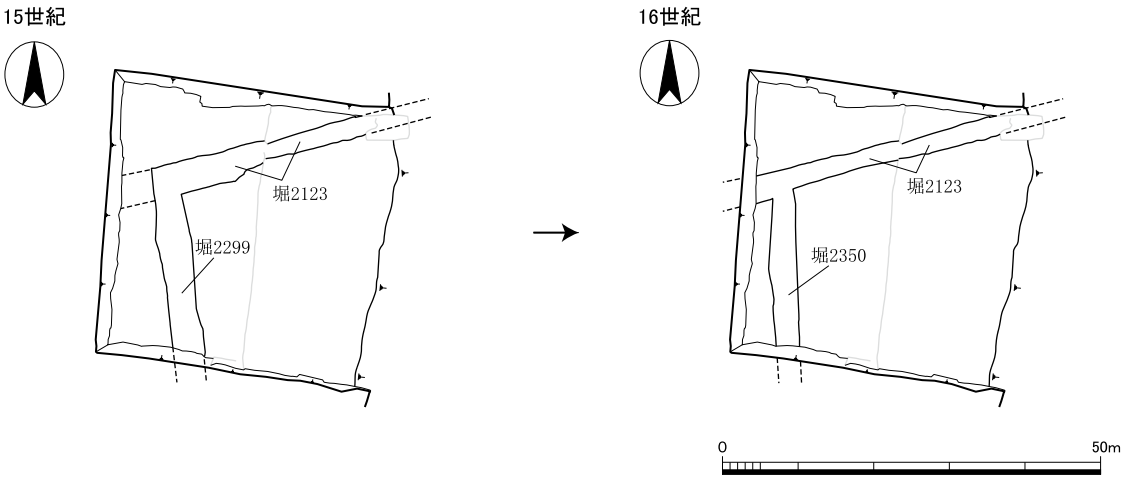


図27　堀2123・2299・2350の変遷模式図（１：1,000）

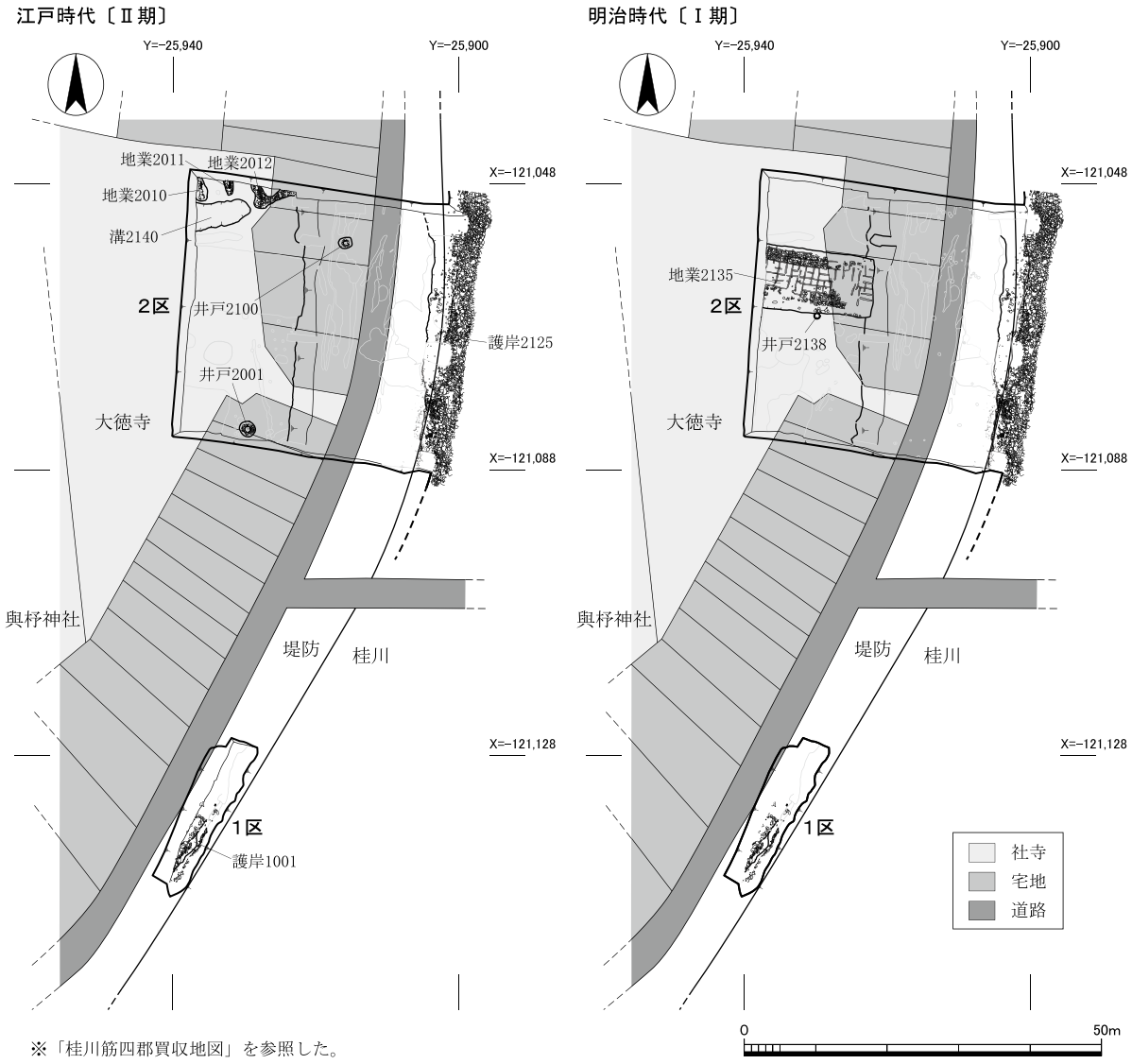
２区では堀2123・2299・2350などを検出した。堀2123は東西方向、堀2299・2350は南北方向の堀であり、それぞれ複数回の掘り直しが行われている。各堀の機能していた時期は、堀2123が15世紀から16世紀後半、堀2299が15世紀代、堀2350が16世紀初頭から16世紀後半と考えられる。次に、各堀がどのように合流し機能していたのかについて出土遺物および層位の対応関係から検討する。まず、15世紀段階では堀2123と堀2299が機能していたと想定される。堀2299は合流部で東に曲がり堀2123とつながり「Ｌ」字型を呈していたと考えられる。合流部以西では、15世紀代の遺物が出土していないことと調査区の西壁断面に対応する層を確認できなかったことから「Ｔ」字型にはならないと想定しているが、堀が完全に重複していた場合もあり、その可能性は完全には否定できない。16世紀に入ると南北方向の堀2299は埋められ、堀2350が機能していた。この段階では出土遺物と層位の対応関係から堀2123と堀2350は合流部で接続し「Ｔ」字型を呈していたと考えられる。

なお、時代は異なるが、明治時代の土地買収図の「桂川筋四郡買収地図」（国土交通省淀川資料館所蔵）と今回の調査区を重ね合わせたところ（図29）、調査区の西端はかつて当地に所在していた大徳寺の敷地に相当することがわかった[3)]。大徳寺は與杼神社の神宮寺として寺伝では９世紀中頃には存在していたとされる。現在記録として残るのは江戸時代以降であるが、室町～安土桃山時代にも当地に存在していたと仮定した場合、これらの堀は大徳寺の外堀と考えることができる[4)]。堀2123からは卒塔婆や柿経、瓦質の灯篭、風炉といった寺院や宗教行為と関連する遺物が多量に出土しており、これらも寺院との関連を強く窺わせるものである。

５）江戸時代〔Ⅱ期〕（図28）

この時期の遺構は、１区・２区で検出した。

１区では護岸1001を、２区では護岸2125、地業2010・2011・2012、井戸2001・2100などを検出した。先述の明治時代の地図と照らし合わせると、西端が大徳寺、中央部が宅地、中央東寄りが道路となることがわかる。宅地の大部分と道に相当する範囲は、下段部に相当しており、削平され



※「桂川筋四郡買収地図」を参照した。

図28　遺構変遷図３（１：1,000）

ているため確認できなかった。

護岸1001と護岸2125は一連のものと考えられる。護岸2125は標高約８ｍで検出し、護岸1001は、標高約９ｍで検出している。このことから護岸2125も標高９ｍ前後までは構築されていた可能性が考えられる。護岸2125は現在もその役割を果たしていることから、全面の破壊調査は行わず、複数箇所の断割や一部の面的な掘り下げでその構造を把握することに努めたが、正確な構築時期については明らかにすることができなかった。今後の調査の課題である。

地業2010～2011は調査区の北西部で検出した。検出位置は、合成図では大徳寺の一画であり、蔵や塀などの地業と想定できる。井戸2001・2100は、明治時代の地籍図から建物配置に大きな変化がないと仮定すれば、ともに宅地の範囲内に位置する。宅地内の共用井戸の可能性も考えられる。

図29 「桂川筋四郡買収地図」（トレース）と調査区の合成図（１：5,000）

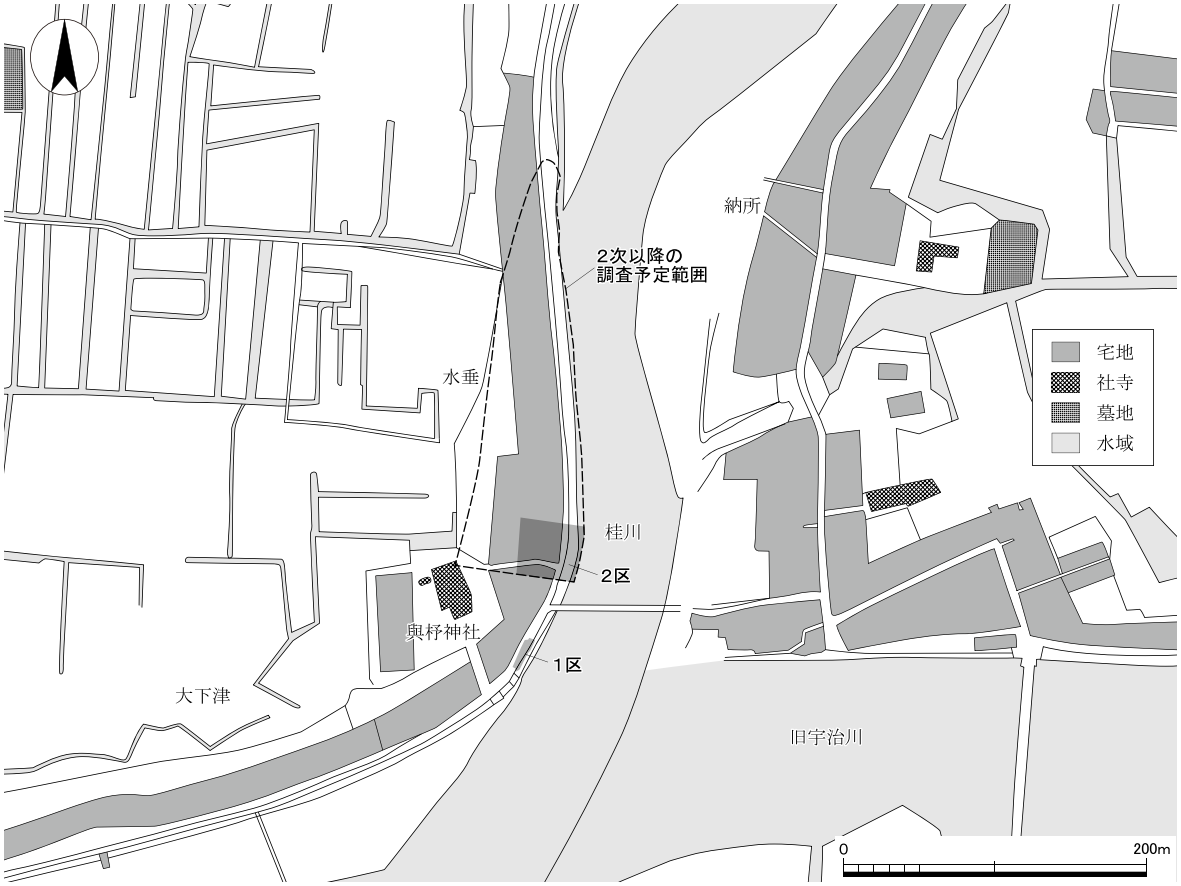


図30 「淀川本支流川平面図」（トレース）と調査区の合成図（１：5,000）

６）明治時代〔Ⅰ期〕（図28）

この時期の遺構は、２区のみで検出した。地業2135と井戸2138がある。地業2135は、今回の調査で検出した江戸時代以前の遺構の方位の振れとは異なる振れをしている。江戸時代以前の遺構は、いずれも北に対して西に振るのに対して、この地業2135は北に対して東に振っている。条里制およびそれに倣った土地区画の在り方とも異なっている。

また地業2135は、いわゆる粗朶沈床工法と非常に類似した工法が用いられている。粗朶沈床工法は、明治時代初頭にオランダ人技術者のヨハネス・デ・レーケらによって日本に持ち込まれた技術で、通常河床に設置されるものである。設置の目的は水の勢いのコントロールなどであるが、該当範囲は、合成図では大徳寺・宅地となっており、河川があったとは考えにくい。この地業が何を目的として行われたのかについては今後の検討課題である。

今回、当地の土地利用を考えるにあたり「桂川筋四郡買収地図」と「淀川本支流川平面図」の２種類の図面（ともに国土交通省淀川資料館所蔵）を確認した[5)]。これらの地図と調査区を重ね合わせたところ（図29・30)、今回の調査区を含めて調査予定範囲には、水垂集落や與杼神社・常念寺・大徳寺などが重なることがわかった。

７）まとめと今後の課題

今回、長岡京跡・淀水垂大下津町遺跡の調査を行い、当初の想定とは異なり、弥生時代中期から明治時代までの10時期の遺構面を確認し、各時期・各時代で特筆すべき遺構・遺物を検出した。河川敷という現状にありながら、約2000年にわたる遺跡が遺されている稀有な事例であり、港湾遺跡の在り方を通史的に検討し得る貴重な遺跡であることが判明した。その中でも、古代から近世までの瓦葺建物の存在を示す瓦類の出土や、中世における輸入陶磁器類の出土、鉄精錬に関する遺構・遺物の出土など、これまで考古学的に確認できていなかった「淀津」についての検討を可能とする遺構・遺物が出土したことは大きな成果と考える。ただ、文献上に「淀津」が表れる平安時代、また史料から盛期であったと考えられる鎌倉時代については、今回面的な調査を行うことができておらず、今後の調査で、より具体像を明らかにしていく必要がある。また、奈良時代以前についても集落が存在したことが確実となり、「淀津」成立へとつながる交流拠点としての実態の一部が明らかとなりつつある。これまで、旧巨椋池周辺、三川合流地帯で見つかっている集落遺跡の空白地帯を埋める発見であり、当地の地形形成の有り方についても再考を促す成果といえる。今後の調査で、考古学のみならず、地理学や文献史学などの関連分野とも連携し、当遺跡の実像を明らかにしていく必要がある。

註

１）　古代学研究会編『古墳時代から飛鳥時代へ　集落遺跡の分析からみた社会変化』　六一書房　2021年

２）　大道和人氏からご教示をいただいた。また、炉の構造については、大道和人「古代の溶解炉の復元－鍛冶屋敷遺跡の事例から－」『考古学は何を語れるか』同志社大学考古学シリーズⅩ　同志社大学考

古学シリーズ刊行会　2010年、大道和人「鍛冶屋敷遺跡の銅精錬・溶解炉と東日本の半地下式竪形炉について」『鋳造遺跡研究資料2021』 鋳造遺跡研究会　2021年を参考にした。

3） 地図の合成は千本通を基準として行った。

4） この時期の京内の寺院は、本能寺や妙顕寺のように周囲に堀をめぐらしていたものもあり、この堀もそうした性格のものの可能性も考えられる。山本雅和『「本能寺の変」を調査する』 リーフレット京都　№231　財団法人京都市埋蔵文化財研究所・京都市考古資料館　2008年

5） 前者は水垂村が明治時代に移転する直前の明治30年のもので、後者は明治24～25年に作成されたものである。後者の方が先に作成されたにもかかわらず、大徳寺の寺域が記されていないなどの矛盾点もみられる。

参考文献（淀津・水垂集落について）

淺井良亮・大邑潤三・植村善博『京都市淀、水垂・大下津地域における治水・水害史と淀川改良工事』 京都歴史災害研究　第14号　2013年　29～39頁

植村善博・大邑潤三編『京都南、移転集落水垂の歴史と生活』 文理閣　2015年

木村　宏「淀津の盛衰と港湾機能の変遷」『人文地理』８巻６号　1957年　30～41頁

田良島哲「<研究ノート>中世淀津と石清水神人」『史林』第68巻第４号　1985年　613～638頁

『京都市の地名　日本歴史地名大系27』 平凡社　1979年

『史料　京都の歴史　第16巻　伏見区』 平凡社　1991年

参考文献（粗朶沈床について）

高津儀一『土木工要録』 有隣堂　1881年

樋口経太・関克己・美寺寿人「伝統的河川工法に関する研究」『リバーフロント研究所　研究所報告』平成６年度研究所報告　第6号　1994年

『ふうど』 2019年夏号　第45号　川のなかの秘策　株式会社タカヨシ

付章　自然科学分析

株式会社パレオ・ラボ

（１）放射性炭素年代測定

１．はじめに

調査区から採取した試料について、加速器質量分析法（AMS法）による放射性炭素年代測定を行った。

２．試料

本稿では、放射性炭素年代測定以外の実施分析項目のうち、花粉分析と珪藻分析の試料の採取状況についても併せて掲載している。放射性炭素年代測定、花粉分析、珪藻分析の試料一覧を表１に示す。これらの試料の採取位置および基本層序と堀埋土の岩質などを併せて示した柱状図を図１・２に示す。なお、年代測定試料の情報、調製データは表２のとおりである。測定試料を写真１・２に示す。また、試料№１の採取位置の堆積状況を写真３・４に示す。

また、本稿の考察では、年代値に関する評価とあわせて、調査区の基本層序と、珪藻分析と花粉分析を行った中世の堀の埋土の埋没状況についての検討も行う。

表１　分析試料一覧

	遺構面	採取地点	遺構	試料番号	埋没段階	層序	年代	珪藻	花粉	時代
１区	第２面	１地点	土坑1014埋土	1	－	－	○	－	－	－
２区	－	２地点	基本層序(深掘)	1	－	－	○	－	－	－
	第３面	３地点	堀2299	1	－	41層	－	○	－	中世
				2		42層	－	○	－	
				3		43層	－	○	○	
		４地点	堀2350	1	最終	2層	－	○	－	
				2	新	10層	－	○	－	
				3		13層上	－	○	－	
				4		13層下	－	○	－	
				5		15層	－	○	－	
				6	中	24層	－	○	－	
				7		25層	－	○	－	
				8		26層	－	○	－	
				9		27層	－	○	○	
		５地点	堀2123 合流部	1	新	84層上	－	－	－	
				2		84層下	－	－	－	
				3		87層	－	○	－	
				4	古	93層	－	○	－	
				5		97層	－	○	－	
		６地点	堀2123	1	新	11層	－	○	－	
				2	中	14層	－	－	－	
				3		15層	－	○	－	
				4		16層	－	○	－	
				5		17層	－	○	－	

表２　測定試料および処理

測定番号	遺跡データ	試料データ	前処理
PLD-46567	試料№１ 調査区：２区 基本層序(断割)：15層 採取位置：井戸2178側壁 採取地点：2-1地点	種類：種類不明の炭化植物片 状態：wet	超音波洗浄 有機溶剤処理：アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2 mol/L,水酸化ナトリウム：1.0 mol/L,塩酸：1.2 mol/L）
PLD-46568	試料№２ 調査区：１区 遺構面：第２面 遺構：土坑1014	種類：種類不明の炭化材片 試料の性状：最終形成年輪以外 部位不明 状態：wet	超音波洗浄 有機溶剤処理：アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2 mol/L,水酸化ナトリウム：1.0 mol/L,塩酸：1.2 mol/L）

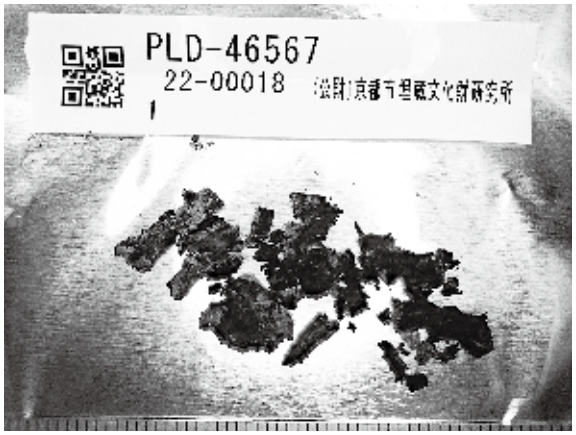


写真１　試料№１（２区断割基本層序15層：PLD-46567）

写真２　試料№２（１区土坑1014：PLD-46568）

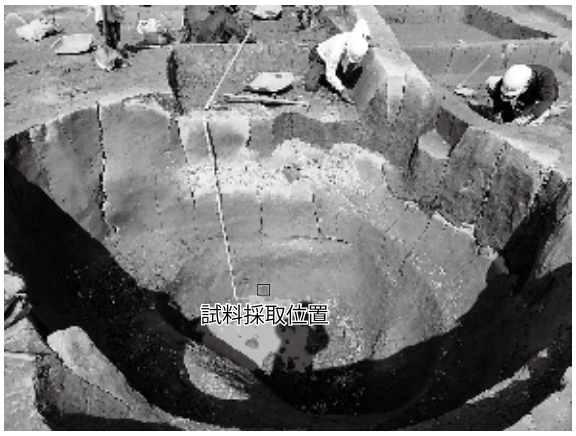


写真３　試料№１の採取位置

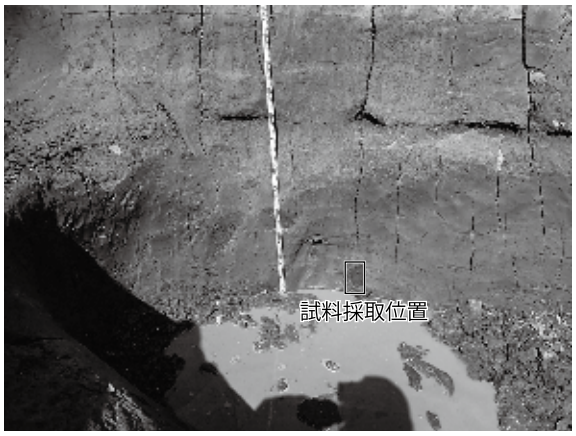


写真４　試料№１の採取層準の堆積状況

３．方法

試料は調製後、加速器質量分析計（パレオ・ラボ、コンパクトAMS：NEC製 1.5SDH）を用いて測定した。得られた^{14}C濃度について同位体分別効果の補正を行った後、^{14}C年代、暦年代を算出した。

４．結果

表３に、同位体分別効果の補正に用いる炭素同位体比（δ13C)、同位体分別効果の補正を行って暦年較正に用いた年代値と較正によって得られた年代範囲、慣用に従って年代値と誤差を丸めて表示した^{14}C年代、図３に暦年較正結果をそれぞれ示す。暦年較正に用いた年代値は下１桁を丸めていない値であり、今後暦年較正曲線が更新された際にこの年代値を用いて暦年較正を行うために記載した。

^{14}C年代はAD1950年を基点にして何年前かを示した年代である。^{14}C年代（yrBP）の算出には、

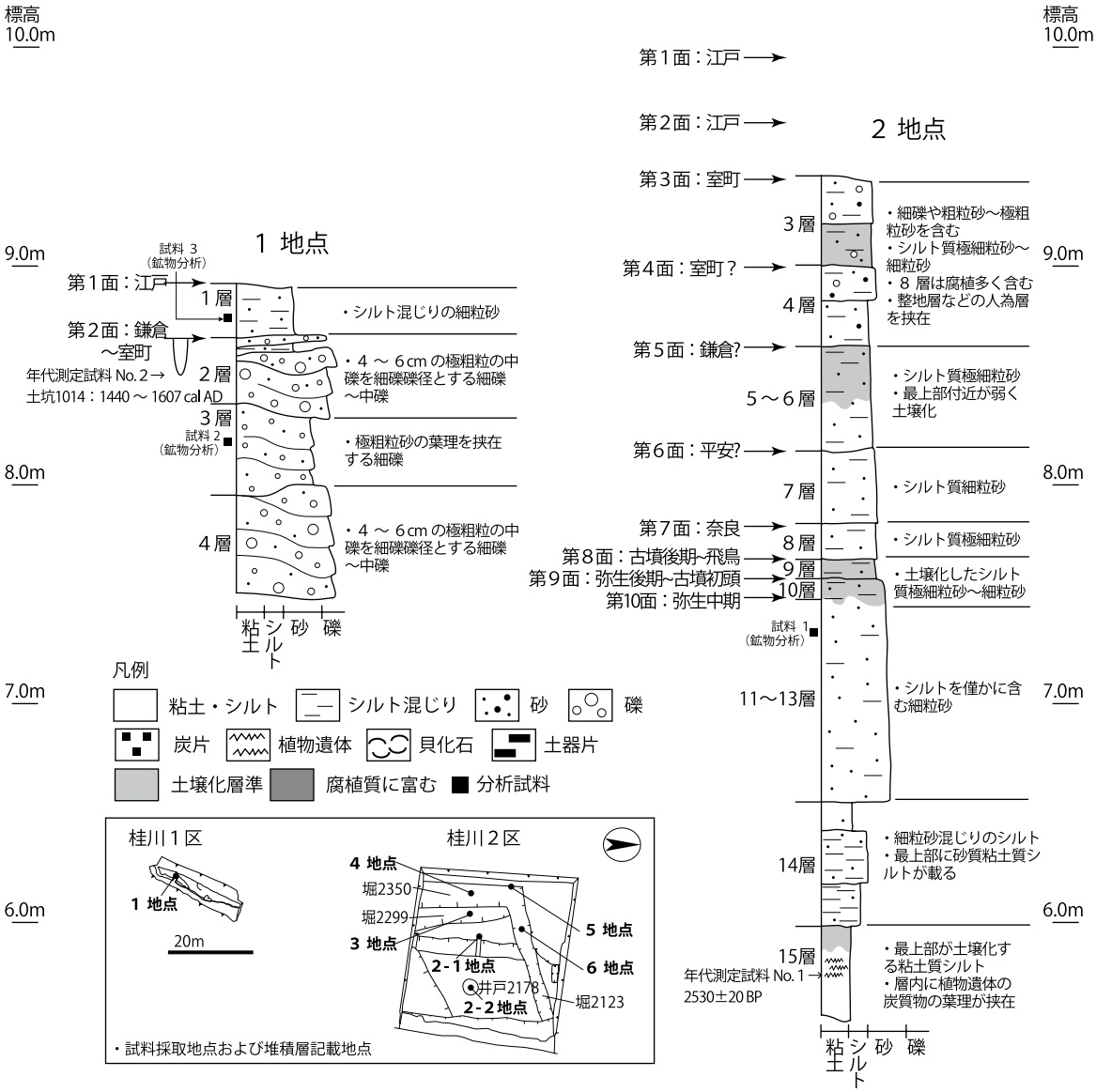


図１　調査区の基本層序の堆積状況および岩質記載と分析試料の採取位置

^{14}Cの半減期としてLibbyの半減期5568年を使用した。また、付記した^{14}C年代誤差（±1σ）は、測定の統計誤差、標準偏差等に基づいて算出され、試料の^{14}C年代がその^{14}C年代誤差内に入る確率が68.27％であることを示す。

なお、暦年較正の詳細は以下のとおりである。

暦年較正とは、大気中の^{14}C濃度が一定で半減期が5568年として算出された^{14}C年代に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の^{14}C濃度の変動、および半減期の違い（^{14}Cの半減期5730 ± 40年）を較正して、より実際の年代値に近いものを算出することである。

^{14}C年代の暦年較正にはOxCal4.4（較正曲線データ：IntCal20）を使用した。なお、１σ暦年代範囲は、OxCalの確率法を使用して算出された^{14}C年代誤差に相当する68.27％信頼限界の暦年代範囲であり、同様に２σ暦年代範囲は95.45％信頼限界の暦年代範囲である。カッコ内の百分率の値は、その範囲内に暦年代が入る確率を意味する。グラフ中の縦軸上の曲線は^{14}C年代の確率分布を示し、二重曲線は暦年較正曲線を示す。

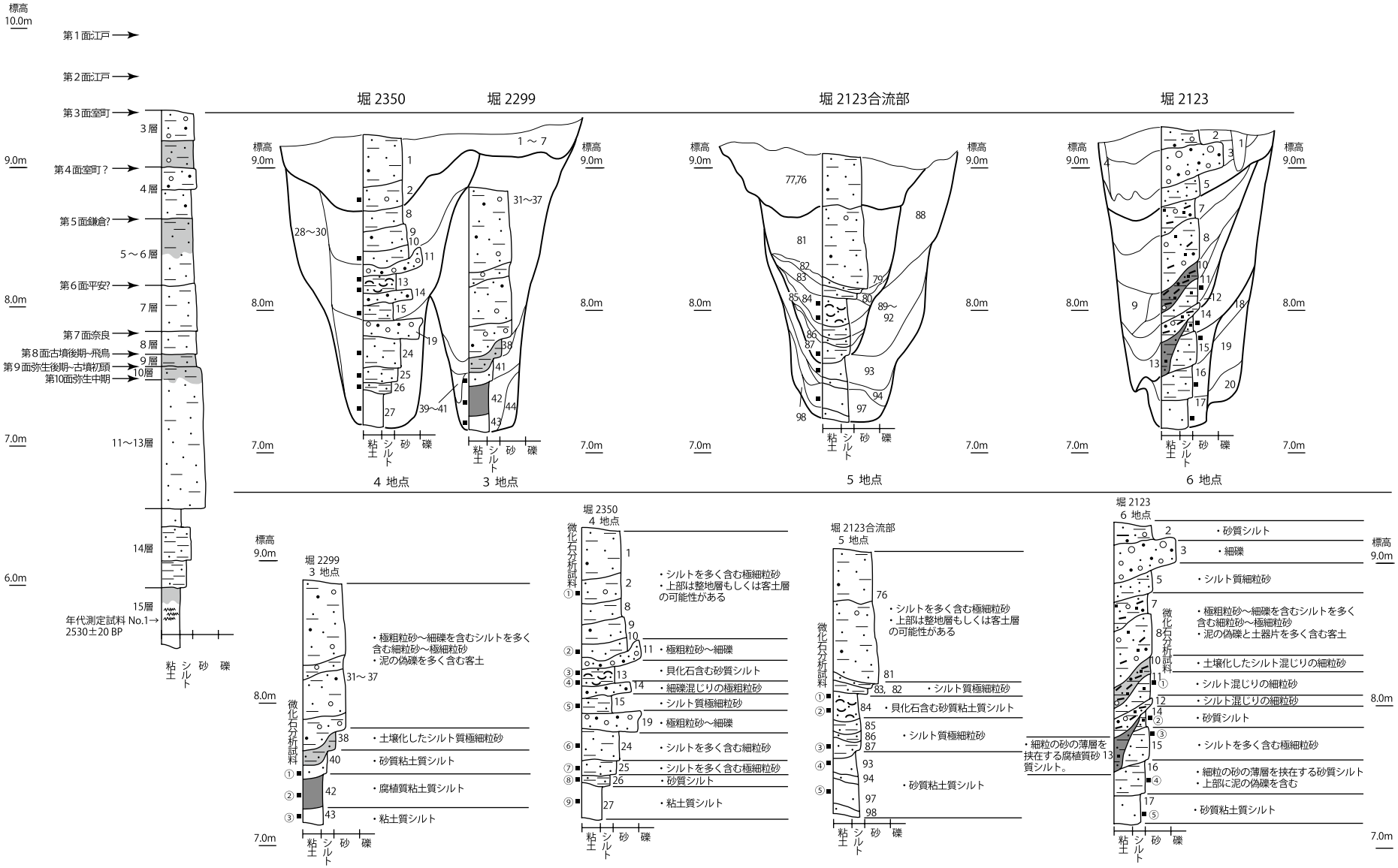


図 2　堀の埋土の堆積状況および岩質記載と分析試料の採取位置（凡例は図1に準ずる）

表３　放射性炭素年代測定および暦年較正の結果

測定番号	δ ^{13}C (‰)	暦年較正用年代 (yrBP±1σ)	^{14}C 年代 (yrBP±1σ)	^{14}C年代を暦年代に較正した年代範囲	
				1σ 暦年代範囲	2σ 暦年代範囲
PLD-46567 試料No.１	−27.02±0.21	2528±20	2530±20	777−751 cal BC (26.89%) 683−667 cal BC (15.08%) 634−621 cal BC (7.93%) 613−591 cal BC (18.36%)	787−747 cal BC (30.92%) 689−665 cal BC (18.01%) 644−562 cal BC (44.60%) 560−550 cal BC (1.92%)
PLD-46568 試料No.２	−27.48±0.20	414±18	415±20	1448−1471 cal AD (68.27%)	1440−1490 cal AD (94.72%) 1604−1607 cal AD (0.73%)

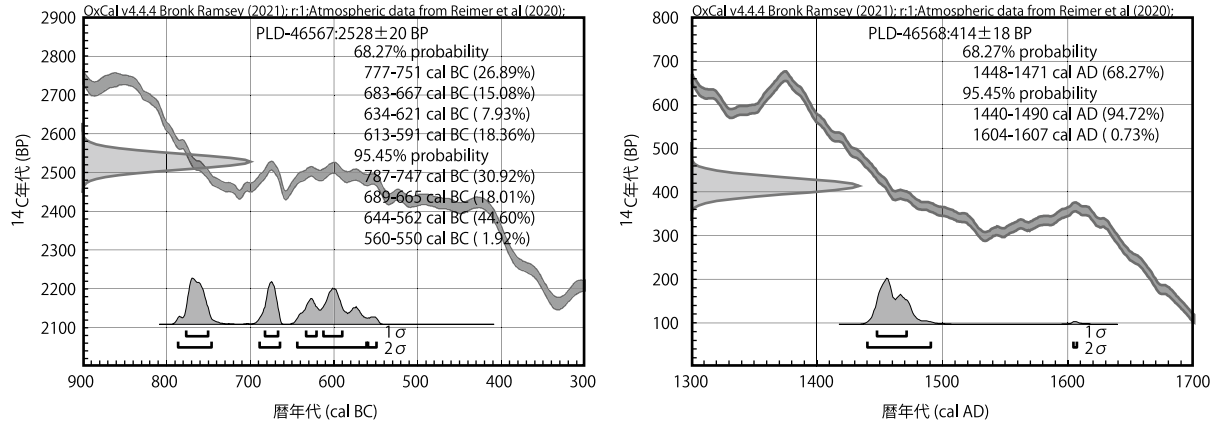


図３　暦年較正結果

５．考察

（１）年代値

１）土坑1014の試料№２の年代

１区の土坑1014の試料№２（PLD-46568）の測定結果（以下の較正年代は２σの値）は、^{14}C年代が415±20 BP、較正年代が1440-1490 cal AD（94.72%）および1604-1607 cal AD（0.73%）で、15世紀中頃～末および17世紀初頭の暦年代を示す。古墳時代以降の時期区分に関して児玉編（2018）をふまえると、土坑1014の埋土に含まれる炭化材片の年代は、室町時代前期～江戸時代初期に対比される。

２）基本層序（断割）の試料№１の年代

２区の断割トレンチ部分（２－１地点）の最下層の15層の層内に、植物遺体の炭質物の葉理が挟在していた。試料№１（PLD-46567）は、２－２地点の井戸2178の側壁部分の、15層に対比される層準の平行葉理から採取した（図１の２－２地点）。

測定の結果（以下の較正年代は２σの値）、試料№１（PLD-46567）は^{14}C年代が2530±20 BP、較正年代が787-747 cal BC（30.92%）、689-665 cal BC（18.01%）、644-562 cal BC（44.60%）、560-550 cal BC（1.92%）で、紀元前７世紀前半～紀元前６世紀中頃の暦年代を示した。小林（2017）による縄文土器型式および時期区分と暦年代の関係を参照すると、15層中の炭化植物片（試料№１）の暦年代は、縄文時代晩期後葉に対比される。

（２）調査区の埋没状況

縄文時代晩期後葉の年代値を示す炭化植物片（試料№１）を挟在する15層は、標高約7.5ｍの弥

生時代中期の遺構面である第10面の下位1.8ｍ前後の標高約5.7ｍに堆積している（図１の２地点）。15層は、塊状無層理の粘土質シルトで構成され、泥質な層相から、後背湿地的な堆積環境下にあったと解釈される。15層から弥生時代中期の遺構面（第10面）を構成する11層までの層準では、細粒砂混じりのシルトの14層と、シルトを僅かに含む細粒砂の11～13層が厚く累重しており、上方粗粒化を示す。14層から11層の構成層は、氾濫原に流入してきた浮遊砂を主体とする砂質の砕屑物からなり、層相から、上方へ付加的に発達する自然堤防の堆積環境下にあったと解釈される。弥生時代中期の遺構面（第10面）の構成層である11層の上位には、土壌生成作用を強く受けた弥生時代中期以降から飛鳥時代までの古土壌（埋没土壌化層）の10層、９層が載る。よって、14層から11層段階の自然堤防発達は、弥生時代中期もしくは当該期以前のある段階に静穏化したと捉えられる。今回の断割トレンチの堆積層の観察にもとづく層相変化と、放射性炭素年代値および発掘調査の結果から、２区では、縄文時代晩期後葉以降のある段階から弥生時代中期ないしそれ以前のある時期までの期間に、自然堤防が発達したと考えられる。

弥生時代中期の遺構面（第10面）の構成層である11層直上には、弥生時代後期～古墳時代初頭の遺構面（第９面）の構成層である10層が載る。さらに10層の直上には、古墳時代後期～飛鳥時代の遺構面（第８面）の構成層である９層が被覆する。10層と９層は、堆積層の累重が顕著ではなく、ともに岩質と層相がほぼ変化せず、土壌化したシルト質極細粒砂～細粒砂で構成される。よって、２区では、弥生時代中期以降から飛鳥時代にかけて、洪水堆積物の流入頻度や強度が前段階に比べて低下して、氾濫原の堆積環境が安定するとともに、自然堤防上の高燥な地表部で土壌生成作用が卓越したと認識できる。奈良時代の遺構面（第７面）の構成層である８層についても、腐植含量は低下するものの、岩質と堆積速度が10層と９層とさほど変わらないため、奈良時代も飛鳥時代に引き続き、調査区の地表環境が安定していたとみられる。

２区では、奈良時代の遺構面（第７面）の上に、再び砂質の層相を示す自然堤防堆積物である７層から６層が、平安時代から室町時代にかけて累重するようになる。７層から３層には、平安時代（第６面）から室町時代（第３面）までの遺構面が多数挟在する。よって、２区では平安時代から室町時代において、発達する自然堤防上で断続的に人間活動が展開したと考えられる。平安時代から室町時代までの自然堤防堆積物の上半部にあたる鎌倉時代の第５面から室町時代の第３面付近では、整地層や盛土などの人為的な堆積層の形成が活発となり、２区においては、中世にかなり濃密な人間活動が展開していたとみられる。

（３）中世の堀の埋没状況

１）はじめに

２区では、中世に埋没した深さ1.8～2.0ｍ前後の深い堀が、埋没もしくは埋め立てと再掘削を伴い、数条検出されている（図１）。今回の分析では、堀の埋没環境の検討を目的として、埋土の層相観察と珪藻分析を行っている。堀埋土の岩質などの記載を図２に示す。ここでは、別項の珪藻分析の結果も参照しながら（珪藻分析の項参照）、現地での層相観察の結果にもとづき、堀の埋没環境について検討する。

２）堀2299（３地点）

切り合い関係から、相対的な形成順序が先行する堀2299（３地点）では、埋土最下部に連続的に累重する粘土質シルトと砂質粘土シルトからなる43層、42層、41層で珪藻分析を、43層で花粉分析を実施している（図２）。43～41層の層相は、静水域において堆積する泥層で構成されており、当該層準の堆積時には堀内が水没して滞水域が形成されていたと考えられる。ただし、珪藻化石の産出状況はいずれの試料も300個未満で42層を除き100個未満と極めて不良である。したがって、43層、42層、41層はそれぞれ、洪水時の非常に限られた期間に水没して極めて早く堆積したため、埋土に化石が取り込まれ難い環境下にあったと推測される。堀2299に含まれる珪藻化石は、洪水時などで一時的に滞水し、近隣から珪藻殻が破損を受けつつ運搬され、堆積した化石を主体すると推測される。

なお、43層における花粉化石の保存状態も不良であり、43層の堆積後に好気的な堆積環境となって花粉化石が消失したと推定されている（花粉分析の項参照）。また、珪藻分析では、41層で耐乾性の高い陸生珪藻Ａ群の産出が目立っており、堆積層の形成時期に堀底が湿った環境下にあったか、近隣に湿った環境の場所が存在した状況が推定され、堀内が常時水没していたり、多湿の環境が維持されてはいなかった状況が確認できる。なお、堀2299での珪藻化石と花粉化石の保存状態が不良であった要因は、堆積速度の大きさと、堆積後に乾燥した状態が維持されていたという双方の環境が影響していると考えられる。

珪藻分析層準の43層、42層、41層が堀底で埋積した後には、堀底が再掘削され、再掘削された溝状の凹地に40層～38層が埋積する。このうち39層は、泥の偽礫を多量に含む埋土で、埋め戻しを目的とした客土である。最上部の38層は、層相から土壌化していたと推定され、再掘削された堀底が人為的に埋め戻された後にいったん地表化し、植生に覆われるような放置期間が存在していた可能性がある。38層の上部は、堀2299の埋め立てを目的とした偽礫を多く含む客土層の37層～31層が厚く累重する。放置期間を示す38層の上部に、厚い客土層の37層～31層が載るため、36層は上位の客土層から堆積物累重による加圧を受けたと考えられる。ただし、38層では、上位からの加圧によって湿潤状態の堆積物に生じる変形構造が認められない。よって、客土層の堆積時期には、堀底が乾いた状態であったと推測される。

以上、珪藻分析結果と埋土の層相から、堀2299の機能期の堀底では、常時水没あるいは、堀底埋土が水で飽和されて、過湿や多湿となるような湿潤状態が維持されておらず、普段は乾燥しており空堀に近い状態であったと考えられる。堀底が水没もしくは湿潤状態となるのは、洪水時や多量の降雨があった時のみであったと推定される。

３）堀2350（４地点）

堀2350では、４地点とした中央セクションで採取した埋土について層位的な珪藻分析を実施した（図１・２）。また、堀2350では、埋土の基底部の27層で花粉分析を併せて実施している。

堀2350の堀埋土基底部の27層は、堀2299最下部の41層～39層と同様の層相を示す、塊状無層理の粘土質シルト層が厚く累重する。27層では、堀2299最下部の41層～39層と同様に珪藻化石の

産出状況が不良で、珪藻化石の破片が目立つ。よって、堀2350の掘削後、最初期段階の堀底では、堀2299の堀底と同様に、普段は乾燥状態であったと考えられる。27層における花粉化石の保存状態は、堀2299最下部と同様に不良であり、好気的土壌環境下での花粉化石の消失が推定されている（花粉分析の項参照）。

27層の上位の26層から２層までの分析層準では、基本的に珪藻化石の産出状況が良好となる。ただし、この層準での珪藻化石は、多産種や優占種がほぼ存在せず、生態性が相反する種が混在した状態で産出するとともに、僅かに産出する種類数がかなり多いという特徴がある。堀の埋土については、掃流性の砂礫も挟在するものの、浮遊洪水堆積物に由来するシルトからシルト混じりの細粒の砂を主体とする。したがって、堀は、河川氾濫時に流入した洪水によって運搬供給された浮遊堆積物の泥～泥混じり砂により埋積されたと捉えられる。堀埋土の堆積環境にもとづくと、27層の上位の26層から２層までの珪藻化石群集は、基本的に混合群集の様相を呈しており、異地性の化石を多く含むと考えられる。ただし、層準によっては、平水時に堀内に生育していた珪藻も含まれると予想され、このような種はやや多産している可能性がある。

19層の礫質砂に覆われる26層から24層までの堀埋土下部に相当する層準のうち、27層直上の26層では、淡水底生指標種を伴い、沼沢湿地付着生指標種群の珪藻がやや多産する。ただし、26層の珪藻化石の産出数は164個と少なく、直上の分析層準に比べ保存状態が相対的に不良傾向を示す点に注意する必要がある。26層の直上の25層、24層では、沼沢湿地付着生指標種群が減少して、淡水底生指標種を伴い、水の流れを好む場所に生育する上流性河川指標種群の珪藻が産出するようになる。珪藻化石群集にもとづくと、堀2350の堀埋土下部の26層～24層では、基底部の27層の乾燥していた状態から、珪藻の生育もしくは化石の保存に適した湿潤な状態へ、堀底の環境が変化したと考えられる。なお、26層から24層では、シルト主体からシルトを多く含む細粒の砂へと上方粗粒化する。埋土の層相をふまえると、堀2350の堀埋土下部では、26層で浅い滞水域や埋土が水で十分に飽和される湿潤な地表環境、25層と24層でやや水の流れが伴うような湿潤な地表環境が形成されていたと推定される。

堀2350の19層から11層までの堀埋土中部では、19層、14層、11層において、粗粒の砂から細礫からなる掃流性の洪水堆積物が積層的に挟在するようになる。珪藻分析は、粗粒の掃流性の洪水堆積物間に堆積した砂混じりのシルト～シルト混じり砂からなる細粒堆積物で構成される15層と13層（上部と下部）を対象に実施している。15層と13層では、下位の層準に比べ、相対的に多産傾向を示す種の出現が認められなくなる。このような産状から、15層と13層の珪藻化石は、浮遊洪水堆積物によって供給された異地性の珪藻化石を主体とする群集と解釈される。19層から11層の層相と珪藻化石群集をふまえると、堀2350の堀埋土中部では、堀埋土下部よりも洪水の影響を強く受けるようになるとともに、粗粒の洪水堆積物も堀内へ直接流入するような、埋没環境の不安定化が強まったと考えられる。さらに、堀2350では掃流性の粗粒の洪水砂礫の流入が複数回確認でき、堀が完全に閉鎖した状態ではなく、流路や基幹水路などに接続していたと推定される。なお、13層には貝化石が多く含まれるが、堆積環境にもとづくと、堀の上流部から供給された再堆積

物である可能性も考えられる。

堀2350の堀埋土上部の10層から１層は、シルトを多く含む極細粒砂の厚い堆積層であり、この段階に、堀内が浮遊洪水堆積物によって急速に埋積されたと推定できる。珪藻分析は、10層と２層で実施しており、堀埋土中部とほぼ同様の群集を示す結果から、基本的に異地性主体の珪藻化石で構成されているとみられる。

以上の堀2299と堀2350の埋没環境の検討から、堀2299の基底部付近での機能段階ないし放棄段階には、２区付近の地下水位が低く、堀底は滞水や湿潤な状態ではなく、基本的に乾燥傾向が維持されていたと考えられる。また、堀2299の段階には、堀内に洪水堆積物が頻繁に流入するような状態ではなかったと推定される。堀2299を完全に埋め立てた客土層を再掘削して新たなに形成した堀2350では、基底部において堀2299の基底部付近と同様の乾燥した地表環境が形成されていたとみられる。ただし、基底部に泥層がいったん堆積した後には、堀内への洪水流の流入頻度や強度が高まるとともに、堀底が浅く水没したり、湿潤な地表環境が維持されるような環境に変化したと考えられる。堀2350の基底部より上位でみられるこのような堆積環境の変化は、２区周囲でのこの段階における流路の河床上昇に伴う地下水位上昇や、氾濫原への洪水の増加といった自然環境の変化に起因する可能性がある。ただし、現段階では、調査区周囲の地形変化などに関しての具体的な知見が得られておらず、推測の域を出ない。

４）堀2123（５地点、６地点）

堀2123では、５地点とした調査区西壁部分（以下、堀2123合流部とする）と６地点とした上段中央部付近に設定されたセクションで採取した埋土について層位的な珪藻分析を実施した（図１・２）。

・５地点

堀埋土下部の97層では、湖沼沼沢湿地指標種群の珪藻がやや多産する。このような特徴は、上述の４地点の堀2350の堀埋土下部に相当する層準（26層）でも、湖沼沼沢湿地指標種群ではないものの、沼沢湿地付着生指標種群がやや多産しており、同調的と判断できる可能性のある珪藻化石群集の層位的な変動が得られている。ただし、97層の珪藻化石の産出数は160個と、164個であった堀2350の26層と同様に化石の保存状態が相対的に不良であった点には留意する必要がある。97層の直上の93層でも、堀2350の堀埋土下部にみられる層位的変化と同様に、上流性河川指標種群の珪藻が淡水底生指標種を伴い、出現するようになる。さらに、上流性河川指標種群の珪藻がやや多産した層準の上位で上流性河川指標種の珪藻が減少する現象も、５地点の堀2123合流部と４地点の堀2350で共通して認められる層位的変化である。この他の共通する層相変化としては、堀埋土中部に対比される層準において、両地点とも貝化石を多く含む層準が挟在するという特徴がある。ただし、５地点の堀2123合流部埋土では、４地点の堀2350で顕著な掃流性の洪水砂礫の挟在が認められない。この点を除くと、５地点の堀2123合流部と４地点の堀2350の埋土の層相変化は類似しており、堀埋土の基底部から下部がいずれも泥質で、上位に向かって砂分含量が高まり上方粗粒化するという共通した層相変化が認められる。

・６地点

本地点では、基底部に17層、下部に16層から14層が堆積する。この堀埋土の基底部から下部では、岩質が砂質粘土質シルトから砂質シルト、シルト混じりの極細粒砂へ、上方粗粒化する。このうち17層から15層では、淡水底生指標種群の珪藻が他の種類を伴い、やや多産する。層相と珪藻化石群集から、６地点の堀2123の17層～15層の堆積段階の堀底には、珪藻の生育もしくは化石の保存に適したような湿性の地表環境が形成されていた可能性がある。17層から14層までの埋土を再掘削して新たに形成された溝状の凹地を充填する埋土の11層では、多産傾向を示す種が目立たなくなっており、下位よりも洪水による堆積物供給の影響が強まり、異地性主体の群集へと変化した可能性がある。また、８層より上位の埋土は客土主体となっており、最終的には人為によって堀が埋め立てられたと考えられる。

５）堀の埋没過程

走行方向が南北方向の堀2350と東西方向の堀2123の切り合い関係については、発掘調査においてセクションでの確認が行えてない状況である。堀埋土の珪藻化石は、これまで述べてきたように、基本的に混合群集の様相を示す異地性の化石が主体をなす群集と考えられる。ただし、珪藻分析の項で示されているように、分析結果のクラスター分析により、堀埋土の珪藻化石群集はいくつかのグループに分類可能である（珪藻分析の項参照）。

クラスター分析の結果によると、４地点の堀2350埋土の新段階と６地点の堀2123埋土の中段階では、珪藻化石群集が明確に分離でき、これらの埋土は同じ段階に存在していなかったと考えられる。いっぽうで、５地点の堀2123については、埋土古段階の114層が６地点の堀2123の埋土中段階に、埋土新段階の84層が４地点の堀2350の埋土新段階に対比される。また、上述のように、埋土の層位的な層相や珪藻化石群集の変化に着目した場合には、４地点の堀2350と５地点の堀2123に同期性がある可能性が指摘できる。

今回の珪藻分析の検討から、クラスター分析によると、堀2123では、合流部である５地点の埋土古段階と６地点の埋土中段階での同期性が指摘できる。そして、５地点の堀2123合流部については、埋積が進行した段階になると、５地点の堀2123合流部の埋土新段階と４地点の堀2350の埋土新段階に同期性が生じるようになった状況がうかがえる。ただし、埋土の層相と特徴的な珪藻化石の産出状況にもとづくと、５地点の堀2123合流部と４地点の堀2350は、埋土の基底部から最終埋没段階まで同期性を有していた可能性も考えられる。

以上、今回の堀埋土の層相記載と珪藻分析結果だけでは、５地点の堀2123合流部について、掘削初期から４地点の堀2350と同期性を有していたか、あるいは先行して６地点の堀2123と東西方向の堀が存在しており、この東西方向の堀がある程度埋没が進行した段階に４地点の堀2350に接続するようになったかについて確定できない。このように現段階の分析結果の検討においては、南北方向と東西方向の堀の同時存在性や接続状況に関して明らかにできなかった点が多く、より詳細な発掘調査結果をふまえ、今後さらに検討を重ねていく必要がある。

（パレオ・ラボAMS年代測定グループ　　伊藤　茂・加藤和浩・廣田正史・佐藤正教・山形秀

樹・Zaur Lomtatidze・辻　康男）

引用・参考文献

Bronk Ramsey, C.（2009）Bayesian Analysis of Radiocarbon dates. Radiocarbon, 51（1）, 337-360.

小林謙一（2017）縄紋時代の実年代－土器型式編年と炭素14年代－. 263p, 同成社.

児玉幸多編（2018）標準日本史年表. 66p, 吉川弘文館.

中村俊夫（2000）放射性炭素年代測定法の基礎. 日本先史時代の^{14}C年代編集委員会編「日本先史時代の^{14}C年代」: 3-20, 日本第四紀学会.

Reimer, P.J., Austin, W.E.N., Bard, E., Bayliss, A., Blackwell, P.G., Bronk Ramsey, C., Butzin, M., Cheng, H., Edwards, R.L., Friedrich, M., Grootes, P.M., Guilderson, T.P., Hajdas, I., Heaton, T.J., Hogg, A.G., Hughen, K.A., Kromer, B., Manning, S.W., Muscheler, R., Palmer, J.G., Pearson, C., van der Plicht, J., Reimer, R.W., Richards, D.A., Scott, E.M., Southon, J.R., Turney, C.S.M., Wacker, L., Adolphi, F., Büntgen, U., Capano, M., Fahrni, S.M., Fogtmann-Schulz, A., Friedrich, R., Köhler, P., Kudsk, S., Miyake, F., Olsen, J., Reinig, F., Sakamoto, M., Sookdeo, A. and Talamo, S.（2020）The IntCal20 Northern Hemisphere radiocarbon age calibration curve（0-55 cal kBP）. Radiocarbon, 62（4）, 725-757, doi:10.1017/RDC.2020.41. https://doi.org/10.1017/RDC.2020.41（cited 12 August 2020）

（2）珪藻分析

1．はじめに

調査区で検出された堀の堆積環境を検討するために、堆積物試料が採取された。以下では、試料について行った珪藻分析の結果を示し、考察した。なお、同一試料を用いて花粉分析も行われている（花粉分析の項参照）。

2．試料と処理方法

試料は、２区で検出された４つの堀から採取された堆積物、計19点である。分析試料の情報は、表４の通りである。なお、分析試料の採取層準や岩質については、放射性炭素年代測定の報告の図１・２に示している（放射性炭素年代測定の項参照）。

各試料について以下の処理を行い、珪藻分析用プレパラートを作製した。（１）乾燥させ、秤量した試料をビーカーに移し、30%過酸化水素水を加えて加熱・反応させ、有機物の分解と粒子の分散を行った。（２）反応終了後、水を加え、１時間程してから上澄み液を除去し、細粒のコロイドを捨てる。（３）遠心管に回収した懸濁残渣をシリンジで適量取り、カバーガラスに滴下し、乾燥させた。乾燥後は、マウントメディアで封入し、プレパラートを作製した。光学顕微鏡1000倍で、珪藻殻の８割以上を目安に形が保存されている珪藻殻を、各試料300個以上になるまで計数を行った。分析順による系統誤差をなくすため、計数は19試料に対して順不同で行った。なお、珪藻殻の産出に乏しいプレパラートでは、300殻未満の同定・計数や破片の検出のみにとどめる。

また、接続関係を求めるため、計数結果に階層クラスター分析を行った。計数結果を正規化せ

表４　試料リスト

試料番号	採取地点	遺構名/試料No.		層位	標高(m)	土相	土色	計量(g)
1	3地点	堀2299	No.1	41層	7.7	砂質粘土質シルト	5Y4/2灰オリーブ色	0.44
2			No.2	42層	7.45	粘土質シルト	5Y3/2オリーブ黒色	0.40
3			No.3	43層	7.2	粘土質シルト	7.5Y4/2灰オリーブ色	0.41
4	4地点	堀2350	No.1	2層	8.75	シルト混じり極細粒砂	5Y3/2オリーブ黒色	0.43
5			No.2	10層	8.35	シルト混じり極細粒砂	5Y4/2灰オリーブ色	0.39
6			No.3	13層上	8.2	砂質シルト	5Y4/2灰オリーブ色	0.42
7			No.4	13層下	8.1	砂質シルト	5Y4/2灰オリーブ色	0.41
8			No.5	15層	8.0	シルト質極細粒砂	5Y3/2オリーブ黒色	0.41
9			No.6	24層	7.65	シルト混じり細粒砂	5Y3/2オリーブ黒色	0.38
10			No.7	25層	7.5	シルト混じり極細粒砂	2.5Y4/2暗灰黄色	0.41
11			No.8	26層	7.45	砂質シルト	5Y3/2オリーブ黒色	0.41
12			No.9	27層	7.3	粘土質シルト	7.5Y3/2オリーブ黒色	0.41
13	5地点	堀2123合流部	No.3	87層	7.85	シルト質極細粒砂		0.37
14			No.4	94層	7.5	砂質粘土質シルト		0.37
15			No.5	97層	7.3	砂質粘土質シルト		0.41
16	6地点	堀2123	No.1	11層	8.1	シルト混じり細粒砂	7.5Y3/2オリーブ黒色	0.36
17			No.3	15層	7.75	シルト混じり極細粒砂	7.5Y4/2灰オリーブ色	0.37
18			No.4	16層	7.6	砂質シルト	10Y4/1灰色	0.37
19			No.5	17層	7.35	砂質粘土質シルト	10Y3/2オリーブ黒色	0.37

表５－１　堆積物中の珪藻化石産出表（種群は、千葉・澤井（2014）による）

	分類群		種群	堀2299(3地点)			堀2350(4地点)									堀2123合流部(5地点)			堀2123(6地点)			
				No.1	No.2	No.3	No.1	No.2	No.3	No.4	No.5	No.6	No.7	No.8	No.9	No.3	No.4	No.5	No.1	No.3	No.4	No.5
1	*Rhoicosphenia*	*abbreviata*	C1	1	1		3		1	3	1	3	9	3		5	1	1	6	3	5	2
2	*Hippodonta*	*capitata* var. *linearis*	E1							2	5	9				2	1		11			
3	*Nitzschia*	*sigma*	E1					3		2	25	3	1	1			1	1	2		3	
4	*Pseudostaurosira*	*brevistriata*	E2	1						1	3	1	2			3	6			1	2	
5	*Navicula*	*gregaria*	U3																			
6	*Nitzschia*	*clausii*	U3						2	1		1	1			3	1			2	1	
7	*Cocconeis*	*placentula*	F	5	17	1	12	6	6	15	13	11	20	17	1	22	21	2	16	13	17	7
8	*Cymbella*	*turgidula* var. *nipponica*	F					4	4	14	20	10	15	12		20	19	4	9	16	47	8
9	*Eunotia*	*bilunaris*	F	1				1			3	1	1	3	1	5	4			6	1	1
10	*Eunotia*	*formica*	F											1	1							
11	*Eunotia*	*intermedia*	F				2	4	1	2	8	5	5	1		2	4	3	1	21	6	1
12	*Meridion*	*circulare*	F								1										1	
13	*Navicula*	*tripunctata*	F					3		5		1				6	2		6	4	4	2
14	*Sellaphora*	*pupula*	F					11		4	3	66	1	1		1	4		3	6	1	1
15	*Achnanthidium*	*japonicum*	J	2	2			5	8	9	17	12	28	1		10	29		11	15	21	2
16	*Achnanthes*	*hungarica*	K					19		4	2	11	2	1		5	1	5	3	6	4	
17	*Planothidium*	*lanceolatum*	K				3	32	3	3	1	4	9	3		10	18		17	9	7	1
18	*Reimeria*	*sinuata*	K	2			4	1	2	1	5	6	6			6	6		1	2	4	
19	*Cyclotella*	*meneghiniana*	L					2		1	2	1				2	3	4			1	
20	*Cyclotella*	*stelligera*	M							1												
21	*Aulacoseira*	*ambigua*	N		1							1								4		1
22	*Fragilaria*	*capucina* var. *vaucheriae*	N				1				4	5	8			1	3	34	4	7	1	
23	*Gomphonema*	*acuminatum*	O					2		2	1		1							1	1	
24	*Navicula*	*elginensis*	O					3	2	9	2	3	4			4	3		1	10	3	
25	*Pinnularia*	*gibba*	O				1	14	2	9	11	18	1	35		1			19	12	3	
26	*Pinnularia*	*nodosa*	O				1	3		8		1								1		
27	*Stauroneis*	*phoenicenteron*	O						1		1	1				1			1	4	1	2
28	*Tabellaria*	*fenestrata*	O	1																		
29	*Neidium*	*ampliatum*	P					6	3	7	10	5	3	2		7	2	2	3	13	5	
30	*Diploneis*	*elliptica*	Q				2	2	1		1		1							3	4	1
31	*Amphora*	*montana*	Qa					6	3	11	14	3	21	2		14	2		1		4	1
32	*Diadesmis*	*contenta* f. *biceps*	Qa	7	3		4	4	3	5	3	9	11	1	1	10	18	1	7	24	2	1
33	*Hantzschia*	*amphioxys*	Qa	5	7		3		5	11	10	8	20	2	6	18	2	7	6	5	2	1
34	*Luticola*	*mutica*	Qa	10	5		2	5	4	3	7	3	6	1	4	8	2	4	7	3	3	1
35	*Orthoseira*	*roeseana*	Qa					2								1						
36	*Pinnularia*	*borealis*	Qa	5							3		1				1					
37	*Achnanthidium*	*minutissimum*	Qb					3	2	2	5	7	4			7	13		5	8	13	2
38	*Caloneis*	*silicula* var. *truncatum*	U5					4		7	8		6	3		3	4		1	2	5	

表５－２　堆積物中の珪藻化石産出表（種群は、千葉・澤井（2014）による）

	分類群		種群	堀2299(3地点)			堀2350(4地点)									堀2123合流部(5地点)			堀2123(6地点)			
				No.1	No.2	No.3	No.1	No.2	No.3	No.4	No.5	No.6	No.7	No.8	No.9	No.3	No.4	No.5	No.1	No.3	No.4	No.5
39	*Epithemia*	spp.	U5	1	1		1	1	2		2	2	1	2			1	1	1			2
40	*Gomphonema*	spp.	U5							1						1	3	1		1	1	
41	*Melosira*	spp.	U5							2		1		1			1				6	1
42	*Navicula*	spp.	U5		1		1	38	5	17	8	11	9	4		14	2	21	5	15	16	4
43	*Pinnularia*	spp.	U5													1						
44	*Diatoma*	*mesodon*	U6																	1		
45	*Fragilaria*	*capitellata*	U6							1		1	1			5						
46	*Fragilaria*	*capucina* f. *paccina*	U6																			
47	*Gomphonema*	*biceps*	U6				2	7			5	3	1	1		1	5			1	2	2
48	*Gomphonema*	*productum*	U6					5		4	4					1	2		4			
49	*Gomphonema*	*rhombicum*	U6	2			4		4	2	3	6	8			3	6			2	7	4
50	*Gomphonema*	*turris*	U6					1		1	1	3	1			1	2	13				
51	*Navicula*	*seminuloides*	U6	3			5	13	8	10	20	14	26	3		32	27		8	17	4	3
52	*Nitzschia*	*acidoclinata*	U6				1	11	6	6	4	3	14	4		18	3	1	3	19	5	
53	*Nitzschia*	*alpinobacillum*	U6					11			1					5			1	4		
54	*Pinnularia*	*septentrionalis*	U6																			
55	*Pinnularia*	*valdetolerans*	U6	4			4	22	16	17	13	12	22	11		24	3	4	11	20	8	2
56	*Pseudostaurosira*	*brevistriata* var. *minor*	U6									1	1			1	1		3			
57	*Punctstriata*	*linearis*	U6				2		2	2	6	2	1	2		3	6	2	10	10	4	1
58	*Stauroneis*	*anceps* f. *gracilis*	U6							2	1	3		1		2				1		
59	*Synedra*	*rumpens* var. *familiaris*	U6							1			1			3	7		1	2	5	1
60	*Synedra*	*ulna var.oxyrhychus*	U6			2			1	1						1			1			
61	*Achnanthes*	*crenulata*	W	2	4		1						2		3		1					
62	*Achnanthes*	*inflata*	W	1															1			
63	*Amphora*	*ovalis*	W				1	3	2	5	3	2				1	2		3	1	4	
64	*Bacillaria*	*paxillifer*	W					2				1										
65	*Cymbella*	*naviculiformis*	W		1					1		1							1	1	1	
66	*Encyonema*	*silesiacum*	W				4	5	1	15	8	2	3	2		5	14	13	6	16	7	5
67	*Frustulia*	*vulgaris*	W					8	3	6	1	4	1	2		4		1	5	5	2	
68	*Gomphonema*	*angustatum*	W					39	17	12	19	14	3	9		10	23	13	11	35	18	5
69	*Gomphonema*	*truncatum*	W						2				2				1	2	1	2	1	
70	*Gyrosigma*	*procerum*	W					2	3	3								6	35	1		1
71	*Gyrosigma*	*scalproides*	W					2	1	1	1	2				1				3		
72	*Navicula*	*cryptocephala*	W					24	14	15	10	6	8	14		6	12	4	37	11	12	5
73	*Navicula*	*cryptotenella*	W				1	3		2	1	3	1			3	4		1			
74	*Navicula*	*cuspidata*	W								3	2										
75	*Neidium*	*affine*	W				1			3									1			
76	*Nitzschia*	*tryblionella*	W							4	1	2		1		2	2		1	4		

表５－３　堆積物中の珪藻化石産出表（種群は、千葉・澤井（2014）による）

	分類群		種群	堀2299(3地点)			堀2350(4地点)									堀2123合流部(5地点)			堀2123(6地点)			
				No.1	No.2	No.3	No.1	No.2	No.3	No.4	No.5	No.6	No.7	No.8	No.9	No.3	No.4	No.5	No.1	No.3	No.4	No.5
77	*Pinnularia*	*braunii*	W				1				1	1				1	1		4	4		
78	*Pinnularia*	*microstauron*	W																			
79	*Pinnularia*	*viridis*	W					3	1	6	1	6	2	2		3	2		4	7	5	
80	*Rhopalodia*	*gibba*	W							1										1		
81	*Rhopalodia*	*gibberula*	W						1				1	1			1		1	1		2
82	*Stauroneis*	*anceps*	W					10	4	11	3	4		1		10	1		7	2		
83	*Surirella*	*angusta*	W				2	15	3	3	1	3	11	3		4	3			2	3	
84	*Surirella*	*minuta*	W					1				1						1				
85	*Surirella*	*tenera*	W					4		2				1					1		2	
86	*Synedra*	*ulna*	W	2	9	1	4	1	7	11	12	12	6	9	4	7	9	9	4	12	24	6
87	Fragments				121	26									57							
1	海水藻場		C1	1	1	0	3	0	1	3	1	3	9	3	0	5	1	1	6	3	5	2
2	海水泥質干潟		E1	0	0	0	0	3	0	4	30	12	1	1	0	2	2	1	13	0	3	0
3	汽水泥質干潟		E2	1	0	0	0	0	0	1	3	1	2	0	0	3	6	0	0	1	2	0
4	汽水不定・不明種		U3	0	0	0	0	0	2	1	0	1	1	0	0	3	1	0	0	2	1	0
5	淡水底生		F	6	17	1	14	29	11	40	48	94	42	35	3	56	54	9	35	66	77	20
6	上流性河川		J	2	2	0	0	5	8	9	17	12	28	1	0	10	29	0	11	15	21	2
7	中～下流性河川		K	2	0	0	7	52	5	8	8	21	17	4	0	21	25	5	21	17	15	1
8	最下流性河川		L	0	0	0	0	2	0	1	2	1	0	0	0	2	3	4	0	0	1	0
9	湖沼浮遊生		M	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
10	湖沼沼沢湿地		N	0	1	0	1	0	0	0	4	6	8	0	0	1	3	34	4	11	1	1
11	沼沢湿地付着生		O	1	0	0	2	22	5	28	15	23	6	35	0	6	3	0	21	28	8	2
12	高原湿原		P	0	0	0	0	6	3	7	10	5	3	2	0	7	2	2	3	13	5	0
13	陸生		Q	0	0	0	2	2	1	0	1	0	1	0	0	0	0	0	0	3	4	1
14	陸生A群		Qa	27	15	0	9	17	15	30	37	23	59	6	11	51	25	12	21	32	11	4
15	陸生B群		Qb	0	0	0	0	3	2	2	5	7	4	0	0	7	13	0	5	8	13	2
16	淡水不定・不明種		U5	1	2	0	2	43	7	27	18	14	16	10	0	19	11	23	7	18	28	7
17	その他不明種		U6	9	0	2	18	70	37	47	58	48	76	22	0	100	62	20	42	77	35	13
18	広布種		W	5	14	1	15	122	59	101	65	66	40	45	7	57	76	49	124	108	79	24
1	海水種			1	1	0	3	3	1	7	31	15	10	4	0	7	3	2	19	3	8	2
2	汽水種			1	0	0	0	0	2	2	3	2	3	0	0	6	7	0	0	3	3	0
3	淡水種			53	51	4	70	373	153	301	288	320	300	160	21	337	306	158	294	396	298	77
合計				55	173	30	73	376	156	310	322	337	313	164	78	350	316	160	313	402	309	79
堆積物1g中の殻数(個)				9.E+05	3.E+06	5.E+05	1.E+06	1.E+07	3.E+06	5.E+06	7.E+06	8.E+06	6.E+06	3.E+06	1.E+06	7.E+06	9.E+06	3.E+06	1.E+07	1.E+07	6.E+06	2.E+06

ず、ウォード法を用い、樹形図の作図には平方距離を使用した。

３．結果

プレパラートを顕微鏡下で観察した計数結果は、表５のとおりである。検鏡の結果、40属81種86分類群の珪藻種が検出された。本文中で種名を挙げた珪藻は、図９に写真を掲載した。堀ごとに、産出珪藻種の特徴を下位層から順に述べる。全体を通して、主に付着性の羽状目珪藻が多産し、浮遊性の中心目珪藻は僅かであった。種の特徴の説明にあたっては、主に小杉（1988）および安藤（1990）が設定し、千葉・澤井（2014）により再検討された環境指標種群（表６）を用いた。

・堀2299（３地点：図４）

３地点の堀2299の３試料は、いずれも珪藻が希薄であった。試料№３では、同定できないほど破損した珪藻殻が少数産出した。破損した一部でも特徴的な模様をした淡水底生指標種の*Cocconeis placentula*と広布種の*Synedra ulna*が同定された。試料№２では、同定できないほどに破損した珪藻殻が多く見られた。判別できた珪藻種は、破損した一部でも特徴的な模様をした淡水底生指標種の*Cocconeis placentula*や、陸生Ａ群の*Hantzschia amphioxys*、広布種の*Synedra ulna*であった。試料№１では、55殻の同定・計数を行い、陸生Ａ群の*Luticola mutica*、*Hantzschia amphioxys*、*Diadesmis contenta* f. *biceps*が比較的多く確認された。

・堀2350（４地点：図５）

４地点の堀2350の９試料では、試料№１、試料№３、試料№８、試料№９の４試料で珪藻の産出が少なく、試料№９では堀2299の試料№３と同様に破片の検出を行った。珪藻が貧産の試料を含むが、上方へ向けて変化が見られる。堀2350の試料№９で産出した珪藻はほぼ破片で、陸生Ａ群の*Luticola mutica*と*Hantzschia amphioxys*、広布種の*Synedra ulna*の産出が確認できた。試料

表６　環境指標種群と本分析で産出した種

種群名（以下、「指標種群」を略す）		環境指標となる現生種の出現環境や生態学的特徴など	本分析で産出した[代表種]・主要構成種・標徴種・不定
海水藻場	C1	塩分が12‰以上の水域の海藻に付着する（アマモなど）	[*Rhoicosphenia abbreviata*]
海水泥質干潟	E1	塩分が26‰以上の水域の泥底に付着する	*Hippodonta capitata* var. *linearis*、*Nitzschia sigma*
上流性河川	J	河川上流に出現する	*Achnanthidium japonicum*
中～下流性河川	K	中下流域に出現する（河川沿いの河成段丘、扇状地、自然堤防、後背湿地）	*Planothidium lanceolatum*、*Reimeria sinuata*
最下流性河川	L	最下流域の三角州に集中して出現する	*Cyclotella meneghiniana*
湖沼浮遊性	M	水深が1.5m以上で水生植物が水底に生息していない湖沼に生息する	*Cyclotella stelligera*
湖沼沼沢湿地	N	湖沼において浮遊性種および付着生種として優占する	*Aulacoseira ambigua*
沼沢湿地付着性	O	水深が1.0m内外で、湿地及び植物が一面に繁茂している沼沢湿地において、付着状態で生育する	*Gomphonema acuminatum*、*Navicula elginensis*、*Pinnularia gibba*、*Pinnularia nodosa*、*Stauroneis phoenicenteron*、*Tabellaria fenestrata*
高層湿原	P	ミズゴケなどを主とした植物群落及び、泥炭地の発達が見られる場所に出現する	*Neidium ampliatum*
陸域	Q	ジメジメとした湿り気のある陸域に生息する	*Diploneis elliptica*

代表種とは、その環境のみに出現し、かつ高率である種、主要構成種とは、他の環境にも出現するが、そこでの群集に主要な構成要素となる種、標徴種とは、高率には出現しないが、その環境の良い指標となる種を指す。

また、種まで同定できなかった分類群や生態未詳な種に対しては、海水不定・不明種(U1)、海～汽水不定・不明種(U2)、汽水不定・不明種(U3)、汽水～淡水不定・不明種(U4)、淡水不定・不明種(U5)、生態情報が得られなかった種は不明種(U6)に割り振り、淡水生で生態に幅のある種には広布種(W)、第三系で産出し既に絶滅している種を化石種(R)として扱う。

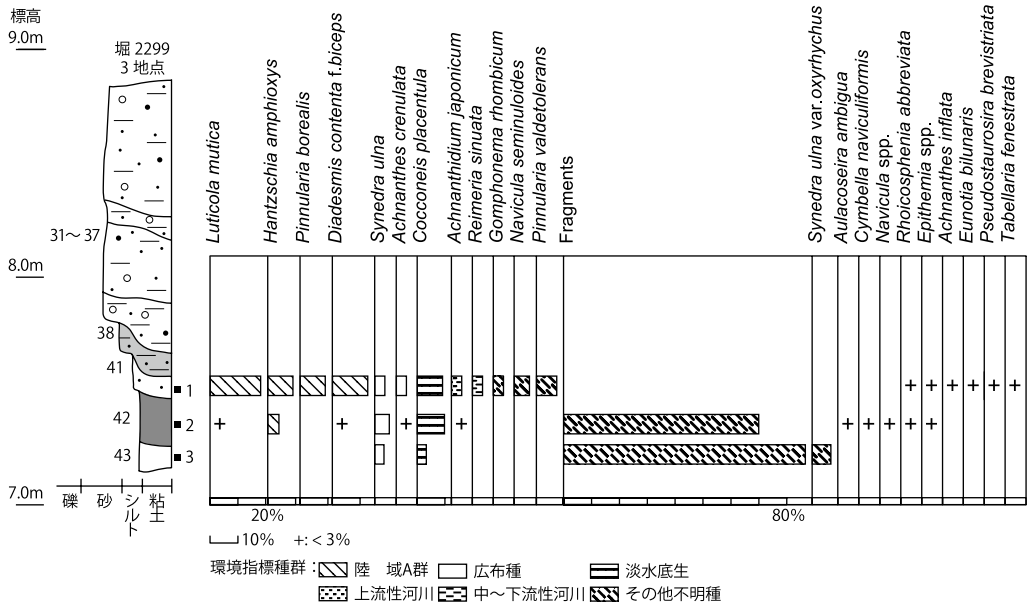


図４　堀2299（３地点）の珪藻分析結果

№８では、沼沢湿地付着生指標種の*Pinnularia gibba*と淡水底生指標種の*Cocconeis placentula*、*Cymbella turgidula* var. *nipponica*などが多く産出した。試料№７では、*Pinnularia gibba*と*Cocconeis placentula*の産出率が減り、陸生Ａ群の*Amphora montana*、*Diadesmis contenta* f. *biceps*、*Hantzschia amphioxys*の産出率が増加している。試料№６では、淡水底生指標種の*Sellaphora pupula*の産出率が顕著に増加している。試料№５から珪藻の産出が少ない試料№３にかけてはほぼ同傾向で、広布種の*Gomphonema angustatum*、*Navicula cryptocephala*、その他不明種の*Pinnularia valdetolerans*、*Navicula seminuloides*が産出する。試料№２では、中～下流性河川指標種の*Achnanthes hungarica*と*Planothidium lanceolatum*の産出率が微増する。試料№１は珪藻の産出が少なく、破片でも明瞭な*Cocconeis placentula*を多く検出した。

・堀2123合流部（５地点：図６）

５地点の堀2123合流部の３試料では、試料№５の１試料で珪藻の産出が少なく、その中では湖沼沼沢湿地指標種の*Fragilaria capucina* var. *vaucheriae*が多産している。試料№４では、上流性河川指標種の*Achnanthidium japonicum*、淡水底生指標種の*Cocconeis placentula*、*Cymbella turgidula* var. *nipponica*など、多様な指標種群に属する付着性の珪藻が多種産出している。試料№３では、陸生Ａ群の*Hantzschia amphioxys*と*Amphora montana*が微増している。

・堀2123（６地点：図７）

６地点の堀2123の４試料では、試料№５の１試料で珪藻の産出が少なく、その中では、淡水底生指標種の*Cymbella turgidula* var. *nipponica*、*Cocconeis placentula*のほか、広布種も産出している。試料№４は、試料№５と同じ傾向で、試料№３では広布種のSynedra ulnaの産出が減り、淡水底生指標種の*Eunotia intermedia*、陸生Ａ群の*Diadesmis contenta* f. *biceps*などが微増している。試料№１では、広布種の*Gyrosigma procerum*、沼沢湿地付着生指標種群の*Pinnularia gibba*、中～下流性河川指標種の*Planothidium lanceolatum*などが多く見られた。

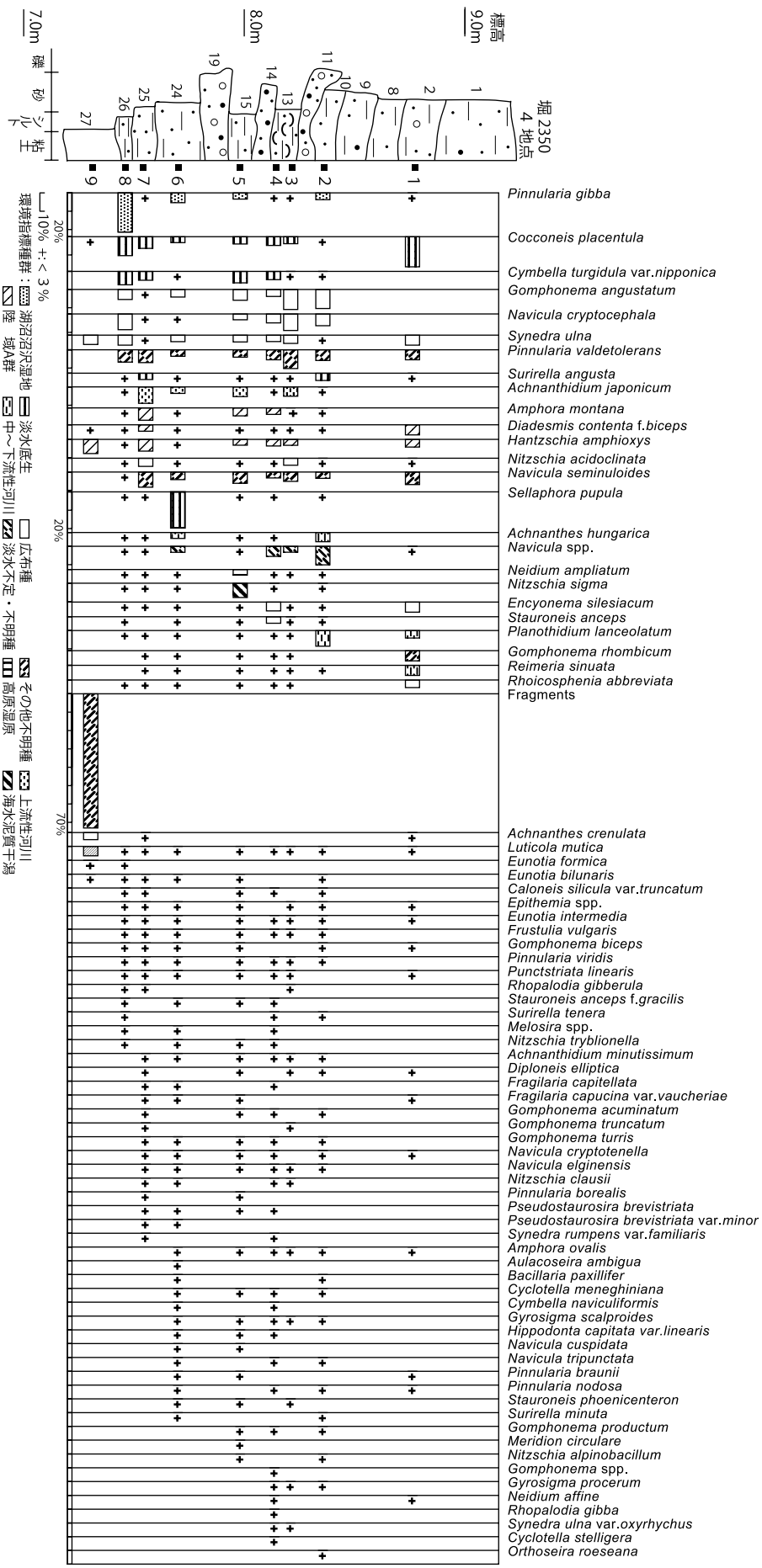


図５　堀2350（４地点）の珪藻分析結果

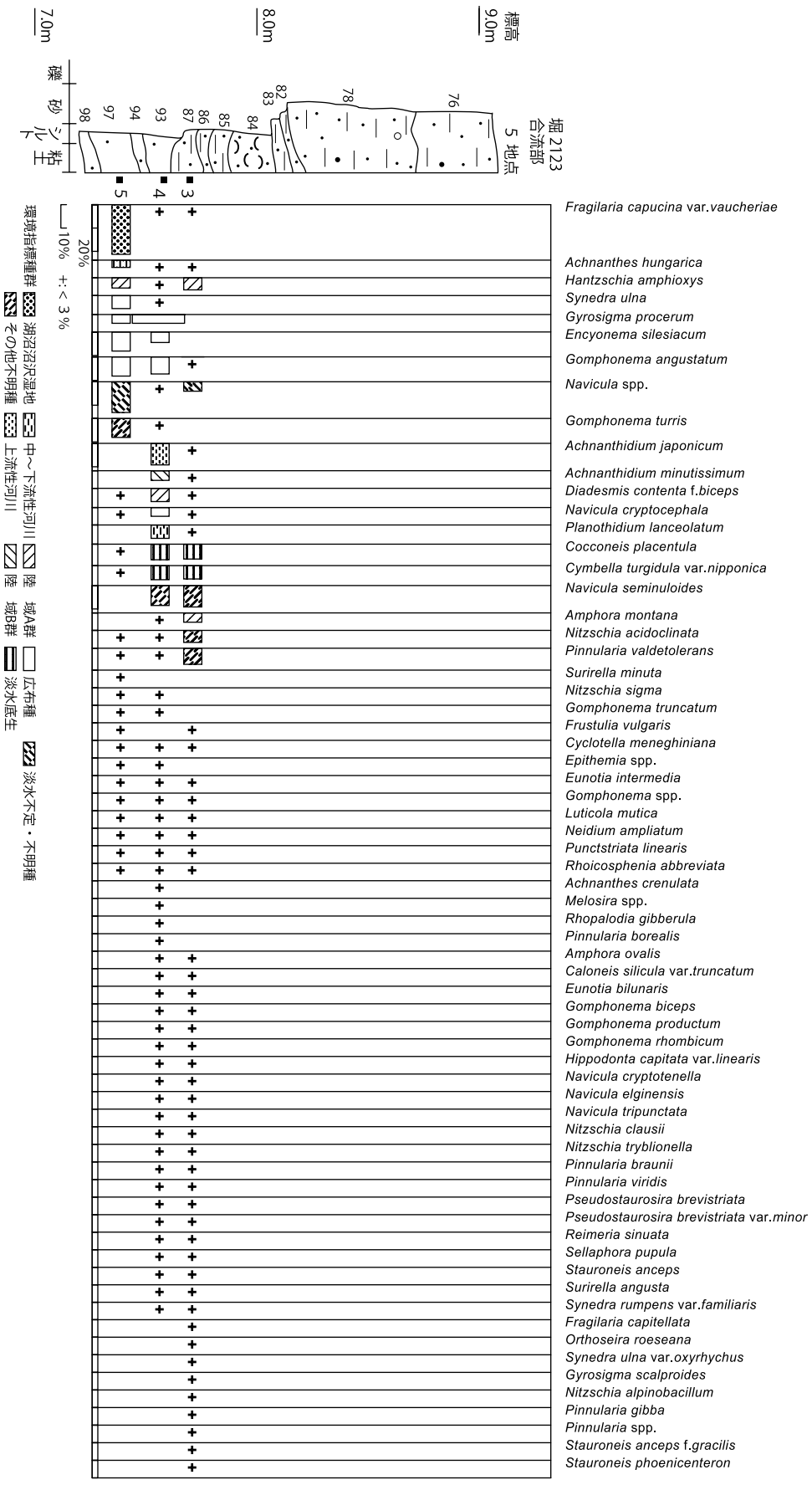


図６　堀2123合流部（５地点）の珪藻分析結果

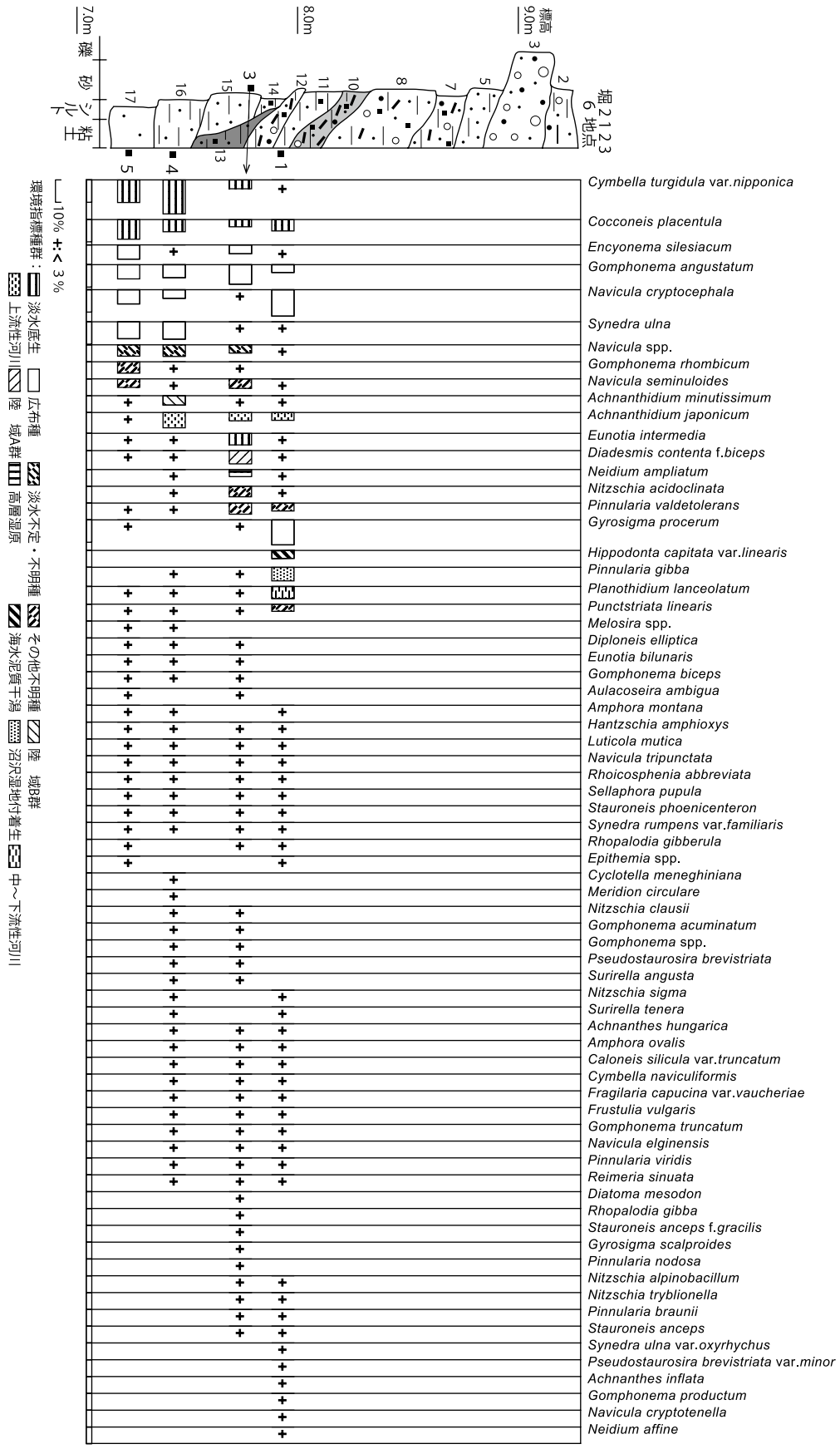


図７　堀2123（６地点）の珪藻分析結果

４．考察

（１）各堀の堆積環境の変遷

全般として、羽状目珪藻の優占は低水位の環境を示唆している。環境指標種群の定義にもとづけば、水深は１ｍ以内であったと考えられる。多様な環境指標種群に属する珪藻の産出は、様々な環境が近隣にあり、それらの環境からの流入があるような環境であったと考えられる。珪藻の貧産、破片のみの検出であった試料は、周辺からの土砂の流入によって、希釈や珪藻殻の物理的破損を受けたと考えられる。堀は平常時には乾燥していたと考えられるため、化学的にも溶解していた可能性がある。

３地点の堀2299は３試料ともに珪藻が希薄で、破片も多かったため、堀2299は平常時には乾燥しており、大雨などの際に土砂供給を受けるような堀であったと考えられる。試料№３では希薄ながら陸生Ａ群の珪藻が検出されており、堀底が湿った環境であったか、近くに湿った環境の場所があったと推定される。

４地点の堀2350と５地点の堀2123合流部、６地点の堀2123は、最下部で珪藻の貧産あるいは破片の検出、その上位では珪藻が産出している産状から、堀が形成された当初は滞水しておらず、その後、それぞれ低水位な滞水環境になったと考えられる。堀2350では、試料№８は沼沢湿地付着生指標種と淡水底生指標種の産出から、水深の浅い水域であったと考えられる。試料№７では、陸生Ａ群の増加が見られ、特に*Diadesmis contenta* f. *biceps* は渡辺ほか（2005）によれば好清水性種であり、きれいな水の届く湿った環境であったと推定される。試料№６では、淡水底生指標種で渡辺ほか（2005）によれば好汚濁性種である*Sellaphora pupula* の産出が増えており、有機汚濁の影響を受ける環境になったと考えられる。試料№５から試料№３にかけては同じ傾向で、多産する種がなく、多様な指標種が混在する産状である。試料№２では、中～下流性河川指標種の微増に転じる産状から、水域の繋がりが変化したと推定される。

６地点の堀2123では、試料№４で多様な指標種群に属する付着性の珪藻の混在群集である産状から、洪水などによる流入を受けたと考えられる。試料№３では陸生Ａ群の産出から、堀底が湿った環境だったか、近くに湿った環境の場所があったと推定される。

６地点の堀2123では、４試料ともに淡水底生指標種が多産し、浅い水域であったと推定される。多産する特定の種がなく、多様な指標種が混在し、種構成が変化している産状から、水域の繋がりが変化したと推定される。

（２）堀の接続関係

４つの堀の接続関係について検討する。３地点の堀2299を４地点の堀2350が切っており、新旧は明らかである。堀2299は珪藻の産出が少なく、珪藻が十分に検出された５地点の堀2123合流部と６地点の堀2123とは接続していなかったと考えられる。

４地点の堀2350と５地点の堀2123合流部、６地点の堀2123について、層序間の類似性が見られるかどうか、計数結果を正規化せずに、ウォード法を用いた階層クラスター分析を行った。分析には、多変量解析:クラスター分析（菊地、2013）を使用した。平方距離を基準に描かれた樹形図は、

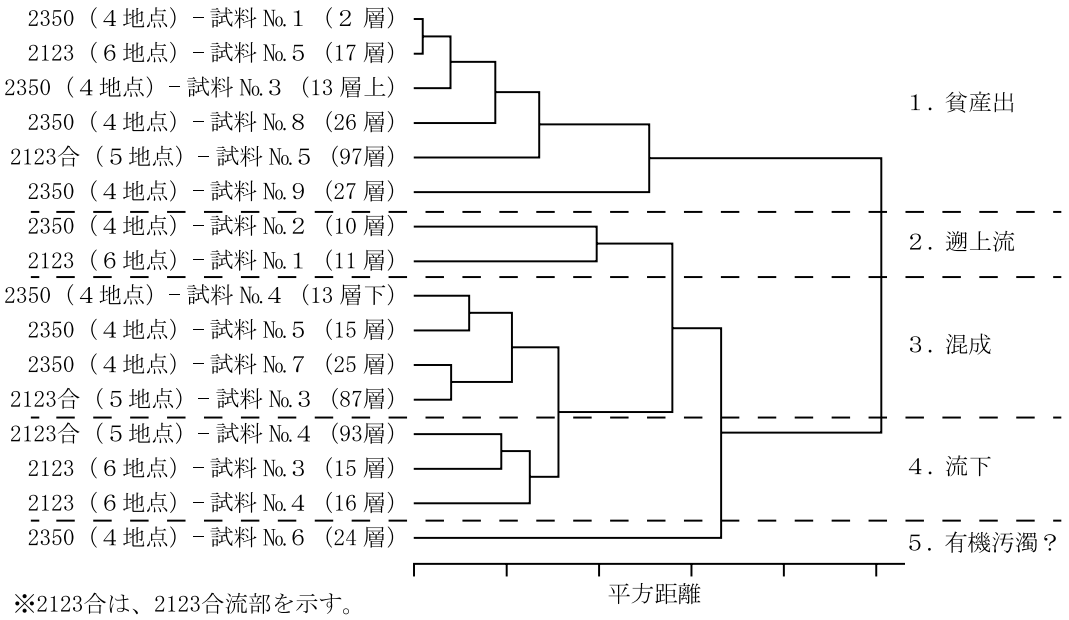


図８　クラスター分析結果の樹形図

図８のとおりである。樹形図から５つのクラスターに分け、検討する。

５つ目は４地点の堀2350の試料№１、６地点の堀2123の試料№５、４地点の堀2350の試料№３、堀2350の試料№８、５地点の堀2123合流部の試料№５、４地点の堀2350の試料№９が属する。これらの試料では珪藻殻数が少なく、300殻以上計数できなかった層序であり、貧産出クラスターとする。

２つ目のクラスターは、５地点の堀2123合流部の試料№２と６地点の堀2123の試料№１が属する。この２試料では、共通して中～下流性河川指標種の*Planothidium lanceolatum*、沼沢湿地付着生指標種の*Pinnularia gibba*、広布種の*Gomphonema angustatum*、*Navicula cryptocephala*、その他不明種の*Pinnularia valdetolerans*が３％以上産出している。ただし、５地点の堀2123合流部の試料№２は堀の埋土上部から採取した試料で、６地点の堀2123の試料№１は堀の埋土下部～中部から採取した試料であり、層序が対応しておらず、クラスター分析における平方距離も十分に大きい。中～下流性河川指標種が産出している特徴から、仮に遡上流クラスターとする。

３つ目は、４地点の堀2350の試料№４と４地点の堀2350の試料№５、４地点の堀2350の試料№７、５地点の堀2123合流部の試料№３が属する。この４試料では、共通して淡水底生指標種の*Cocconeis placentula*と*Cymbella turgidula* var. *nipponica*、陸生Ａ群の*Amphora montana*と*Hantzschia amphioxys*、その他不明種の*Navicula seminuloides*、*Pinnularia valdetolerans*が３％以上産出している。その他に様々な指標種群が混在しており、異地性の珪藻種からなる特徴から、仮に混成クラスターとする。

４つ目は、５地点の堀2123合流部の試料№４と６地点の堀2123の試料の№３、６地点の堀2123の試料№４が属する。この３試料では、共通して上流性河川指標種の*Achnanthidium japonicum*、淡水底生指標種の*Cocconeis placentula*と*Cymbella turgidula* var. *nipponica*、広布種の*Gomphonema angustatum*が３％以上産出している。この産状から、水深の増加と上流域からの流

入が考えられる。上流性河川指標種が産出する特徴から、仮に流下クラスターとする。

５つ目は、４地点の堀2350の試料№６単独のクラスターであり、淡水底生指標種の*Sellaphora pupula*の産出が特徴的な層序である。*Sellaphora pupula*は、渡辺ほか（2005）によれば好汚濁性種とされており、仮に有機汚濁？クラスターとする。

クラスター分析の結果から、考えられる接続関係は次のとおりである。（１）堀埋土下部において東西に連なる５地点の堀2123合流部と６地点の堀2123に流下クラスターが構成され、接続した。（２）堀埋土中部において６地点の堀2123が閉塞したのか、４地点の堀2350が開削して５地点の堀2123合流部による混成クラスターが構成され、接続した。（３）堀埋土の上部で４地点の堀2350と６地点の堀2123による遡上流クラスターが構成されたが、現実的な堆積過程を反映していないと考えられ、接続はしていなかったとみられる。また、５地点の堀2123合流部と６地点の堀2123の上部については、分析を行っておらず、接続関係は未詳である。以上から、５地点の堀2123合流部は６地点の堀2123と４地点の堀2350と時期を変えて接続関係が見られるが、４地点の堀2350と６地点の堀2123は接続していなかったと考えられる。

４地点の堀2350の試料№６は、*Sellaphora pupula*が特徴的に産出しており、その一方で試料№７に比べて陸生Ａ群に属する*Amphora montana*、*Hantzschia amphioxys*、*Diadesmis contenta* f. *biceps*の産出率が減っている。渡辺ほか（2005）によれば、*Sellaphora pupula*は好汚濁性種、陸生Ａ群のうち前２者は広適応性種、*Diadesmis contenta* f. *biceps*は好清水性種である。この種組成の変化から、堀2350（試料№６）の堆積時には、有機汚濁が進行するような出来事が起こった可能性がある。４地点の堀2350の試料№６は5Y3/2オリーブ黒色のシルト混じり細砂、下位は2.5Y4/2暗灰黄色のシルト混じり極細砂、上位は5Y7/2灰白色の砂礫である。上位に向かっての粗粒化は流量の増加に伴う変化であり、周辺や上流から人工的な有機汚濁物質が入り込んだと考えられる。

５．おわりに

珪藻分析の結果、堀2299は珪藻の貧産から他の堀との接続は検討できなかった。他の３つの堀は、基底部の堆積時に５地点の堀2123合流部と６地点の堀2123が、中位層の堆積時に５地点の堀2123合流部と４地点の堀2350が接続していたと推定された。上位層の堆積時の接続関係については、未詳である。また、４地点の堀2350では有機汚濁が進行するような出来事が起こった可能性が推定された。

（石川　智）

引用文献

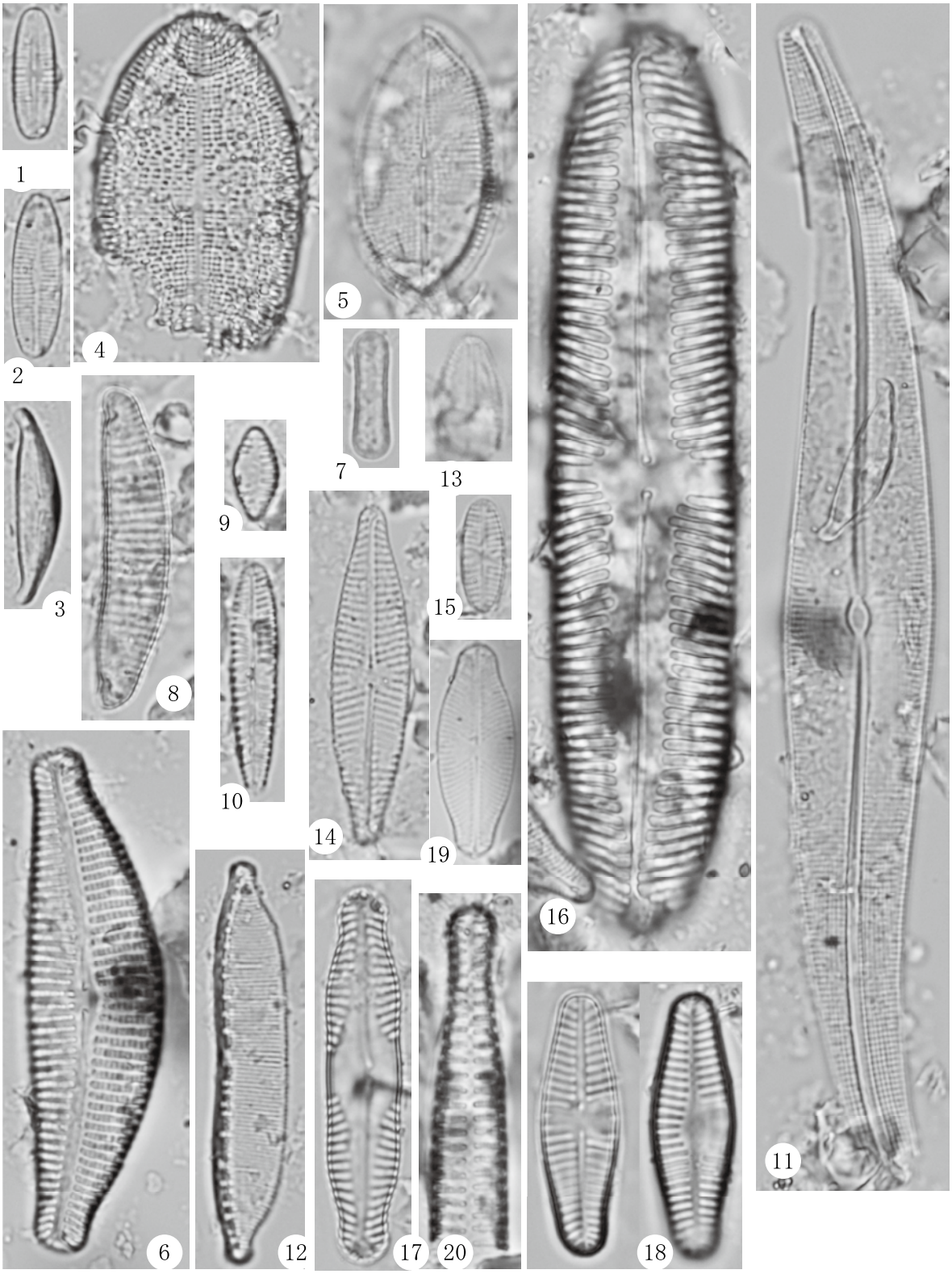
安藤一男（1990）淡水産珪藻による環境指標種群の設定と古環境復元への応用．東北地理，42，73-88.

千葉　崇・澤井裕紀（2014）環境指標種群の再検討と更新．Diatom，30，7-30.

菊池富男（2013）多変量解析:クラスター分析．（http://www.vector.co.jp/soft/win95/business/se489536.html）

小杉正人（1988）珪藻の環境指標種群の設定と古環境復元への応用．第四紀研究，27，1-20.

渡辺仁治・浅井一視・大塚泰介・辻　彰洋・伯耆晶子（2005）淡水珪藻生態図鑑．784p，内田老鶴圃.



1.*Achnanthidium japonicum*(123) 2.*Achnanthidium japonicum*(350-2)
3.*Amphora montana*(350-1) 4.*Cocconeis placentula*(299) 5.*Cocconeis placentula*(350-1)
6.*Cymbella turgidula* var.*nipponica*(350-1) 7.*Diadesmis contenta f.biceps*(123)
8.*Eunotia intermedia*(123) 9.*Fragilaria capucina* var.*vaucheriae*(350-1)
10.*Gomphonema angustatum*(350-1) 11.*Gyrosigma procerum*(123)
12.*Hantzschia amphyoxys*(299) 13.*Luticola mutica*(350-1) 14.*Navicula cryptocephala*(123)
15.*Navicula seminuloides*(350-1) 16.*Pinnularia gibba*(123) 17.*Pinnularia valdetolerans*(350-1)
18.*Planothidium lanceolatum*(350-1) 19.*Sellaphora pupula*(350-1) 20.*Synedra ulna*(350-1)

スケールバーは0.01㎜（括弧内の数字は撮影した試料の堀を示す）

図９　堆積中の珪藻化石の顕微鏡写真

（3）花粉分析

１．はじめに

調査区で検出された堀では、古植生を検討するために堆積物試料が採取された。以下では、試料について行った花粉分析の結果を示し、考察した。なお、同一試料を用いて珪藻分析も行われている（珪藻分析の項参照）。

２．試料と分析方法

分析試料は、室町時代に埋没した堀の基底部埋土の堀2299の試料№３と堀2350の試料№９の計２試料である。分析試料の採取層準や岩質については、放射性炭素年代測定の報告の図１・２に示している。これらの試料について、以下の方法で花粉分析を実施した。

試料（湿重量約３g）を遠沈管にとり、10%水酸化カリウム溶液を加え10分間湯煎する。水洗後、46%フッ化水素酸溶液を加え１時間放置する。水洗後、比重分離（比重2.1に調整した臭化亜鉛溶液を加え遠心分離）を行い、浮遊物を回収し、水洗する。水洗後、酢酸処理を行い、続けてアセトリシス処理（無水酢酸９：濃硫酸１の割合の混酸を加え20分間湯煎）を行う。水洗後、残渣にグリセリンを滴下し、保存用とする。この残渣よりプレパラートを作製した。プレパラートは、１枚の全面を検鏡した。

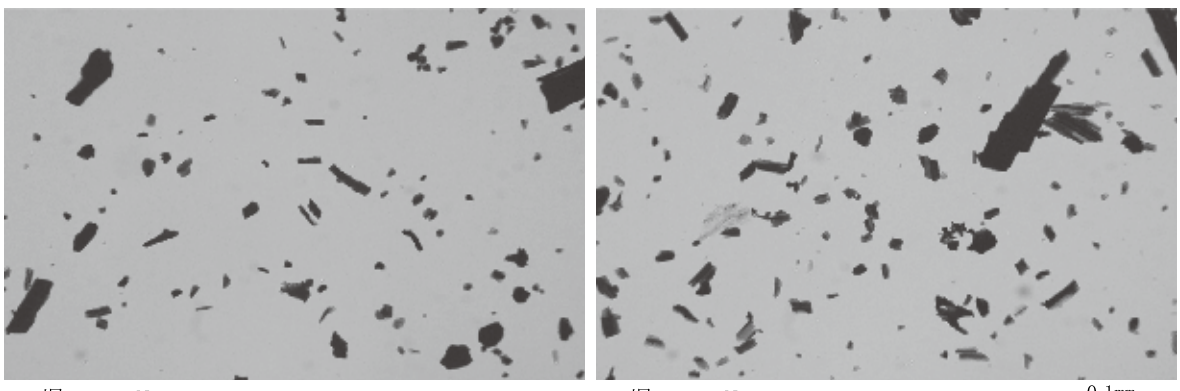
３．結果

検鏡の結果、２試料からは花粉化石が検出されなかった。プレパラートの状況を図10に示す。花粉化石が検出されなかったため、表は作成していない。

４．考察

一般的に、花粉は湿乾を繰り返す環境に弱く、酸化的環境下で堆積すると紫外線や土壌バクテリアなどによって分解され、消失してしまう。したがって、堆積物が酸素と接触する機会の多い堆積環境では、花粉化石が残りにくい。同一試料で行った珪藻分析においても十分な量の珪藻化石が得られておらず、絶えず水を湛えた堆積環境ではなかったと考えられる。よって、試料採取地点は酸化的環境に晒されたために、花粉化石が分解・消失してしまった可能性がある。

（森　将志）



1. 堀2299　№３　　2. 堀2350　№９

図10　プレパラートの状況

（４）鉱物分析

１．はじめに

調査で検出された堆積物の供給源に関する検討を行う目的で、鉱物分析と砂粒分析を行った。

２．試料と方法

分析試料は、発掘調査区の構成層から採取した３試料、比較用として現河床から採取した２試料である（表７）。調査区で採取した分析試料の採取位置等については、放射性炭素年代測定の報告の図１・２に示している（放射性炭素年代測定の項参照）。また、現河床の試料は、アーマコートした表層の礫分を取り除いた部分を採取した。試料の採取状況を写真５～16に示す。また、試料採取地点の位置図を図11に示す。

分析は、鉱物分析と、分析№２、４、５については砂粒分析も行った。

試料は、50g程度を秤量した後、１φ（0.5㎜）、２φ（0.25㎜）、３φ（0.125㎜）、４φ（0.063㎜）の４枚の篩を重ね、湿式篩分けをした。４φ篩残渣について、重液（テトラブロモエタン、比重2.96）を用いて重鉱物と軽鉱物に分離した。軽鉱物および重鉱物は、ガムクロラールを用いてプレパラートを作製し、偏光顕微鏡を用いて同定・計数を行った。軽鉱物については、町田・新井（2003）の火山ガラスの分類基準に従って、バブル型平板状（b1）、バブル型Ｙ字状（b2）、軽石型

表７　分析試料とその特徴

分析№	採取地点	遺構/位置	層位/採取層準	備考
1	発掘調査区2区	井戸2178側壁(2地点)	11層	第10面の基盤層
2	発掘調査区1区	南断割(1地点)	3層	流路埋積層
3	発掘調査区1区	南断割(1地点)	1層	流路埋積層直上の洪水層
4	宮前橋	河床の寄州	寄州の表層の礫質砂層	現桂川河床
5	御幸橋	河床の中州	寄州の表層の砂層	現木津川河床

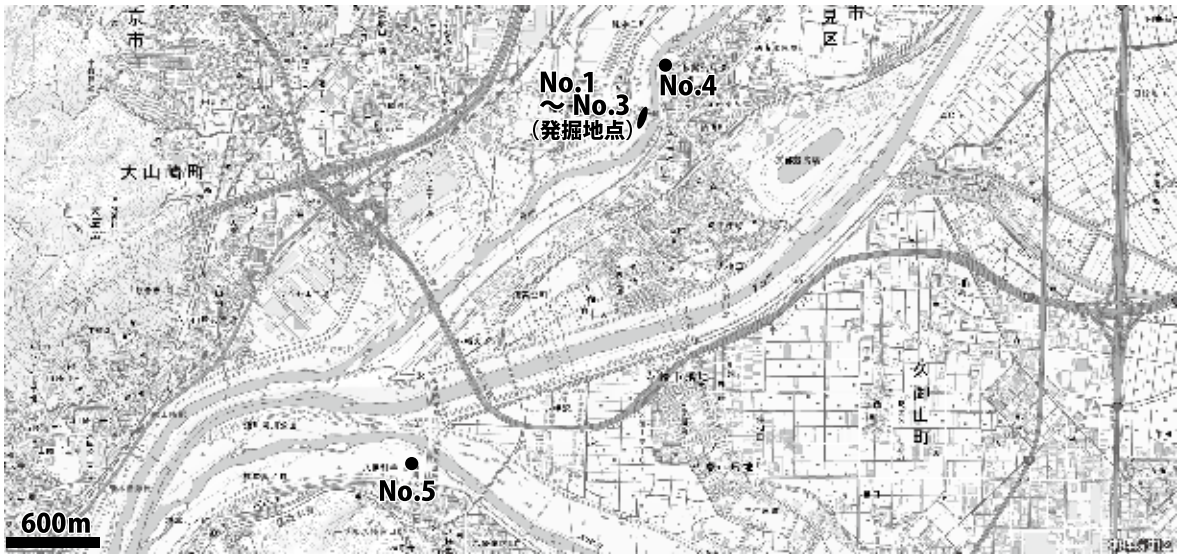


図11　試料採取地点の位置図（国土地理院の地理院地図の画像を利用）

写真５　試料№１採取位置（２区、井戸2178側壁、11層）

写真６　試料№１（２区、井戸2178側壁、11層）の堆積状況

写真７　試料№２採取位置（１区、南断割、３層）

写真８　試料№３採取位置（１区、南断割、１層）

写真９　試料№４採取採取地点（宮前橋上流の寄州）

写真10　試料№４採取採取位置（寄州を上流側から撮影）

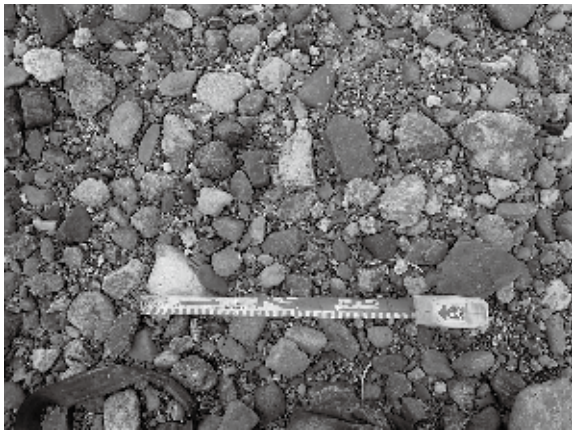


写真11　試料№４の寄州の堆積状況（アーマコート除去前）

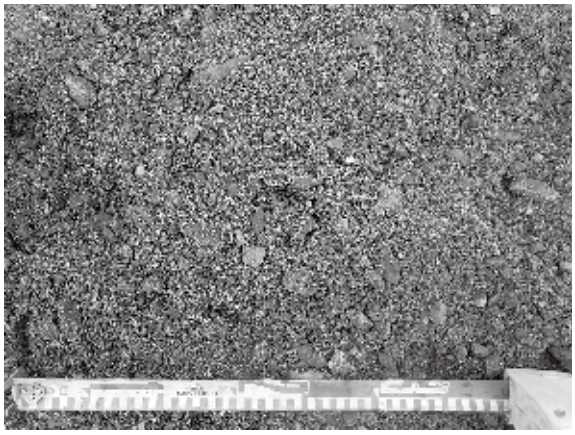


写真12　試料№４の寄州の堆積状況（アーマコート除去後）

写真13　試料№５採取採取地点（御幸橋下流の寄州）

写真14　試料№５採取採取位置（寄州を下流側から撮影）

写真15　試料№５の寄州の堆積状況（アーマコート除去前）

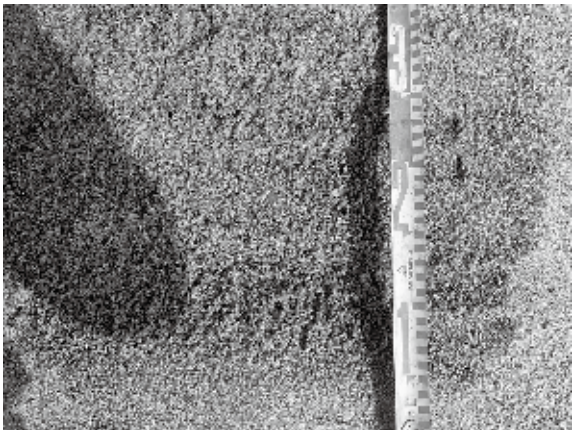


写真16　試料№５の寄州の堆積状況（アーマコート除去後）

繊維状（p1）、軽石型スポンジ状（p2）、急冷破砕型フレーク状（c1）、急冷破砕型塊状（c2）に分類した。重鉱物については、斜方輝石（Opx）、単斜輝石（Cpx）、角閃石（Ho）、ジルコン（Zr）、磁鉄鉱（Mg）、不明（Opq）等を同定・計数した。

砂粒分析は、分析№２、４、５について、１φ残渣から大型礫を除き、エポキシ樹脂で固めて砂粒物の薄片を作製して、偏光顕微鏡を用いて複合石英類（深成岩類）、チャート、砂岩、泥岩、その他鉱物を同定・計数した。

３．結果

以下に、各試料の特徴、鉱物分析と砂粒分析の結果について述べる。

［分析№１（発掘調査区２区、井戸2178側壁、11層］

試料は、暗灰黄色（2.5Y 4/2）の砂混じりシルト質粘土である。篩分けでは、４φ以上の残渣は12.86%であった（表８）。

軽鉱物では、不明粒子（Opq）が多く、長石類（Fel）や石英（Qu）を含み、バブル型火山ガラス（b1、b2）や雲母類（Mi）が少量含まれていた。重鉱物では、不明粒子（Opq）が多く、次いで角閃石（Ho）が多く、斜方輝石（Opx）や単斜輝石（Cpx）、ジルコン（Zr）を少量含む（表９・10）。

［分析№２（発掘調査区１区、南断割、３層］

試料は、黄灰色（2.5Y 4/1）の礫混じり粗砂である。篩分けでは、４φ以上の残渣は95.06%で

あった（表８）。

軽鉱物では、不明粒子（Opq）が多く、長石類（Fel）や石英（Qu）を含み、バブル型火山ガラス（b1、b2）や急冷型フレーク状ガラス（c1）、雲母類（Mi）が少量含まれていた。重鉱物では、不明粒子（Opq）が多く、次いで角閃石（Ho）が多く、斜方輝石（Opx）や単斜輝石（Cpx）、ジルコン（Zr）、磁鉄鉱（Mg）を含む（表９・10）。

１φ篩残渣中の２㎜以下の砂粒薄片では、深成岩類と思われる複合石英類が70粒子、チャートが31粒子、砂岩が59粒子、泥岩が40粒子などであり、全体としては堆積岩類が多い（表11）。

［分析№３（発掘調査区１区、南断割、１層］

試料は、灰白色（5Y 7/2）の粘土質シルトである。篩分けでは、４φ以上の残渣は13.64%であった（表８）。

表８　堆積物の含水率・含砂率・粒度組成

分析№	堆積物の色調・特徴	処理乾重(g)	砂粒分の粒度組成(重量g)				4φ以上(重量%)	軽・重鉱物組成(重量g)	
			1φ	2φ	3φ	4φ		軽鉱物	重鉱物
1	暗灰黄色(2.5Y 4/2)、砂混じりシルト質粘土	50.09	0.00	0.02	0.80	5.62	12.86	0.42	0.01
2	黄灰色(2.5Y 4/1)、礫混じり粗砂	50.05	45.04	2.30	0.17	0.07	95.06	0.07	0.00
3	灰白色(5Y 7/2)、粘土質シルト	50.06	0.08	0.07	0.75	5.93	13.64	0.26	0.01
4	灰色(5Y 4/1)、砂礫	50.04	40.70	5.70	1.46	0.29	96.22	0.23	0.01
5	浅黄色(2.5Y 7/4)、礫混じり中～粗砂	50.01	41.60	7.21	0.25	0.03	98.16	0.03	0.00

表９　４φ篩残渣中の軽鉱物組成

分析№	石英(Qu)	長石類(Fel)	雲母類(Mi)	不明(Opq)	火山ガラス						ガラス合計	軽鉱物合計
					バブル(泡)型		軽石型		急冷破砕型			
					平板状(b1)	Y字状(b2)	繊維状(p1)	スポンジ状(p2)	フレーク状(c1)	塊状(c2)		
1	17	39	4	186	3	1					4	250
2	21	38	3	185	1	1			1		3	250
3	12	21	1	216							0	250
4	18	21	1	210							0	250
5	26	63	14	147							0	250

表10　４φ篩残渣中の重鉱物組成

分析№	重鉱物						重鉱物の合計
	斜方輝石(Opx)	単斜輝石(Cpx)	角閃石(Ho)	ジルコン(Zr)	磁鉄鉱(Mg)	不明(Opq)	
1	7	1	57	1		184	250
2	8	8	69	1	3	161	250
3	3	4	40			203	250
4	8	1	32	7	9	193	250
5	6	4	133	8	6	93	250

表11　１φ篩残渣中の岩石組成

分析№	石英	長石類	雲母類	複合石英類	チャート	砂岩	泥岩	不明粒子	合計
2	25	24	1	70	31	59	40		250
4	22	21	1	64	31	59	48	4	250
5	82	32	6	107	4	8	8	3	250

軽鉱物では、不明粒子（Opq）が多く、長石類（Fel）や石英（Qu）を含み、雲母類（Mi）が少量含まれていた。重鉱物では、不明粒子（Opq）が多く、次いで角閃石（Ho）が多く、斜方輝石（Opx）や単斜輝石（Cpx）を少量含む（表９・10）。

［分析№４（宮前橋、河床の寄州、寄州の表層）］

試料は、灰色（5Y 4/1）の砂礫である。篩分けでは、４φ以上の残渣は96.22%であった（表８）。

軽鉱物では、不明粒子（Opq）が多く、長石類（Fel）や石英（Qu）を含み、雲母類（Mi）が少量含まれていた。重鉱物では、不明粒子（Opq）が多く、次いで角閃石（Ho）が多く、斜方輝石（Opx）や単斜輝石（Cpx）、ジルコン（Zr）、磁鉄鉱（Mg）を少量含む（表９・10）。

１φ篩残渣中の２㎜以下の砂粒薄片では、深成岩類と思われる複合石英類が64粒子、チャートが31粒子、砂岩が59粒子、泥岩が48粒子などであり、全体としては堆積岩類が多い（表11）。

［分析№５（御幸橋、河床の中州、中州の表層）］

試料は、浅黄色（2.5Y 7/4）の礫混じり中～粗砂（マサ状）である。篩分けでは、４φ以上の残渣は、98.16%であった（表８）。

軽鉱物では、不明粒子（Opq）が多く、次いで長石類（Fel）が多く、石英（Qu）や雲母類（Mi）が含まれていた。重鉱物では、角閃石（Ho）が多く、次いで不明粒子（Opq）が多く、斜方輝石（Opx）や単斜輝石（Cpx）、ジルコン（Zr）、磁鉄鉱（Mg）を含む（表９・10）。

１φ篩残渣中の２㎜以下の砂粒薄片では、深成岩類と思われる複合石英類が107粒子、チャートが４粒子、砂岩が８粒子、泥岩が８粒子などであり、全体としては深成岩類が多い（表11）。

４．考察

現河床の表層から採取した分析№４の桂川の試料は、砂粒分析において堆積岩類が多く、深成岩類を伴う砂粒組成を示し、鉱物では不明粒子が多く、角閃石をやや多く含み、輝石類、ジルコン、磁鉄鉱を伴う。一方、分析№５の木津川の試料は、深成岩類が多く、堆積岩類を伴う砂粒組成であり、鉱物では角閃石が多く、不明粒子をやや多く含み、輝石類やジルコン磁鉄鉱を伴う。

遺跡試料の分析№２は、分析№４と同様、堆積岩類が多く、深成岩類を伴う砂粒組成を示し、鉱物では不明粒子が多く、角閃石をやや多く含み、輝石類、ジルコン、磁鉄鉱を伴う。

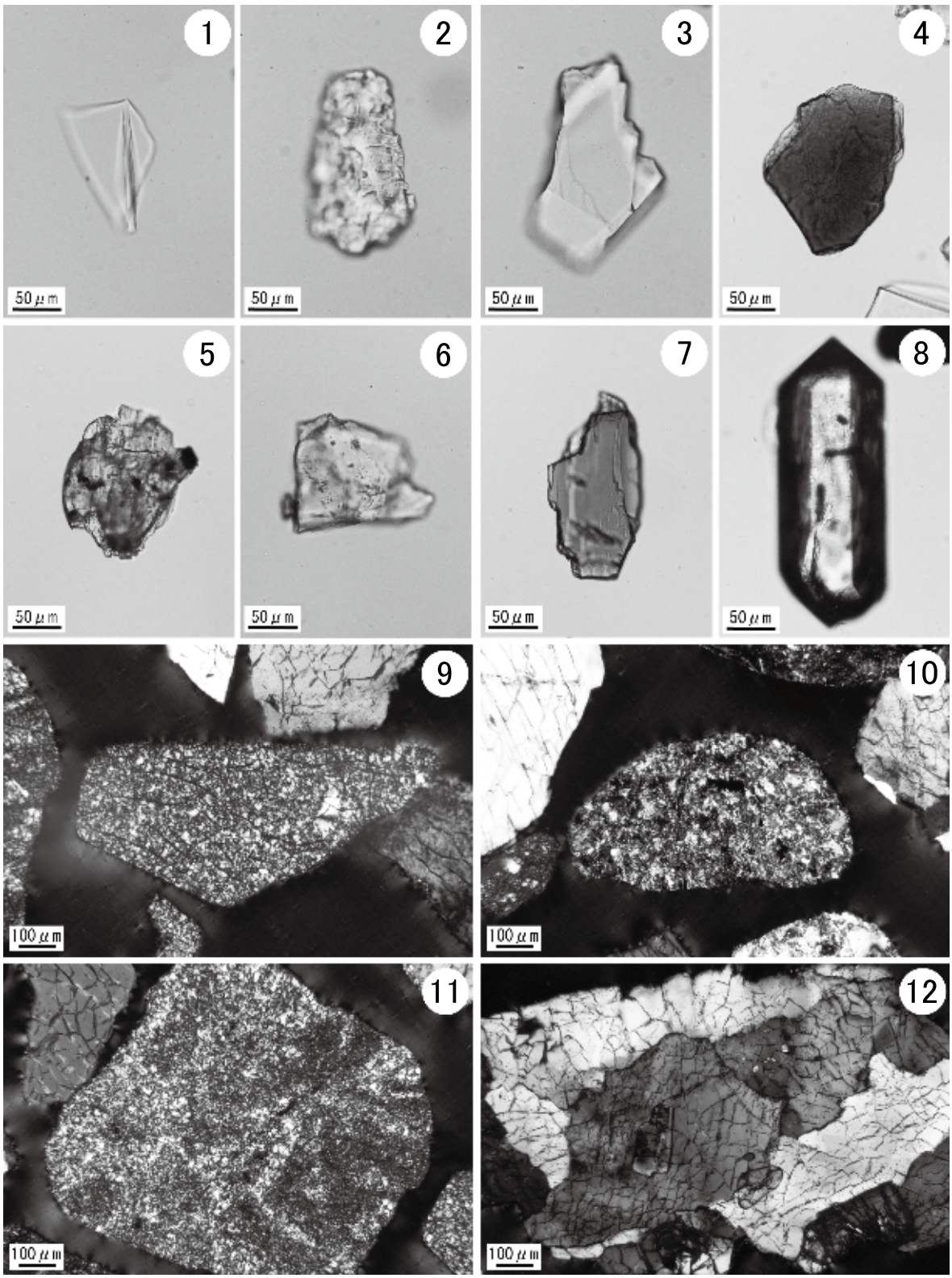
遺跡試料の分析№１と№３の鉱物組成は、遺跡試料の分析№２あるいは現桂川の分析№４と同様の鉱物組成であった。

以上の結果から、遺跡試料（分析№１～３）は、現木津川河床砂礫とは違いが見られ、現桂川河床の砂礫と類似する。

（藤根　久）

引用文献

町田　洋・新井房夫（2003）新編火山灰アトラス．336p，東京大学出版会．



1. バブル型平板状ガラス　2. 長石類　3. 石英　4. 雲母類　5. 斜方輝石　6. 単斜輝石　7. 角閃石
8. ジルコン　9. チャート　10. 砂岩　11. 泥岩　12. 複合石英類

図12　試料中の鉱物・岩石の顕微鏡写真

付表１　土器類一覧表

（　）は残存値、単位はcm

No.	器種	器形	遺構名	口径	器高	底径	色調	胎土	備考
1	弥生土器	壷	土坑2440	15.2	(7.1)	－	10YR6/4	3㎜以下の石英、長石、チャート	
2	弥生土器	壷	土坑2440	－	(5.0)	－	7.5YR5/2	2㎜以下の長石、チャート	
3	弥生土器	壷	土坑2440	－	(5.0)	－	7.5YR5/3	2㎜以下の石英、長石	
4	弥生土器	壷	土坑2440	9.8	(4.4)	－	2.5YR6/4	2㎜以下の石英、チャート	
5	弥生土器	壷	土坑2440	－	(2.3)	4.1	5YR4/2	2㎜以下の石英、長石、チャート	
6	弥生土器	壷	土坑2440	－	(4.3)	－	10YR4/2	2㎜以下の石英、長石	
7	弥生土器	甕	土坑2440	－	(1.4)	－	10YR4/2	2㎜以下の石英、長石	
8	弥生土器	甕	土坑2440	13.8	(5.2)	－	10YR5/3	3㎜以下の長石、チャート	
9	弥生土器	甕	土坑2440	19.0	(3.4)	－	7.5YR4/3	2㎜以下の石英、長石、チャート	
10	弥生土器	甕	土坑2440	－	(6.0)	4.8	5YR5/2	2㎜以下の石英、長石	
11	弥生土器	鉢	土坑2440	12.8	(4.7)	－	5YR6/4	2㎜以下の長石	
12	弥生土器	鉢	土坑2440	30.0	(6.1)	－	5YR4/2	3㎜以下の石英、長石	搬入品か
13	弥生土器	高杯	土坑2440	21.8	(4.5)	－	10YR6/3	2㎜以下の石英、長石	瀬戸内系
14	弥生土器	高杯	土坑2440	－	(7.2)	12.0	10YR5/2～4/2	2㎜以下の長石、チャート	内面ケズリ
15	弥生土器	高杯	土坑2440	－	(13.5)	14.4	7.5YR8/4～7/4	2㎜以下の石英、長石	
16	弥生土器	壷	土坑2492	19.4	(7.6)	－	5YR6/6	3㎜以下の石英、長石、チャート	
17	弥生土器	壷	土坑2492	18.6	(3.1) (19.0)	－	5YR5/8	1㎜以下の石英、長石、チャート、赤色粒	条痕文系、搬入品
18	弥生土器	壷	落込2392 下層	－	(4.6)	－	10YR5/1	1.5㎜以下の石英、長石、チャート	
19	弥生土器	壷	落込2392 下層	－	(8.2)	3.0	2.5Y7/3	3㎜以下の石英、長石	
20	弥生土器	壷	落込2392 下層	16.2	(11.5)	－	2.5Y8/2	3㎜以下の石英、長石、チャート	
21	弥生土器	壷	落込2392 下層	－	(11.1)	－	2.5Y7/3	3㎜以下の石英、長石、チャート	
22	弥生土器	蓋	落込2392 下層	－	(3.7)	－	10YR6/2	1㎜以下の石英、長石	
23	弥生土器	甕	落込2392 下層	－	(2.6)	5.2	10YR6/2	2㎜以下の石英、長石、チャート	搬入品か
24	弥生土器	鉢	落込2392 下層	－	(5.3)	－	7.5YR6/3	2㎜以下の石英、長石	
25	古式土師器	壷	落込2392 上層	14.0	(1.7)	－	2.5YR6/6	2㎜以下の石英、長石	搬入品か
26	古式土師器	壷	落込2392 上層	11.6	(3.6)		2.5Y7/3	3㎜以下の長石、チャート	
27	古式土師器	壷	落込2392 上層		(6.5)		2.5Y7/2	2㎜以下の長石、チャート、クサリ礫	
28	古式土師器	甕	落込2392 上層	14.8	(2.8)		7.5YR4/2	1㎜以下の石英、長石、角閃石	生駒西麓産
29	古式土師器	甕	落込2392 上層	15.8	(3.0)		7.5YR4/2	2㎜以下の石英、長石、角閃石	生駒西麓産
30	古式土師器	甕	落込2392 上層	18.0	(3.3)		2.5Y4/1	1㎜以下の長石、角閃石	生駒西麓産
31	古式土師器	甕	落込2392 上層	16.8	13.4	2.0	2.5YR6/4	5㎜以下の石英、長石、チャート	北近畿系、搬入品
32	古式土師器	甕	落込2392 上層	11.6	16.8	4.3	7.5YR7/4	4㎜以下の石英、長石	

( )は残存値、単位はcm

No.	器種	器形	遺構名	口径	器高	底径	色調	胎土	備考
33	古式土師器	甕	落込2392 上層	17.6	(5.3)	-	10YR7/3	3mm以下の石英、長石、チャート	
34	古式土師器	甕	落込2392 上層	15.0	(11.3)		7.5YR7/4	5mm以下の石英、長石、チャート	
35	古式土師器	甕	落込2392 上層	16.2	(4.2)		2.5YR5/4	3mm以下の長石、チャート	
36	古式土師器	甕	落込2392 上層	16.2	(6.4)		5YR7/4	3mm以下の石英、長石、チャート	
37	古式土師器	甕	落込2392 上層	-	(3.5)	4.5	2.5Y7/2	3mm以下の石英、長石、チャート	
38	古式土師器	鉢	落込2392 上層	-	(1.8)	2.4	7.5YR5/2	3mm以下の石英、長石	搬入品
39	古式土師器	鉢	落込2392 上層	-	(3.4)	4.0	2.5Y7/2	3mm以下の石英、長石	
40	古式土師器	鉢	落込2392 上層		(8.0)	5.0	2.5Y7/3	3mm以下の石英、長石、チャート	
41	古式土師器	手焙形土器	落込2392 上層	(19.0)			7.5YR6/4	6mm以下の石英、長石、チャート	
42	古式土師器	高杯	落込2392 上層	13.0	(9.2)		5YR5/4	3mm以下の石英、長石、チャート	搬入品
43	古式土師器	高杯	落込2392 上層	-	(4.5)	14.0	7.5YR5/3	2mm以下の石英、長石	
44	古式土師器	壷	竪穴建物2356	5.7	11.0	1.0	10YR7/4	2mm以下の石英、長石、チャート、クサリ礫	
45	古式土師器	甕	竪穴建物2356	17.0	(10.2)		5YR7/6、10YR 7/2(体部内面)	3mm以下の石英、長石、チャート、雲母少	
46	古式土師器	鉢	竪穴建物2356	-	(7.2)	5.0	5YR7/4	3mm以下の石英、長石、チャート	
47	古式土師器	壷	竪穴建物2356内炉2390	-	(3.9)	-	10YR8/2	1.5mm以下の石英、長石、チャート、雲母、赤色粒	
48	古式土師器	甕	竪穴建物2356内炉2390	17.1	(2.4)	-	10YR8/2	3mm以下の石英、長石、チャート、雲母、赤色粒	
49	古式土師器	甕	竪穴建物2400	14.8	(2.3)		10YR7/3	2mm以下の石英、長石	
50	古式土師器	甕	竪穴建物2400内土坑2477	15.8	19.6	2.5	2.5Y4/2	1mm以下の石英、長石、角閃石	生駒西麓産
51	古式土師器	器台	竪穴建物2400	15.0	(1.5)		2.5Y7/3	2mm以下の石英、長石、チャート	
52	古式土師器	小型器台	竪穴建物2400内土坑2477	9.8	(8.9)		7.5YR7/4	3mm以下の石英、長石、チャート	
53	古式土師器	器台	竪穴建物2400	-	(5.9)	-	10YR6/3	3mm以下の石英、長石	
54	古式土師器	器台	竪穴建物2400	-	(5.4)	11.2	2.5YR5/6	7mm以下の石英、長石、チャート	
55	古式土師器	壷	竪穴建物2240	9.6	17.7	2.0	10YR8/2	5mm以下の石英、長石、チャート	
56	古式土師器	壷	竪穴建物2240	22.4	(3.9)	-	5YR6/6	3mm以下の石英、長石、チャート	
57	古式土師器	壷	竪穴建物2240	-	(11.3)	-	7.5YR6/4	2mm以下の石英、長石、チャート、雲母、赤色粒	
58	古式土師器	壷	竪穴建物2240	-	14.5	3.0	5YR5/6、10YR5/4	4mm以下の石英、長石、チャート	
59	古式土師器	甕	竪穴建物2240	15.0	(2.7)	-	10YR3/2	2mm以下の石英、長石、チャート、雲母、角閃石、赤色粒	生駒西麓産
60	古式土師器	甕	竪穴建物2240	14.5	(6.4)	-	10YR4/3	6mm以下の石英、長石、チャート、雲母、角閃石	生駒西麓産
61	古式土師器	甕	竪穴建物2240	15.8	(9.2)	-	10YR4/3	6mm以下の石英、長石、チャート、雲母、角閃石	生駒西麓産
62	古式土師器	甕	竪穴建物2240	16.4	(12.8) (8.3)	2.8	10YR5/2 10YR3/1	5mm以下の石英、長石、チャート、雲母、角閃石	生駒西麓産
63	古式土師器	甕	竪穴建物2240	17.0	(6.7)	-	7.5YR5/4	3mm以下の石英、長石、チャート、雲母	
64	古式土師器	甕	竪穴建物2240	15.7	(13.1)		5YR6/4	2mm以下の石英、長石、チャート、赤色粒	

( )は残存値、単位はcm

No.	器種	器形	遺構名	口径	器高	底径	色調	胎土	備考
65	古式土師器	甕	竪穴建物2240	14.8	(13.1)	-	7.5YR7/6	3㎜以下の石英、長石、チャート、雲母、赤色粒	
66	古式土師器	甕	竪穴建物2240	15.7	(4.2)	-	7.5YR6/4	5㎜以下の石英、長石、チャート、雲母、赤色粒	
67	古式土師器	甕	竪穴建物2240	16.2	(2.6)	-	5YR6/6	2㎜以下の石英、長石、チャート、雲母、赤色粒	
68	古式土師器	甕	竪穴建物2240	16.3	(7.4)	-	7.5YR7/4	5㎜以下の石英、チャート、赤色粒	
69	古式土師器	甕	竪穴建物2240内土坑2391	14.0	(14.1)	-	7.5R7/4	4㎜以下の石英、長石、チャート	
70	古式土師器	甕	竪穴建物2240	-	(15.4)	3.0	10YR7/2	3㎜以下の石英、長石、チャート、雲母、角閃石	
71	古式土師器	鉢	竪穴建物2240	11.6	9.5	4.4	10YR6/3	3㎜以下の石英、長石、チャート	
72	古式土師器	鉢	竪穴建物2240	8.8	4.0	8.4	10YR7/2	3.5㎜以下の石英、長石、チャート	
73	古式土師器	鉢	竪穴建物2240	6.3	8.1	4.7	10YR8/3	3㎜以下の石英、長石、チャート	
74	古式土師器	有孔鉢	竪穴建物2240	-	(3.7)	3.2	2.5Y7/2	1.5㎜以下の石英、長石、チャート、雲母、赤色粒	
75	古式土師器	有孔鉢	竪穴建物2240	-	(5.8)	2.8	7.5YR7/4	2㎜以下の石英、長石、チャート、雲母、赤色粒	
76	古式土師器	高杯	竪穴建物2240	-	13.0	16.0	5YR6/6	1.5㎜以下の石英、長石、チャート	
77	古式土師器	小型器台	竪穴建物2240	8.8	(2.4)	-	5YR5/6	0.5㎜以下の石英、長石	
78	古式土師器	小型器台	竪穴建物2240	8.3	8.9	8.5	7.5YR7/4	2㎜以下の石英、長石、チャート	
79	古式土師器	甕	竪穴建物2410	13.6	10.8		10YR5/3	2㎜以下の石英、長石、角閃石	生駒西麓産
80	古式土師器	台付甕	竪穴建物2410	10.2	(3.6) (4.6)	-	10YR5/6	2㎜以下の石英、長石	S字甕、搬入品
81	古式土師器	器台	竪穴建物2410	-	(6.2)	11.2	5YR5/4	0.5㎜以下の石英、長石	
82	古式土師器	甕	土坑2404	14.9	17.8	3.6	10YR7/4	3㎜以下の石英、長石、チャート、微細な雲母	
83	古式土師器	甕	竪穴建物2368	16.0	(6.1)		5YR6/6	3㎜以下の石英、長石、チャート	
84	古式土師器	壷	竪穴建物2368	-	(3.2)	4.8	7.5YR7/4、N3/0(外面黒斑か?)	2㎜以下の石英、長石、チャート	
85	古式土師器	器台	竪穴建物2368	8.4	11.0	11.6	2.5YR5/6	2㎜以下の石英、長石	
86	須恵器	杯蓋	溝2325	-	5.0	12.4	N8/0(内)、2.5GY 4/1(外)、N4/0(断)	3～5㎜の長石	
87	須恵器	杯身	溝2325	10.9	4.7		N7/0(内)、2.5GY 4/1(外)、N3/0(断)	3㎜以下の石英、長石	
88	土師器	椀	流路2353	11.0	5.9		2.5YR5/6	1㎜以下の長石	
89	土師器	杯	2区断割	21.0	5.1		2.5YR6/6	1㎜以下の長石、砂粒	
90	須恵器	長頸壷	掘立柱建物2154柱穴2162	-	(20.2)	8.2	2.5Y8/1	3㎜以下の石英、長石	東海地方産
91	土師器	皿	土坑2326	13.4	3.4		5YR7/6	2㎜以下の石英、長石、クサリ礫	
92	土師器	甕	土坑2326	27.4	27.5		10YR8/1～8/2	2㎜以下の石英、長石	
93	灰釉陶器	把手付瓶子	溝2187	-	(11.2)	5.1	2.5Y8/1(素地)、5GY8/1(釉)	0.5㎜以下の石英、長石	
94	須恵器	甕	井戸2178	-	-		N5/0	2㎜以下の石英、長石	
95	土師器	皿	流路1017	8.8	1.2		7.5YR7/4	赤色粒	乙訓在地形A群
96	土師器	皿	流路1017	9.4	2.0		10YR6/3	雲母	乙訓在地形A群

( )は残存値、単位はcm

No.	器種	器形	遺構名	口径	器高	底径	色調	胎土	備考
97	土師器	皿	流路1017	-	1.9		10YR7/3	雲母	乙訓在地形A群
98	土師器	皿	流路1017	11.0	1.5		10YR5/1		乙訓在地形A群
99	土師器	皿	流路1017	13.8	(2.7)		7.5YR8/4	赤色粒	乙訓在地形A群
100	瓦器	皿	流路1017	8.6	1.4		N5/0		
101	瓦器	椀	流路1017	11.8	(2.9)	-	N5/0、N8/0		楠葉型
102	瓦器	椀	流路1017	-	(2.2)	-	N4/0、2.5Y8/1		楠葉型
103	瓦器	椀	流路1017	-	(2.8)	-	N5/0		楠葉型
104	瓦器	羽釜	流路1017	20.4	(7.4)		N5/0		
105	瓦器	鍋	流路1017	26.6	-		N4/0、2.5Y8/1		
106	瓦器	鍋	流路1017	-	-		N4/0		
107	輸入白磁	椀	流路1017	15.3	-	-	胎 2.5Y7/1 釉 2.5Y7/1		
108	輸入白磁	椀	流路1017	-	-	-	胎 2.5Y8/2 釉 2.5Y8/2		
109	焼締陶器	擂鉢	流路1017 最上層	-	-	-	5YR5/4		備前産
110	土師器	皿	井戸2225	8.4	1.1		7.5YR7/4	雲母	乙訓在地形A群
111	土師器	皿	井戸2225	8.8	1.2		2.5Y8/4	雲母、赤色粒	乙訓在地形A群
112	土師器	皿	井戸2225	8.8	1.45		10YR7/2	雲母、赤色粒	乙訓在地形A群
113	土師器	皿	井戸2225	8.8	1.5		7.5YR8/3	雲母	乙訓在地形A群
114	土師器	皿	井戸2225	9.2	1.5		7.5YR8/2	雲母	乙訓在地形A群
115	土師器	皿	井戸2225	9.4	1.5		2.5Y8/2	雲母	乙訓在地形A群
116	土師器	皿	井戸2225	11.4	(2.2)		5Y7/6	雲母、赤色粒	乙訓在地形A群
117	土師器	皿	井戸2225	11.8	2.3		2.5Y7/2		乙訓在地形A群
118	土師器	皿	井戸2225	12.4	2.0		2.5Y7/1	雲母	乙訓在地形A群
119	土師器	皿	井戸2225	12.8	2.5		10YR7/4	雲母、赤色粒	乙訓在地形A群
120	土師器	鍋	井戸2225	31.4	(13.0)		2.5YR6/8	長石、石英	
121	瓦器	皿	井戸2225	9.3	1.6		N5/0、N8/0		
122	瓦器	皿	井戸2225	9.4	1.7		N5/0、N8/0		
123	瓦器	椀	井戸2225	11.4	3.9	4.4	N5/0、N8/0		楠葉型
124	瓦器	椀	井戸2225	12.0	3.6	4.5	N5/0、N8/0		楠葉型
125	瓦器	椀	井戸2225	12.8	4.1	4.6	N5/0、N8/0		楠葉型
126	瓦器	椀	井戸2225	14.7	4.7	5.5	N6/0、N8/0		楠葉型
127	土師器	皿	堀2123古	7.4	1.4		2.5Y7/2	雲母、赤色粒	乙訓在地形A群
128	土師器	皿	堀2123古	7.8	1.2		7.5YR7/4	雲母、赤色粒	乙訓在地形A群

（ ）は残存値、単位はcm

No.	器種	器形	遺構名	口径	器高	底径	色調	胎土	備考
129	土師器	皿	堀2123古	8.0	1.0		7.5YR7/4	雲母、赤色粒	乙訓在地形A群
130	土師器	皿	堀2123古	7.8 ～8.3	1.4		2.5Y8/2	雲母、赤色粒	乙訓在地形A群
131	土師器	皿	堀2123古	10.2	1.7		7.5YR8/4	雲母、赤色粒	乙訓在地形A群
132	土師器	皿	堀2123古	10.2	1.9		5YR7/4	雲母、赤色粒	乙訓在地形A群
133	土師器	皿	堀2123古	10.2	2.0		7.5YR7/4	雲母、赤色粒	乙訓在地形A群
134	土師器	皿	堀2123古	6.4	1.4		10YR7/6	雲母、赤色粒	乙訓在地形B群1類
135	土師器	皿	堀2123古	6.6	1.6		7.5YR6/4	雲母、赤色粒	乙訓在地形B群1類
136	土師器	皿	堀2123古	6.8	1.6		7.5YR7/4	雲母、赤色粒	乙訓在地形B群1類
137	土師器	皿	堀2123古	6.9	1.5		7.5YR7/4	雲母、赤色粒	乙訓在地形B群1類
138	土師器	皿	堀2123古	7.1	1.6		7.5YR7/4	雲母、赤色粒	乙訓在地形B群1類
139	土師器	皿	堀2123古	7.2	1.5		7.5YR8/4	雲母、赤色粒	乙訓在地形B群1類
140	土師器	皿	堀2123古	7.3	1.5		7.5YR7/2	雲母、赤色粒	乙訓在地形B群1類
141	土師器	皿	堀2123古	7.3	1.5		7.5YR8/3	雲母、赤色粒	乙訓在地形B群1類
142	土師器	皿	堀2123古	7.6	1.5		10YR7/4	雲母、赤色粒	乙訓在地形B群1類
143	土師器	皿	堀2123古	7.7	1.7		10YR7/4	雲母、赤色粒	乙訓在地形B群1類
144	土師器	皿	堀2123古	11.1	2.2		10YR8/3	雲母、赤色粒	乙訓在地形B群1類
145	土師器	皿	堀2123古	11.4	2.5		10YR8/2	長石	乙訓在地形B群2類
146	土師器	皿	堀2123古	10.3	2.4		7.5YR7/3	雲母、赤色粒	乙訓在地形B群2類 墨書
147	土師器	皿	堀2123古	13.7	4.0		10YR7/4	赤色粒	乙訓在地形B群2類 墨書
148	土師器	皿	堀2123古	14.7	3.1		10YR7/4	赤色粒	乙訓在地形B群2類 墨書
149	土師器	皿	堀2123古	14.5	2.8		7.5YR7/4	雲母、赤色粒	乙訓在地形B群2類
150	土師器	皿	堀2123古	－	－		2.5Y8/2	雲母、赤色粒	乙訓在地形B群 墨書
151	土師器	皿Sh	堀2123古	6.6	1.9		2.5Y8/2		
152	土師器	皿Sh	堀2123古	7.0	1.8		2.5Y8/2		
153	瓦器	椀	堀2123古	10.4	3.6	3.7	N5/0		楠葉型
154	瓦器	椀	堀2123古	11.7	4.0	3.8	N5/0		楠葉型
155	瓦器	椀	堀2123古	12.2	3.9	4.3	N4/0		楠葉型
156	瓦器	椀	堀2123古	14.2	5.0	4.9	N4/0		楠葉型
157	瓦器	杯	堀2123古	14.0	5.0	－	N4/0		
158	瓦器	灯篭	堀2123古	－	29.0	23.4	N4/0、N5/0 2.5Y8/1		
159	焼締陶器	甕	堀2123古	46.0	82.8	46.0	5YR4/2		備前産
160	土師器	皿	堀2123新 （下層）	6.7 ～7.1	1.6		10YR7/3	雲母、赤色粒	乙訓在地形B群1類

( )は残存値、単位はcm

No.	器種	器形	遺構名	口径	器高	底径	色調	胎土	備考
161	土師器	皿	堀2123新（下層）	6.9	1.6		2.5Y7/2	雲母、赤色粒	乙訓在地形B群1類
162	土師器	皿	堀2123新（下層）	6.9	1.6		7.5YR7/4	雲母、赤色粒	乙訓在地形B群1類
163	土師器	皿	堀2123新（下層）	6.9	1.5		10YR7/3	雲母、赤色粒	乙訓在地形B群1類
164	土師器	皿	堀2123新（下層）	7.0	1.4		2.5Y7/2	雲母、赤色粒	乙訓在地形B群1類
165	土師器	皿	堀2123新（下層）	7.2	1.4		7.5YR7/4	雲母、赤色粒	乙訓在地形B群1類
166	土師器	皿	堀2123新（下層）	7.3	1.4		2.5Y7/2	雲母、赤色粒	乙訓在地形B群1類
167	土師器	皿	堀2123新（下層）	6.8～7.1	1.5		10YR7/3	雲母、赤色粒	乙訓在地形B群1類
168	土師器	皿	堀2123新（下層）	7.2	1.3		10YR7/2	雲母、赤色粒	乙訓在地形B群1類
169	土師器	皿	堀2123新（下層）	7.2	1.5		7.5YR7/3	雲母、赤色粒	乙訓在地形B群1類
170	土師器	皿	堀2123新（下層）	9.4	2.0		2.5Y7/2	雲母、赤色粒	乙訓在地形B群2類
171	土師器	皿	堀2123新（下層）	10.3	2.4		10YR7/3	雲母、赤色粒	乙訓在地形B群2類
172	土師器	皿	堀2123新（下層）	10.4	2.1		10YR7/3	雲母、赤色粒	乙訓在地形B群2類
173	土師器	皿	堀2123新（下層）	10.5	2.5		7.5YR7/4	雲母、赤色粒	乙訓在地形B群2類
174	土師器	皿	堀2123新（下層）	10.6	2.5		10YR7/2	雲母、赤色粒	乙訓在地形B群2類
175	土師器	皿	堀2123新（下層）	10.8	2.1		7.5YR7/4	雲母、赤色粒	乙訓在地形B群2類
176	土師器	皿	堀2123新（下層）	10.8	2.4		7.5YR7/4	雲母、赤色粒	乙訓在地形B群2類
177	土師器	皿	堀2123新（下層）	10.8	2.4		7.5YR7/4	雲母、赤色粒	乙訓在地形B群2類
178	土師器	皿	堀2123新（下層）	14.6	2.6		7.5YR7/4	雲母、赤色粒	乙訓在地形B群2類
179	土師器	皿Sh	堀2123新（下層）	7.3	1.6		2.5Y8/2		
180	瓦器	鍋	堀2123新（下層）	26.0	(10.6)	16.2	N5/0、2.5Y7/1		搬入品か
181	土師器	皿	堀2123新（上層）	6.7	1.5		7.5YR7/3	雲母、赤色粒	乙訓在地形B群1類
182	土師器	皿	堀2123新（上層）	7.0	1.4		2.5Y7/2	雲母、赤色粒	乙訓在地形B群1類
183	土師器	皿	堀2123新（上層）	7.2	1.6		5YR7/4	雲母、長石	乙訓在地形B群1類
184	土師器	皿	堀2123新（上層）	6.4	1.5		7.5YR7/3	雲母、赤色粒	乙訓在地形B群1類
185	土師器	皿	堀2123新（上層）	7.2	1.4		10YR6/1	雲母、赤色粒	乙訓在地形B群1類
186	土師器	皿	堀2123新（上層）	9.0	2.2		10YR7/3	雲母、赤色粒	乙訓在地形B群2類
187	土師器	皿	堀2123新（上層）	9.0	2.3		7.5YR7/4	雲母、赤色粒	乙訓在地形B群2類
188	土師器	皿	堀2123新（上層）	8.0	2.0		7.5YR7/4	雲母、長石	乙訓在地形B群2類
189	土師器	皿	堀2123新（上層）	8.8	2.2		10YR3/1	雲母	乙訓在地形B群2類
190	土師器	皿	堀2123新（上層）	8.8	1.9		7.5YR7/4	雲母、赤色粒	乙訓在地形B群2類
191	土師器	皿	堀2123新（上層）	9.0	1.9		5YR7/4	雲母、赤色粒	乙訓在地形B群2類
192	土師器	皿	堀2123新（上層）	9.2	1.7		10YR7/2	雲母	乙訓在地形B群2類

（ ）は残存値、単位はcm

No.	器種	器形	遺構名	口径	器高	底径	色調	胎土	備考
193	土師器	皿	堀2123新（上層）	12.6	2.5		7.5YR6/3	雲母、赤色粒	乙訓在地形B群2類
194	土師器	皿	堀2123新（上層）	13.8	2.6		10YR7/2	雲母、長石	乙訓在地形B群2類
195	土師器	皿S	堀2123新（上層）	9.0	2.0		7.5YR8/3		
196	土師器	皿S	堀2123新（上層）	9.2	1.5		2.5Y7/2		
197	土師器	皿S	堀2123新（上層）	11.2	2.0		2.5Y5/1		
198	土師器	皿S	堀2123新（上層）	13.4	2.1		2.5Y8/2		
199	土師器	皿S	堀2123新（上層）	13.4	2.3		2.5Y8/1		
200	土師器	皿S	堀2123新（上層）	15.2	2.5		2.5Y8/1		
201	瓦器	風炉	堀2123新（上層）	23.6	24.8	－	N3/0		
202	焼締陶器	擂鉢	堀2123新（上層）	28.7	11.9	15.1	2.5Y3/2		備前産 擂目9条1単位
203	焼締陶器	壷	堀2123新（上層）	－	－	5.1	5YR4/2		備前産
204	輸入白磁	皿	堀2123新（上層）	10.1	2.6	4.3	胎 7.5Y7/1 釉 5Y7/1	微細な黒色粒	閩湾窯系
205	輸入青磁	椀	堀2123新（上層）	14.5	6.8	6.0	胎 N8/1 釉 濁黄緑色	微細な灰白色粒	龍泉窯系
206	土師器	皿	堀2123新（上層～最上層）	6.9	1.5		7.5YR7/3	雲母、赤色粒	乙訓在地形B群1類
207	土師器	皿	堀2123新（上層～最上層）	7.0	1.6		10YR7/2	雲母、赤色粒	乙訓在地形B群1類
208	土師器	皿	堀2123新（上層～最上層）	7.2	1.3		7.5YR7/3	雲母、長石	乙訓在地形B群1類
209	土師器	皿	堀2123新（上層～最上層）	7.2	1.5		2.5Y7/2	雲母、赤色粒	乙訓在地形B群1類
210	土師器	皿	堀2123新（上層～最上層）	8.0	1.9		7.5YR7/4	雲母、赤色粒	乙訓在地形B群2類
211	土師器	皿	堀2123新（上層～最上層）	8.2	2.2		10YR7/3	雲母、赤色粒	乙訓在地形B群3類
212	土師器	皿	堀2123新（上層～最上層）	9.3	1.7		2.5Y7/2	雲母、赤色粒	乙訓在地形B群2類
213	土師器	皿	堀2123新（上層～最上層）	10.2	1.6		7.5YR7/4	雲母、長石	乙訓在地形B群2類
214	土師器	皿	堀2123新（上層～最上層）	10.6	2.6		7.5YR7/4	雲母、赤色粒	乙訓在地形B群2類
215	土師器	皿	堀2123新（上層～最上層）	13.0	2.3		5YR6/4	雲母、赤色粒	乙訓在地形B群2類
216	土師器	皿S	堀2123新（上層～最上層）	9.0	1.6		2.5Y7/3		
217	土師器	皿S	堀2123新（上層～最上層）	9.4	1.8		10YR7/2	赤色粒少	
218	土師器	皿S	堀2123新（上層～最上層）	10.0	1.6		10YR8/2		
219	瓦器	鍋	堀2123新（上層～最上層）	28.4	－		7.5Y7/1		
220	輸入白磁	皿	堀2123新（上層～最上層）	9.8	2.5	4.8	胎 10Y8/1 釉 10Y8/1	2㎜以下の黒色粒	華南沿岸窯系
221	輸入青磁	皿	堀2123新（上層～最上層）	13.4	3.1	7.7	胎 10Y8/1 釉 濁青緑色		龍泉窯系
222	輸入青磁	椀	堀2123新（上層～最上層）	12.5	6.9	5.5	胎 N7/1 釉 7.5Y7/3	微細な黒色粒	龍泉窯系
223	土師器	皿	堀2123合流部古～中	7.0	1.5		10YR7/3	雲母、赤色粒	乙訓在地形B群1類
224	土師器	皿	堀2123合流部古～中	7.2	1.6		10YR7/2	長石	乙訓在地形B群1類

( )は残存値、単位はcm

No.	器種	器形	遺構名	口径	器高	底径	色調	胎土	備考
225	土師器	皿	堀2123合流部 古～中	7.3	1.5		10YR7/3	雲母、長石	乙訓在地形B群1類
226	土師器	皿	堀2123合流部 古～中	7.8	1.9		10YR8/3	雲母、赤色粒	乙訓在地形B群1類
227	土師器	皿	堀2123合流部 古～中	7.0	1.8		2.5Y7/2	雲母、赤色粒	乙訓在地形B群1類
228	土師器	皿	堀2123合流部 古～中	7.0	1.5		5YR7/4	雲母、長石	乙訓在地形B群1類
229	土師器	皿	堀2123合流部 古～中	8.0	1.6		10YR8/2	雲母、赤色粒	乙訓在地形B群1類
230	土師器	皿	堀2123合流部 古～中	9.5	2.1		2.5Y7/3	雲母、長石	乙訓在地形B群2類
231	土師器	皿	堀2123合流部 古～中	9.6	2.2		10YR7/3	長石	乙訓在地形B群2類
232	土師器	皿	堀2123合流部 古～中	9.7	2.2		10YR7/3	雲母、長石	乙訓在地形B群2類
233	土師器	皿	堀2123合流部 古～中	10.0	2.3		7.5YR7/3	雲母、赤色粒	乙訓在地形B群2類
234	土師器	皿	堀2123合流部 古～中	10.0	2.4		7.5YR7/4	雲母、赤色粒	乙訓在地形B群2類
235	土師器	皿	堀2123合流部 古～中	10.4	2.3		10YR8/4	雲母、赤色粒	乙訓在地形B群2類
236	土師器	皿	堀2123合流部 古～中	11.2	2.2		7.5YR7/3	雲母	乙訓在地形B群2類
237	土師器	皿	堀2123合流部 古～中	13.2	2.4		10YR7/2	雲母、赤色粒	乙訓在地形B群2類
238	土師器	皿	堀2123合流部 古～中	14.2	2.2		10YR7/2	雲母、赤色粒	乙訓在地形B群2類
239	土師器	皿	堀2123合流部 古～中	14.5	2.8		2.7Y7/1	雲母、赤色粒	乙訓在地形B群2類
240	土師器	皿Sh	堀2123合流部 古～中	6.2	1.4		10YR7/3	雲母、長石	
241	土師器	皿Sh	堀2123合流部 古～中	6.4	1.6		2.5Y7/2	赤色粒	
242	土師器	皿Sh	堀2123合流部 古～中	6.5	1.6		10YR7/2	雲母、赤色粒	
243	土師器	皿Sh	堀2123合流部 古～中	6.8	1.8		10YR7/2	赤色粒	
244	土師器	皿Sh	堀2123合流部 古～中	7.2	1.7		10YR8/3		
245	土師器	皿S	堀2123合流部 古～中	14.4	2.0		7.5YR7/4		
246	瓦器	壷	堀2123合流部 古～中	2.2	4.0		N7/0		
247	瓦器	羽釜	堀2123合流部 古～中	24.8	(13.8)		2.5Y6/2		
248	瓦器	浅鉢	堀2123合流部 古～中	長径 41.6	8.9		N3/0、2.5Y7/1		
249	焼締陶器	杯	堀2123合流部 古～中	10.2	2.8	5.6	2.5YR4/3		備前産、岡山県備前市 不老山東口窯に類例
250	焼締陶器	擂鉢	堀2123合流部 古～中	30.8	12.0	13.8	10YR8/6		信楽産 擂目4条1単位
251	輸入青花	皿	堀2123合流部 古～中	10.5	2.2	6.6	胎 N8/1 釉 青白色	微細な灰白色粒	景徳鎮
252	土師器	皿	堀2123合流部 新(下層～上層)	6.7	1.5		2.5Y7/2	雲母	乙訓在地形B群1類
253	土師器	皿	堀2123合流部 新(下層～上層)	6.7	1.7		2.5Y7/2	雲母	乙訓在地形B群1類
254	土師器	皿	堀2123合流部 新(下層～上層)	6.8	1.6		10YR7/3	雲母、赤色粒	乙訓在地形B群1類
255	土師器	皿	堀2123合流部 新(下層～上層)	7.0	1.5		10YR7/2	雲母、赤色粒	乙訓在地形B群1類
256	土師器	皿	堀2123合流部 新(下層～上層)	7.2	1.5		10YR7/2		乙訓在地形B群1類

( )は残存値、単位はcm

No.	器種	器形	遺構名	口径	器高	底径	色調	胎土	備考
257	土師器	皿	堀2123合流部新(下層～上層)	7.4	1.9		10YR8/2	雲母、赤色粒	乙訓在地形B群1類
258	土師器	皿	堀2123合流部新(下層～上層)	6.7	1.2		2.5Y7/2	雲母	乙訓在地形B群1類
259	土師器	皿	堀2123合流部新(下層～上層)	7.1	1.6		7.5YR7/4	雲母、赤色粒	乙訓在地形B群1類
260	土師器	皿	堀2123合流部新(下層～上層)	7.3	1.5		10YR7/3	雲母、赤色粒	乙訓在地形B群1類
261	土師器	皿	堀2123合流部新(下層～上層)	8.4	1.8		2.5Y8/2		乙訓在地形B群1類
262	土師器	皿	堀2123合流部新(下層～上層)	8.6	1.8		10YR7/3	赤色粒	乙訓在地形B群1類
263	土師器	皿	堀2123合流部新(下層～上層)	9.0	1.5		10YR8/2	雲母、長石	乙訓在地形B群1類
264	土師器	皿	堀2123合流部新(下層～上層)	9.8	2.0		10YR7/2	雲母	乙訓在地形B群2類
265	土師器	皿	堀2123合流部新(下層～上層)	9.6	2.0		10YR7/3	雲母、赤色粒	乙訓在地形B群2類
266	土師器	皿	堀2123合流部新(下層～上層)	9.2	2.1		7.5YR7/3	雲母、赤色粒	乙訓在地形B群2類
267	土師器	皿	堀2123合流部新(下層～上層)	10.2	2.1		2.5Y8/2	雲母、長石	乙訓在地形B群2類
268	土師器	皿	堀2123合流部新(下層～上層)	10.4	2.1		7.5YR7/4	雲母、赤色粒	乙訓在地形B群2類
269	土師器	皿	堀2123合流部新(下層～上層)	9.8	2.2		10YR7/2	赤色粒	乙訓在地形B群2類
270	土師器	皿	堀2123合流部新(下層～上層)	10.2	2.4		10YR8/3	雲母、長石	乙訓在地形B群2類
271	土師器	皿	堀2123合流部新(下層～上層)	10.4	2.8		10YR7/3	雲母、赤色粒	乙訓在地形B群2類
272	土師器	皿	堀2123合流部新(下層～上層)	9.4	2.1		7.5YR7/3	雲母、赤色粒	乙訓在地形B群3類
273	土師器	皿	堀2123合流部新(下層～上層)	9.5	2.6		7.5YR7/4	雲母、赤色粒	乙訓在地形B群3類
274	土師器	皿	堀2123合流部新(下層～上層)	9.6	2.2		10YR6/3	雲母	乙訓在地形B群3類
275	土師器	皿	堀2123合流部新(下層～上層)	10.2	2.5		10YR8/2	雲母、赤色粒	乙訓在地形B群3類
276	土師器	皿	堀2123合流部新(下層～上層)	13.8	2.5		7.5YR7/4	雲母、赤色粒	乙訓在地形B群2類
277	土師器	皿	堀2123合流部新(下層～上層)	14.0	2.5		7.5YR7/4	雲母、赤色粒	乙訓在地形B群2類
278	土師器	皿	堀2123合流部新(下層～上層)	14.0	3.0		10YR8/3	雲母、赤色粒	乙訓在地形B群2類
279	土師器	皿	堀2123合流部新(下層～上層)	14.8	2.4		7.5YR7/4	雲母、赤色粒	乙訓在地形B群2類
280	土師器	皿	堀2123合流部新(下層～上層)	15.2	2.8		2.5Y8/3	雲母、赤色粒	乙訓在地形B群2類
281	土師器	皿Sh	堀2123合流部新(下層～上層)	6.8	1.6		7.5YR8/3		
282	土師器	皿Sh	堀2123合流部新(下層～上層)	7.4	1.7		2.5Y8/2		
283	土師器	皿S	堀2123合流部新(下層～上層)	14.5	2.1		7.5YR7/4		
284	土師器	皿	堀2123合流部新(最上層)	6.7	1.4		10YR7/2	雲母、赤色粒	乙訓在地形B群1類
285	土師器	皿	堀2123合流部新(最上層)	6.7	1.5		7.5YR7/3	雲母、赤色粒	乙訓在地形B群1類
286	土師器	皿	堀2123合流部新(最上層)	7.0	1.5		2.5Y7/2	雲母、赤色粒	乙訓在地形B群1類
287	土師器	皿	堀2123合流部新(最上層)	7.0	1.6		10YR7/2	雲母、赤色粒	乙訓在地形B群1類
288	土師器	皿	堀2123合流部新(最上層)	7.8	1.7		2.5Y8/2	赤色粒	乙訓在地形B群1類

（ ）は残存値、単位はcm

No.	器種	器形	遺構名	口径	器高	底径	色調	胎土	備考
289	土師器	皿	堀2123合流部新(最上層)	6.9	1.6		7.5YR7/4	雲母、赤色粒	乙訓在地形B群1類
290	土師器	皿	堀2123合流部新(最上層)	6.9	1.6		7.5YR7/4	雲母、赤色粒	乙訓在地形B群1類
291	土師器	皿	堀2123合流部新(最上層)	7.0	1.6		2.5Y7/2	雲母	乙訓在地形B群1類
292	土師器	皿	堀2123合流部新(最上層)	9.0	2.0		7.5YR7/4	雲母、赤色粒	乙訓在地形B群2類
293	土師器	皿	堀2123合流部新(最上層)	10.0	2.4		7.5YR7/4	雲母、赤色粒	乙訓在地形B群2類
294	土師器	皿	堀2123合流部新(最上層)	14.2	2.7		7.5YR7/3	雲母、赤色粒	乙訓在地形B群2類
295	土師器	皿	堀2123合流部新(最上層)	14.2	2.6		2.5Y7/2	雲母	乙訓在地形B群2類
296	土師器	皿	堀2123合流部新(最上層)	14.6	3.0		10YR7/2	雲母	乙訓在地形B群2類
297	土師器	皿S	堀2123合流部新(最上層)	9.2	1.9		10YR8/1		皿Sbか
298	土師器	皿S	堀2123合流部新(最上層)	9.2	1.6		2.5Y8/1		
299	土師器	皿S	堀2123合流部新(最上層)	13.6	2.2		10YR7/3	雲母、赤色粒	
300	土師器	皿	堀2123合流部新(最上層)	9.4	1.8		10YR7/3	雲母、赤色粒	系統不明
301	土師器	皿	堀2123合流部新(最上層)	9.6 ～10.3	2.0		10YR7/2	雲母少	系統不明 粘土紐巻き上げ法
302	瓦器	擂鉢	堀2123合流部新(最上層)	－	－	－	N4/0		
303	瓦器	擂鉢	堀2123合流部新(最上層)	－	－	9.8	N4/0、2.5Y7/1		
304	瓦器	羽釜	堀2123合流部新(最上層)	31.0	－		2.5Y7/2		
305	瓦器	羽釜	堀2123合流部新(最上層)	20.2	10.6		2.5Y5/1、2.5Y 7/2		
306	瓦器	浅鉢	堀2123合流部新(最上層)	－	－	－	N3/0、2.5Y7/1		凸帯2条、スタンプ文
307	焼締陶器	擂鉢	堀2123合流部新(最上層)	26.7	12.1	10.0	5YR5/2		備前産 擂目9条1単位
308	瓦器	羽釜	堀2123合流部新(最上層)	39.0	－		2.5Y7/2		
309	瓦器	羽釜	堀2123合流部新(最上層)	28.0	(21.2)		10YR5/1		
310	施釉陶器	折縁皿	堀2123合流部新(最上層)	10.7	2.2	5.6	胎 N8/1 釉 7.5Y7/3		瀬戸・美濃系
311	施釉陶器	丸皿	堀2123合流部新(最上層)	11.5	3.4	4.4	胎 N8/1 釉 7.5Y6/2		肥前系
312	輸入白磁	皿	堀2123合流部新(最上層)	12.1	3.0	4.7	胎 7.5Y8/1 釉 灰白色	微細な黒色粒極少	華南沿岸窯系
313	輸入白磁	杯	堀2123合流部新(最上層)	9.6	3.0	4.3	胎 7.5Y8/1 釉 10Y8/1		閩湾窯系 墨書「○と＋」
314	輸入青花	皿	堀2123合流部新(最上層)	10.6	2.3	6.5	胎 N8/1 釉 青白色	微細な灰白色粒極少	景徳鎮
315	土師器	皿	堀2299	7.6	1.3		2.5Y7/2	雲母、赤色粒	乙訓在地形A群
316	土師器	皿	堀2299	8.0	1.0		2.5Y7/2	雲母、赤色粒	乙訓在地形A群
317	土師器	皿	堀2299	8.7	1.8		10YR6/2	雲母、赤色粒	乙訓在地形A群
318	土師器	皿	堀2299	9.2	1.6		2.5Y7/2	雲母	乙訓在地形A群
319	土師器	皿	堀2299	9.8	1.9		7.5YR7/3	雲母、赤色粒	乙訓在地形A群
320	土師器	皿	堀2299	10.0	2.1		10YR7/3	雲母、赤色粒	乙訓在地形A群

（ ）は残存値、単位はcm

No.	器種	器形	遺構名	口径	器高	底径	色調	胎土	備考
321	土師器	皿	堀2299	10.2	1.6		7.5YR7/3	雲母、赤色粒	乙訓在地形A群
322	土師器	皿	堀2299	10.5	1.6		7.5YR7/4	雲母、赤色粒	乙訓在地形A群
323	土師器	皿	堀2299	10.5	1.6		10YR7/3	雲母、赤色粒	乙訓在地形A群
324	土師器	皿	堀2299	10.5	1.9		10YR7/3	雲母、赤色粒	乙訓在地形A群
325	土師器	皿	堀2299	10.6	1.9		10YR7/2	雲母、赤色粒	乙訓在地形A群
326	土師器	皿	堀2299	11.0	2.1		10YR7/3	雲母、赤色粒	乙訓在地形A群
327	土師器	皿	堀2299	7.2	1.5		10YR7/3	雲母、赤色粒	乙訓在地形B群1類
328	土師器	皿	堀2299	9.6	2.3		10YR7/4	雲母、赤色粒	乙訓在地形B群2類
329	土師器	皿	堀2299	10.8	2.5		7.5YR7/3	雲母、赤色粒	乙訓在地形B群2類
330	土師器	皿	堀2299	10.8 ～11.8	2.6		7.5YR7/3	雲母、赤色粒	乙訓在地形B群2類
331	土師器	皿	堀2299	11.0	2.4		2.5Y7/2	雲母、赤色粒	乙訓在地形B群2類
332	土師器	皿	堀2299	11.5	2.2		7.5YR7/4	雲母、赤色粒	乙訓在地形B群2類
333	土師器	皿	堀2299	15.4	2.4		2.5Y6/3	雲母、赤色粒	乙訓在地形B群2類
334	土師器	皿S	堀2299	14.2	2.7		2.5Y8/2	雲母	
335	土師器	皿S	堀2299	14.6	2.6		2.5Y7/2	雲母	
336	土師器	皿S	堀2299	14.7	2.8		2.5Y8/2	雲母	
337	土師器	皿S	堀2299	14.8 ～15.4	2.6		2.5Y8/2	雲母	
338	土師器	皿S	堀2299	14.8	2.8		2.5Y8/2	雲母	
339	土師器	皿S	堀2299	15.0	2.7		2.5Y8/2		
340	土師器	皿S	堀2299	15.1	2.7		2.5Y8/2	雲母	
341	土師器	皿S	堀2299	15.3	2.4		2.5Y8/2	雲母	
342	土師器	皿S	堀2299	15.3	3.1		2.5Y7/2		
343	土師器	皿S	堀2299	15.6	2.9		2.5Y8/2	雲母	
344	瓦器	羽釜	堀2299	29.0	-	23.0	N3/0、2.5Y8/1		
345	土師器	皿	堀2350 （下層）	7.0	1.2		2.5Y6/3	雲母	乙訓在地形A群
346	土師器	皿	堀2350 （下層）	7.0	1.5		2.5Y7/3	雲母、赤色粒	乙訓在地形B群1類
347	土師器	皿	堀2350 （下層）	7.6	1.6		10YR6/2	雲母	乙訓在地形B群1類
348	土師器	皿	堀2350 （下層）	8.2	1.9		10YR7/3	雲母、赤色粒	乙訓在地形B群2類
349	土師器	皿	堀2350 （下層）	8.6	2.0		10YR6/3	雲母	乙訓在地形B群2類
350	土師器	皿	堀2350 （下層）	9.4	2.4		5YR7/3	雲母	乙訓在地形B群2類
351	土師器	皿	堀2350 （下層）	10.0	2.5		7.5YR7/3	雲母、赤色粒	乙訓在地形B群2類
352	土師器	皿	堀2350 （下層）	10.8	2.5		7.5YR7/4	雲母、赤色粒	乙訓在地形B群2類

( )は残存値、単位はcm

No.	器種	器形	遺構名	口径	器高	底径	色調	胎土	備考
353	土師器	皿	堀2350 (下層)	12.6	(2.2)		10YR7/4	雲母	乙訓在地形B群2類
354	土師器	皿	堀2350 (下層)	14.8	(2.9)		7.5YR7/3	雲母、赤色粒	乙訓在地形B群2類
355	土師器	皿S	堀2350 (下層)	15.0	2.0		2.5Y7/1		
356	土師器	皿S	堀2350 (下層)	15.5	2.3		2.5Y7/2		
357	土師器	壷	堀2350 (下層)	8.2	5.9		2.5Y6/3	雲母、赤色粒	内面煤付着
358	輸入白磁	皿	堀2350 (下層)	9.2	2.2	4.7	胎 5Y8/1 釉 5Y8/2		閩湾窯系
359	輸入白磁	八角杯	堀2350 (下層)	8.0	3.0	3.2	胎 N8/0 釉 N8/0	微細な黒色粒	邵部窯系
360	土師器	皿	堀2350 (上層)	6.8	1.4		7.5R7/4	雲母、赤色粒	乙訓在地形B群1類
361	土師器	皿	堀2350 (上層)	6.9	1.6		2.5Y7/2		乙訓在地形B群1類
362	土師器	皿	堀2350 (上層)	7.6	1.8		10YR7/2	雲母、赤色粒	乙訓在地形B群1類
363	土師器	皿	堀2350 (上層)	8.0	1.7		7.5YR7/5	雲母、赤色粒	乙訓在地形B群1類
364	土師器	皿S	堀2350 (上層)	7.8	1.6		2.5Y7/2		
365	土師器	皿S	堀2350 (上層)	8.8	1.8		2.5Y7/2		
366	土師器	皿S	堀2350 (上層)	9.1 ～9.5	1.8		2.5Y8/1		
367	土師器	皿S	堀2350 (上層)	11.3	2.1		7.5YR7/4		
368	瓦器	羽釜	堀2350 (上層)	24.2	－	－	2.5Y7/1		
369	施釉陶器	天目椀	堀2350 (上層)	11.5	5.9	4.2	胎 N8/2 釉 7.5YR2/1	0.5㎜以下の長石	瀬戸・美濃系
370	施釉陶器	皿	堀2350 (上層)	15.0	2.9	8.5	胎 N8/1 釉 5Y6/4	1㎜以下の石英、長石、 チャート、赤色粒	瀬戸・美濃系 内禿皿
371	施釉陶器	皿	堀2350 (上層)	11.3	3.5	4.7	胎 10YR7/3 釉 2.5Y7/2		肥前系
372	輸入青磁	椀	堀2350 (上層)	13.8	7.4	5.0	胎 N5/0 釉 5GY5/1		龍泉窯系
373	瓦器	小型浅鉢	第1面整地層	10.8	5.2	－	N4/0		外面に花文のスタンプ
374	施釉陶器	皿	第1面整地層	11.0	6.6	4.5	胎 7.5YR7/4 釉 7.5Y7/1	0.5㎜以下の長石、黒色粒	肥前系
375	施釉陶器	杯	第1面整地層	7.6	4.1	3.1	胎 2.5Y7/1 釉 2.5Y6/2	1㎜以下の石英、長石	肥前系
376	施釉陶器	椀	第1面整地層	11.0	6.6	4.5	胎 7.5YR7/4 釉 7.5Y7/1	0.5㎜以下の長石、黒色粒	肥前系
377	施釉陶器	天目椀	第1面整地層	10.9	7.1	3.5	胎 2.5Y8/2 釉 7.5YR3/2	1㎜以下の石英、長石、 チャート	瀬戸系
378	輸入陶器	皿	第1面整地層	15.4	4.8	5.0	胎 N7/0 釉 10Y7/2	1㎜以下の長石、チャート、黒色粒	灰青沙器、内面に目跡、高台内にケズリ痕
379	輸入陶器	皿	第1面整地層	13.8	4.0	2.8	胎 7.5YR7/3 釉 2.5Y7/2	1㎜以下の石英、長石、 チャート、黒色粒	灰青沙器、内面に目跡、高台内にケズリ痕
380	施釉陶器	皿	地業2010	13.2	3.9	2.0	胎 2.5Y8/2 釉 2.5Y6/2		
381	土師器	皿	護岸2125	6.8	1.6		10YR7/3	石英、長石、雲母、赤色粒	乙訓在地形B群1類
382	土師器	皿Sb	護岸2125	9.5	2.0		7.5YR8/3	石英、長石、雲母	
383	土師器	皿S	護岸2125	12.6	1.9		5YR7/6	石英、長石、チャート、 赤色粒	
384	焼締陶器	筒形香炉	護岸2125	13.5	9.1	11.2	N7/0	1㎜以下の長石	信楽系

（ ）は残存値、単位はcm

No.	器種	器形	遺構名	口径	器高	底径	色調	胎土	備考
385	焼締陶器	擂鉢	護岸2125	22.5	8.4	11.6	2.5Y6/6	石英、長石、赤色粒	伊賀
386	施釉陶器	皿	護岸2125	12.8	2.4	4.1	胎 2.5Y7/2 釉 10YR7/3		肥前系
387	施釉陶器	壷	護岸2125	－	－	5.6	胎 10YR6/3 釉 7.5Y7/1		肥前系
388	染付磁器	椀	護岸2125	11.1	7.2	4.3	胎 N9/0 釉 5GY8/1		肥前系
389	染付磁器	椀	護岸2125	10.9	5.1	4.1	胎 N8/0 釉 呉須		肥前系
390	染付磁器	椀	護岸2125	11.7	7.4	4.5	胎 N9/0 釉 10GY8/1		肥前系
391	染付磁器	椀	護岸2125	11.4	7.7	4.2	胎 N9/0 釉 呉須		肥前系
392	染付磁器	椀	護岸2125	10.0	5.4	3.7	胎 N9/0 釉 呉須		肥前系
393	染付磁器	皿	護岸2125	－	－	8.0	胎 N8/0 釉 7.5YR4/2	0.5㎜以下の黒色粒	肥前系
394	土師器	皿S	溝2140	10.7	2.3		10YR7/3	微細な長石	
395	土師器	皿S	溝2140	10.7	2.4		2.5Y7/3	花崗岩片、赤色粒	
396	焼締陶器	擂鉢	溝2140	21.3	9.1	11.4	10Y7/1	石英、長石	信楽系 擂目5条1単位
397	施釉陶器	椀	溝2140	12.3	7.4	4.7	胎 5Y8/1 釉 7.5Y8/2		信楽系 端反口縁、削出高台
398	施釉陶器	鉢	溝2140	11.7	8.1	8.9	胎 7.5Y6/1 釉 10YR5/4	石英、長石	信楽系 火皿か
399	施釉陶器	片口鉢	溝2140	10.2	6.7	5.8	胎 7.5Y7/1 釉 5YR4/4		
400	染付磁器	天目椀	溝2140	11.1	7.2	5.0	胎 N8/0 釉 5GY8/1		肥前系
401	白磁	椀	溝2140	11.2	7.6	4.9	胎 蛋白色 釉 青白色		肥前系
402	染付磁器	椀	溝2140	11.1	5.9	4.2	胎 2.5GY8/1 釉 10Y7/1	微細な黒色粒	肥前系
403	染付磁器	皿	溝2140	12.4	3.6	4.4	胎 N8/0 釉 N7/0	微細な黒色粒	肥前系
404	焼締陶器	擂鉢	井戸2001	37.9	14.3	20.8	5YR5/3	石英、長石、チャート	堺・明石系
405	施釉陶器	蓋物身	井戸2001	8.5	4.6	5.6	胎 N9/0 釉 7.5Y8/1		京・信楽系
406	施釉陶器	銚子	井戸2001	6.6	15.5	7.0	胎 5Y8/1 釉 5Y7/1		京・信楽系
407	施釉陶器	急須	井戸2001	－	－	－	胎 5Y8/1 釉 5Y8/2	長石、チャート	瀬戸・美濃系
408	白磁	椀	井戸2001	8.7	5.5	3.2	胎 N9/0 釉 10Y8/1		肥前系
409	染付磁器	椀	井戸2001	8.5	4.3	3.3	胎 N9/0 釉 5GY8/1		肥前系
410	染付磁器	皿	井戸2001	14.5	3.5	8.6	胎 N9/0 釉 呉須		肥前系
411	施釉陶器	刷毛目皿	井戸2001	－	－	12.4	胎 2.5Y6/1 釉 2.5Y8/3		肥前系
412	染付磁器	鶴首壷	井戸2001	1.7	13.0	4.6	胎 N9/0 釉 5GY8/1		肥前系
413	輸入磁器	色絵椀	地業2135	－	－	－	胎 N8/0 釉 透明釉		景徳鎮、「群中十錦」

付表２　瓦類一覧表

No.	種類	出土遺構	瓦当文様の特徴	成形技法の特徴	時期・同笵・同文等
瓦1	軒丸瓦	井戸2225	右巻三巴文。頭部は離れ、尾部は長く互いに接して界線となる。巴文の上面は平坦。外区に密な珠文。周縁は素文直立縁。	瓦当裏面溝付丸瓦挿入成形。瓦当側面上半オサエと横ナデ、裏面ナデ。裏面はやや平坦。丸瓦凸面縦ナデ、凹面ナデ、側面縦ナデ。	12世紀。播磨。『林崎三本松瓦窯跡群報告書』NM41と同文。
瓦2	軒丸瓦	井戸2225	右巻三巴文。頭部は離れ、尾部は互いに接して界線となる。巴文の上面は平坦。外区に密な珠文。周縁は素文直立縁。外区界線径は7.3㎝。	瓦当裏面溝付丸瓦挿入成形。瓦当側面下半横ナデ、裏面横方向ナデ。裏面はやや平坦。笵はB型。	12世紀。播磨。『林崎三本松瓦窯跡群報告書』NM41と同文。
瓦3	軒丸瓦	堀2123（下層）	右巻三巴文。頭部は離れ、尾部は短く互いに接して界線となる。巴文の上面は丸い。密な珠文26。周縁は素文直立縁。瓦当面に離れ砂付着。笵キズあり。界線φ6.7㎝。	瓦当部裏面溝付き丸瓦挿入成形。瓦当側面上半縦ナデ、下半横ナデ、裏面ナデ。裏面は平坦で側面と稜あり。	鎌倉時代。
瓦4	軒丸瓦	堀2123（上層）	左巻三巴文。頭部は離れ、尾部は短く互いに接して界線となる。巴文の上面は丸い。密な珠文14、間隔が不均等。周縁は素文直立縁。瓦当面に笵キズ多い。界線φ6㎝。	瓦当成形不明。瓦当側面上半縦ナデ、下半横ナデ、裏面ナデで下半横方向ナデ。裏面は平坦で、側面と稜が付く。行基丸瓦で端部はすぼまる。丸瓦との段なし。丸瓦凸面縦ナデ、凹面布目で一部縦ナデ、側面縦ケズリ後縦ナデ。端部内面横ケズリ、側面切り取る。端面横ナデ。	鎌倉時代。
瓦5	軒丸瓦	堀2123（最上層）	同上。	瓦当成形不明。瓦当側面上半縦ナデ、下半横ナデ、裏面ナデで下半横方向ナデ。裏面は平坦で、側面と稜が付く。丸瓦凸面縦ナデ、凹面布目、側面縦ケズリ。胎土は砂粒を多く含み、灰白色、硬質。外面燻して黒灰色。	鎌倉時代。瓦4と同笵。拓影のみ。
瓦6	軒丸瓦	堀2350	右巻三巴文。頭部は離れ、尾部は互いに接する所とそうでない。巴文の上面は丸い。密な珠文。周縁は素文直立縁。瓦当面に離れ砂付着。	瓦当成形不明。瓦当側面上半横デ、裏面ナデで周辺強くなでる。裏面は平坦。丸瓦凸面縦ナデ後部分的に縦ミガキ、凹面ナデ。側面縦ケズリ。胎土は砂粒を多く含み、黄灰白色、硬質。	鎌倉時代。
瓦7	軒平瓦	井戸2225（掘形）	巴剣頭文。巴文を3単位配し、間に剣頭文2単位を配す。巴文は陽刻で、右巻きで頭・尾は離れる。剣頭文は陰刻で垂直配置。瓦当面に布目残存。平瓦部凸面ヘラ記号か。	段顎。瓦当部折曲成形。瓦当部上縁横ケズリ、凸面縦縄タタキ、裏面縦縄タタキ後オサエ。裏面頸部に曲げ皺あり。凹型台痕跡なし。平瓦凹面布目、凸面縦縄タタキ、側面縦ケズリ後縦ナデ。	12世紀。山城産。『平成28年度 指定準備業務報告書 附編』KH5-Aと同文。尊勝寺296型式。
瓦8	軒平瓦	井戸2225（掘形）	外行唐草文。中心文は下向きC字形。唐草は連続し、左3転・右7転。支茎は2本・3本単位で両側に展開。唐草先端はやや巻き込む。周縁は素文直立縁で、下・右・左部分にあり。	段顎。瓦当部折曲成形。瓦当部上縁横ケズリ、凸面縦縄タタキ、裏面オサエ。裏面頸部に曲げ皺あり。凹型台痕跡なし。平瓦凹面布目、凸面斜方向縄タタキ、側面縦ケズリ後縦ナデ、端面ナデ。	12世紀。山城産。『平成28年度 指定準備業務報告書 附編』KH1と同笵。尊勝寺〔奈文研〕179型式。
瓦9	軒平瓦	井戸2225（掘形）	陰刻剣頭文。剣頭文は単弁形で7単位、配置は垂直である。幅の差が大きい。右から3番目の子葉は曲がる。瓦当面に布目残存。平瓦部凸面ヘラ記号。	段顎。瓦当部折曲成形。瓦当部上縁横ケズリ、凸面横ナデ、裏面オサエナデ。裏面頸部に布目残存、曲げ皺あり。凹型台痕跡なし。平瓦凹面布目、凸面オサエ後横ナデ、側面縦ケズリ後縦ナデ、端面横ナデ。	12世紀。山城産。同笵計3点。
瓦10	軒平瓦	井戸2225（掘形）	同上。	同上。	12世紀。山城産。瓦9と同笵。拓影のみ。
瓦11	軒平瓦	井戸2225（掘形）	陰刻剣頭文。剣頭文は単弁形で8単位、配置は垂直である。平瓦後部中央に釘穴あり。瓦当面に布目残存。笵キズあり。	段顎。瓦当部折曲成形。瓦当部上縁横ケズリ、凸面縦縄タタキ、裏面オサエ。裏面頸部に曲げ皺あり。凹型台痕跡なし。平瓦凹面布目後部分的にナデ、凸面縦縄タタキ、側面縦ケズリ、端面横ナデ。端面に砂粒付着。	12世紀。山城産。『平成28年度 指定準備業務報告書 附編』KH8型式。尊勝寺〔奈文研〕291型式。
瓦12	軒平瓦	井戸2225（掘形）	外行唐草文。唐草は連続し、主茎は大きく反転し、子径は強く巻き込む。外区にやや太い界線配す。周縁は素文で下部のみ確認。瓦当面に布目残存。	曲線顎。瓦当部成形不明。瓦当部凸面～平瓦凸面に連続して、斜方向縄タタキ。平瓦凹面布目、側面縦ケズリ。	12世紀。讃岐産。『発掘調査概報2001-7』図版37-364と同文。
瓦13	軒平瓦	井戸2100	唐草文。外区は界線、珠文。周縁は素文直立縁。	瓦当部折曲成形。瓦当部凹面布目、顎凸面横タタキ、裏面縦タタキ。平瓦凹面布目、凸面縦縄タタキ。	12世紀。丹波。
瓦14	軒平瓦	堀2123（下層）	外行唐草文。中心文不明。唐草主茎はゆるやかに反転し、支茎は巻き込む。周縁は素文直立縁。	瓦当成形不明。瓦当凹面布目、顎凸面横ナデ、裏面ナデ。	鎌倉時代。
瓦15	軒平瓦	堀2123（最上層）	外行唐草文。中心文不明。唐草は分離。唐草主茎は緩やかに反転し、先端はやや膨らむ。周縁は素文直立縁。瓦当面に離れ砂付着。	顎貼り付け成形。段顎。瓦当凹面布目、顎凸面横ナデ、裏面横ナデ。頸部凹型台圧痕あり。	鎌倉時代。『東福寺防災施設工事発掘調査報告書』瓦56と類似。
瓦16	軒平瓦	堀2123（最上層）	内行唐草文。唐草は不連続。支葉二重で内側に3転開。中心文は蓮華文。瓦当面に離れ砂付着。	瓦当貼り付け技法。瓦当凹面横ナデ、顎凸面横ナデ、裏面ナデ頸部凹型台圧痕あり。平瓦凹面縦ナデ平滑、凸面ナデ、側面縦ナデ。	鎌倉時代。『発掘調査報告2018-10』図版82-瓦44、『発掘調査報告2015-17』図版54-瓦226と同文。

No.	種類	出土遺構	瓦当文様の特徴	成形技法の特徴	時期・同笵・同文等
瓦17	軒平瓦	堀2350	外行唐草文。中心文は下向きU字形。唐草文は両側に反転し、左側7単位。主葉は分離し反転し、先端は二葉に分かれる。外区は界線。周縁は素文直立縁。	瓦当顎貼り付け成形。瓦当上面は平瓦凹面側の布目が連続する。顎凸面横ナデ、裏面横ナデ、頸部強く横ナデ。頸部後ろに凹型台圧痕あり。平瓦凹面布目部分的にナデて平滑にする。凸面縦ナデ、側面縦ケズリ後縦ナデ。表面は燻して黒灰色。	鎌倉時代。
瓦18	軒平瓦	堀2123（最上層）	外行唐草文。中心文は下向き三葉文。唐草は連続し2転。唐草主茎は大きく反転し、支茎は巻き込み、先端はやや膨らむ。周縁は素文直立縁。	段顎。瓦当貼り付け成形。瓦当部上縁横ナデ、顎凸面横ナデ、裏面横ナデ。裏面頸部にオサエ後横ナデ。凹型台痕跡なし。平瓦凹面不定方向ナデで平滑。縦ナデで平滑、側面縦ナデ。	鎌倉時代～室町時代。
瓦19	軒平瓦	撹乱	外行唐草文。中心文は下向き3単位桐。唐草主茎は分離し、左右に反転。唐草は強く巻き込み、先端は太くなる。周縁は素文直立縁で、右脇が広くなる。	段顎。顎貼り付け成形。瓦当凹面横ナデ、顎凸面縦ナデ、裏面横ナデ、頸部強く横ナデ。平瓦凹面ナデ、凸面オサエナデ。	安土桃山時代。『平成7年度 調査概要』図版12-12に類似。
瓦20	軒平瓦	地業2135	外行唐草文。中心文は花文。唐草主茎は分離し、左右に3回反転。唐草は緩やかに反転し、先端は強く巻き込み太くなる。唐草支茎先端はY字形に分かれる。周縁は素文直立縁。	顎貼り付け成形。瓦当凹面横ナデで平滑、顎凸面横ナデ、裏面横ナデ。 頸部凹型台圧痕あり。表面は燻して黒灰色。	江戸時代。
瓦21	軒平瓦	地業2135	外行唐草文。中心文は花文。唐草主茎は分離し、左右に反転。唐草は緩やかに反転し、先端は強く巻き込み太くなる。唐草支茎先端はY字形に分かれる。周縁は素文直立縁で、左脇が広くなる。	段顎。顎貼り付け成形。瓦当凹面横ナデ、顎凸面横ナデ、裏面横ナデ。平瓦凹面ナデで平滑、凸面ナデ。表面は燻して黒灰色。	江戸時代。
瓦22	菊丸瓦	現代盛土	単弁16弁蓮華文。中房は半球状。外区なし。周縁は素文直立縁。	瓦当部裏面丸瓦貼付成形。瓦当側面横ナデ、裏面横方向ナデ。裏面は平坦で側面と稜あり。表面は燻して黒灰色。	江戸時代。
瓦23	鳥衾瓦	地業2135	右巻三巴文。頭部は離れ、尾部は短く互いに離れる。巴文の上面は丸い。外区に粗い珠文。周縁は素文直立縁でやや広い。	瓦当部裏面丸瓦貼り付け成形。瓦当側面上半横ナデ、下半縦ナデ、裏面上半ナデ。丸瓦凸面縦ナデ、凹面ナデ。表面は燻して黒灰色。	江戸時代。
瓦24	軒桟瓦	井戸2001（枠内）	外行唐草文。中心文は花文。唐草主茎は分離し、左右に反転。唐草は緩やかに反転し、先端は強く巻き込む。唐草支茎先端はY字形に分かれる。周縁は素文直立縁で、右脇が広くなる。平瓦左側は屈曲して桟部となる。	段顎。瓦当貼り付け成形。瓦当凹面横ナデ、顎凸面横ナデ、裏面横ナデ。平瓦凹面横ナデで平滑、凸面横ナデ、桟部縦ナデ。表面は燻して黒灰色。	江戸時代。『近世瓦の研究』第128図-7と同文。
瓦25	軒桟瓦	井戸2001（枠内）	外行唐草文。中心文は三葉文。唐草は分離する。唐草主茎は緩やかに反転し、先端はやや膨らむ。周縁は素文直立縁。平瓦左側が屈曲する。左側桟部に右巻三巴文。頭部は分離し尾部は互いに接して界線となる。外区は珠文、周縁は素文直立縁。瓦当面にキラコ付着。	段顎。瓦当貼り付け成形。瓦当凹面縦ナデ、顎凸面横ナデ、裏面横ナデ。平瓦凹面縦ナデで平滑、凸面横ナデ、桟部縦ナデ。表面は燻して黒灰色。	江戸時代。『近世瓦の研究』第127図-1と同文。
瓦26	軒桟瓦	井戸2138	外行唐草文。唐草は分離する。唐草主茎は緩やかに反転する。周縁は素文直立縁。右脇が広く、刻印がある。瓦当面にキラコ付着。	段顎。瓦当凹面横ナデ、顎凸面横ナデ、裏面横ナデ。表面は暗灰色。	江戸時代。
瓦27	板塀瓦	地業2135	左偏行唐草文。唐草主葉は連続して大きく展開し、先端は巻き込む。支葉は房状となる。周縁は素文直立縁で、上部のみあり。瓦当部右端部と下端部は文様なりに成形。文様はヘラで片切り彫りとする。	瓦当部裏面中位に平瓦貼付成形。瓦当部上端にはばの狭い粘土板を接合し、平瓦と一体化する。瓦当部上面横ナデ、裏面横ナデ。表面は燻して黒灰色。	江戸時代。
瓦28	丸瓦	井戸2225	玉縁丸瓦。灰白色で堅緻、砂粒少ない。	丸瓦凸面横ナデ・縦方向並行タタキ。凹面糸切り・布目の痕跡あり。両側面は縦ケズリ。広端面内側・外側とも面取りケズリ。玉縁の凸面・狭端面横ナデ。	12世紀。播磨。
瓦29	丸瓦	井戸2225	玉縁丸瓦。灰白色で堅緻、砂粒少ない。	丸瓦凸面横ナデ・縦方向並行タタキ。凹面糸切り・布目の痕跡あり。両側面内縁を面取り・縦ケズリ。	12世紀。播磨。

文献
『明石市文化財調査報告6：林崎三本松瓦窯跡群発掘調査報告書』 明石市文化・スポーツ部文化振興課 2017年
『平成28年度 京都市埋蔵文化財出土遺物文化財指定準備業務報告書 鳥羽離宮金剛心院跡出土品』附編 京都市文化市民局 2017年
『平成7年度 京都市埋蔵文化財調査概要』 財団法人京都市埋蔵文化財研究所 1997年
『東寺（教王護国寺）旧境内』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査概報2001-7 財団法人京都市埋蔵文化財研究所 2001年
『円勝寺跡・成勝寺跡・白河街区跡・岡崎遺跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告2015-17 公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所 2016年
『平安京左京六条二坊九町跡・烏丸綾小路遺跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告2018-10 公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所 2019年
『東福寺防災施設工事・発掘調査報告書』 東福寺 1990年
『平城宮跡第一次・伝飛鳥板蓋宮跡発掘調査報告』附尊勝寺跡発掘調査報告 奈良文化財研究所学報第10冊 奈良文化財研究所 1961年
『近世瓦の研究』 奈良文化財研究所学報第78冊 奈良文化財研究所 2008年

付表３　木製品一覧表

（　）は残存値、単位はcm

No.	器種	器形	遺構名	口径	器高	底径	長	幅	厚	備考
木1	木製品	漆器椀	堀2299	－	(4.2)	5.7				ゆがみ大
木2	木製品	漆器椀	堀2350	－	(2.7)	7.8 程度				
木3	木製品	漆器椀	堀2350新段階 （上層）	14.0	9.6	7.4				高台内線刻
木4	木製品	漆器杯	堀2123新段階 （上層）	8.8	2.5	5.3				
木5	木製品	漆器杯	堀2123新段階 （上層～最上層）	9.0	5.8	2.5				
木6	木製品	漆器椀	堀2123合流部	－	(4.0)	6.8 程度				
木7	木製品	漆器椀	堀2123新段階 （下層）	－	(3.5)	7.0 程度か				
木8	木製品	漆器椀	堀2123新段階 （上層）	12.6	5.8	7.2				
木9	木製品	漆器椀	井戸2001 石組内	10.6	3.7	－				
木10	木製品	漆器椀	溝2140	11.3	6.2	4.0				
木11	木製品	漆器椀	溝2140	－	(6.5)	－				
木12	木製品	漆器椀	溝2140	－	(6.3)	－				ゆがみくずれ大
木13	木製品	下駄	堀2123合流部				(19.2)	(8.6)	2.3	
木14	木製品	下駄	堀2123新段階 （上層）				20.4	8.0	4.1	
木15	木製品	下駄	堀2123新段階 （上層）				15.0	5.9	2.4	
木16	木製品	下駄	溝2140				21.3	8.5 ～7.1	7.3	
木17	木製品	下駄	溝2140				21.7	8.5 ～8.0	6.9	後の歯ワレ
木18	木製品	下駄	溝2140				21.5	7.4	2.4	
木19	木製品	箸	井戸2225				(21.5)	0.6	0.5	
木20	木製品	箸	堀2350				24.2	0.6	0.7	
木21	木製品	箸	堀2350				20.7	0.5	0.65	
木22	木製品	箸	堀2123				23.7	0.7	0.6	
木23	木製品	箸	堀2123				23.4	0.6	0.5	
木24	木製品	箸	堀2123				21.1	0.8	0.7	
木25	木製品	箸	堀2123				(19.1)	0.7	0.5	
木26	木製品	箸	堀2123				(20.4)	0.6	0.7	
木27	木製品	箸	堀2123				19.0	0.6	0.5	
木28	木製品	櫛	井戸2001				5.2	(5.2)	0.9	
木29	木製品	櫛？	堀2123				(9.7)	2.8	0.5	
木30	木製品	木球	堀2123新段階 （上層）				縦5.1	横4.9	高4.1	
木31	木製品	曲物	井戸2225							
木32	木製品	曲物	井戸2225							
木33	木製品	鋤	堀2123合流部				(61.4)	9.9	5.7	
木34	木製品	卒塔婆	堀2299				(28.3)	6.5	0.7	
木35	木製品	卒塔婆	堀2123 あげ土				(50.5)	7.6	0.9	
木36	木製品	卒塔婆	堀2350古段階 （下層）				58.5	7.0	1.2	「永禄十年」の紀年銘あり
木37	木製品	卒塔婆	堀2350古段階 （下層）				(49.7)	(7.9)	0.8	

( )は残存値、単位はcm

No.	器種	器形	遺構名	口径	器高	底径	長	幅	厚	備考
木38	木製品	卒塔婆	堀2123合流部 新段階				(55.3)	5.8	0.3～ 0.4	「元亀二年」の紀年銘あり
木39	木製品	卒塔婆	堀2123合流部				57.7	7.9	0.6	「永禄十一年」の紀年銘あり
木40	木製品	卒塔婆	堀2123新段階 (上層)				51.1	(5.9)	0.6	
木41	木製品	卒塔婆	堀2123新段階 (上層)				(65.7)	7.8	0.8	
木42	木製品	卒塔婆	堀2123合流部				70.8	6.7	1.0	
木43	木製品	卒塔婆	堀2123合流部				(69.0)	8.1	0.8	
木44	木製品	卒塔婆	堀2123合流部				65.0	7.0	1.0	

付表４　石製品一覧表

( )は残存値、単位はcm

No.	器種	器形	遺構名	口径	器高	底径	長	幅	厚	重量(g)	石材	備考
石1	石製品	磨製石器	土坑2440				(12.8)	6.5	1.3	166.9	粘板岩	竪穴建物2400のものと接合
石2	石製品	磨製石剣	土坑2492				(4.5)	(3.1)	0.5		粘板岩	
石3	石製品	扁平片刃 石斧	土坑2492				5.7	1.5	0.7	7.2	粘板岩	
石4	石製品	磨製石鏃	2区第5面・ X期　基盤層				(2.7)	(1.5)	0.4	1.3	粘板岩	
石5	石製品	剥片	竪穴建物2400				1.7	3.1	1.6	10.6	緑色凝灰岩	
石6	石製品	剥片	井戸2178				1.6	1.8	1.1	2.7	緑色凝灰岩	
石7	石製品	剥片	落込2440				2.6	1.4	0.3	14.0	サヌカイト	
石8	石製品	剝片	落込2392				3.5	4.8	0.6	9.0	サヌカイト	
石9	石製品	石鍋	堀2123	－	(7.8)	－				335.5	滑石	
石10	石製品	石鍋	堀2123	－	(7.0)	－				211.6	滑石	
石11	石製品	石鍋	井戸2225	－	(6.0)	－				201.5	滑石	
石12	石製品	硯	2区第1面・ Ⅰ期　整地層				13.6	5.7	1.5	163.9	粘板岩系	
石13	石製品	砥石	地業2135				(7.5)	1.6	1.6	32.1	粘板岩系	
石14	石製品	砥石	堀2350				4.8	2.8	0.9	22.8	粘板岩系	
石15	石製品	砥石	堀2123				(9.9)	3.3	1.0	58.5	粘板岩系	
石16	石製品	砥石	堀2123				(10.5)	3.8	1.7	103.6	粘板岩系	
石17	石製品	砥石	井戸2001 石組内				17.4	6.5	－	611.5	粘板岩系	
石18	石製品	砥石	2区第2面・ Ⅱ期　整地層				12.0	3.2	2.2	146.2	粘板岩系	
石19	石製品	石臼(上臼)	井戸2100 石組内						11.6	4.5kg	花崗岩	径 推定26.0cm
石20	石製品	石臼(下臼)	護岸2125 裏込				縦 (20.5)	横 (22.9)	10.9		花崗岩	
石21	石製品	不明石製品	井戸2001 石組内				(23.6)	18.1	7.8	5.0kg	花崗岩	
石22	石製品	台座	井戸2001 石組内				29.6	33.6	15.7	29.0kg	花崗岩	
石23	石製品	五輪塔	護岸2125				25.8	25.8	21.0	19.0kg	花崗岩	
石24	石製品	五輪塔	地業2012				23.5	23.7	17.5	12.5kg	花崗岩	

付表５　土製品一覧表

単位はcm

No.	器種	遺構名	幅	長	孔径	重量(g)	色調	胎土	備考
土1	不明土製品	堀2350	3.6	3.5	-	32.5	2.5Y8/2		
土2	土錘	溝2090	1.1	4.5	0.2	3.7	2.5Y6/1		
土3	土錘	堀2123	1.8	2.6	0.6	5.5	7.5R6/2		
土4	土錘	堀2123	3.6	3.1	1.5	30.6	7.5YR7/2		
土5	土錘	堀2123	3.7	3.3	1.5	34.8	7.5YR7/4	赤色粒、金雲母	
土6	土錘	流路1017	5.3	4.5	2.1	61.9	7.5YR7/4		
土7	土錘	堀2123	4.1	5.5	1.5	64.1	7.5YR6/3	赤色粒、長石	
土8	土錘	堀2123	4.3	5.7	1.5	39.3	7.5YR7/3	赤色粒、金雲母	

付表６　金属製品一覧表

(　)は残存値、単位はcm

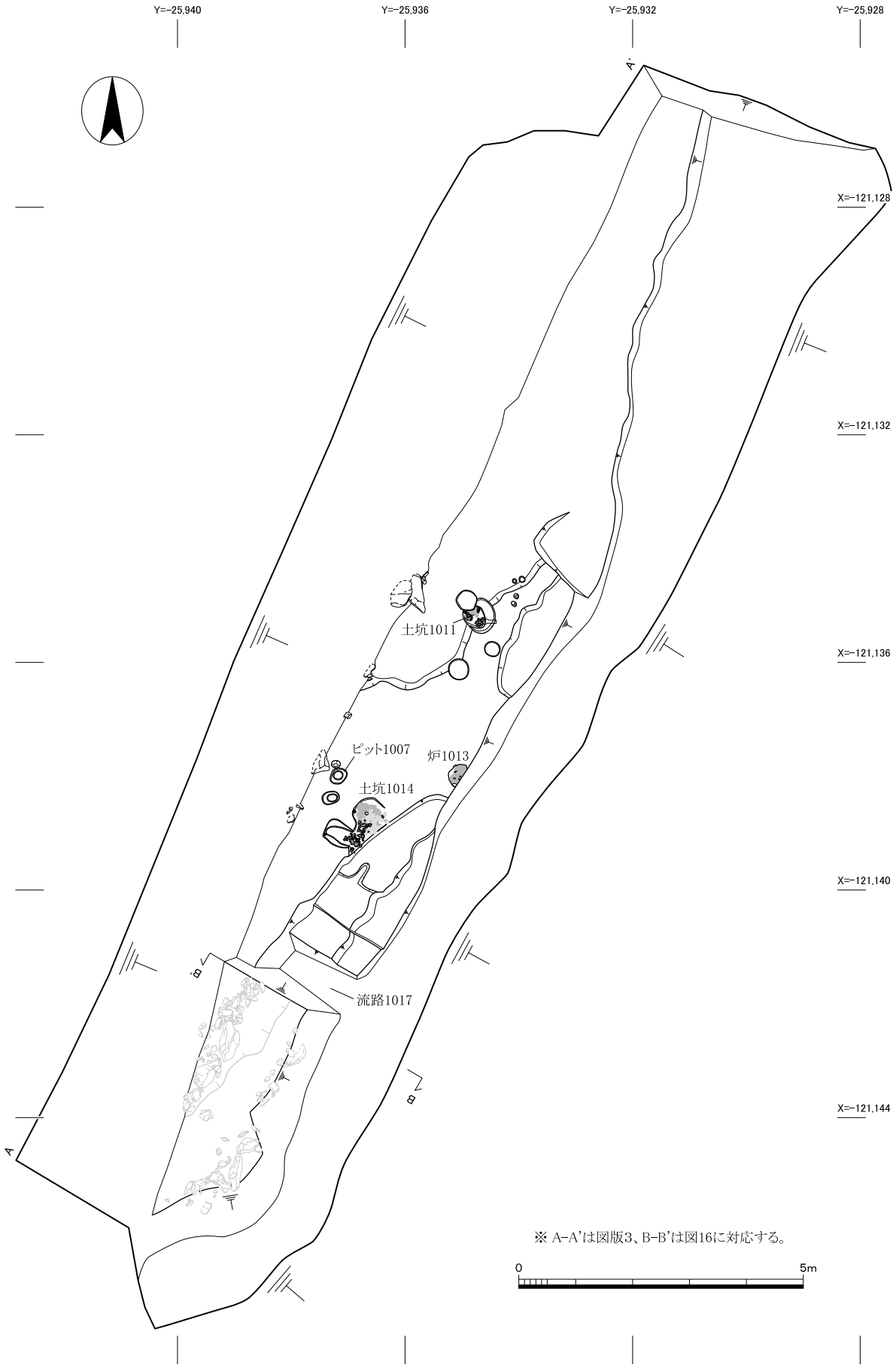
No.	種類	器種	遺構名	長	幅	厚	重量(g)	備考
金1	鉄製品	鉄鏃	竪穴建物2400	5.7	2.2	0.7	8.3	
金2	銅製品	不明	撹乱	2.5	2.5	0.5	16.6	
金3	鉄製品	鍋か鉢	堀2123	(8.6)	(6.5)	(3.9)	90.5	
金4	鉄製品	蓋	堀2123	5.0	6.1	2.7	103.7	
金5	鉄製品	釘	堀2123	6.4	1.5	5.0	7.0	
金6	鉄製品	釘	堀2123	7.1	1.5	0.4	5.4	
金7	銅製品	煙管 雁首	護岸2125	6.6	1.4	3.0	6.3	
金8	銅製品	煙管	重機掘削 (護岸2125周辺)	6.2	1.9	1.1	19.8	
金9	銅製品	煙管	護岸2125	6.4	1.4	0.5	5.7	
金10	銅製品	紐金具	護岸2125	2.0	1.2	0.4	1.1	
金11	銅製品	飾金具	護岸2125	2.2	3.5	0.5	3.8	
金12	金属製品	鉛玉	護岸2125	1.6	1.4	1.3	13.7	未製品か？
金13	金属製品	鉛玉	護岸2125	1.3	1.3	1.3	13.2	
金14	金属製品	鉛玉	護岸2125	1.6	1.5	1.6	19.5	錘か
金15	銅製品	挟	護岸2125	4.9	1.3	1.4	8.3	
金16	銅製品	鋲	護岸2125	2.1	0.5	0.2	0.6	
金17	銅製品	鋲	護岸2125	3.8	0.9	0.3	3.8	
金18	銅製品	目釘	護岸2125	4.6	0.8	(0.8)	1.2	
金19	鉄製品	不明	護岸2125	4.9	7.0	1.6	115.2	
金20	銅製品	不明	護岸2125	9.3	0.4	0.2	2.4	
金21	銅製品	火箸	護岸2125	31.5	0.6	0.6	40.5	

付表７　銭貨一覧表

（　）は残存値、単位はcm

No.	種類	遺構名	縦	横	厚	重量(g)	初鋳年	備考
銭1	至道元寶	2区第1面・Ⅰ期 整地層	2.50	2.48	0.12	2.31	995	
銭2	咸平元寶	撹乱	2.48	2.50	0.12	3.36	998	
銭3	祥符通寶	堀2123	2.50	2.48	0.14	4.00	1009	
銭4	祥符元寶	堀2123	2.50	2.50	0.10	2.96	1009	
銭5	景祐元寶	溝2180	2.55	(1.90)	0.15	1.63	1034	
銭6	景祐元寶	堀2123	2.48	2.50	0.11	3.05	1034	
銭7	皇宋通寶	護岸2125	2.40	2.40	0.12	2.28	1038	
銭8	皇宋通寶	堀2123	2.50	2.48	0.18	5.05	1038	
銭9	皇宋通寶	堀2123	2.47	2.47	0.12	3.91	1038	
銭10	至和元寶	堀2123	2.48	2.48	0.11	3.45	1054	
銭11	嘉祐通寶	堀2123	2.49	2.49	0.13	3.72	1056	
銭12	治平元寶	2区第1面・Ⅰ期 整地層	2.40	2.40	0.14	2.72	1064	
銭13	熙寧元寶	堀2123	2.40	2.42	0.12	3.43	1068	
銭14	元豊通寶	2区第1面・Ⅰ期 整地層	2.48	2.48	0.12	2.80	1078	
銭15	元祐通寶	2区第1面・Ⅰ期 整地層	2.40	(2.38)	0.12	2.31	1086	
銭16	元祐通寶	堀2123	2.45	2.47	0.13	3.88	1086	
銭17	元祐通寶	堀2350	2.40	2.40	0.12	1.94	1086	
銭18	紹聖元寶	堀2123	2.48	2.45	0.13	3.31	1095	
銭19	聖宋元寶	護岸2125	(1.71)	2.41	0.11	1.04	1101	
銭20	聖宋元寶	堀2123	2.45	2.50	0.11	3.13	1101	
銭21	淳祐元寶	2区西壁	2.38	2.40	0.12	3.14	1241	
銭22	洪武通寶	地業2135	(1.60)	(1.90)	0.18	1.08	1368	
銭23	寛永通寶	護岸2125	2.37	2.37	0.13	2.57	1636	
銭24	寛永通寶	護岸2125	2.50	2.50	0.14	3.32	1636	
銭25	寛永通寶	護岸2125	2.45	2.46	0.12	3.38	1636	
銭26	鉄銭	護岸2125	2.45	2.45	0.35	3.97	－	
銭27	鉄銭	護岸2125	2.40	2.42	0.37	4.00	－	
銭28	鉄銭	護岸2125	2.45	2.50	0.68	6.10	－	
銭29	煙管銭	護岸2125	2.25	2.25	0.28	2.75	－	
銭30	模造銭か	堀2350	2.30	2.10	0.11	1.84	－	
銭31	一銭銅貨	ピット2037	2.78	2.70	0.13	5.61	－	明治9年か
銭32	二銭銅貨	2区第1面・Ⅰ期 整地層	3.15	3.15	0.19	11.25	－	鋳造年判読不可

図　　版

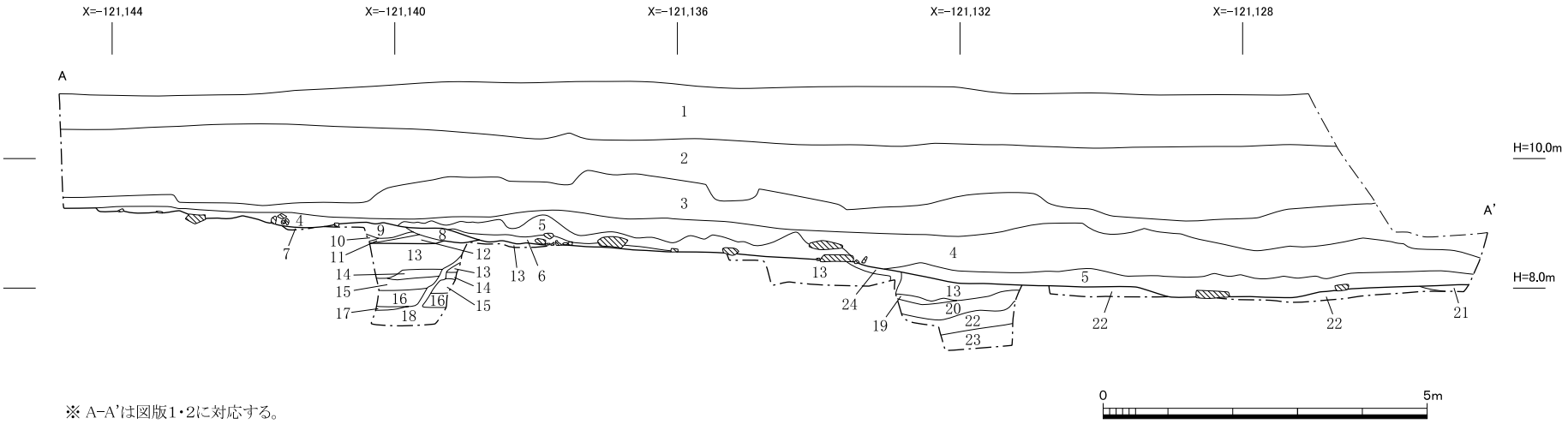


1区第2面〔Ⅳ期〕平面図（1：100）

1区第1面〔Ⅱ期〕平面図（1：100）

遺構　図版3

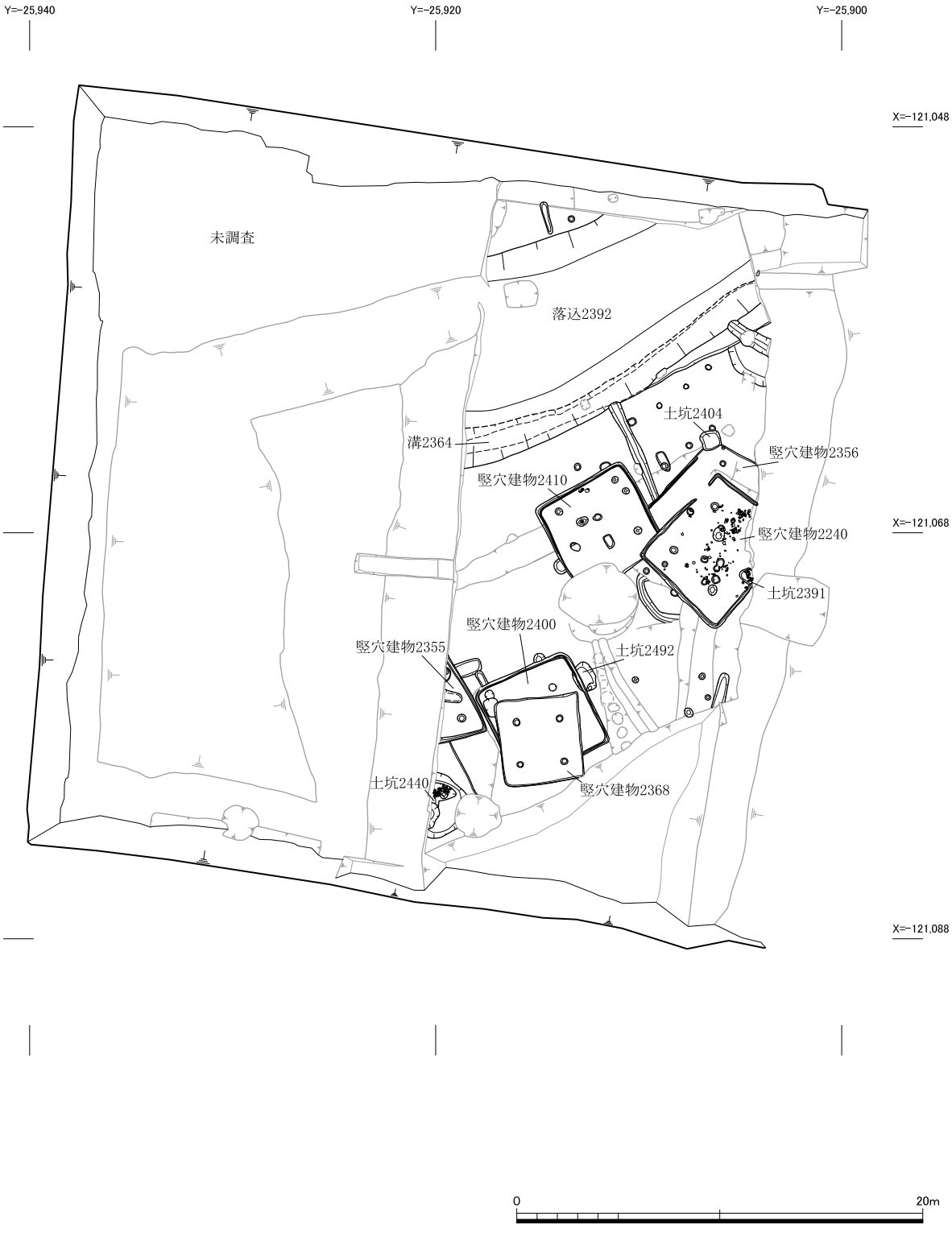
1区西壁断面図（1：100）



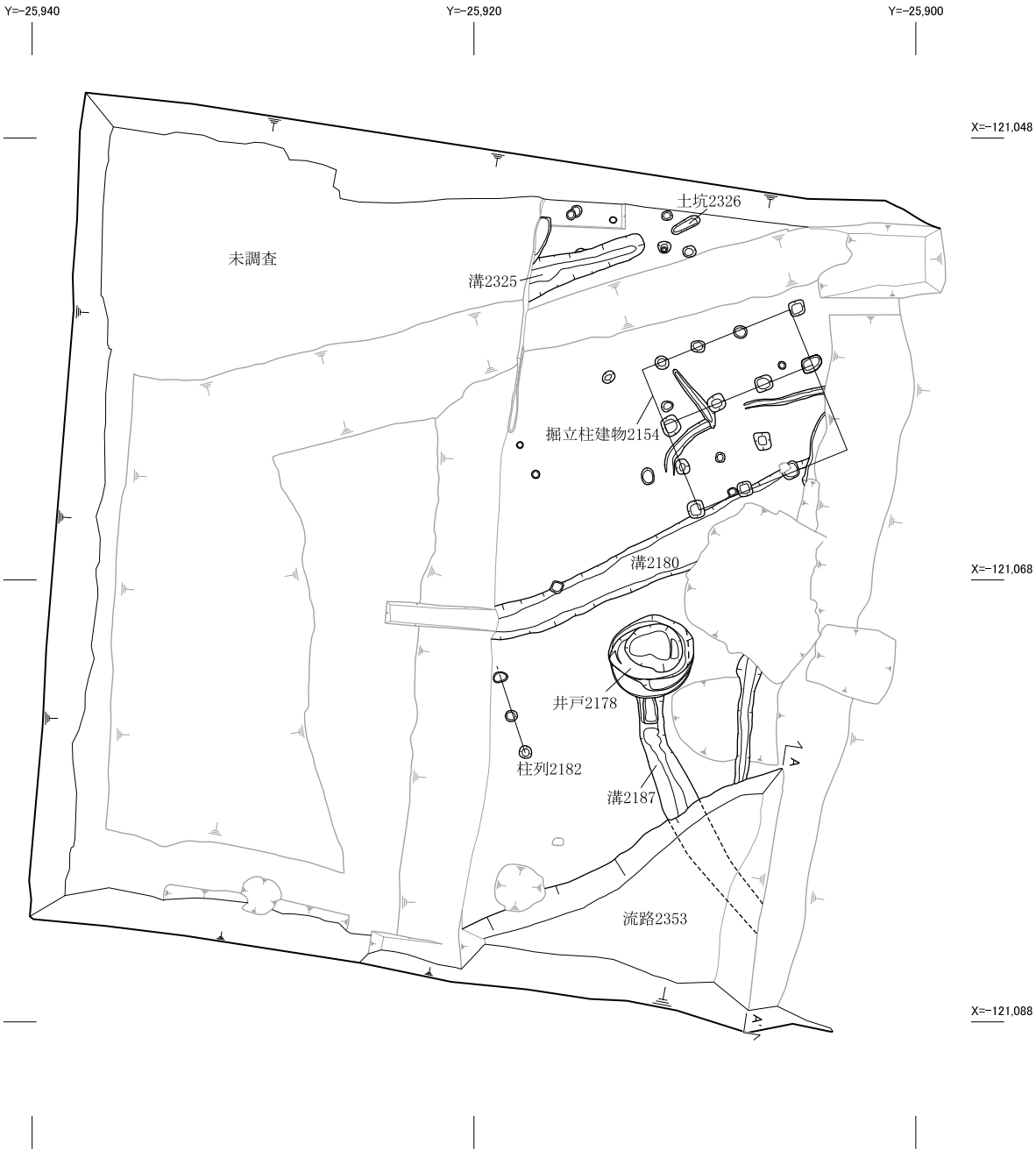
※ A-A'は図版1・2に対応する。

1　10YR3/3暗褐色　粗砂（現代河川堆積）
2　10YR4/2灰黄褐色　粗砂　コンクリガラ等混（現代盛土）
3　極細砂・粗砂・砂礫の互層　ラミナあり（現代河川堆積）
4　2.5Y4/2暗灰黄色　粗砂　φ～10cmの礫多量に混（現代盛土）
5　2.5Y4/1黄灰色　シルトと2.5Y6/4にぶい黄色　粗砂の互層　ラミナあり　変形あり（近代河川堆積）
6　2.5Y4/1黄灰色　細砂～粗砂　φ～20cmの礫混（近代盛土）
7　2.5Y4/2暗褐色　粗砂
8　2.5Y4/2暗褐色　粗砂　φ～5cmの礫多量混
9　2.5Y5/3黄褐色　粗砂
10　2.5Y7/2灰黄褐色　粗～極粗砂　φ～3cmの礫多量混
11　2.5Y7/4浅黄色　シルト
12　2.5Y5/3黄褐色　細砂　φ～3cmの礫多量混
（護岸1001）

13　10Y4/1灰色　極細砂（室町時代堆積層）
14　7.5YR6/6橙色　粗～極粗砂
15　10YR3/1オリーブ黒色　極細砂と10YR4/4褐色　極粗砂の互層
16　7.5YR5/6明褐色　粗～極粗砂
17　7.5YR4/3褐色　φ2～4cmの礫
18　2.5Y5/2暗灰黄色　粗～極粗砂　φ～1cmの礫多量混
19　10YR4/3にぶい黄褐色　粗～極粗砂
20　10YR4/1灰色　極細砂
21　2.5Y4/2暗灰黄色　粗砂
22　10YR4/4褐色　粗～極粗砂
23　10YR5/3にぶい黄褐色　粗～極粗砂
（流路1017）
24　10YR4/4褐色　粗～極粗砂（噴砂）



２区第５面〔Ⅹ・Ⅸ期〕平面図（１：300）



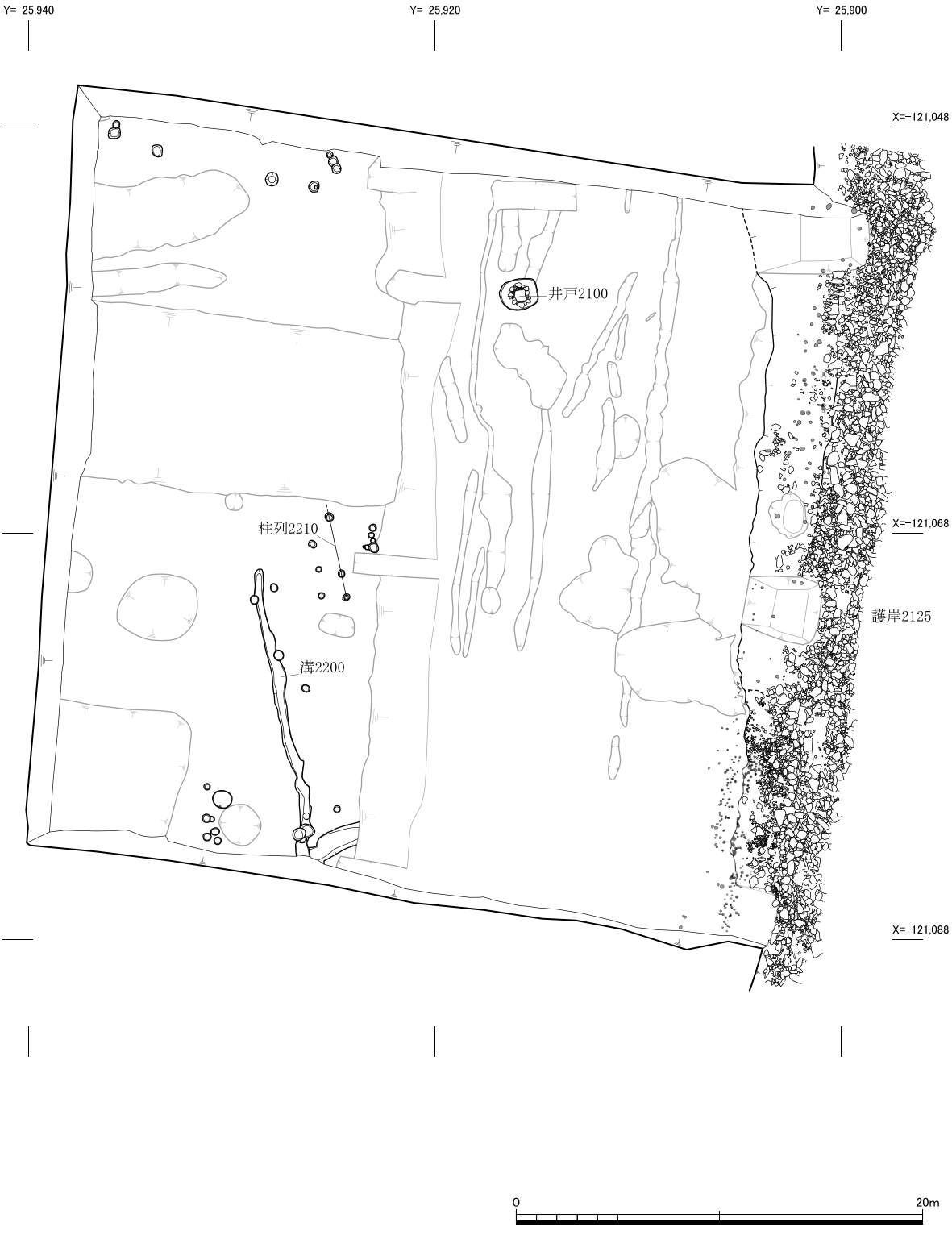
※ A–A'は図版21に対応する。

2区第4面〔Ⅷ・Ⅶ・Ⅵ期〕平面図（1：300）

※ A–A'・B–B'は図版24に対応する。

0 20m

2区第3面〔Ⅴ・Ⅳ・Ⅲ期〕平面図（1：300）

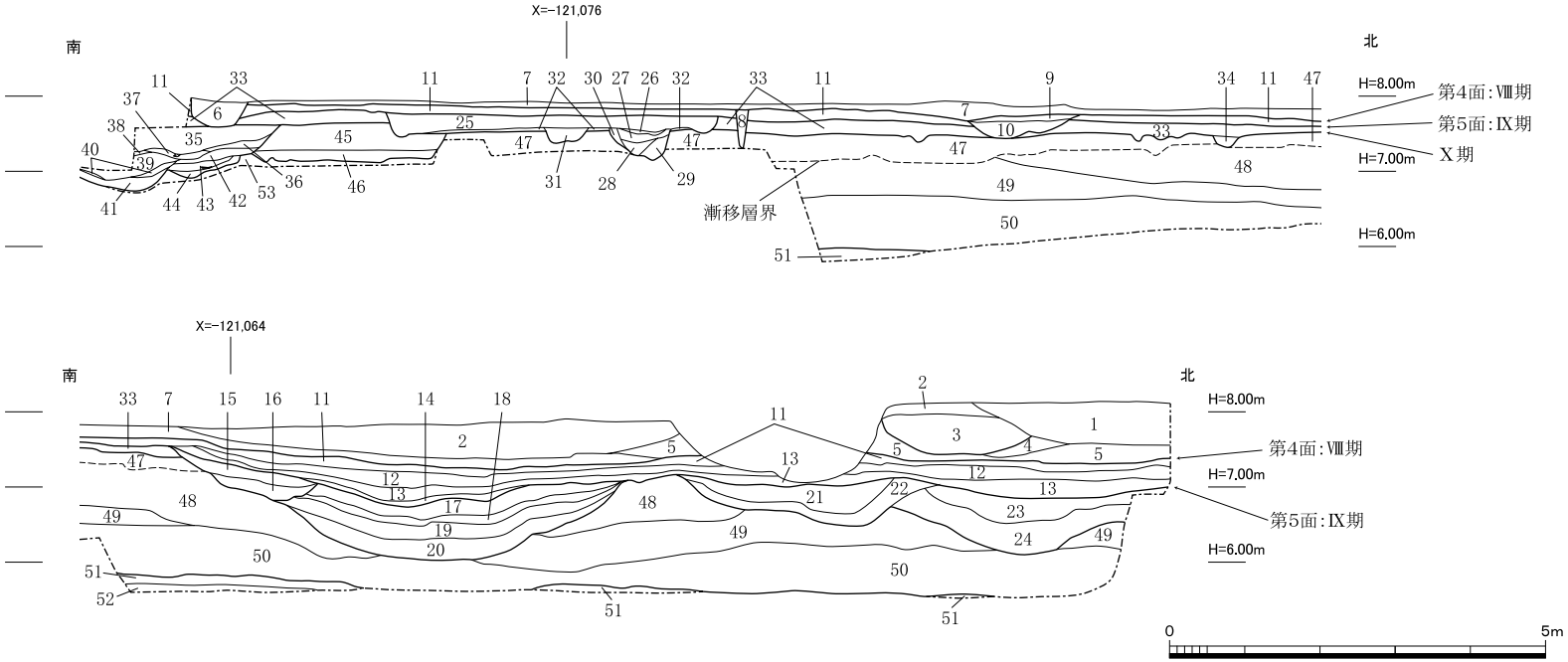


2区第2面〔Ⅱ期〕平面図（1：300）

2区第1面〔Ⅰ期〕平面図（1：300）

図版6　遺構

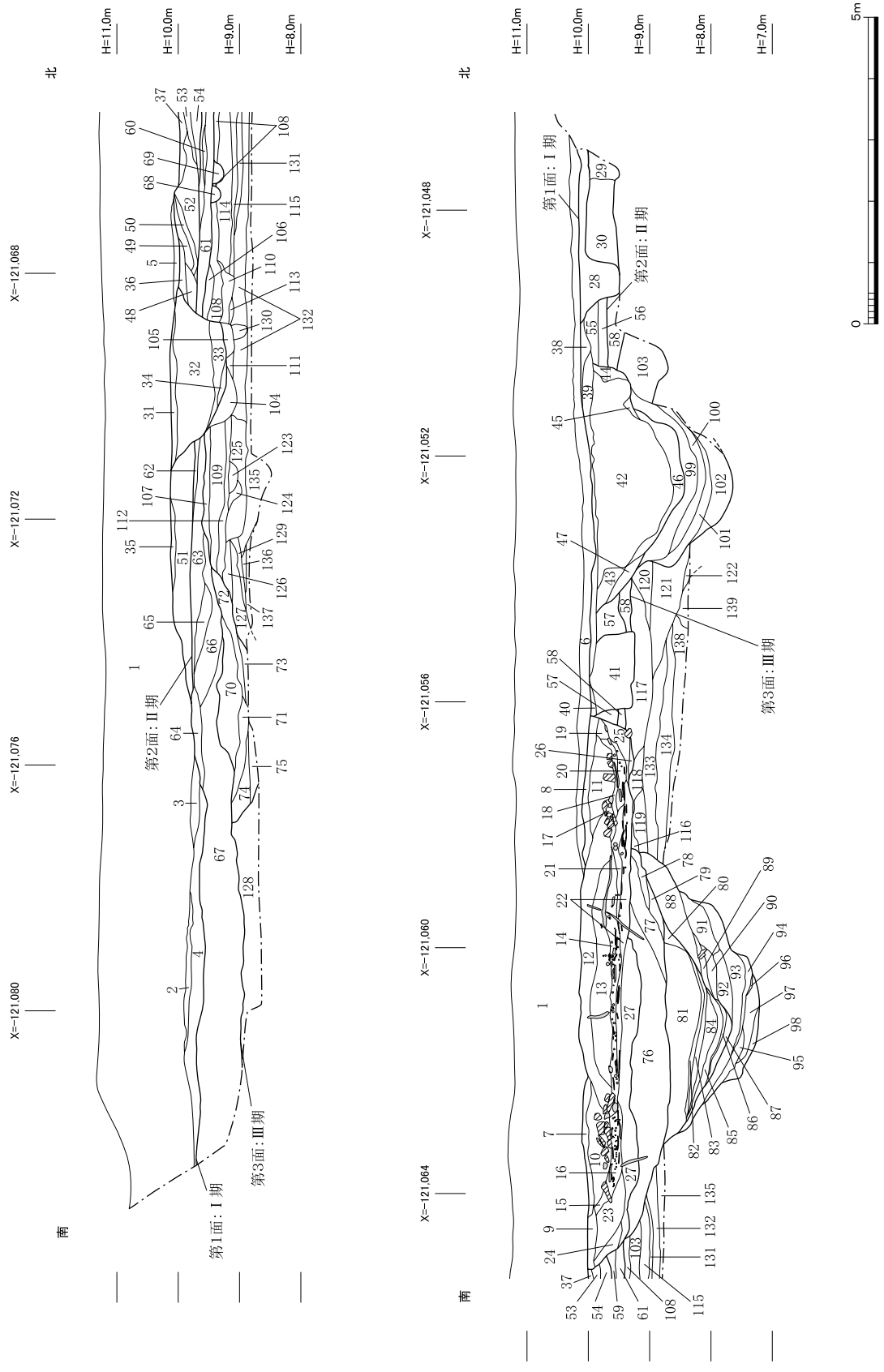
2区下段西壁断面図（1：100）



1　2.5Y5/2暗灰黄色　細砂　炭少量含
2　2.5Y4/3オリーブ褐色　細砂　炭少量含
3　2.5Y4/4オリーブ褐色　細砂　炭少量含(溝2325)
4　2.5Y4/3オリーブ褐色　細砂～シルト
5　2.5Y4/3オリーブ褐色～2.5Y5/6黄褐色　細砂～シルト　炭少量含
6　2.5Y6/4にぶい黄色　シルト　固く締まる
7　5Y4/2灰オリーブ色　シルト～細砂　土器片少量含
8　10YR4/4褐色　粘土
9　2.5Y5/2暗灰黄色　シルト
10　5Y4/1灰色　粘土　炭少量含　溝2180
11　2.5Y3/2黒褐色　シルト　炭・土器片少量含(土壌化層)
12　5Y4/1灰色　シルト　炭少量含
13　2.5Y3/1～3/2黒褐色　シルト　粘質　炭・土器片微量含
14　5Y4/1灰色　シルト　粘質
15　2.5Y4/1黄灰色～4/3オリーブ褐色　シルト　粘質　炭・土器片少量含
16　5Y4/1灰色～2.5Y4/3オリーブ褐色　シルト　粘質　炭少量含　溝2364

17　2.5Y3/1黒褐色　シルト　粘質
18　2.5Y4/1黄灰色　シルト　粘質　炭・土器片微量含
19　2.5Y4/2暗灰黄色　細砂　粘質多め　炭少量含
20　2.5Y4/2暗灰黄色　細砂　粘質　炭少量含
21　2.5Y4/1黄灰色　シルト　炭少量含
22　2.5Y4/1黄灰色　シルト～細砂　炭少量含
23　5Y4/1灰色～2.5Y4/2暗灰黄色　シルト
24　5Y5/1灰色～2.5Y5/2暗灰黄色　シルト　落込2392
25　10YR5/6黄褐色　粘土　炭・土器片含
26　10YR4/4褐色　粘土　炭・土器片含
27　10YR5/3にぶい黄褐色　粘土
2.5Y6/6明黄褐色シルトブロック混　炭含
28　10YR5/4にぶい黄褐色　粘土　炭含
29　10YR4/1褐灰色　粘土　炭・土器片含
30　10YR5/2灰黄褐色　粘土
31　7.5YR4/2灰褐色　シルト　土器片含(土坑2506)
32　7.5YR5/3にぶい褐色　シルト(貼床)　竪穴2355
33　5Y4/1灰色～10YR6/3にぶい黄橙色　粘土～シルト　炭少量含
34　5Y4/1灰色　粘土　炭微量含

35　7.5Y5/1灰色　粘土
36　5Y5/2灰オリーブ色　粘土　炭含
37　2.5Y6/3にぶい黄色　シルト　炭・焼土・土器片含
38　2.5Y5/1黄灰色　シルト　炭含
39　5GY4/1暗オリーブ灰色　粘土　炭微量含
40　2.5Y4/1黄灰色　粘土　炭多量含
41　7.5Y5/1灰色　粘土　炭含
42　2.5Y6/1黄灰色　粘土　炭・焼土含
43　2.5Y4/4オリーブ褐色　粘土　炭・土器片多量含　焼土含
44　2.5Y5/4黄褐色　粘土　炭・焼土含　土坑2440
45　2.5Y5/3黄褐色　シルト　炭・焼土含
46　2.5Y5/2暗灰黄色　粘土　炭・土器片含　土坑2493
47　5Y4/2灰オリーブ色　粘土～シルト
48　2.5Y4/2暗灰黄色～4/3オリーブ褐色　細砂　粘質　炭少量含
49　2.5Y4/2暗灰黄色～5Y4/2灰オリーブ色　シルト　炭少量含
50　2.5Y5/2暗灰黄色～4/4オリーブ褐色　シルト　炭少量含
51　5Y4/1灰色～4/3灰オリーブ色　粘土(土壌化層)
52　5Y3/2オリーブ黒色～4/2灰オリーブ色　粘土
53　5GY6/1オリーブ灰色　粘土



2区上段西壁断面図1（1：100）

図版11　遺構

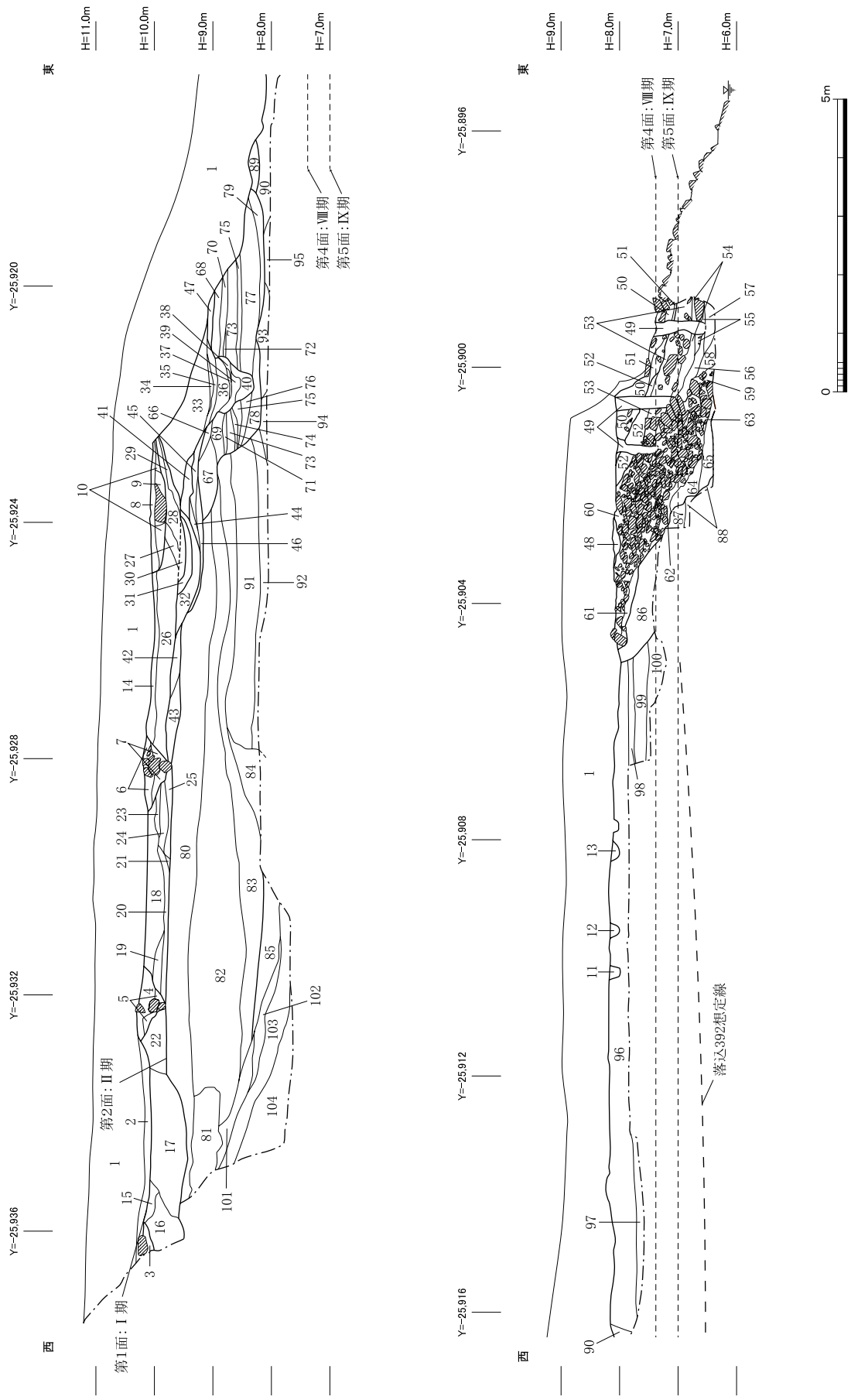
2区上段西壁断面図2（土色）

1 現代盛土 河川堆積
2 10G3/1暗緑灰色 微砂 φ3～5cmの礫混
3 7.5Y4/1灰色 細砂 砂質ブロック・φ3～5cmの礫混
4 10Y4/1灰色 微砂 φ3cmの礫混
5 5Y4/3暗オリーブ色 細砂
6 10YR5/1褐灰色 細砂
7 5Y4/1灰色 砂
8 2.5Y4/1黄灰色 微砂
9 10YR6/6明黄褐色 細砂 φ0.5～1cmの礫混
10 10YR5/3にぶい黄褐色 粗砂
11 10YR5/4にぶい黄褐色 粗砂
12 2.5Y5/2暗灰黄色 粗砂 φ1～7cmの礫混
13 2.5Y6/2灰黄色 粗砂～細砂 φ0.5～7cmの礫混
14 2.5Y6/1黄灰色 粗砂 φ0.5～3cmの礫混 木片多量含
15 N5/0灰色 粘土
16 10YR6/2灰黄褐色 粗砂 木片多量含
17 10YR4/3にぶい黄褐色 粗砂 φ1～3cmの礫混 木片含
18 2.5Y5/2暗灰黄色 粗砂 木片含
19 2.5Y5/1黄灰色 粘土
20 2.5Y6/2灰黄色 粗砂 木片含
21 2.5Y5/1黄灰色 粗砂 粘土混 木片含
22 5Y6/1灰色 粗砂 粘土混 木片含
23 10Y5/1灰色 シルト φ0.5～1cmの礫・まだらに砂混 炭・土器片含
24 2.5Y5/2暗灰黄色 微砂 φ0.5～1cmの礫混 炭含
25 7.5Y5/1灰色 シルト φ2～4cmの礫・砂混
26 2.5Y4/1黄灰色 シルト
27 5Y4/3暗オリーブ色 細砂
28 2.5Y4/3オリーブ褐色 細砂 φ3～10cmの礫混 土器片含〈地業2010〉
29 7.5YR5/8明褐色 粗砂 φ1～3cmの礫多量混
30 10Y6/1緑灰色 微砂 φ3～8cmの礫混
31 10YR4/6褐色 細砂 φ2～5cmの礫混 炭含
32 10YR4/4褐色 微砂 φ1～2cmの礫混 炭・土器片含
33 5Y4/1灰色 微砂 φ0.5cmの礫混
34 5Y5/2灰オリーブ色 細砂
35 5Y4/3暗オリーブ色 細砂 φ2～5cmの礫混
36 2.5Y4/1黄灰色 微砂
37 10YR6/6明黄褐色 細砂 φ0.5～1cmの礫混
38 2.5Y4/6オリーブ褐色 細砂 φ3～10cmの礫混
39 2.5Y4/1黄灰色 微砂
40 2.5Y6/2灰黄色 粗砂 φ1～6cmの礫混
41 2.5Y8/1灰白色 粗砂 φ2～5cmの礫混
42 10YR7/4にぶい黄橙色 細砂〈洪水堆積〉
43 10YR5/1灰色 微砂
44 10YR5/2灰黄褐色 粗砂 灰色シルトブロック混
45 5Y5/1灰色 シルト
46 N5/0灰色 粘土 砂混
47 10Y4/1灰色 微砂
48 7.5YR5/6明褐色 細砂 炭・土器片含
49 7.5YR4/4褐色 微砂
50 5Y5/2灰オリーブ色 微砂 φ2～3cmの礫混
51 10YR4/4褐色 微砂 φ3～20cmの礫混
52 5Y4/2灰オリーブ色 微砂 φ2～3cmの礫混 土器片含
53 5Y4/2灰オリーブ色 細砂 φ1～2cmの礫混
54 2.5Y4/2暗灰黄色 微砂 砂・粘土ブロック混
55 2.5Y5/2暗灰黄色 シルト φ3～12cmの礫少量混
56 10Y5/1灰色 微砂 φ3～8cmの礫混
57 5Y4/1灰色 微砂
58 10Y4/1灰色 微砂
59 5Y5/2灰オリーブ色 微砂 φ0.5～1cmの礫混 炭含
60 5Y4/1灰色 微砂 φ1cmの礫混 炭含
61 2.5Y4/2暗灰黄色 微砂 φ1～2cmの礫混 炭含
62 5Y4/1灰色 微砂 φ1cmの礫混 炭含
63 2.5Y4/2暗灰黄色 微砂 φ3cmの礫混
64 2.5Y4/2暗灰黄色 細砂 φ2～5cmの礫混
65 10YR5/6黄褐色 細砂 φ3～5cmの礫混
66 2.5Y4/2暗灰黄色 細砂 φ2～5cmの礫混
67 5Y4/2灰オリーブ色 微砂 良く締まる φ3～5cmの礫混
68 10Y3/2オリーブ黒色 微砂
69 7.5Y3/1オリーブ黒色 微砂
70 7.5Y4/1灰色 微砂 φ3～5cmの礫混
71 10Y4/1灰色 シルト φ10cmの礫混
72 7.5Y4/1灰色 細砂 φ2cmの礫混
73 7.5Y4/1灰色 シルト
74 10Y4/1灰色 シルト φ1～2cmの礫混 炭含
75 7.5Y4/1灰色 シルト
76 7.5Y5/1灰色 シルト φ2～3cmの礫混
77 10Y6/2オリーブ灰色 シルト
78 10Y5/1灰色 細砂
79 7.5Y4/1灰色 微砂
80 2.5Y4/1黄褐色 細砂
81 5Y5/2灰オリーブ色 細砂 φ5cm以下の礫微量混 木片微量含
82 2.5Y4/1黄灰色 細砂 炭・木片微量含
83 2.5Y4/2暗灰黄色 粗砂
84 5Y4/1灰色 シルト 貝殻多量・木片少量含
85 5Y3/1オリーブ黒色 シルト 木片多量・貝殻少量含
86 2.5Y2/1黒色 シルト 木片含
87 2.5Y3/1黒褐色 シルト 粗砂混 炭少量含
88 2.5Y4/1黄褐色 シルト
89 5Y3/2オリーブ褐色 細砂 木製品・炭含
90 2.5Y4/2暗灰黄色 細砂 木製品・炭含
91 5Y4/1灰色 シルト
92 7.5Y4/1灰色 シルト
93 5Y3/1オリーブ黒色 シルト シルトブロック・φ0.5cm以下の礫混 土器片含
94 2.5Y3/1黒褐色 シルト 炭含
95 7.5Y4/1灰色 シルト
96 5Y4/1灰色 粗砂
97 5Y4/2灰オリーブ色 細砂
98 2.5Y6/2灰黄色 砂
99 5Y5/2灰オリーブ色 粘土 砂混 炭・土器片含
100 2.5GYオリーブ灰色 粘土 φ2～5cmの礫・砂混 炭・土器片含
101 10Y5/1灰色 粘土 砂混
102 7.5Y4/1灰色 粘土 砂混
103 7.5Y4/1灰色 粘土 土器片・木片含
104 7.5Y4/1灰色 微砂 φ1～2cmの礫混 炭含
105 5Y4/1灰色 細砂 φ2～5cmの礫混 炭・土器片含
106 10Y5/1灰色 シルト
107 10Y4/1灰色 微砂
108 10Y4/1灰色 シルト φ1～2cmの礫混 土器片含
109 2.5GY3/1暗オリーブ灰色 微砂 φ3～10cmの礫混 土器片含
110 10Y5/1灰色 シルト φ2～3cmの礫混 土器片含
111 10Y5/2オリーブ灰色 シルト
112 2.5GY4/2暗オリーブ灰色 シルト φ3～5cmの礫混
113 7.5YR4/1灰色 細砂 φ0.5～2cmの礫混
114 10Y3/1オリーブ黒色 シルト φ5cmの礫混
115 7.5Y4/1灰色 シルト 土器片含
116 10Y5/1灰色 細砂
117 5Y5/2灰オリーブ色 シルト
118 5Y4/1灰色 細砂
119 10Y4/1灰色 シルト
120 10Y4/1灰色 シルト
121 7.5Y5/1灰色 シルト
122 N4/0灰色 粘土
123 10Y4/1灰色 シルト
124 2.5GY4/1暗オリーブ灰色 シルト
125 10Y4/1灰色 シルト φ0.5～1cmの礫混 土器片含
126 7.5Y4/2灰オリーブ色 細砂 φ3～5cmの礫混 土器片含
127 10Y4/2オリーブ灰色 細砂 φ2～4cmの礫混 土器片含
128 5Y4/2灰オリーブ色 微砂 φ3cmの礫混 土器片含
129 7.5Y4/1灰色 シルト φ3～5cmの礫混
130 10Y4/1灰色 シルト 炭・土器片含
131 10Y5/1灰色 シルト φ0.5～1cmの礫混
132 10Y4/1灰色 シルト
133 5Y4/1灰色 シルト
134 7.5Y4/1灰色 シルト φ1cm以下の礫少量混
135 7.5Y3/1オリーブ黒色 シルト
136 5Y5/2灰オリーブ シルト φ5cmの礫混 土器片含
137 5Y4/1灰色 シルト
138 10Y4/1灰色 細砂 φ1cm以下の礫少量混 土器片含
139 7.5Y4/1灰色 微砂

地業2135
土坑2507
溝2140
堀2123 合流部（新段階）
堀2123 合流部（古段階）

※ 地業2135（7～27層）は図版33に拡大図あり

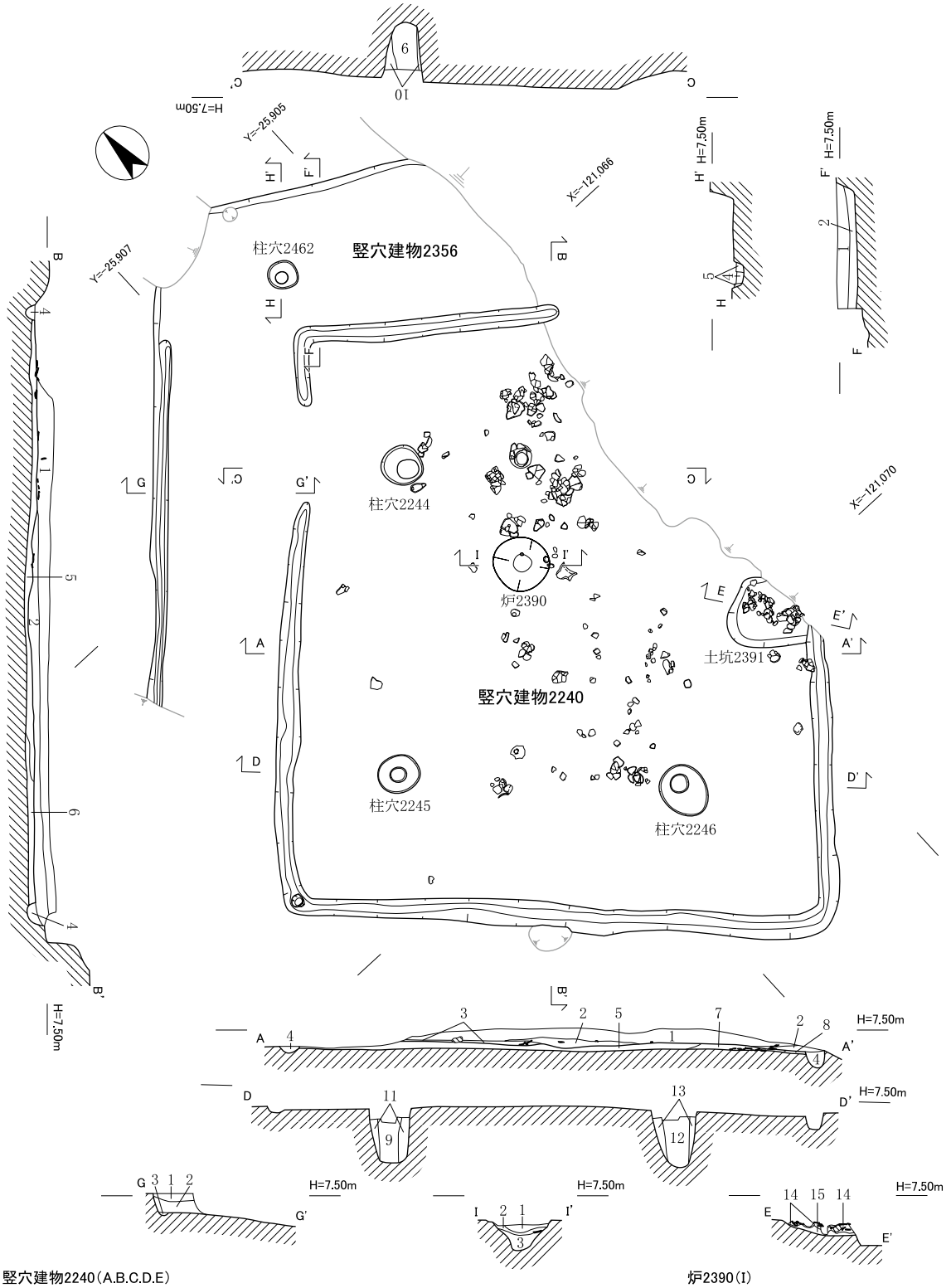
図版12　遺構



2区北壁断面図1（1：100）

2区北壁断面図2（土包）

1 現代盛土 河川堆積
2 10YR5/1褐灰色 細砂
3 2.5Y4/3オリーブ褐色 細砂 φ3～10cmの礫混 土器片含〈地業2010〉
4 10YR5/3にぶい黄褐色 細砂
粘土ブロック・φ5～10cmの礫混 ┐地業2011
5 2.5Y5/3黄褐色 細砂 ┘
6 7.5YR4/4褐色 細砂 炭少量含 ┐
7 2.5Y4/3オリーブ褐色 細砂 φ10～50cmの石混
8 5YR4/6赤褐色 粗砂 固く締まる
9 2.5Y6/3にぶい黄色 微砂 φ2～10cmの礫混 ┐地業2012
φ50cmの平石埋める 固く締まる
10 10YR6/4にぶい黄橙色 細砂 ┘
11 10YR5/4にぶい黄褐色 細砂
12 10YR4/2灰黄褐色 細砂
13 10YR4/2灰黄褐色 細砂
14 10YR4/6褐色 細砂 φ5～15cmの礫混 瓦含
15 2.5Y4/3オリーブ褐色 細砂 粘土ブロック・φ10cmの礫混
16 7.5YR5/8明褐色 粗砂 φ1～3cmの礫多量混
17 10GY6/1緑灰色 微砂
18 7.5YR5/6明褐色 細砂 φ3～10cmの礫多量混
19 10YR6/6明黄褐色 微砂 φ2～5cmの礫混
20 10YR5/2灰黄褐色 細砂 φ2～3cmの礫混
21 10Y5/1灰色 微砂 φ2～5cmの礫混
22 10Y5/1灰色 微砂 陶器片含
23 10YR4/3にぶい黄褐色 粗砂 炭含
24 2.5Y5/3黄褐色 微砂 φ3cmの礫混
25 10YR4/4褐色 微砂 φ3cmの礫混
26 10YR4/4褐色 細砂 φ2～5cmの礫混
27 10YR6/8明黄褐色 粗砂 φ2～5cmの礫多量混
28 10YR5/8黄褐色 粗砂
29 10YR5/4にぶい黄褐色 微砂
30 2.5Y6/4にぶい黄色 細砂
31 7.5YR4/6褐色 細砂 φ3～5cmの礫混
32 10YR4/6褐色 細砂
33 10YR6/4にぶい黄橙色 粗砂 底部に鉄分沈着〈洪水堆積〉
34 2.5Y4/4オリーブ褐色 微砂 φ0.5～1cmの礫混
35 10YR4/1褐灰色 細砂 白色粗砂ブロック・φ1～5cmの礫少量混
36 2.5Y5/3黄褐色 細砂 粘土ブロック・φ5cmの礫混
37 2.5Y4/2暗灰黄色 微砂 砂ブロック混
38 10YR4/4褐色 細砂 砂ブロック混
39 2.5Y4/2暗灰黄色 微砂 粘土ブロック混
40 10YR4/3にぶい黄褐色 細砂
41 7.5YR4/6褐色 粗砂～礫 上面に黒色層
42 2.5Y5/3黄褐色 細砂 炭含
43 2.5Y5/4黄褐色 細砂
44 5Y4/2灰オリーブ色 細砂
45 2.5Y6/1黄灰色 微砂 土器片・瓦含
46 10Y3/1オリーブ黒色 微砂
47 2.5Y6/1黄灰色 微砂
48 10YR4/3にぶい黄褐色 シルト ┐
φ1～12cmの礫少量混
49 10YR4/2灰黄褐色 細砂 φ1～4cmの礫混
木片少量含(杭埋土)
50 2.5Y4/3オリーブ褐色 シルト φ1～7cmの礫多量混
51 2.5Y5/1黄灰色 シルト φ1～5cmの礫少量混
52 2.5Y5/3黄褐色 粗砂礫 φ0.5～4cmの礫混
53 2.5Y4/2暗灰黄色 粗砂 φ0.5～7cmの礫多量混
54 2.5Y4/1黄灰色 粗砂礫 φ0.3～2cmの礫多量混
55 2.5Y3/1黒褐色 粗砂礫 φ0.3～2cmの礫多量、
φ2～5cmの礫少量混
56 10YR3/4暗褐色 粗砂礫 φ0.3～2cmの礫多量、 護岸2125
φ4～7cmの礫少量混
57 10YR3/2黒褐色 細砂 木片少量含
58 7.5YR3/2黒褐色 粗砂 φ0.3～2cmの礫混
59 7.5YR3/1黒褐色 粗砂 φ0.3～5cmの礫混
60 10YR3/3暗褐色 礫 φ0.3～1cmの礫多量混
61 10YR5/1褐灰色 シルト
62 10YR4/2灰黄色 シルト φ0.5～10cmの礫混
63 2.5Y4/2暗灰黄色 粗砂 5Y4/1灰色粘土ブロック混
64 5Y4/1灰色 シルト粗砂多量混
65 5Y4/1灰色 粘土 ┘
66 7.5YR4/2灰褐色 細砂 粘土ブロック少量混
67 2.5Y4/3オリーブ褐色 細砂 鉄分付着
68 10Y4/1灰色 微砂
69 2.5Y4/3オリーブ褐色 細砂 粘土ブロック多量混 固く締まる
70 5Y4/4にぶい赤褐色 細砂 粘土ブロック混
71 7.5YR4/3褐色 細砂 粘土ブロック混
72 10YR5/4にぶい黄褐色 細砂
73 10YR5/8黄褐色 細砂
74 5Y5/1灰色 シルト 白色粘土ブロック混
75 2.5YR4/4オリーブ褐色 細砂〈自然堆積か〉
76 N4/0灰色 微砂 黄色砂ブロック混 土器片含
77 10YR5/2灰黄褐色 細砂 土器片・木製品含
78 2.5Y4/1黄灰色 微砂 炭・土器片含
79 10YR5/3にぶい黄褐色 細砂
80 10Y3/1オリーブ黒色 細砂 黄色砂ブロック多量混
81 7.5Y4/1灰色 粘土 土器片・木片含
82 5Y4/1灰色 微砂 炭・土器片含
83 10Y4/1灰色 微砂 砂ブロック混 炭・植物遺体含
84 5Y5/3灰オリーブ色 細砂
85 10Y4/1灰色 微砂 砂ブロック混 炭・植物遺体含
86 2.5Y6/4にぶい黄色 微砂 ┐
87 10Y4/1灰色 粘土 堀2123
88 5G5/1緑灰色 粘土 ┘
89 10YR6/3にぶい黄橙色 細砂 φ2～3cmの礫混
底部に鉄分沈着
90 10YR5/1褐灰色 微砂 土器片含
91 10Y4/1灰色 微砂 砂ブロック混 炭含
92 2.5Y4/1黄灰色 微砂 黄色砂ブロック・φ0.5～1cmの礫混
土器片含
93 5Y5/2灰オリーブ色 シルト
94 10G4/1暗緑灰色 シルト
95 2.5Y6/4にぶい黄色 微砂
96 2.5Y5/6黄褐色 微砂
97 10YR4/3にぶい黄褐色 微砂
98 10YR5/4にぶい黄褐色 微砂
99 2.5Y6/1黄灰色 微砂
100 10Y3/1オリーブ黒色 シルト〈土壌化層〉
101 5Y5/2灰オリーブ色 粘土 砂混 炭・土器片含
102 2.5Y4/1黄灰色 微砂 炭・土器片含
103 2.5GYオリーブ灰色 粘土 φ2～5cmの礫・砂混
炭・土器片含
104 7.5Y4/1灰色 粘土 砂混



竪穴建物2240（A.B.C.D.E）

1 2.5Y4/4オリーブ褐色 シルト 炭・土器片含
2 2.5Y4/2暗灰黄色 シルト 炭・土器片含
3 2.5Y2/1黒色 細砂(炭層)
4 2.5Y4/3オリーブ褐色 シルト 炭含(壁溝)
5 2.5Y3/3暗オリーブ褐色 シルト 土器片・炭含 ┐
6 2.5Y4/3オリーブ褐色 シルト ｜
7 2.5Y5/4黄褐色 シルト ｜ 貼床
8 2.5Y4/3オリーブ褐色 シルト 土器片含 ┘
9 2.5Y4/3オリーブ褐色 シルト ┐
10 2.5Y3/3暗オリーブ褐色 シルト ｜ 主柱穴
11 2.5Y4/4オリーブ褐色 シルト ┘
12 10YR4/6褐色 シルト 炭微量含 ┐ 主柱穴
13 7.5YR4/3褐色 シルト 炭微量含 ┘
14 10YR4/2灰黄色 シルト やや粘質 ┐
15 10YR4/4～4/6褐色 シルト やや粘質 ┘ 土坑2391

竪穴建物2356（F.G.H）

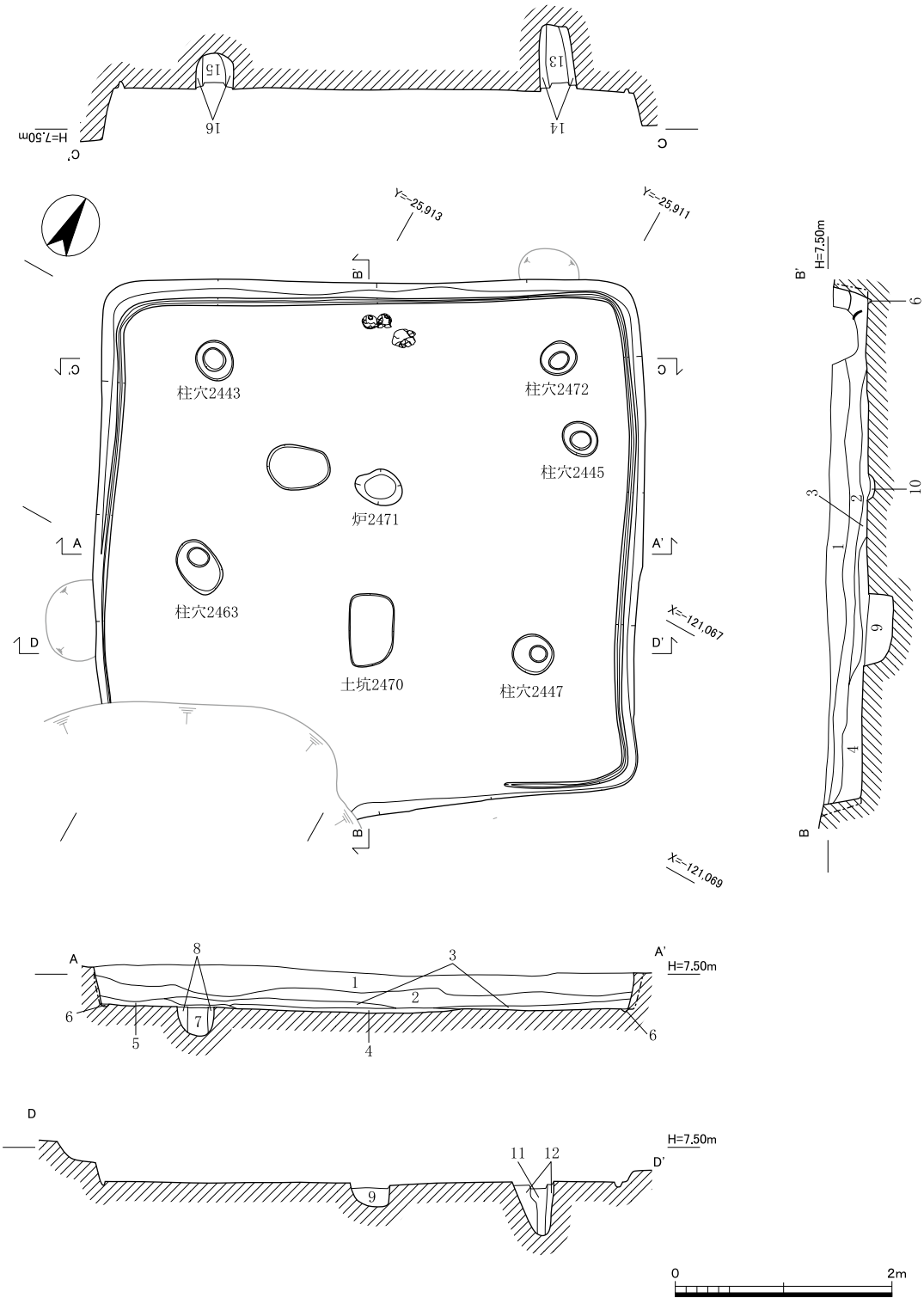
1 2.5Y5/3黄褐色 シルト
2 2.5Y5/2暗灰黄色 シルト 黄褐色細砂少量混
3 10YR4/3にぶい黄褐色 極細砂 やや粘質(壁溝)
4 2.5Y3/3暗オリーブ褐色 シルト ┐ 柱穴2462
5 2.5Y4/4オリーブ褐色 シルト ┘

炉2390（I）

1 10YR3/3暗褐色 シルト やや粘質 黄灰色シルトブロックまだらに少量混 φ3㎝の礫少量混 炭・土器片少量含
2 2.5Y3/2黒褐色 細砂 粘質 炭・土器片少量含
3 2.5Y3/1黒褐色 細砂 粘質 炭少量含

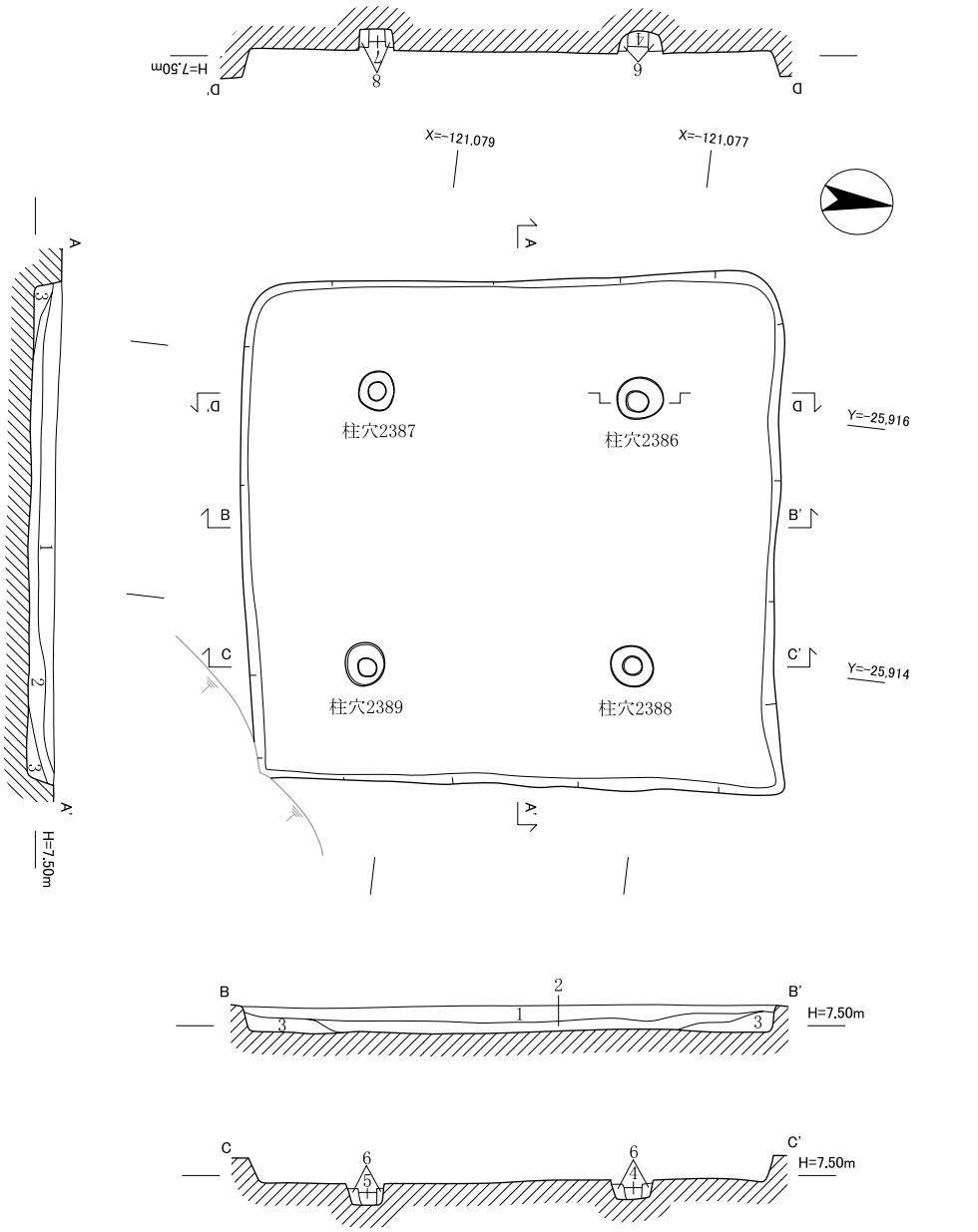
0 2m

竪穴建物2240・2356実測図（1：60）



1 10YR3/3暗褐色 シルト 固く締まる 炭微量含
2 10YR3/2黒褐色 シルト 炭微量含
3 10YR4/2灰黄褐色 シルト 炭微量含
4 2.5Y4/3オリーブ褐色 粗砂 粘質
5 10YR4/2灰黄褐色 シルト
6 2.5Y3/3暗オリーブ褐色 シルト 粘質(壁溝)
7 2.5Y4/2暗灰黄色 シルト ┐
8 2.5Y3/2黒褐色 シルト 粘質 ┘ 柱穴2463
9 2.5Y4/3オリーブ褐色 シルト ┐
炭・土器片微量含 ┘ 土坑2470
10 2.5Y3/2黒褐色 細砂～シルト ┐
炭多量含 焼土含 ┘ 炉2471
11 2.5Y3/3暗オリーブ褐色 シルト 粘質 ┐
12 2.5Y4/2暗灰黄色 シルト 粘質 炭微量含 │
13 2.5Y4/3オリーブ褐色 シルト 炭微量含 │ 主柱穴
14 2.5Y4/3～4/4オリーブ褐色 粘土 │
15 2.5Y4/2暗灰黄色 シルト 粘質 │
16 2.5Y3/2黒褐色 シルト 粘質 ┘

竪穴建物2410実測図（1：60）

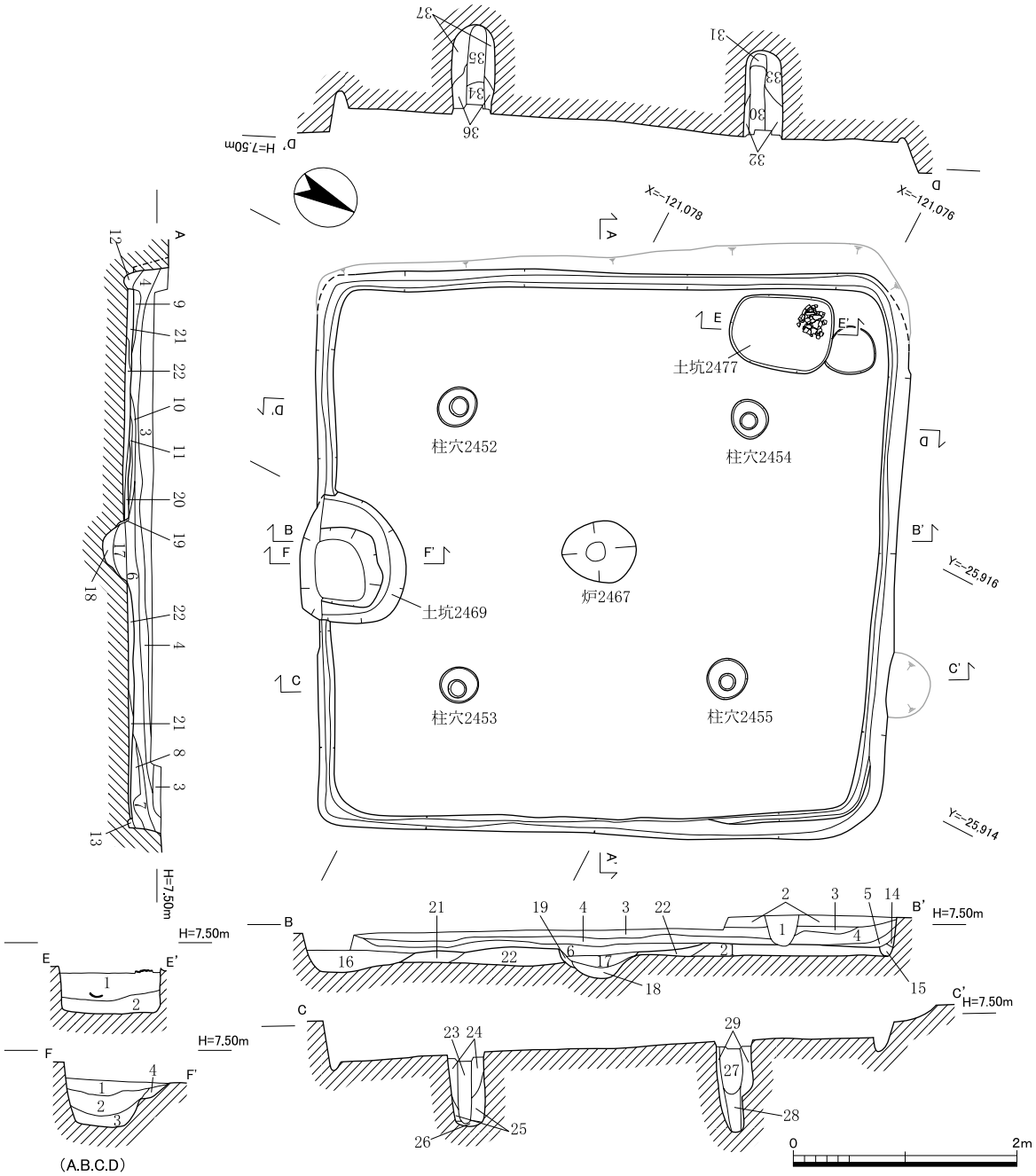


1 10YR4/6褐色 粘土 炭含
2 2.5Y4/4オリーブ褐色 シルト 炭含
3 10YR4/6褐色 シルト 炭含
4 10YR5/4にぶい黄褐色 シルト
5 10YR5/3～5/4にぶい黄褐色 シルト
6 10YR4/6褐色 シルト
7 10YR4/4～4/6褐色 シルト
8 10YR5/6黄褐色 シルト

主柱穴

0 2m

竪穴建物2368実測図（1：60）



（A.B.C.D）

1 2.5Y4/4オリーブ褐色 微砂
2 2.5Y4/6オリーブ褐色 シルト
3 2.5Y4/4オリーブ褐色 シルト
4 2.5Y4/3オリーブ褐色 シルト シルトブロック混
5 2.5Y5/3黄褐色 シルト やや粘質
6 10YR5/4にぶい黄褐色 微砂 シルトブロック混
7 2.5Y4/3オリーブ褐色 微砂 シルトブロック混 底部焼土層
8 10YR4/3にぶい黄褐色 微砂 炭少量含
9 10YR4/3にぶい黄褐色 微砂 土器片少量含
10 2.5Y4/4オリーブ褐色 微砂
11 2.5Y4/3オリーブ褐色 微砂
12 10YR4/4褐色 微砂 シルトブロック混
13 10YR4/4褐色 微砂～シルト
14 7.5YR3/4暗褐色 細砂（焼土） シルトブロック混
15 2.5Y4/3オリーブ褐色 シルト
（壁溝）
16 2.5Y4/2暗灰黄色 微砂～シルト 炭少量含（土坑2469）
17 10YR4/4褐色 微砂
18 7.5YR3/1～3/2黒褐色 粘土含む灰 底部炭層 炭・焼土少量含
19 7.5YR3/4暗褐色 微砂（焼土か）
（炉2467）
20 2.5Y4/3オリーブ褐色 微砂
21 10YR5/4にぶい黄褐色 シルト
22 10YR4/4褐色 微砂
（貼床）
23 10YR4/3～4/4褐色 微砂
24 10YR3/4暗褐色 シルト
25 10YR5/3にぶい黄褐色 シルト～粘土
26 10YR4/4褐色 粘土
27 2.5Y4/3オリーブ褐色 粘土 シルトブロック混
28 2.5Y4/1～4/2暗灰黄色 粘土
29 2.5Y4/3オリーブ褐色 シルト～細砂
30 2.5Y4/3オリーブ褐色 シルト～粘土
31 5Y4/2灰オリーブ色 粘土
32 10YR3/4暗褐色 シルト
33 2.5Y4/4オリーブ褐色 シルト～粘土
34 10YR4/4褐色 微砂 灰色粘土ブロック混
35 2.5Y5/2暗灰黄色 粘土
36 10YR3/4暗褐色 シルト
37 2.5Y5/3黄褐色 粘土 炭少量含
（主柱穴）

土坑2477（E）

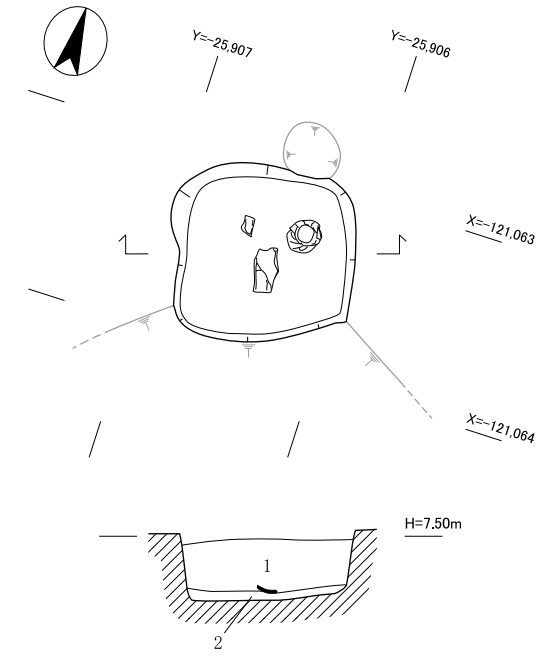
1 2.5YR4/4オリーブ褐色 粘土 土器片含
2 2.5YR3/3黄褐色 粘土

土坑2469（F）

1 2.5Y4/2暗灰黄色 微砂～シルト 炭少量含
2 10YR4/4褐色 微砂 シルトブロック混 土器片少量含
3 2.5Y4/3オリーブ褐色 シルト 炭少量含
4 10YR4/4褐色 微砂

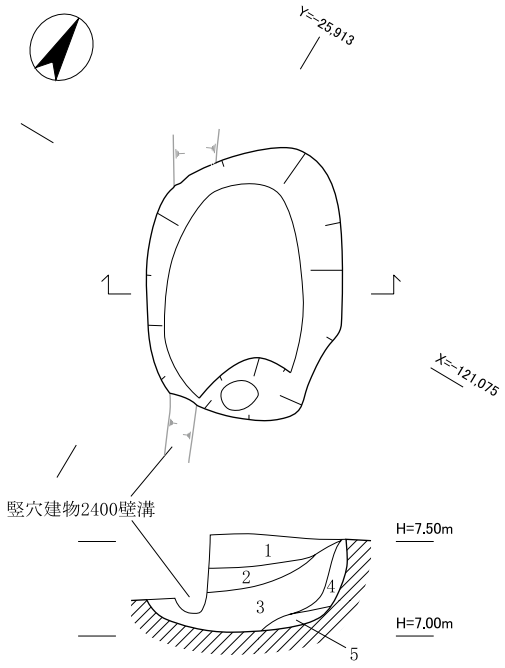
竪穴建物2400実測図（1：60）

土坑2404



1 10YR5/3にぶい黄褐色 シルト
2 2.5Y4/4オリーブ褐色 シルト

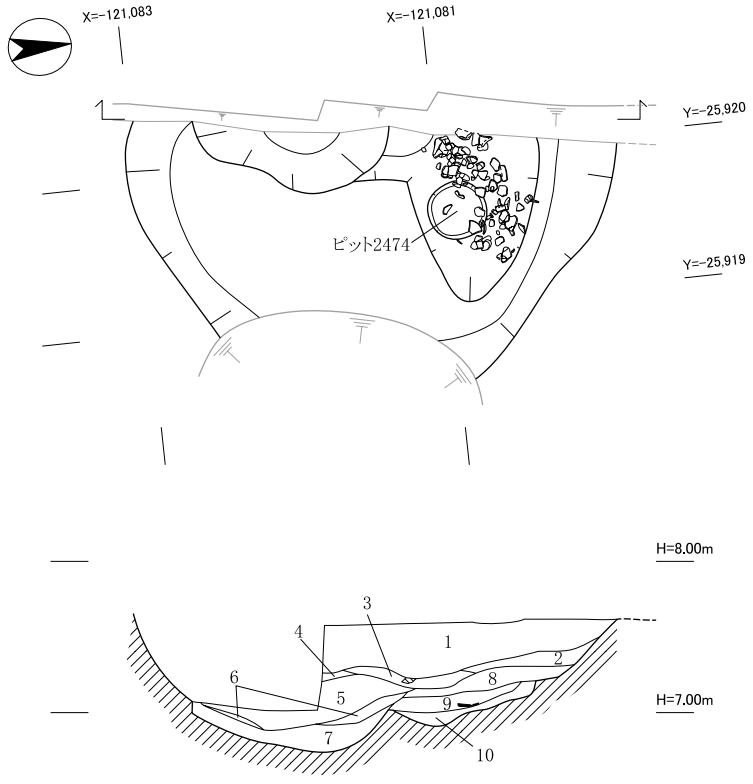
土坑2492



1 10YR4/3にぶい黄褐色 微砂 炭・土器片少量含
2 10YR4/3～4/4にぶい黄褐色 微砂 炭・土器片少量含
3 10YR4/3にぶい黄褐色～3/4暗褐色 微砂
炭多量含 土器片少量含
4 10YR3/4暗褐色 シルト
5 10YR3/4暗褐色 シルト 炭少量含

0 2m

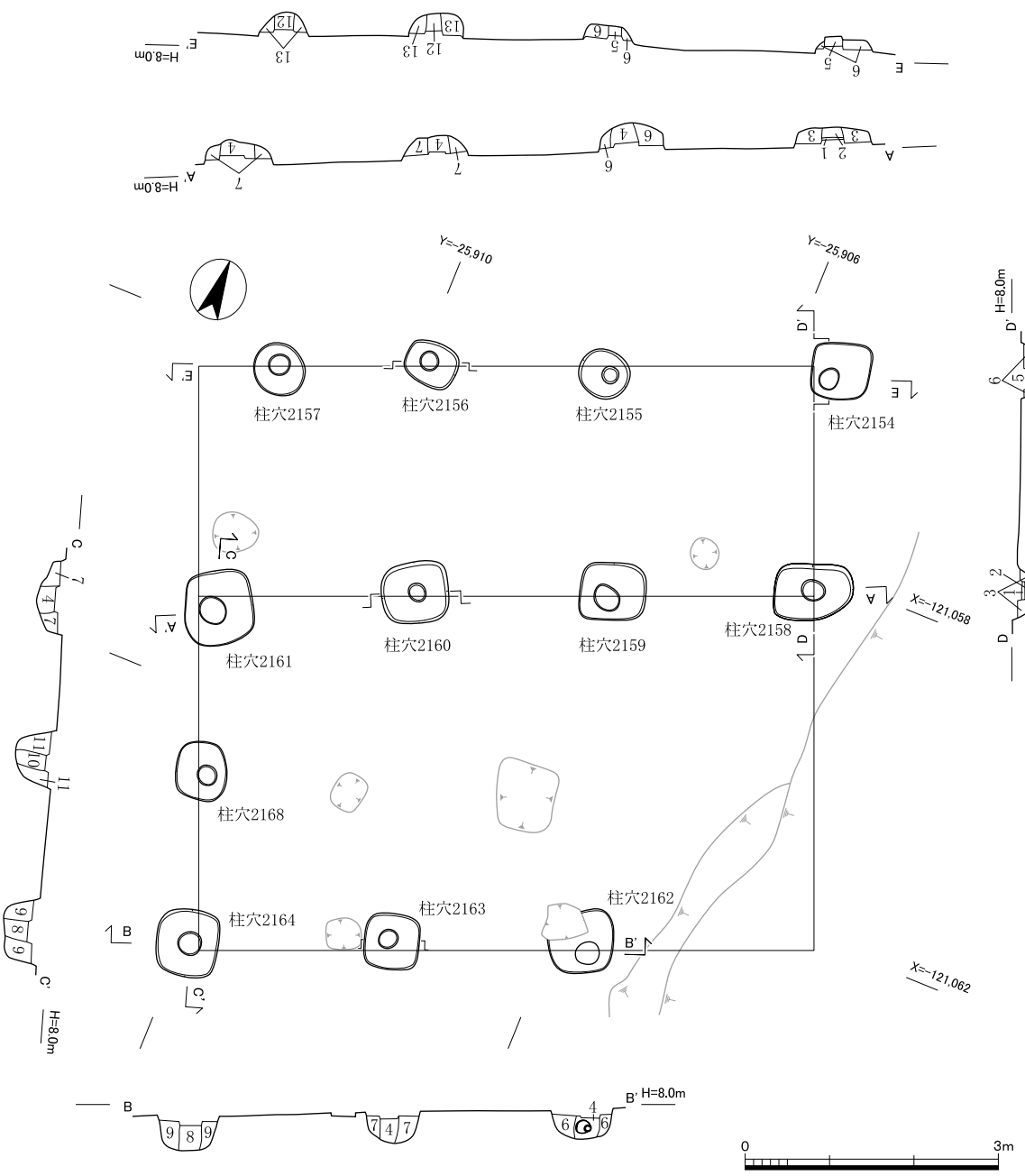
土坑2440



1 7.5Y5/1灰色 粘土
2 5Y5/2灰オリーブ色 粘土 炭含
3 2.5Y6/3にぶい黄色 シルト
炭・焼土・土器片含
4 2.5Y5/1黄灰色 シルト 炭含
5 5GY4/1暗オリーブ灰色 粘土 炭微量含
6 2.5Y4/1黄灰色 粘土 炭多量含
7 7.5Y5/1灰色 粘土 炭含
8 2.5Y6/1黄灰色 粘土 炭・焼土含
9 2.5Y4/4オリーブ褐色 粘土
炭・土器片多量含 焼土含
10 2.5Y5/4黄褐色 粘土 炭・焼土含

0 2m

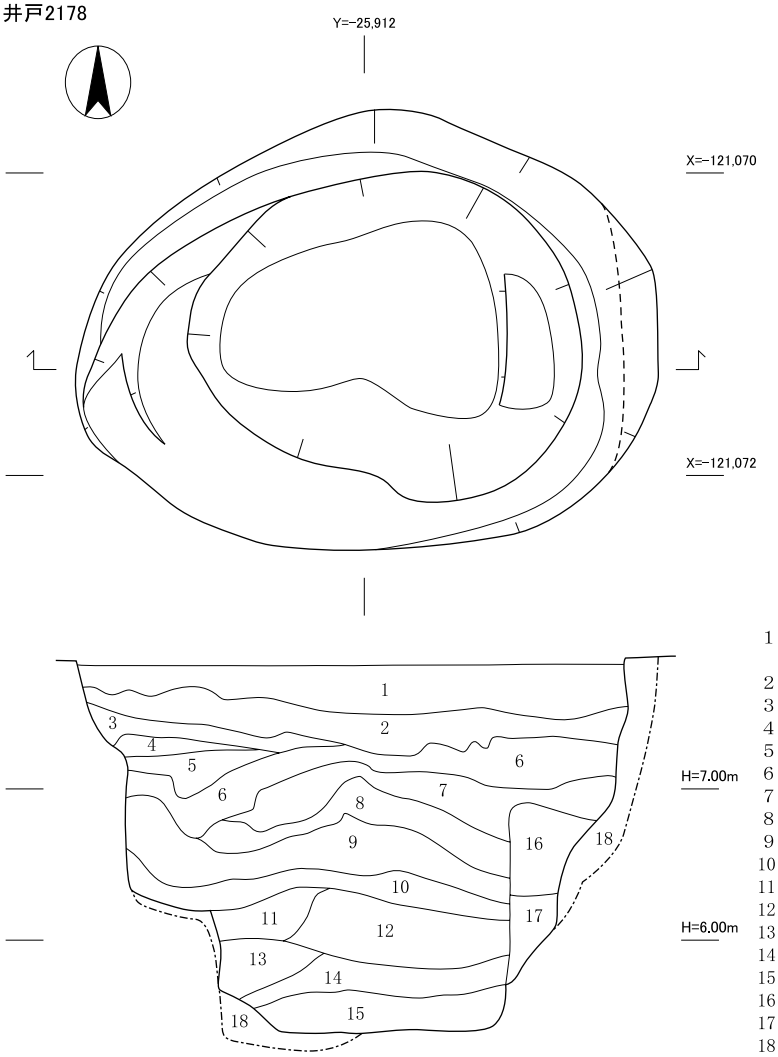
土坑2404・2492・2440実測図（2404・2492は1：40、2440は1：50）



1 10YR6/4にぶい黄橙色 細砂
2 10YR4/6褐色 細砂
3 10YR5/6黄褐色 細砂 炭微量含
4 10YR5/4にぶい黄褐色 細砂 炭微量含
5 10YR5/6黄褐色 細砂 炭微量含
6 10YR4/6褐色 細砂 炭微量含
7 10YR5/6黄褐色 細砂
8 10YR4/4褐色 細砂 炭微量含
9 10YR5/4にぶい黄褐色 細砂 炭微量含
10 2.5Y4/2暗灰黄色 シルト 炭微量含
11 10YR4/3にぶい黄褐色 細砂 シルト多量混
12 10YR5/4にぶい黄褐色 細砂
13 10YR6/4にぶい黄橙色 細砂

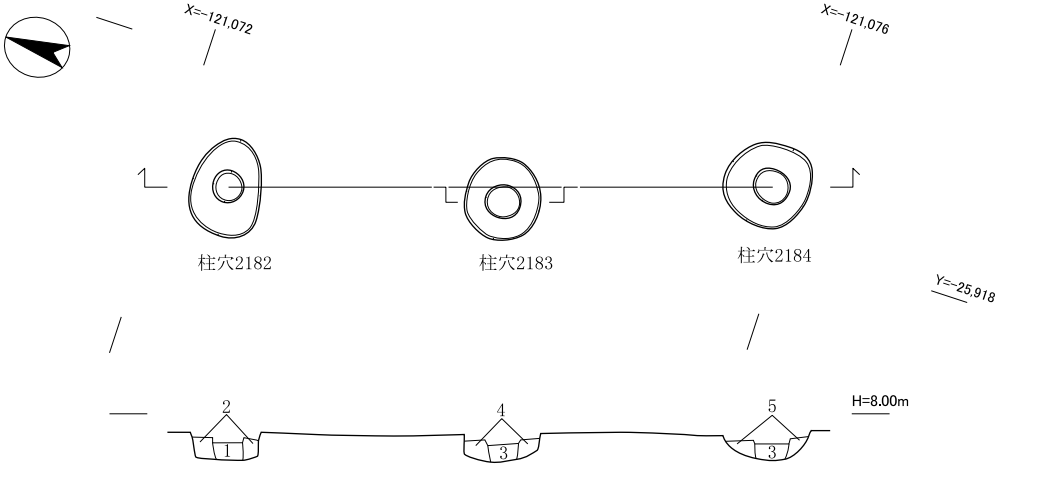
掘立柱建物2154実測図（1：80）

井戸2178



1　10YR5/4にぶい黄褐色　シルト　粗砂混
　土器片含
2　10Y5/1灰色　シルト　粗砂混　土器片含
3　7.5Y4/1灰色　シルト　土器片含
4　2.5Y4/4オリーブ褐色　粗砂～細砂
5　7.5Y3/2オリーブ黒色　シルト　炭・土器片含
6　10Y4/1灰色　シルト　φ1～2㎝の礫微量混
7　7.5Y3/2オリーブ黒色　シルト　炭・土器片含
8　10Y5/1灰色　シルト
9　7.5Y3/2オリーブ黒色　シルト　炭・土器片含
10　7.5Y4/2灰オリーブ色　シルト
11　10Y4/1灰色　シルト　炭含
12　7.5Y4/1灰色　シルト
13　10Y5/1灰色　シルト
14　10Y4/1灰色　シルト　炭含
15　10Y4/2オリーブ灰色　シルト
16　5Y5/2灰オリーブ色　シルト　炭含
17　7.5Y5/1灰色　シルト
18　5Y5/1灰色　粘土

柱列2182

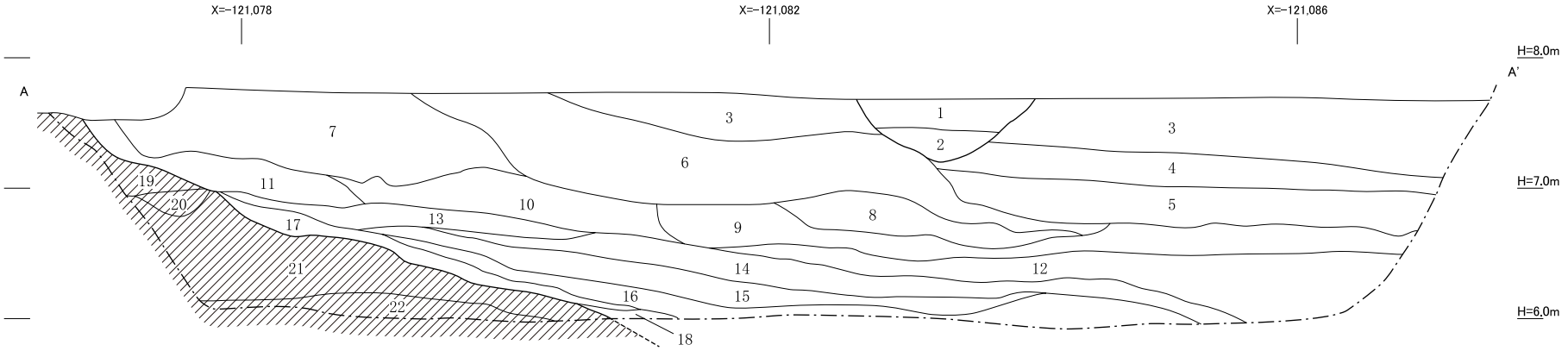


1　10YR5/4にぶい黄褐色　細砂　シルト多量混　炭微量含
2　2.5Y4/4オリーブ褐色　シルト　土器片少量含　炭微量含
3　10YR4/4褐色　細砂　炭微量含
4　10YR5/4にぶい黄褐色　細砂　炭微量含
5　10YR4/6褐色　細砂　炭微量含

井戸2178、柱列2182実測図（1：50）

遺構 図版21

流路2353東壁断面図（1：50）

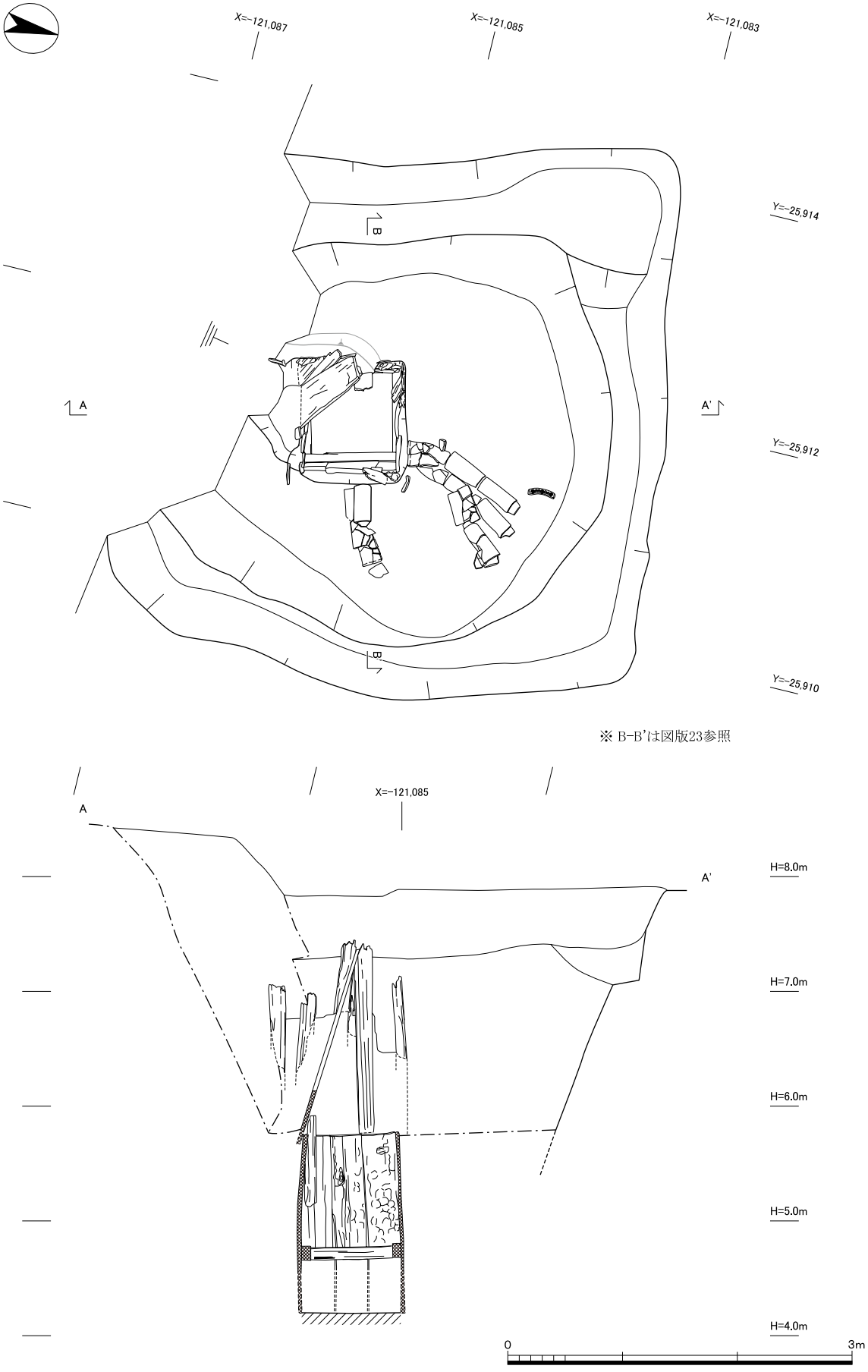


1 10YR6/4にぶい黄橙色 シルト ― 溝2187
2 10YR4/6褐色シルト ―
3 5Y4/2灰オリーブ色 細砂 ―
4 10YR4/3にぶい黄褐色 細砂
5 5Y4/2灰オリーブ色 細砂
6 2.5Y4/4オリーブ褐色 細砂
7 10YR4/3にぶい黄褐色 微砂 マンガン・炭・土器片含
8 7.5YR5/1褐灰色 シルト 炭・土器片含
9 5Y3/2オリーブ黒色 微砂
10 10YR5/6黄褐色 シルト
11 10YR4/3にぶい黄褐色 シルト ― 流路2353

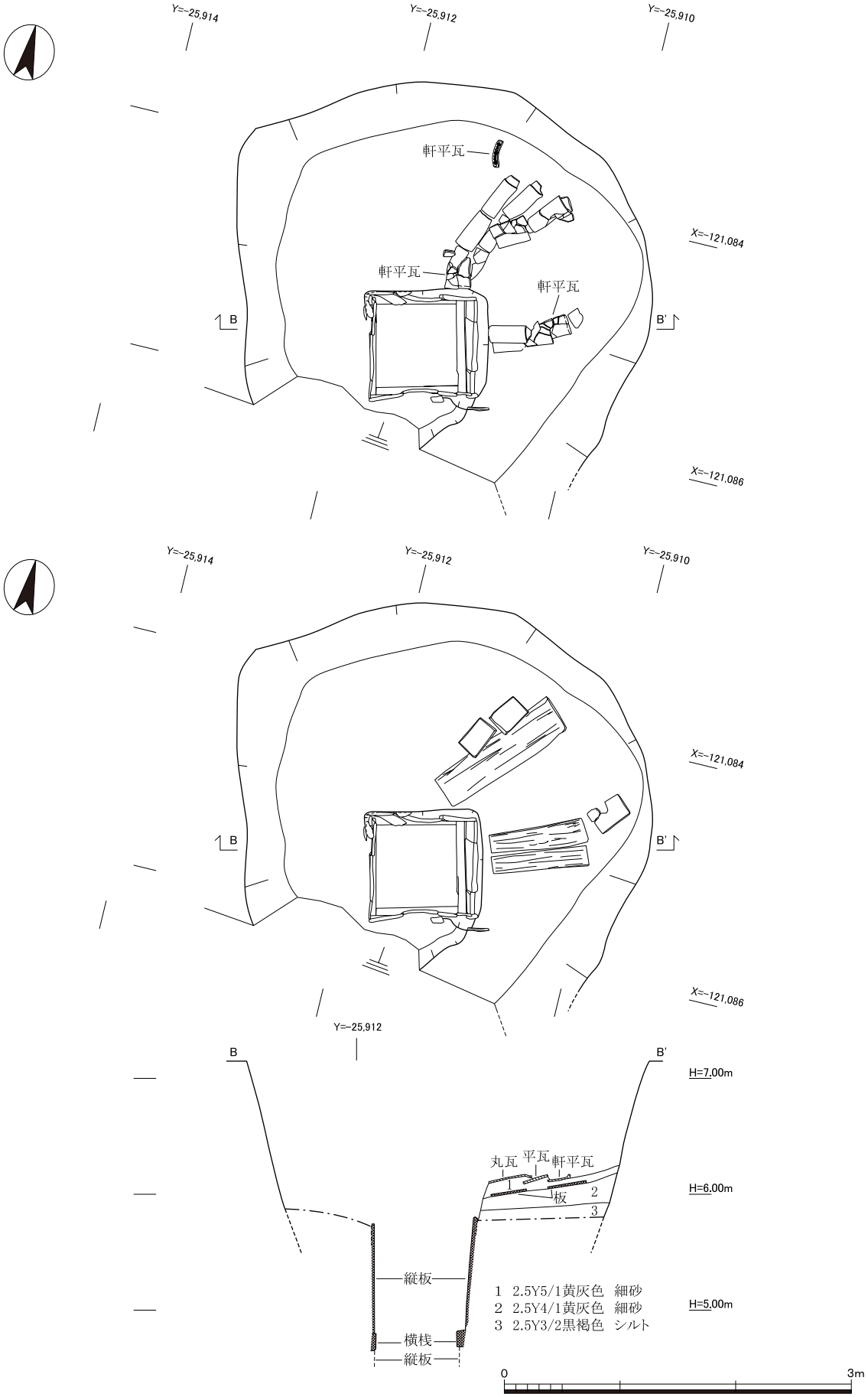
12 10YR4/4褐色 細砂
13 10YR4/6褐色 微砂
14 5Y3/2オリーブ黒色 微砂
15 7.5Y5/1灰色 細砂
16 7.5Y4/1灰色 微砂
17 2.5Y4/2暗灰黄色 微砂 土器片含
18 N4/0灰色 粘土 ― 流路2353
19 7.5YR4/2灰褐色 シルト
20 5Y4/2灰オリーブ色 シルト
21 10YR5/3にぶい黄褐色 微砂
22 10GY4/1暗緑灰色 シルト ― 基盤層

※ A-A'は図版5に対応する。断面ラインは北に対して8.73度東に振れる。

0 4m



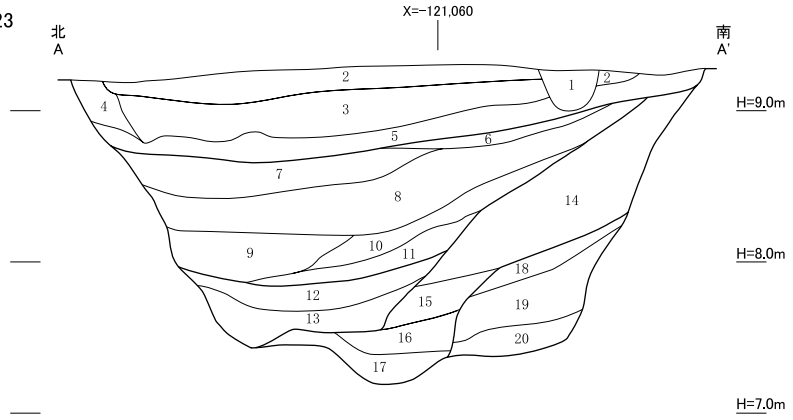
井戸2225実測図（１：50）



井戸2225瓦・板検出状況実測図（1：50）

堀2123・2299・2350断面図（1：50）

堀2123



1 10Y4/2オリーブ灰色 細砂 φ2～5cmの礫混
2 7.5Y5/2灰オリーブ色 細砂
3 5YR4/4にぶい赤褐色 粗砂 φ2～8cmの礫多量混 上面鉄分沈着
4 7.5Y4/2灰オリーブ色 極細砂
5 10Y3/2オリーブ黒色 極細砂
→ 最終整地

6 7.5Y4/1灰色 極細砂 炭・土師器片含、φ1～3cmの礫混
7 7.5Y3/1オリーブ黒色 極細砂 炭・土師器片含、φ3～10cmの礫混
8 7.5Y3/2オリーブ黒色 極細砂 炭・土師器片含、φ2～10cmの礫混
→ 堀2123 新新段階

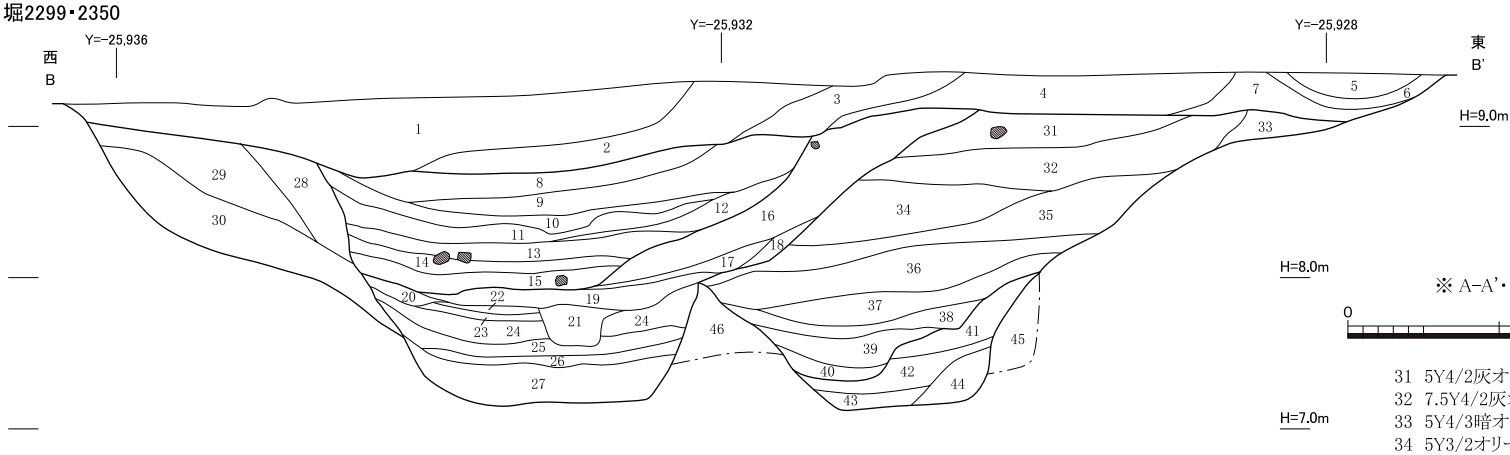
9 5Y4/1灰色 極細砂 炭・土師器片含、φ1～3cmの礫混
10 10Y3/1オリーブ黒色 極細砂 炭・土師器片含、φ1～3cmの礫含混
→ 堀2123 新古段階

11 7.5Y3/2オリーブ黒色 極細砂 土師器片含、φ1～2cmの礫含混
12 7.5Y3/1オリーブ黒色 極細砂 炭・土師器片多量含
13 5Y3/1オリーブ黒色 極細砂 炭含
→ 堀2123 新古段階

14 10Y4/1灰色 極細砂 炭・土師器片少量含
15 7.5Y4/2灰オリーブ色 極細砂 粘土ブロック含
16 10Y4/1灰色 シルト 粘土ブロック含
17 10Y3/2オリーブ黒色 シルト
→ 堀2123 中段階

18 2.5Y5/1 黄灰色 シルト
19 10Y5/1灰色 シルト 黄色砂ブロック含
20 7.5Y4/1灰色 シルト
→ 堀2123 古段階

堀2299・2350



※ A-A'・B-B'は図版6に対応する。

1 5Y3/2オリーブ黒色 細砂
2 5Y4/3暗オリーブ黒色 細砂 土師器片含
3 5Y5/1灰色 シルト
4 5Y5/2オリーブ灰色 細砂
5 5Y6/3オリーブ黄色 細砂
6 5Y4/3暗オリーブ色 細砂
7 10YR4/6褐色 細砂 土師器片含
→ 最終整地

8 5Y4/2灰オリーブ色 シルト
9 5Y5/2灰オリーブ色 シルト 土師器片含
10 5Y4/2灰オリーブ色 細砂 土師器片含
11 5Y7/2灰白色 砂礫(洪水堆積)
12 5Y4/3暗オリーブ色 細砂
13 5Y4/2灰オリーブ色 極細砂 貝殻多量含
14 5Y3/1オリーブ黒色 シルト
15 5Y3/2オリーブ黒色 極細砂 木片含
→ 堀2350 新段階

16 5Y4/1灰色 細砂
17 5Y3/2オリーブ黒色 細砂
18 2.5Y4/2暗灰黄色 細砂
19 5Y7/1灰白色 砂礫(洪水堆積)
→ 堀2350 中段階

20 5Y4/1灰色 細砂
21 7.5Y3/2オリーブ黒色 細砂 5Y7/1灰白色砂礫含(洪水堆積)
22 2.5Y4/2暗灰黄色 細砂
23 5Y7/2灰白色 砂礫(洪水堆積)
24 5Y3/2オリーブ黒色 細砂
25 2.5Y4/2暗灰黄色 極細砂
26 5Y3/2オリーブ黒色 シルト
27 7.5Y3/2オリーブ黒色 シルト
→ 堀2350 中段階

28 5Y5/1灰色 シルト 土師器片含
29 2.5Y5/1黄灰色 シルト
30 5Y3/1オリーブ黒色 シルト
→ 堀2350 古段階

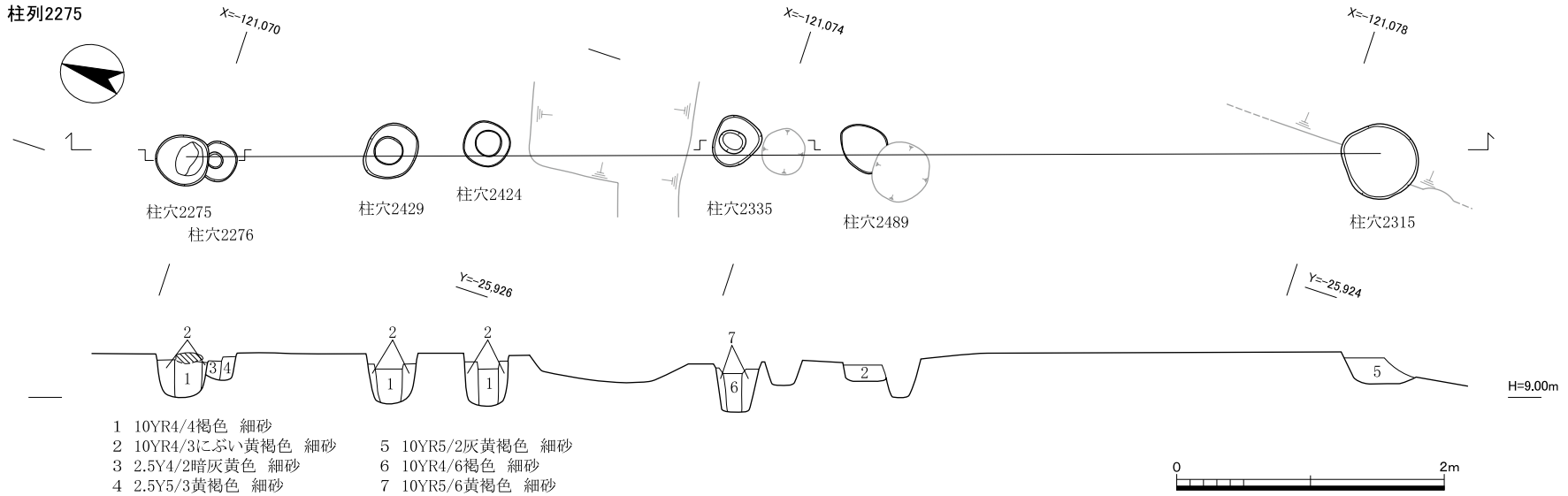
31 5Y4/2灰オリーブ色 細砂
32 7.5Y4/2灰オリーブ色 シルト
33 5Y4/3暗オリーブ色 シルト
34 5Y3/2オリーブ黒色 細砂 土師器片含
35 7.5Y4/2灰オリーブ色 シルト
36 7.5Y4/1灰色 細砂 土師器片含
37 7.5Y3/2オリーブ黒色 細砂
38 5Y5/1灰色 砂礫
39 5Y3/2オリーブ黒色 細砂
40 7.5Y3/1オリーブ黒色 シルト
→ 堀2299 新段階

41 5Y4/2灰オリーブ色 シルト
42 5Y3/2オリーブ黒色 シルト
43 7.5Y4/2灰オリーブ色 シルト
44 5Y4/2灰オリーブ色 シルト
→ 堀2299 古段階

45 7.5Y4/1灰色 シルト
46 5Y3/1オリーブ黒色 シルト
→ 基盤層

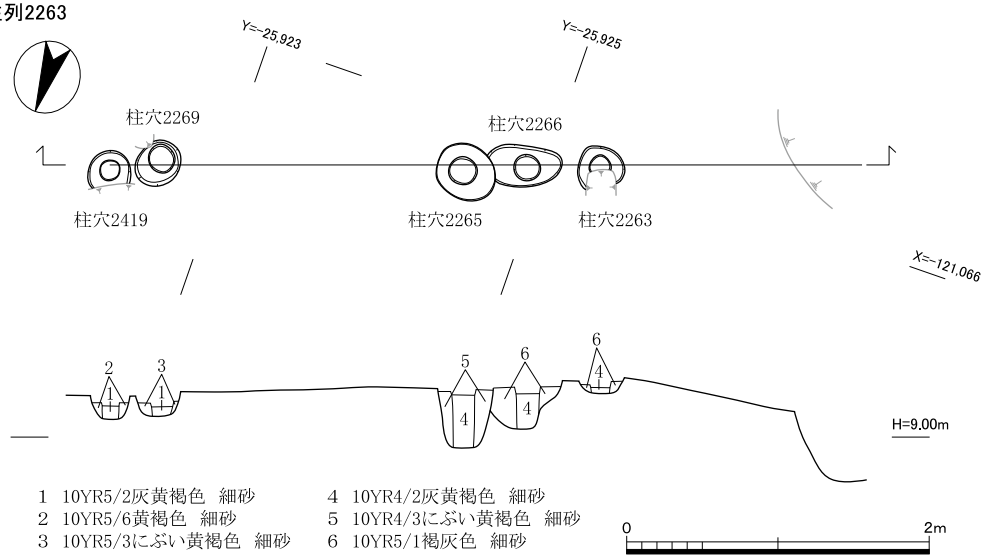
柱列2263・2275・2280実測図（1：50）

柱列2275



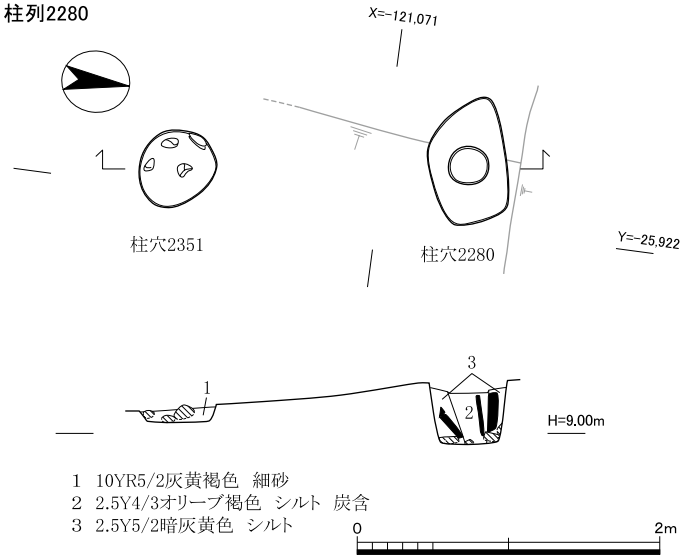
1　10YR4/4褐色　細砂
2　10YR4/3にぶい黄褐色　細砂
3　2.5Y4/2暗灰黄色　細砂
4　2.5Y5/3黄褐色　細砂
5　10YR5/2灰黄褐色　細砂
6　10YR4/6褐色　細砂
7　10YR5/6黄褐色　細砂

柱列2263



1　10YR5/2灰黄褐色　細砂
2　10YR5/6黄褐色　細砂
3　10YR5/3にぶい黄褐色　細砂
4　10YR4/2灰黄褐色　細砂
5　10YR4/3にぶい黄褐色　細砂
6　10YR5/1褐灰色　細砂

柱列2280



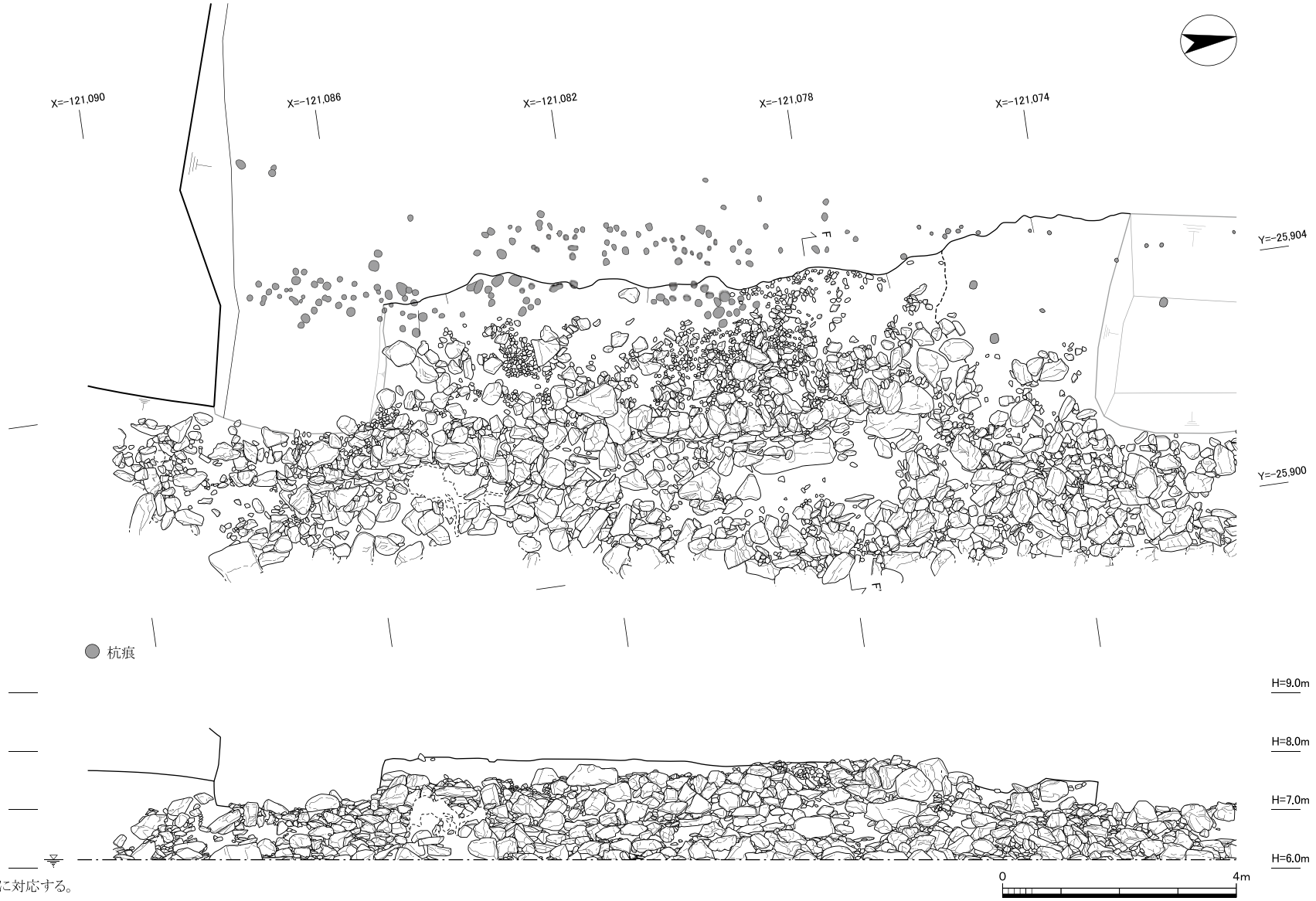
1　10YR5/2灰黄褐色　細砂
2　2.5Y4/3オリーブ褐色　シルト　炭含
3　2.5Y5/2暗灰黄色　シルト

図版26 遺構

護岸2125実測図1（1：100）

※ A-A'～E-E'は図版28・29に対応する。

護岸2125実測図２（１：100）

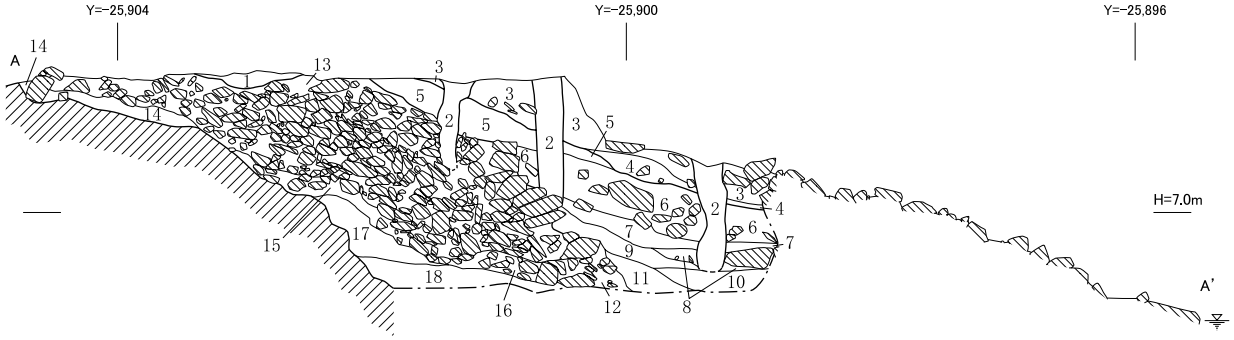


※ F–F'は図版29に対応する。

図版27 遺構

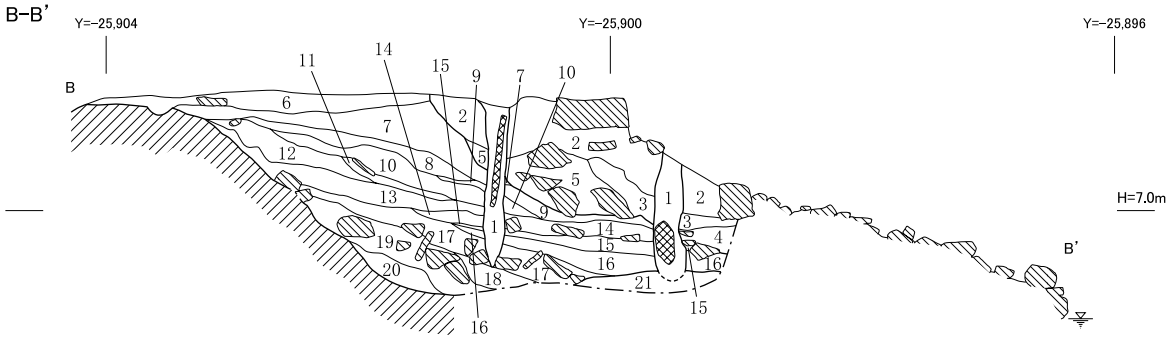
図版28 遺構

A-A'（2区北壁）



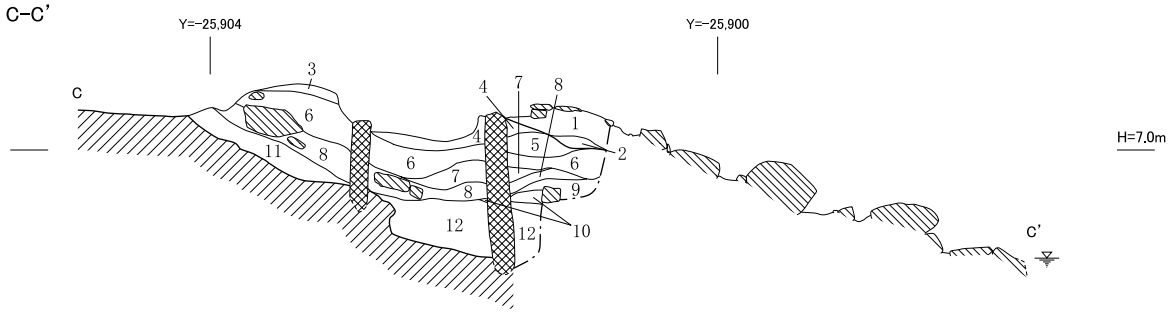
1 10YR4/3にぶい黄褐色 シルト φ1～12cmの礫少量混
2 10YR4/2灰黄褐色 細砂 φ1～4cmの礫混 木片少量含(杭埋土)
3 2.5Y4/3オリーブ褐色 シルト φ1～7cmの礫多量混 ┐護岸Ⅰ層
4 2.5Y5/1黄灰色 シルト φ1～5cmの礫少量混 ┘
5 2.5Y5/3黄褐色 粗砂礫 φ0.5～4cmの礫混 ┐護岸Ⅱa層
6 2.5Y4/2暗灰黄色 粗砂 φ0.5～7cmの礫多量混 ┘
7 2.5Y4/1黄灰色 粗砂礫 φ0.3～2cmの礫多量混 ┐
8 2.5Y3/1黒褐色 粗砂礫 φ0.3～2cmの礫多量、φ2～5cmの礫少量混 │護岸Ⅱb層
9 10YR3/4暗褐色 粗砂礫 φ0.3～2cmの礫多量、φ4～7cmの礫少量混 ┘
10 10YR3/2黒褐色 細砂 木片少量含 ┐
11 7.5YR3/2黒褐色 粗砂 φ0.3～2cmの礫混 ┘護岸Ⅱc層
12 7.5YR3/1黒褐色 粗砂 φ0.3～5cmの礫混 ┐
13 10YR3/3暗褐色 礫 φ0.3～1cmの礫多量混 │
14 10YR5/1褐灰色 シルト │
15 10YR4/2灰黄色 シルト φ0.5～10cmの礫混 │護岸Ⅲ層
16 2.5Y4/2暗灰黄色 粗砂 5Y4/1灰色 粘土ブロック混 │
17 5Y4/1灰色 シルト 粗砂多量混 │
18 5Y4/1灰色 粘土 ┘

B-B'



1 7.5YR3/2黒褐色 細砂 φ1～4cmの礫多量混(杭埋土)
2 2.5Y4/3オリーブ褐色 シルト 粗砂混 ┐
3 2.5Y5/1黄灰色 シルト φ1～5cmの礫少量混 炭少量含 │護岸Ⅰ層
4 2.5Y4/3オリーブ褐色 砂礫 φ0.5～2cmの礫混 │
5 2.5Y4/2暗灰黄色 細砂 粗砂・φ0.5～10cmの礫混 ┘
6 10YR4/3にぶい黄褐色 細砂 φ0.5～5cmの礫少量混 ┐
7 10YR3/4暗褐色 粗砂礫 φ0.5～4cmの礫混 │
8 10YR3/3暗褐色 粗砂 φ0.5～3cmの礫多量混 │
9 2.5Y5/2暗灰黄色 シルト φ2～5cmの礫少量混 │護岸Ⅱa層
10 5Y7/1灰白色 粗砂 │
11 5Y4/2灰オリーブ色 粗砂 φ1～2cmの礫少量混 土器片少量含 ┘
12 2.5Y4/3オリーブ褐色 細砂 φ0.5～3cmの礫少量混 炭少量含 ┐護岸Ⅱa層
13 2.5Y4/2暗灰黄色 シルト φ5～8cmの礫少量混 ┘
14 2.5Y4/3オリーブ褐色 砂礫 φ0.5～2cmの礫混 ┐
15 7.5YR3/2黒褐色 砂礫 φ0.3～0.5cmの礫多量混 │
16 10YR3/4暗褐色～2.5Y3/2黒褐色 粗砂礫 φ0.3～1cmの礫多量、φ2～4cmの礫少量混 │護岸Ⅱb層
17 2.5Y4/2暗灰黄色 粗砂 φ0.5～5cmの礫混 │
18 5Y4/2灰オリーブ色 粗砂 │
19 5Y3/2オリーブ黒色 シルト │
20 2.5Y4/2暗灰黄色 砂礫 φ0.5～2cmの礫混 ┘
21 2.5Y4/3オリーブ褐色 粗砂 ──護岸Ⅱc層

C-C'



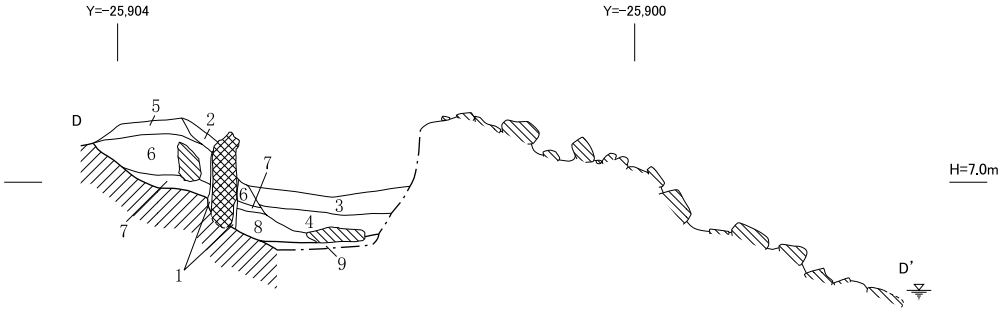
1 10YR5/8黄褐色 細砂～2.5Y5/1黄褐色 シルト φ1～5cmの礫多量混 ┐護岸Ⅰ層
2 2.5Y4/3オリーブ褐色 粗砂礫 φ0.5～1cmの礫混 ┘
3 10YR6/2灰黄褐色 細砂 φ0.5～3cmの礫多量混 ┐
4 10YR5/4にぶい黄褐色 砂礫 φ0.5～2cmの礫混 │護岸Ⅱa層
5 2.5Y4/2暗灰黄色 礫 φ2～3cmの礫混 ┘
6 7.5YR2/1黒褐色～7.5YR2/2暗赤褐色 砂礫 φ0.5～4cmの礫混 ┐護岸Ⅱb層
7 2.5Y4/2暗灰黄色 細砂 φ0.5～2cmの礫混 と10YR3/2黒褐色 砂礫 φ0.5cmの礫多量混の互層 ┐
8 10YR2/1黒褐色 砂礫 φ0.5～3cmの礫多量混 │
9 7.5YR2/2暗赤褐色 砂礫 φ0.5～1cmの礫多量混 │護岸Ⅱb層
10 2.5Y3/2黒褐色 粗砂礫 φ1～3cmの礫混 │
11 5Y4/2灰オリーブ色 シルト ┘
12 2.5Y4/3オリーブ褐色 粗砂 φ0.5～3cmの礫混 ──護岸Ⅱc層

0 3m

※ A-A'～C-C'は図版26に対応する。

護岸2125断面図1 （1：60）

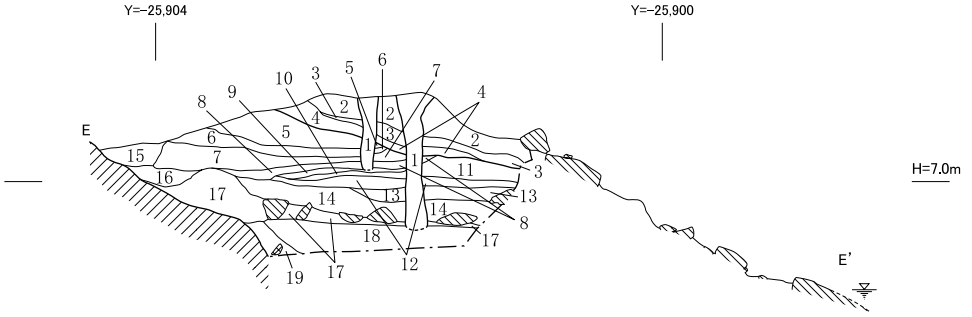
D-D'



1 7.5YR3/4暗褐色 細砂(杭埋土)
2 10YR6/2灰黄褐色 細砂 φ0.5～3cmの礫多量混
3 2.5Y5/2暗灰黄色 粗砂～細砂 φ0.5～3cmの礫混
4 5YR2/4極暗赤褐色 砂礫
→ 護岸Ⅱa層

5 7.5YR5/8明褐色 砂礫
6 5YR4/8赤褐色 砂礫
7 2.5Y4/3オリーブ褐色 細砂
8 7.5YR3/2黒褐色 砂礫 φ2～4cmの礫多量混
→ 護岸Ⅱb層
9 2.5Y4/3オリーブ褐色 砂礫 φ0.3～0.5cmの礫多量混 ― 護岸Ⅱc層

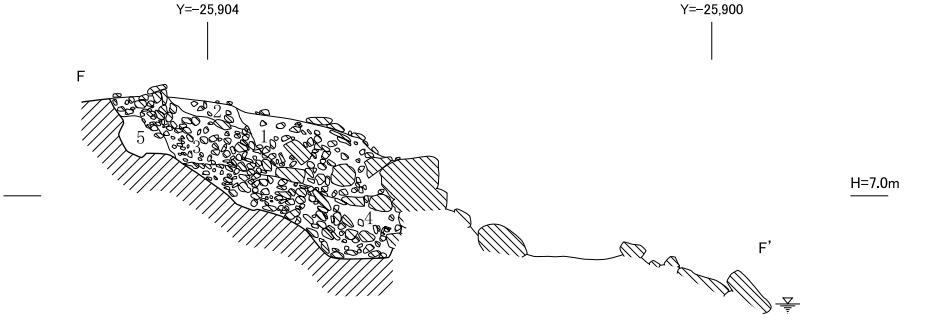
E-E'



1 2.5Y4/1黄灰色 粗砂礫 φ0.5～6cmの礫混(杭埋土)
2 2.5Y5/2暗灰黄色～10YR3/3暗褐色 粗砂礫 φ0.5～5cmの礫混
3 5Y7/2灰白色 粗砂
4 2.5Y5/2暗灰黄色 粗砂礫 φ1～3cmの礫混
→ 護岸Ⅰ層
5 2.5Y4/3オリーブ褐色 粗砂 φ0.5～7cmの礫多量混
6 10YR3/3暗褐色～2.5Y4/2暗灰黄色 粗砂礫 φ1～3cmの礫多量、φ4～7cmの礫少量混
7 2.5Y4/2暗灰黄色～2.5Y5/2暗灰黄色 粗砂礫 φ1～3cmの礫多量、φ4～6cmの礫少量混
8 10YR4/3にぶい黄褐色 粗砂礫 φ0.3～3cmの礫多量混
→ 護岸Ⅱa層

9 2.5Y7/1灰白色 粗砂
10 7.5YR5/2灰褐色 粗砂礫 φ0.3～1cmの礫混
11 2.5Y4/3オリーブ褐色 粗砂礫 φ0.3～3cmの礫混
12 2.5Y4/2暗灰黄色 粗砂礫 φ0.3～3cmの礫多量混
13 10YR4/3にぶい黄褐色 粗砂礫 φ0.5～5cmの礫混
14 2.5Y3/2黒褐色～10YR3/2黒褐色 粗砂礫 φ0.3～6cmの礫混
15 5YR2/3極暗赤褐色～5YR5/6明赤褐色 粗砂礫 φ0.3～3cmの礫混
16 7.5YR5/6明褐色 粗砂礫 φ0.5～5cmの礫混
17 5YR2/3極暗赤褐色～5YR4/6赤褐色 粗砂礫 φ0.5～3cmの礫多量混
→ 護岸Ⅱb層
18 2.5Y4/2暗灰黄色 粗砂礫 φ0.5～6cmの礫混
19 2.5Y3/2黒褐色 粗砂 2.5Y4/3オリーブ褐色 シルトブロック・φ1～3cmの礫混
→ 護岸Ⅱc層

F-F'



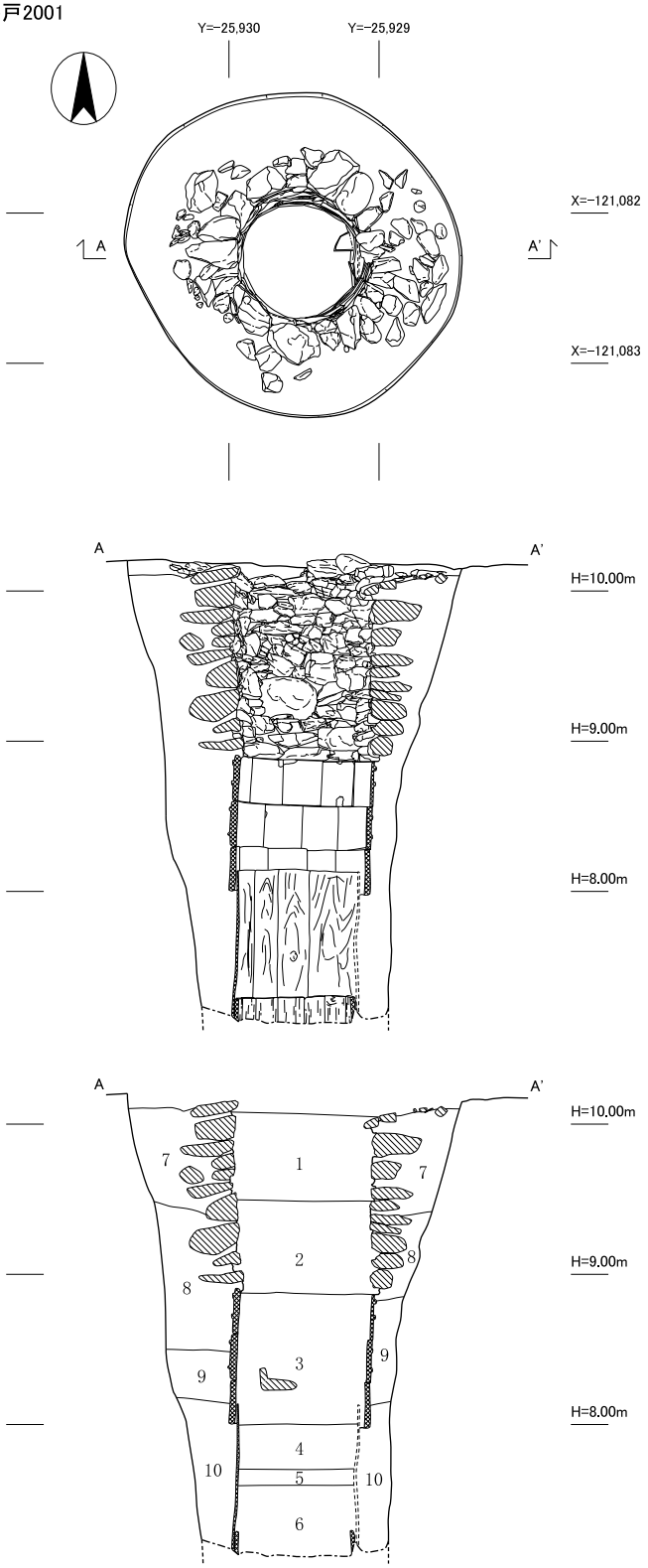
1 7.5YR5/1褐灰色 シルト～7.5YR4/2灰褐色 粗砂 φ1～8cmの礫多量、φ20cmの礫少量混
2 10YR5/1褐灰色 粗砂礫 φ0.5～7cmの礫混
3 10YR4/1褐灰色 細砂 φ0.5～15cmの礫多量混
4 7.5YR4/2褐色 粗砂礫 φ0.5～15cmの礫多量混 2.5Y5/2暗灰黄色 シルトブロック少量混
5 5Y5/1灰色 シルト
→ 護岸Ⅲ層

※ D-D'・E-E'は図版26、F-F'は図版27に対応する。

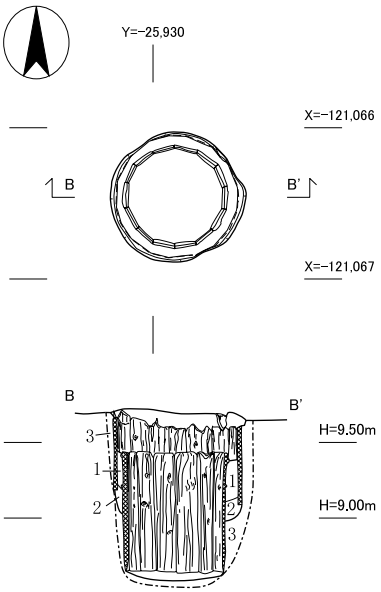
0 3m

護岸2125断面図２（１：60）

井戸2001



井戸2138

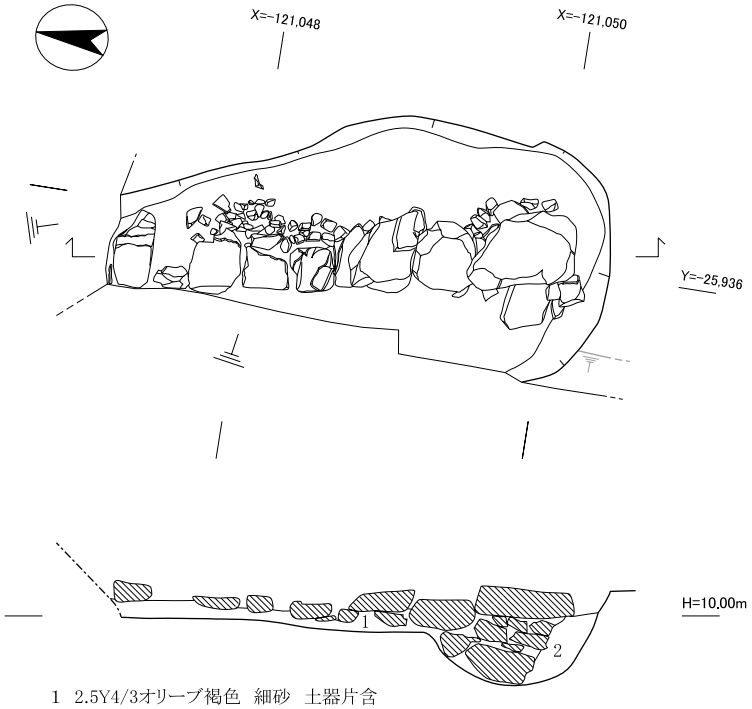


1　10YR5/3～4にぶい黄褐色　砂礫
　φ6㎝以下の礫・粘土少量混
2　7.5Y4/1灰色　粘土　砂微量混
3　10Y4/1灰色　粘土

1　10YR5/2灰黄褐色　粗砂　φ2～5㎝の礫混
2　10YR3/2黒褐色　シルト
3　5Y3/2オリーブ黒色　粘土
4　5Y4/1灰色　砂礫　φ1～10㎝の礫多量混　瓦片含
5　5Y4/1灰色　砂礫　黄灰色細砂混　瓦片多量含
6　2.5Y5/2暗灰黄色　粘土
　φ4～10㎝の礫多量混 φ20～40㎝の礫少量混
7　2.5Y5/3黄褐色　シルト～細砂　土器片含
8　5GY6/1オリーブ灰色　シルト
9　5GY6/1オリーブ灰色　細砂　粘性有
10　2.5Y5/1黄灰色　細砂

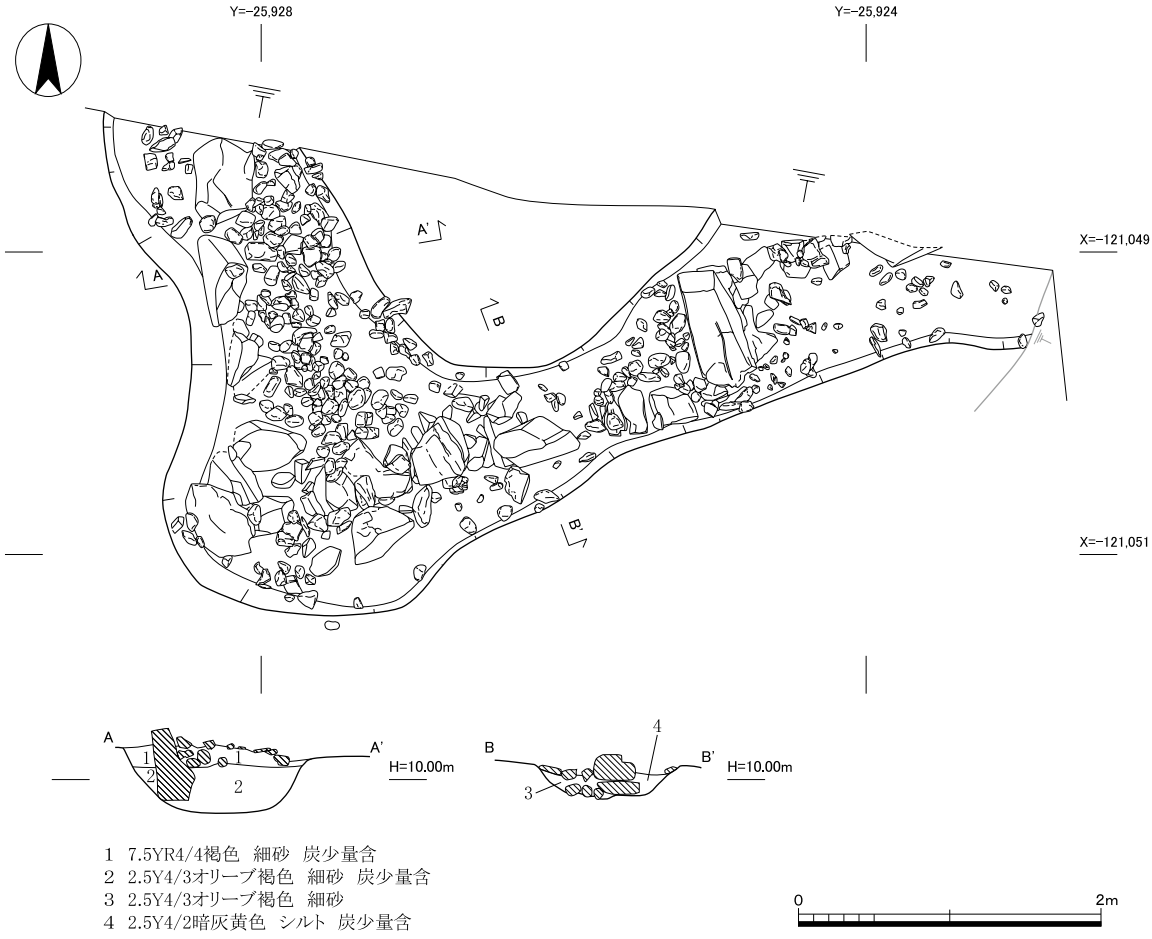
井戸2001・2138実測図（1：50）

地業2010



1 2.5Y4/3オリーブ褐色 細砂 土器片含
2 7.5Y4/1灰色 粘土 炭・瓦・土器片含

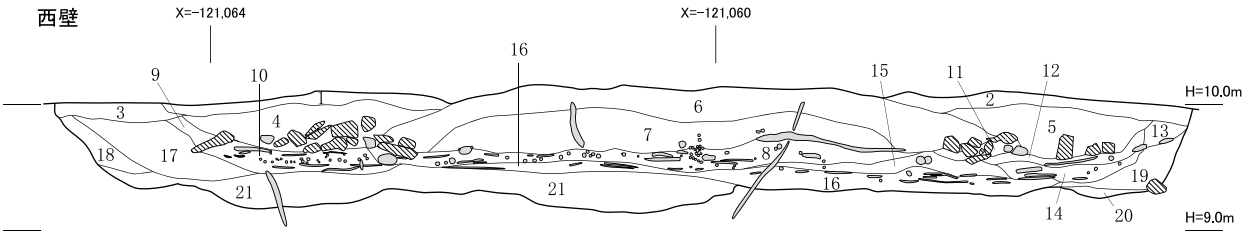
地業2012



1 7.5YR4/4褐色 細砂 炭少量含
2 2.5Y4/3オリーブ褐色 細砂 炭少量含
3 2.5Y4/3オリーブ褐色 細砂
4 2.5Y4/2暗灰黄色 シルト 炭少量含

地業2010・2012実測図（1：50）

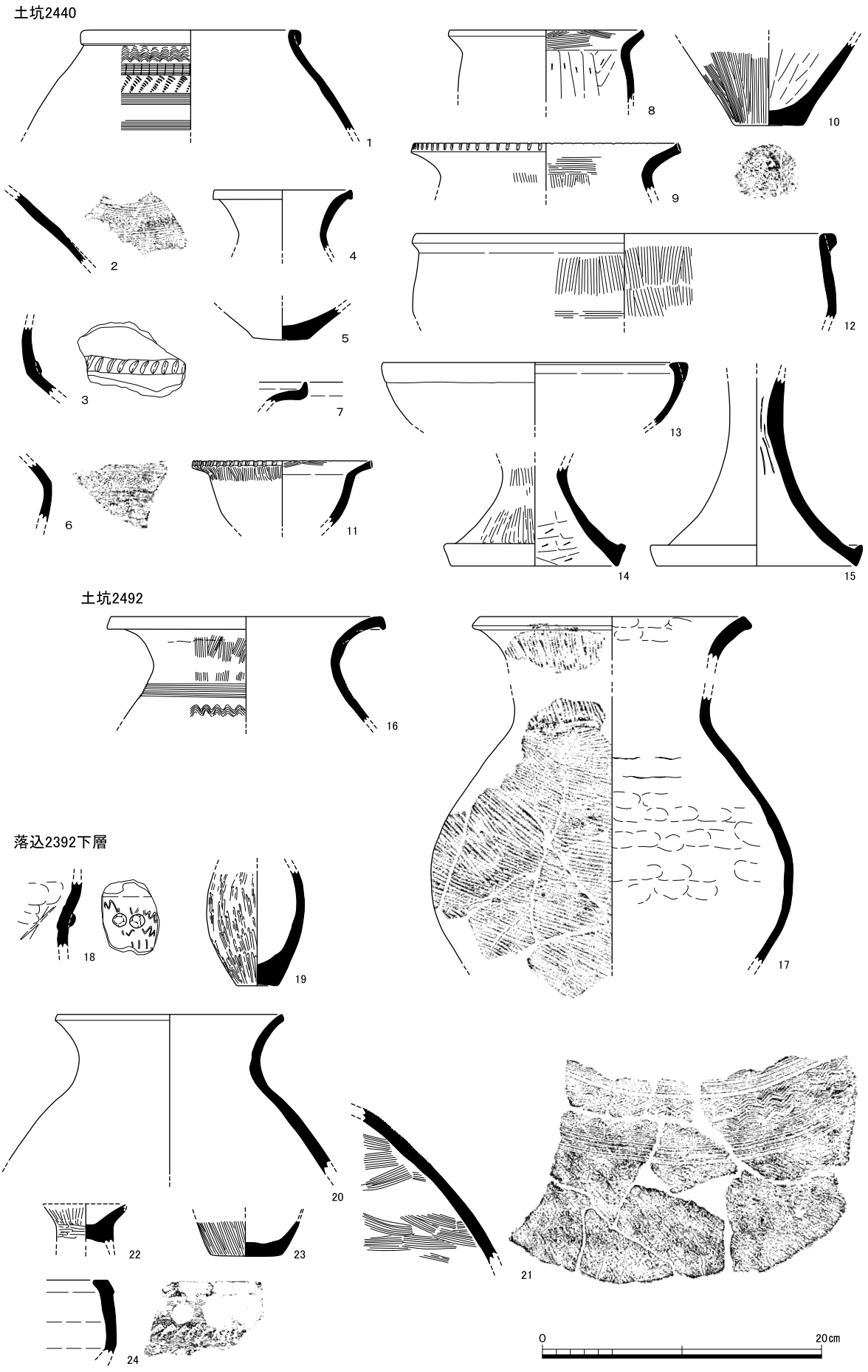
地業2135実測図（1：80）



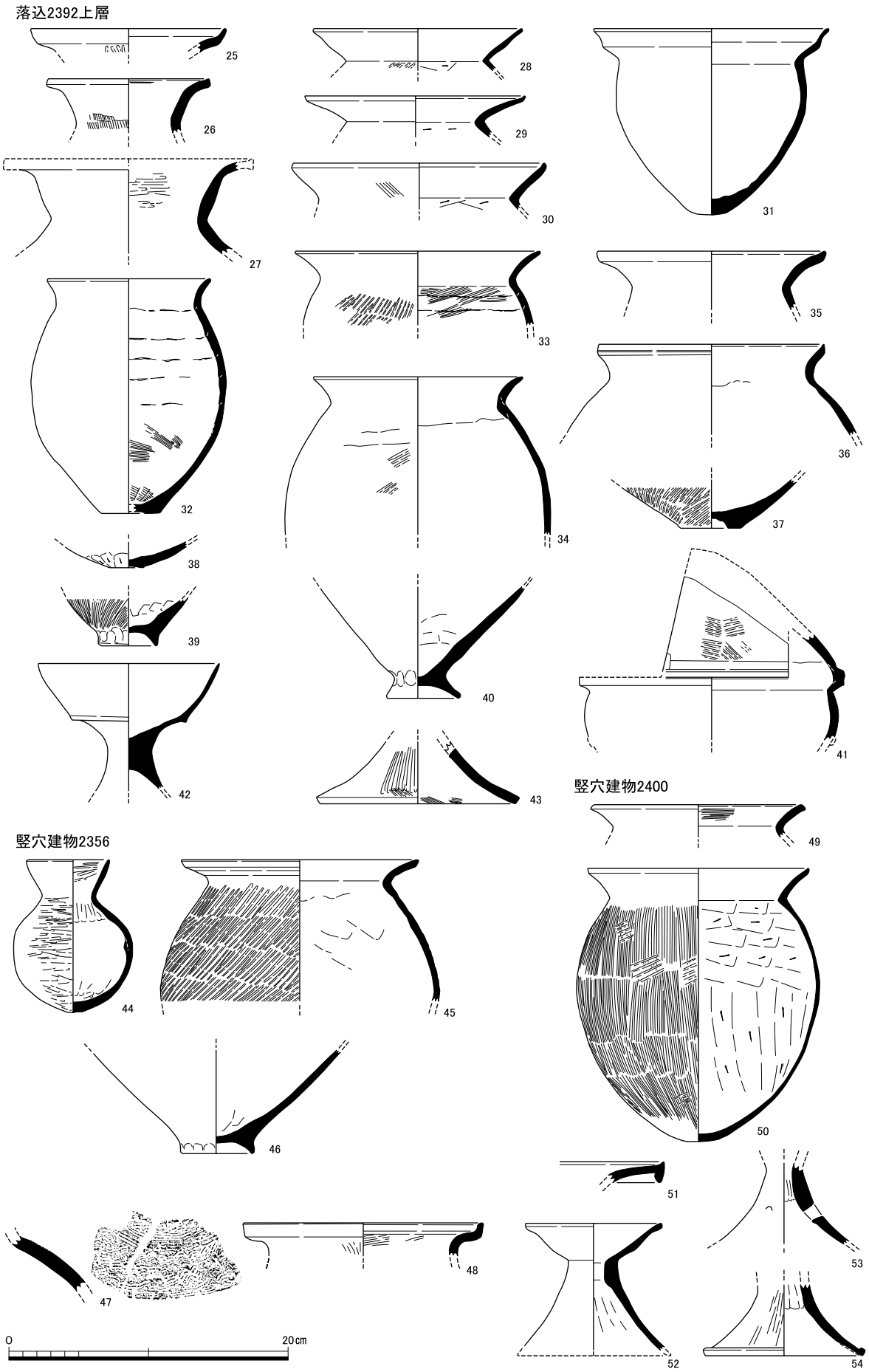
1 5Y4/1灰色 砂
2 2.5Y4/1黄灰色 微砂
3 10YR6/6明黄褐色 細砂 φ0.5～1cmの礫混
4 10YR5/3にぶい黄褐色 粗砂
5 10YR5/4にぶい黄褐色 粗砂
6 2.5Y5/2暗灰黄色 粗砂 φ1～7cmの礫混
7 2.5Y6/2灰黄色 粗砂～細砂 φ0.5～7cmの礫混
8 2.5Y6/1黄灰色 粗砂 φ0.5～3cmの礫混 木片多量含
9 N5/0灰色 粘土
10 10YR6/2灰黄褐色 粗砂 木片多量含
11 10YR4/3にぶい黄褐色 粗砂 φ1～3cmの礫混 木片含
12 2.5Y5/2暗灰黄色 粗砂 木片含
13 2.5Y5/1黄灰色 粘土
14 2.5Y6/2灰黄色 粗砂 木片含
15 2.5Y5/1黄灰色 粗砂 粘土混 木片含
16 5Y6/1灰色 粗砂 粘土混 木片含
17 10Y5/1灰色 シルト φ0.5～1cmの礫・まだらに砂混 炭・土器片含
18 2.5Y5/2暗灰黄色 微砂 φ0.5～1cmの礫混 炭含
19 7.5Y5/1灰色 シルト φ2～4cmの礫・砂混
20 2.5Y4/1黄灰色 シルト
21 5Y4/3暗オリーブ色 細砂

0 2m

地業2135掘り下げ状況実測図（1：60）

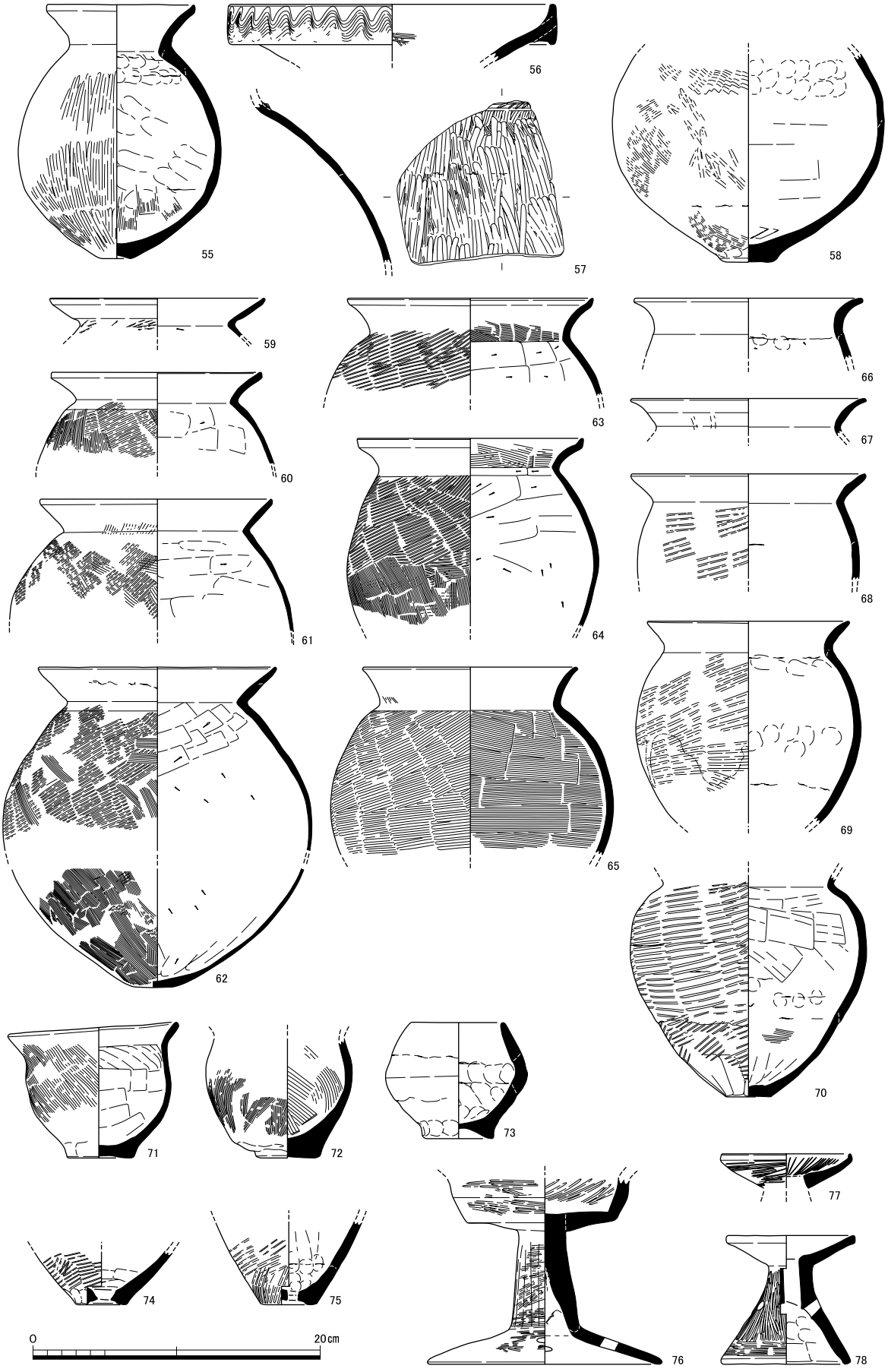


土坑2440・2492、落込2392下層出土土器実測図（1 ： 4）



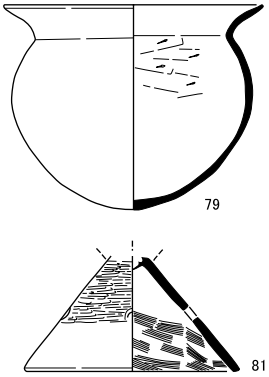
落込2392上層、竪穴建物2356、竪穴建物2400出土土器実測図（１：４）

竪穴建物2240

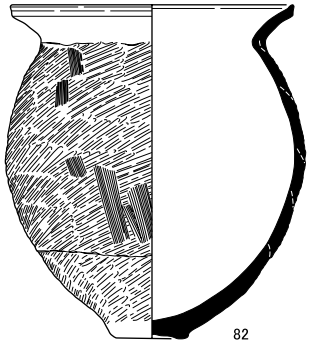


竪穴建物2240出土土器実測図（１：４）

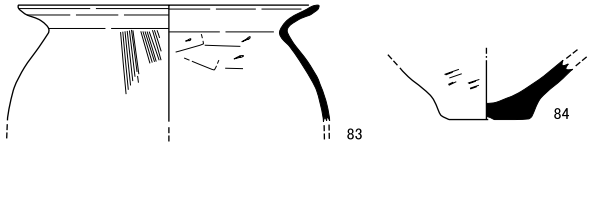
竪穴建物2410



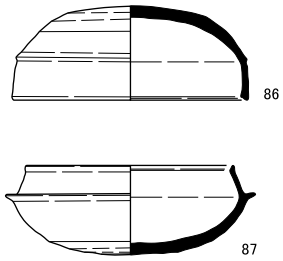
土坑2404



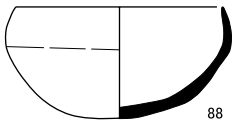
竪穴建物2368



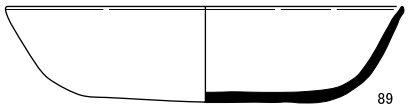
溝2325



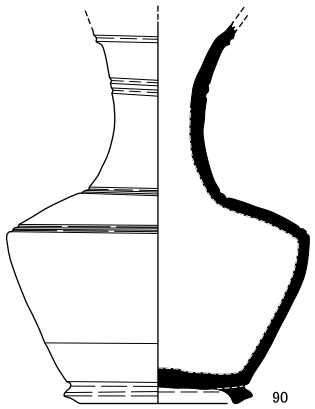
流路2353



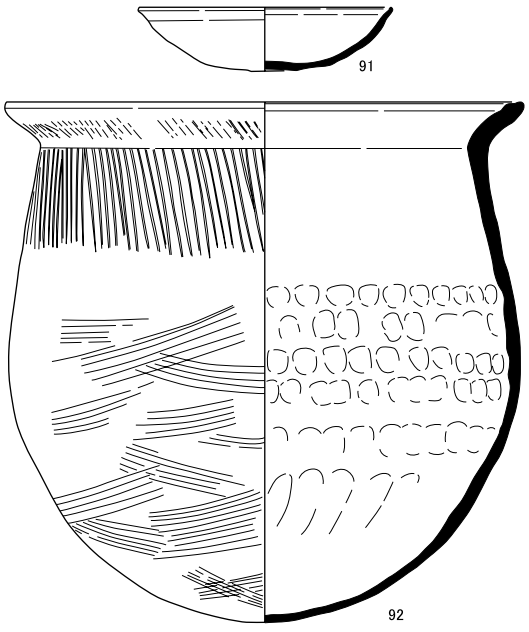
2区断割



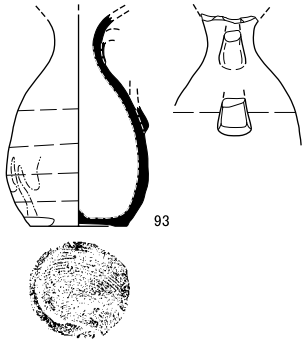
掘立柱建物2154



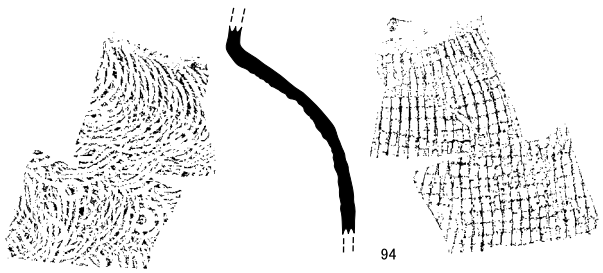
土坑2326



溝2187

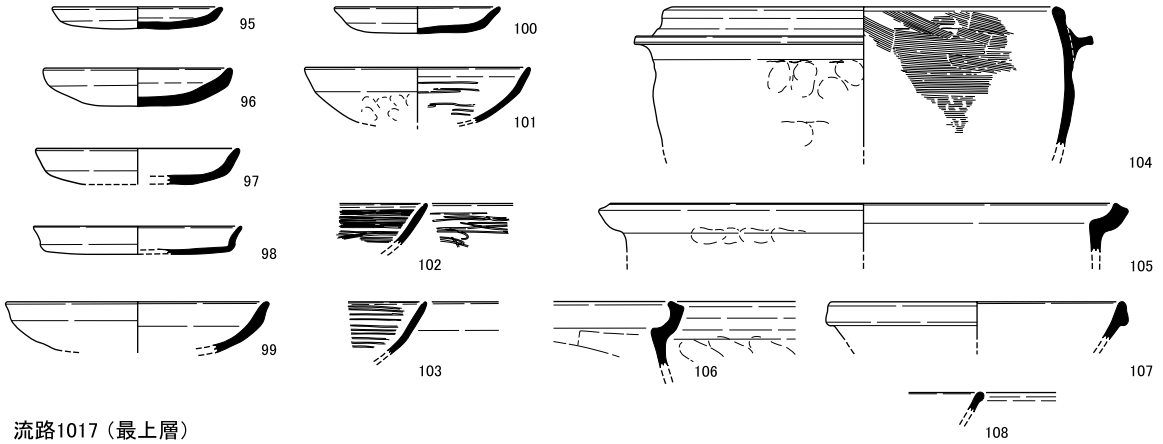


井戸2178



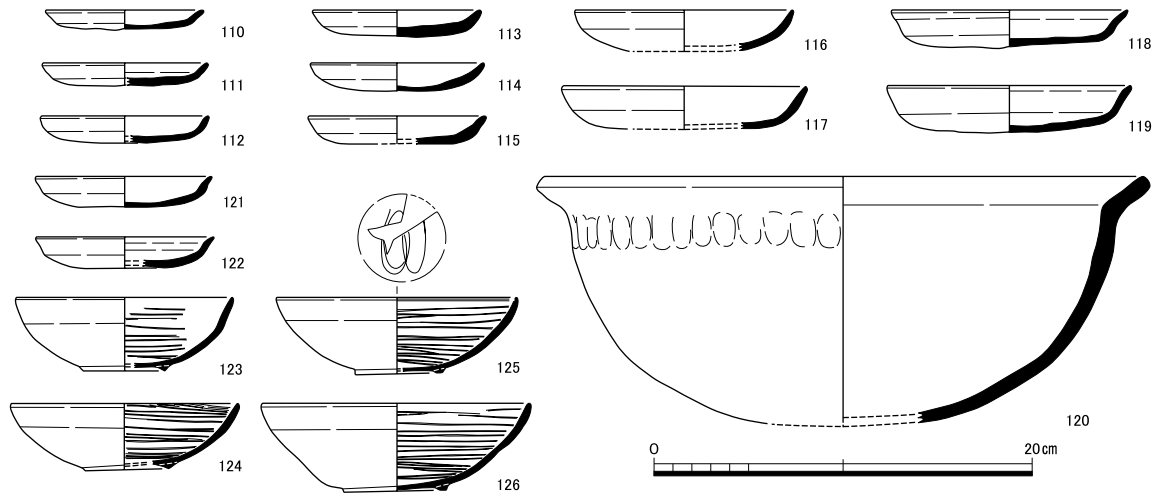
竪穴建物2410、土坑2404、竪穴建物2368、溝2325、流路2353、２区断割、掘立柱建物2154、土坑2326、溝2187、井戸2178出土土器実測図（１：４）

流路1017



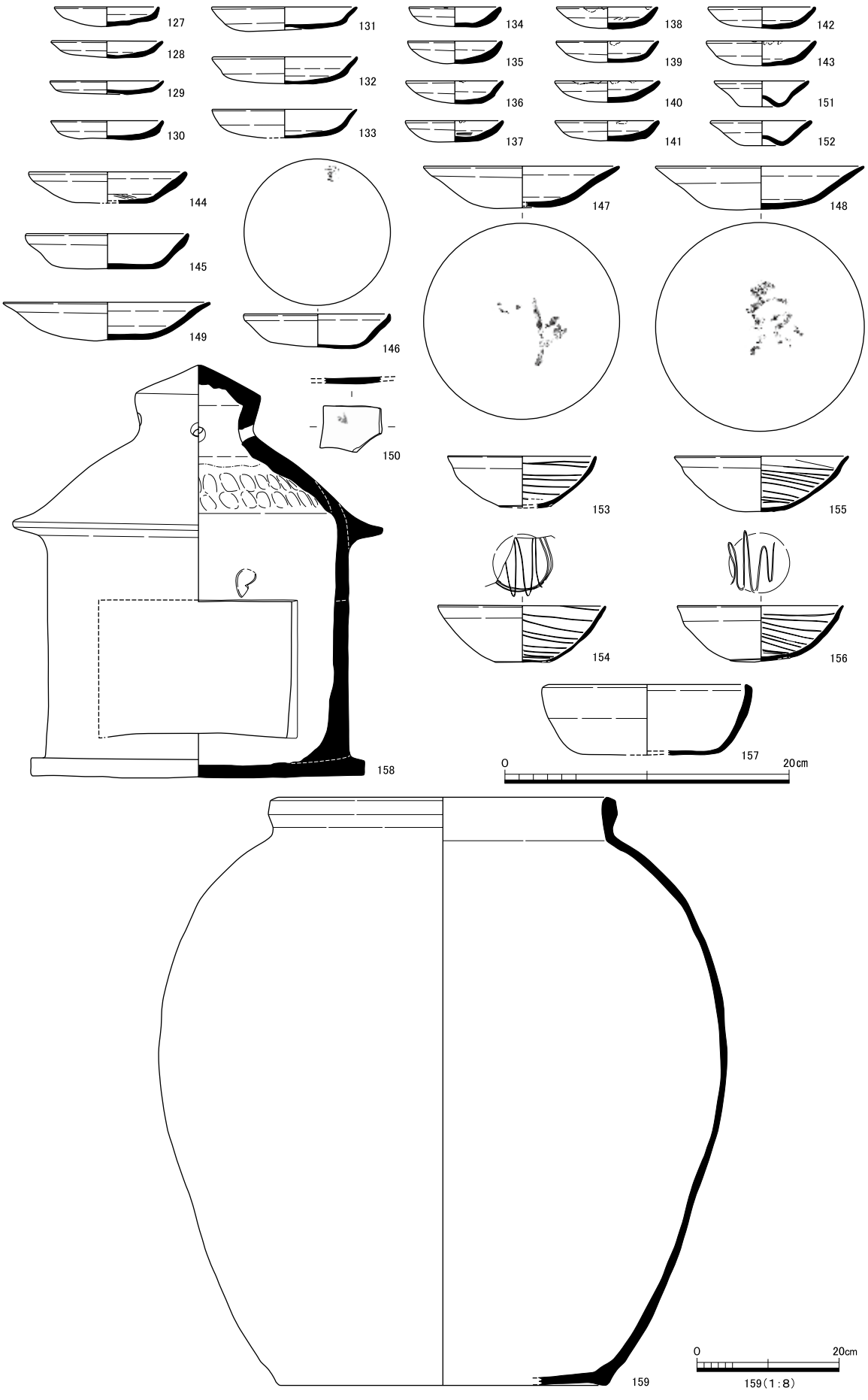
流路1017（最上層）

井戸2225



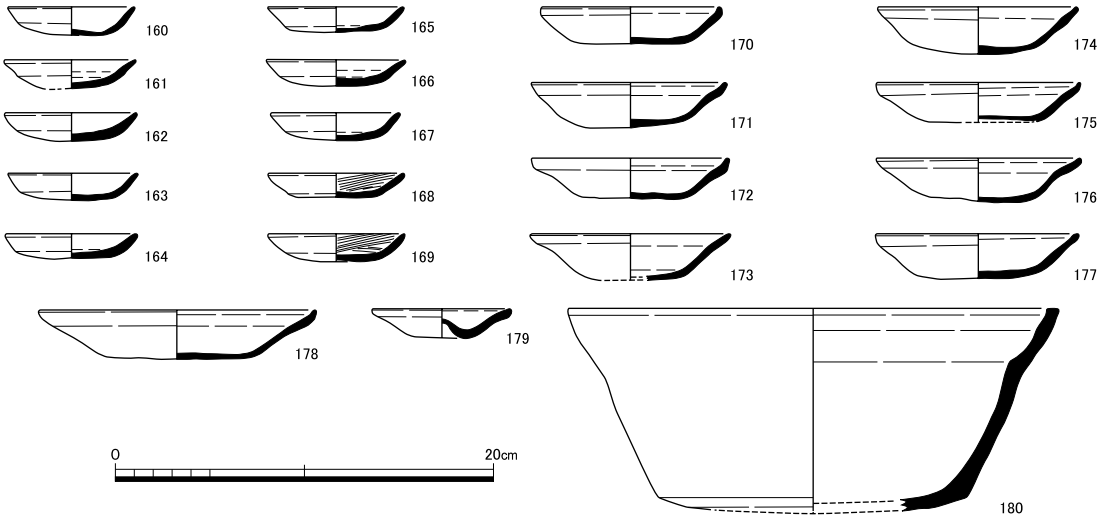
流路1017、流路1017（最上層）、井戸2225出土土器実測図（１：４）

堀2123古段階

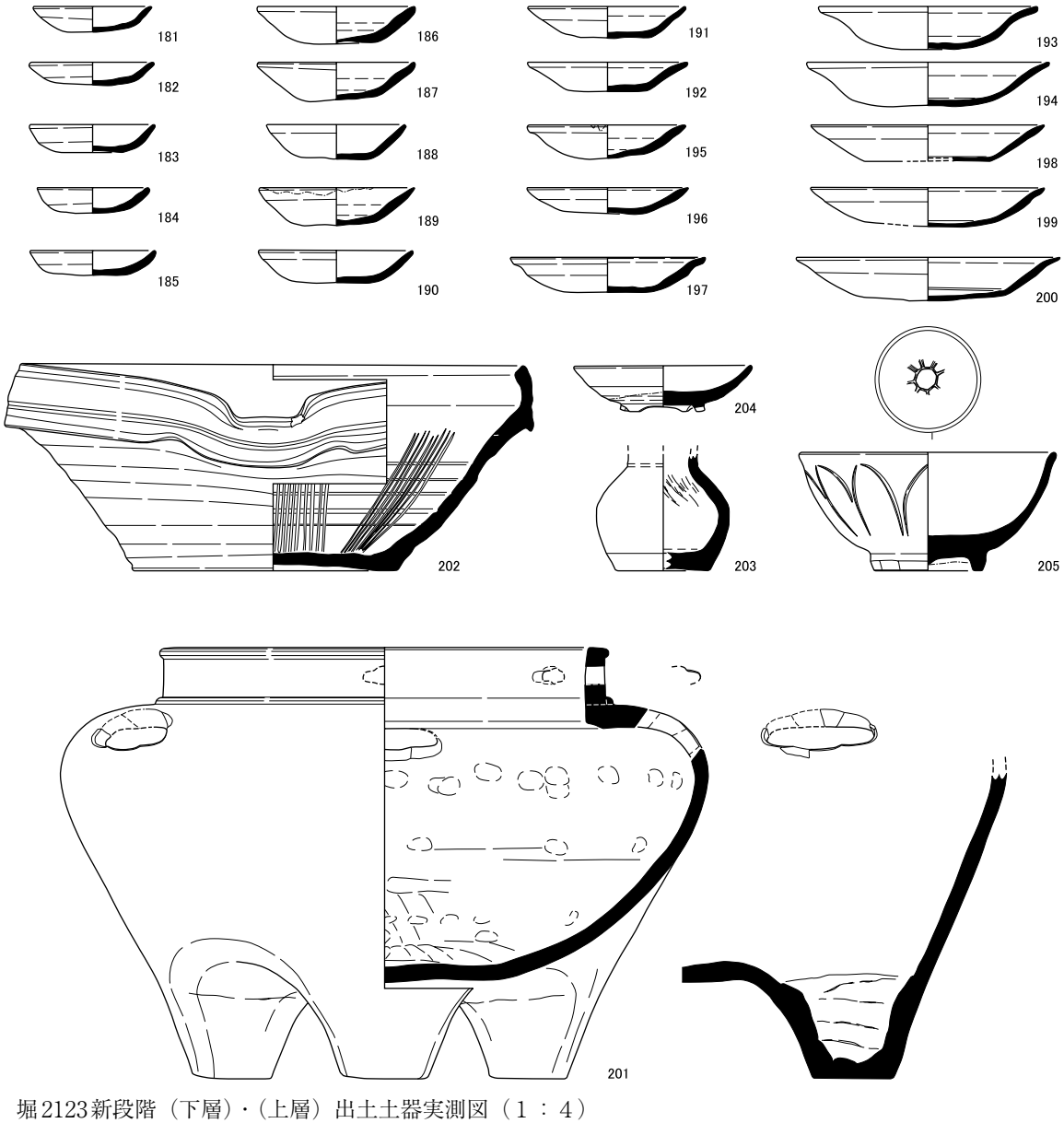


堀2123古段階出土土器実測図（１：４、159のみ１：８）

堀2123新段階（下層）

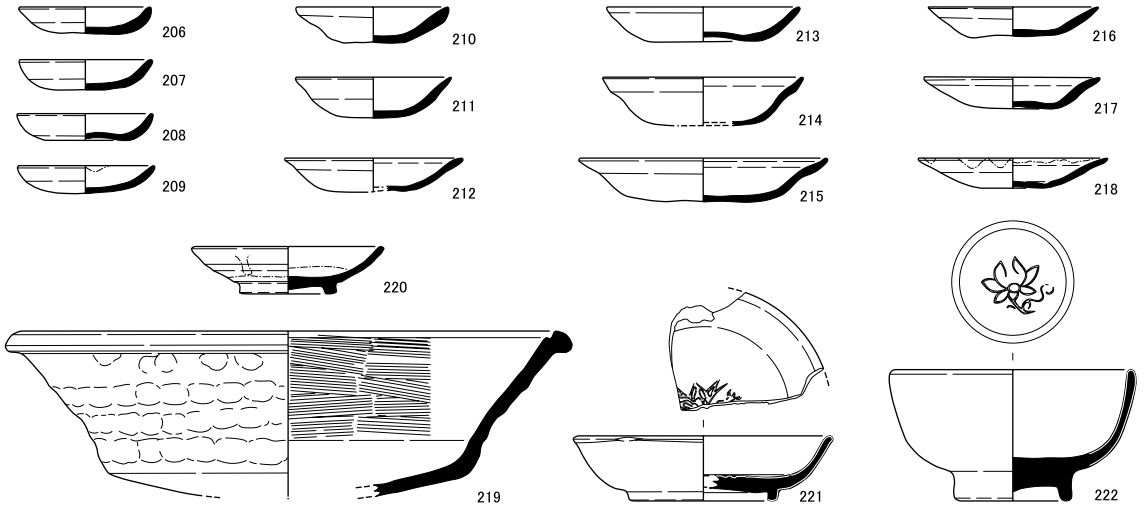


堀2123新段階（上層）

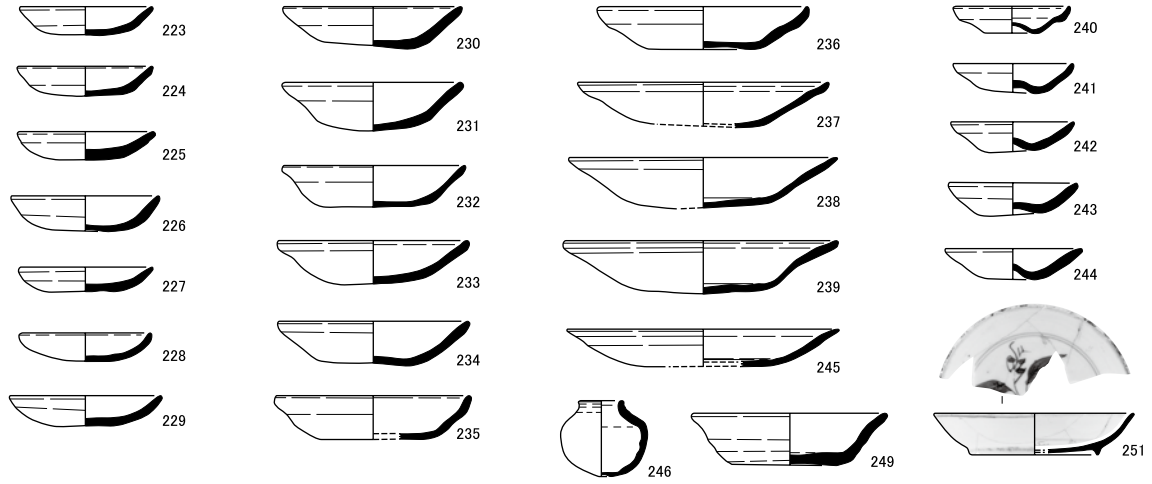


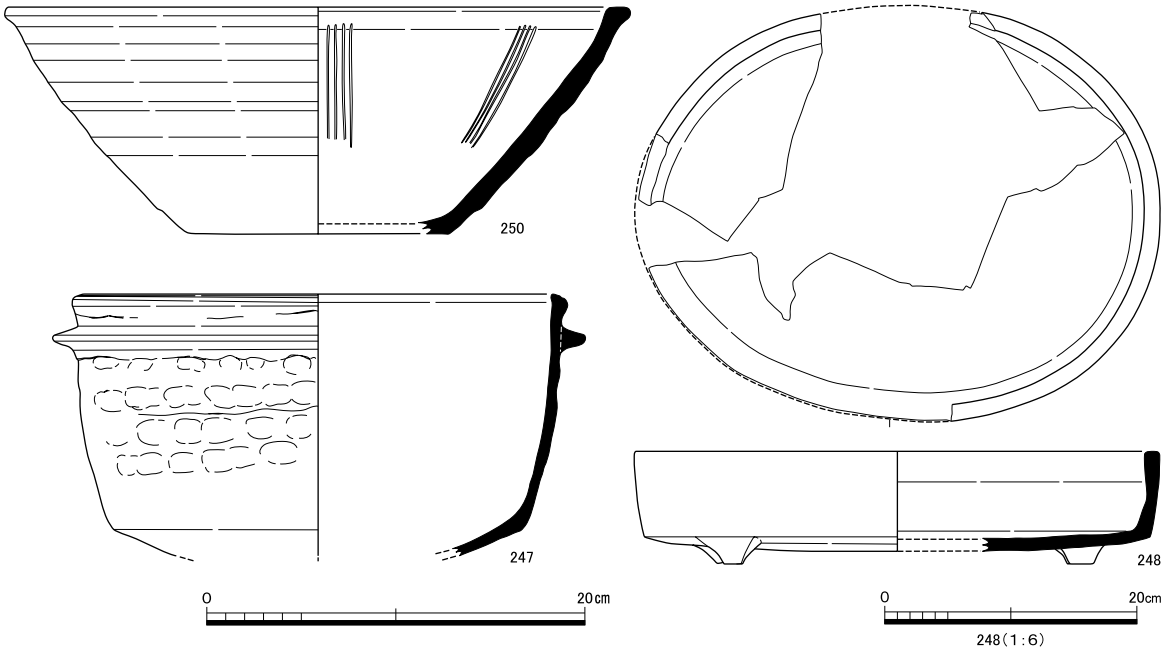
堀2123新段階（下層）・（上層）出土土器実測図（１：４）

堀2123新段階（上層～最上層）



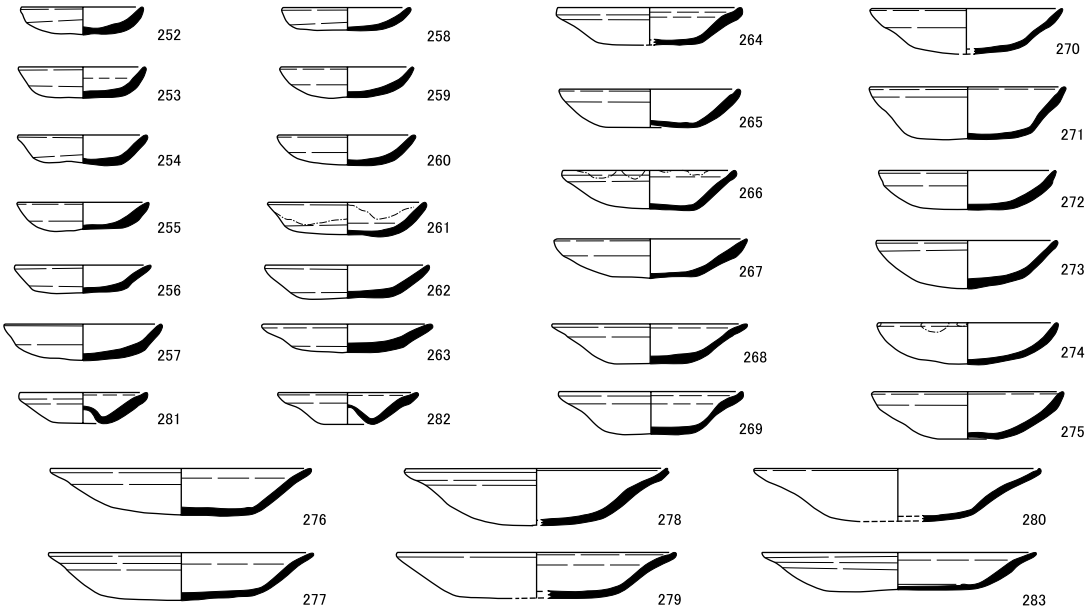
堀2123合流部古段階～中段階



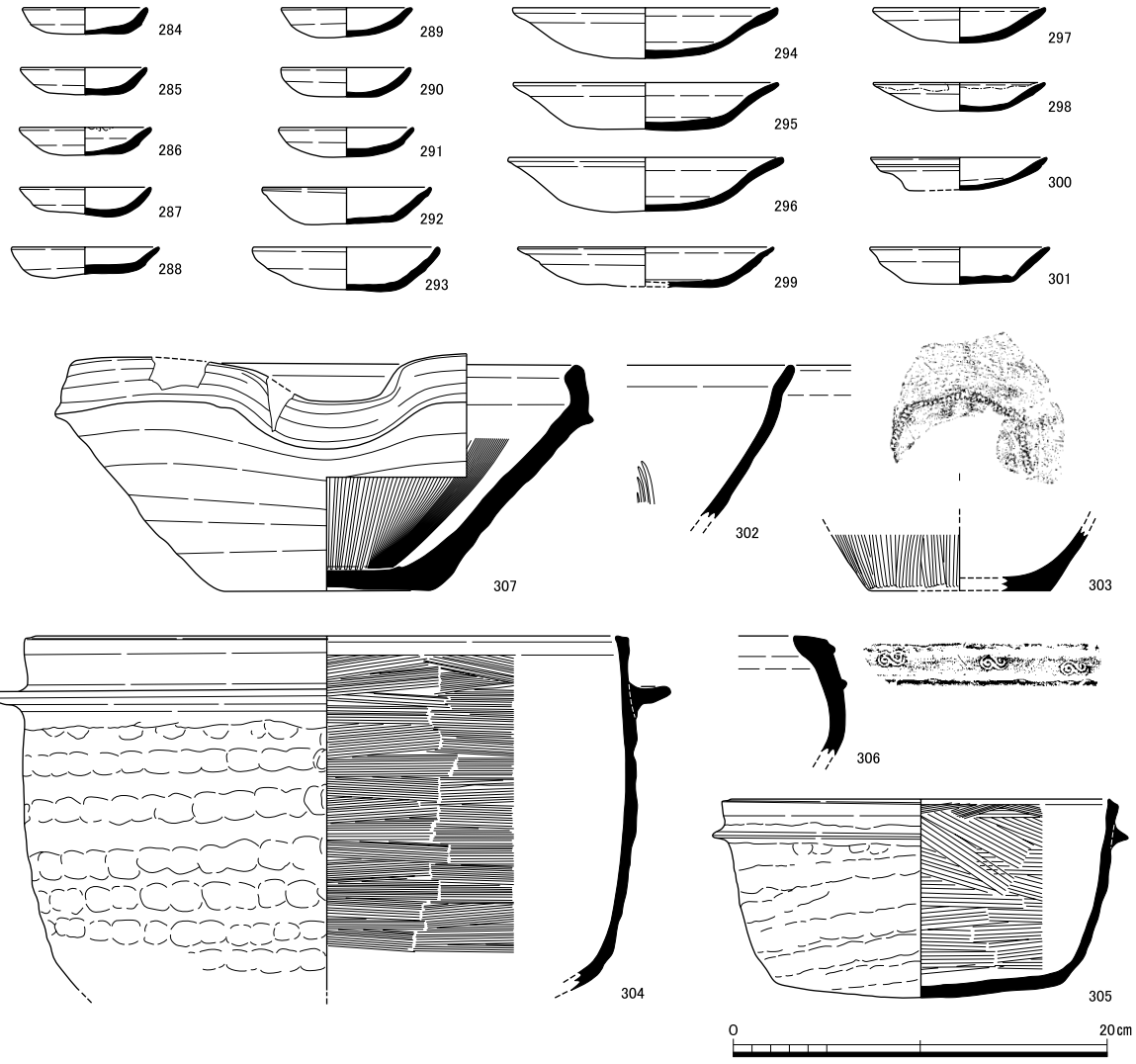


堀2123新段階（上層～最上層）、堀2123合流部古段階～中段階出土土器実測図（１：４、248のみ１：６）

堀2123合流部新段階（下層～上層）

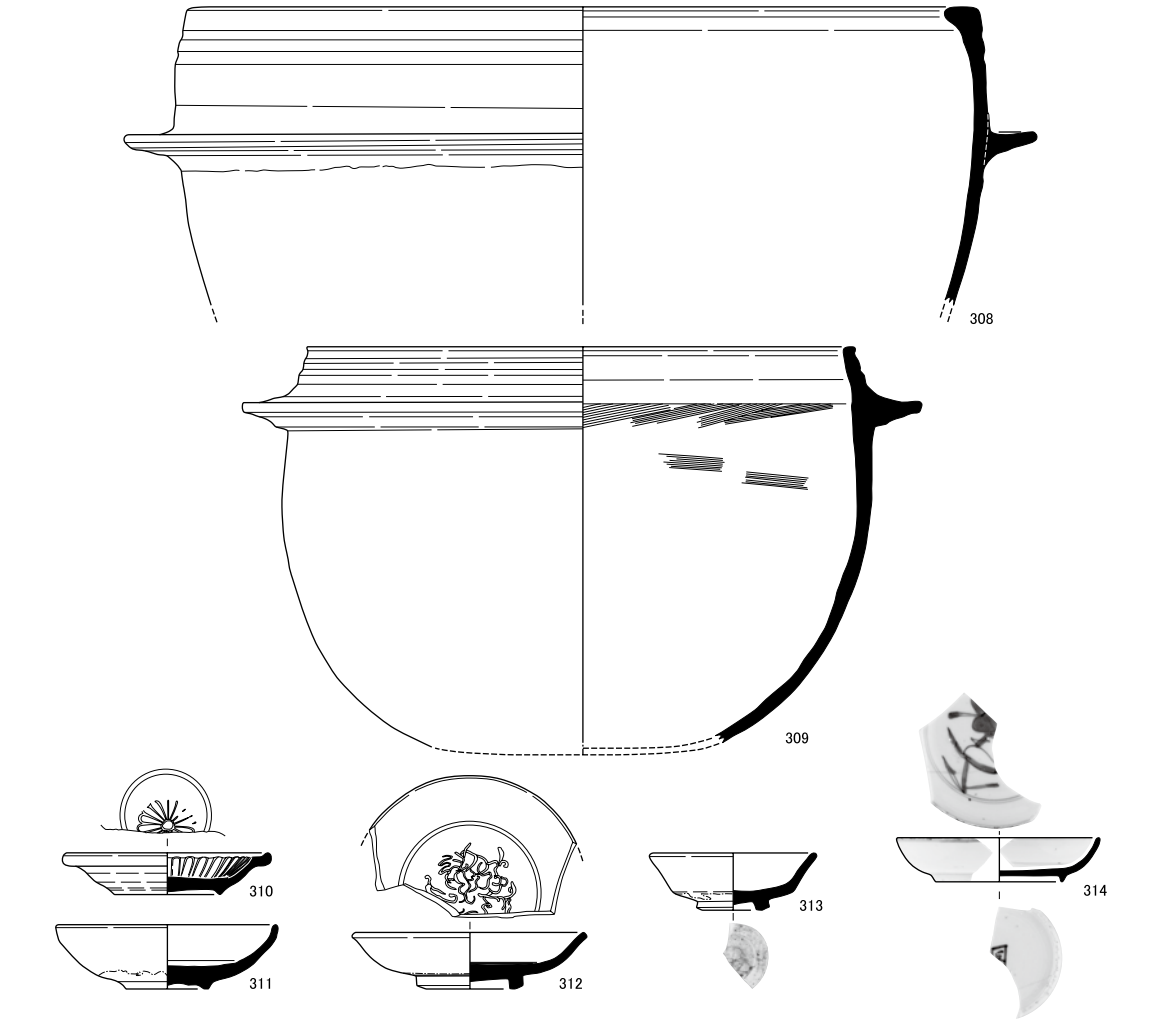


堀2123合流部新段階（最上層）

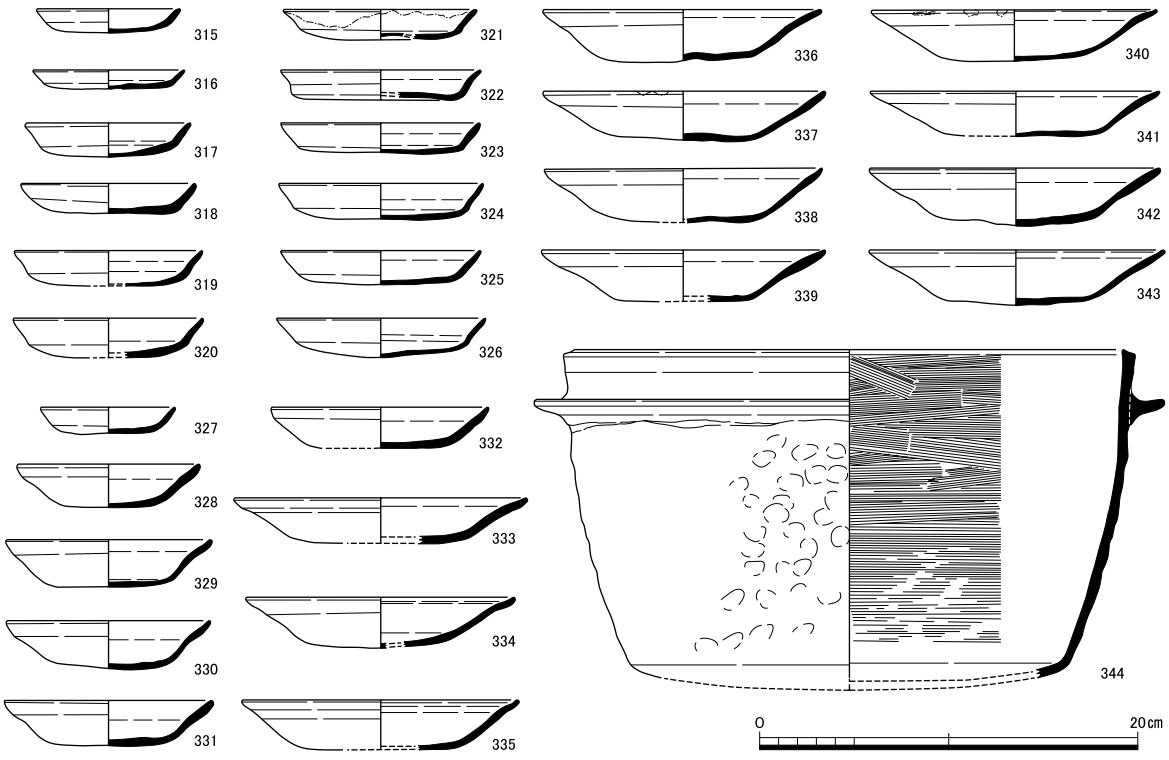


堀2123合流部新段階（下層～上層）・（最上層）出土土器実測図（１：４）

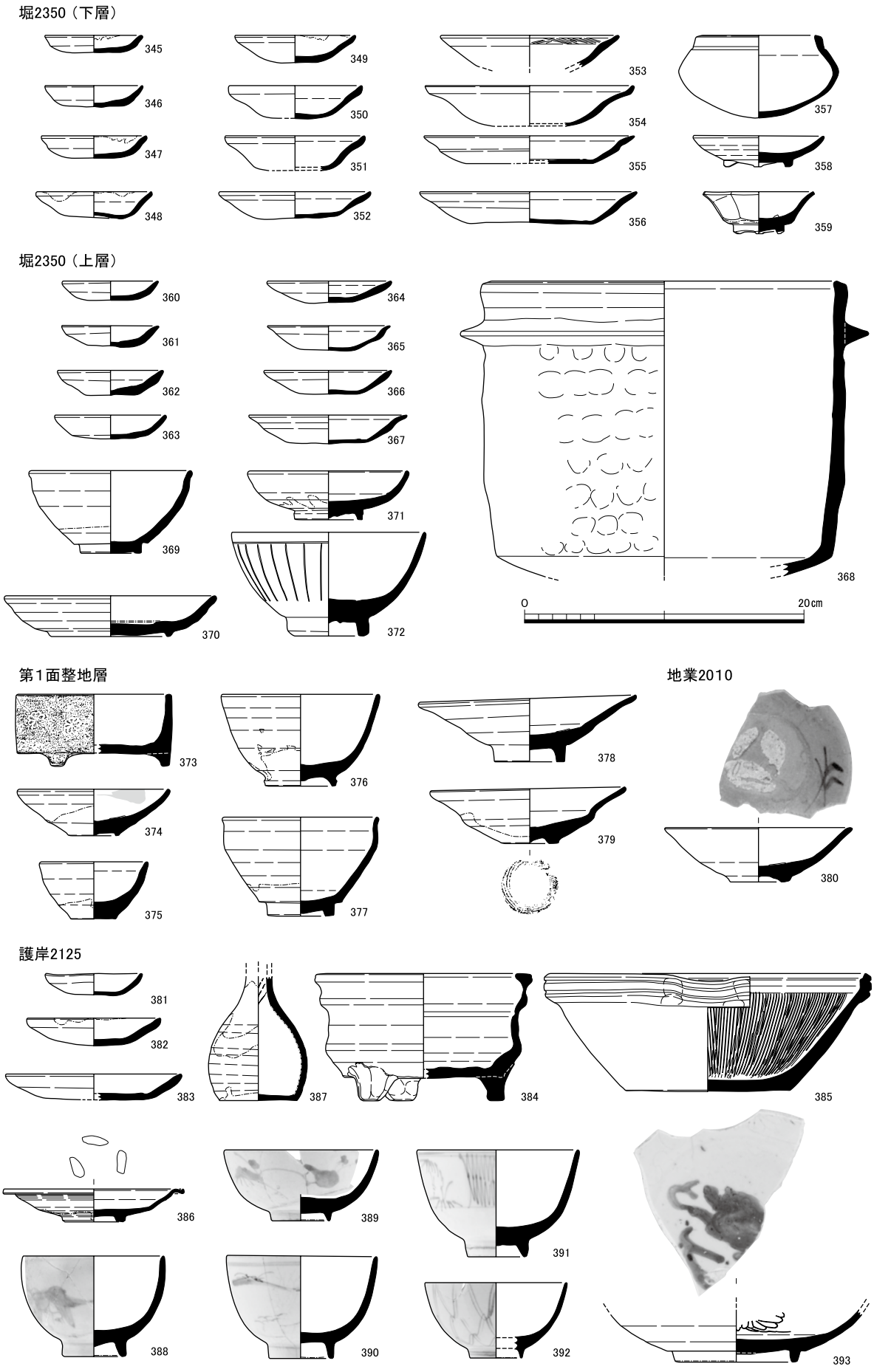
堀2123合流部新段階（最上層）



堀2299

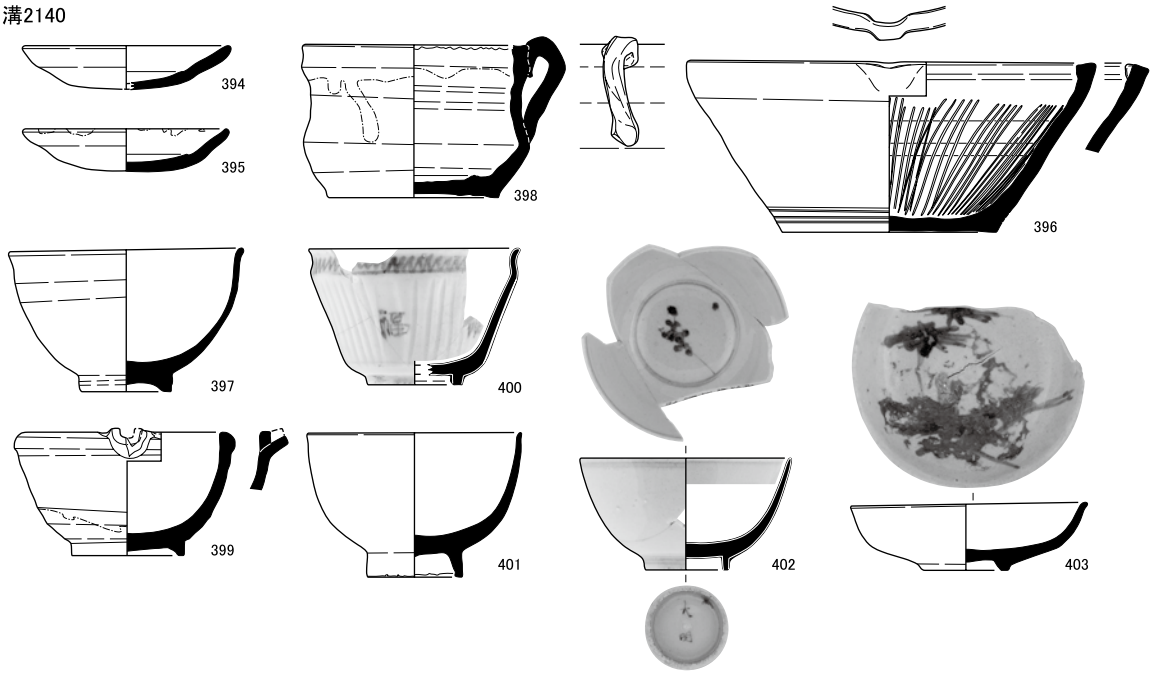


堀2123合流部新段階（最上層）、堀2299出土土器実測図（１：４）

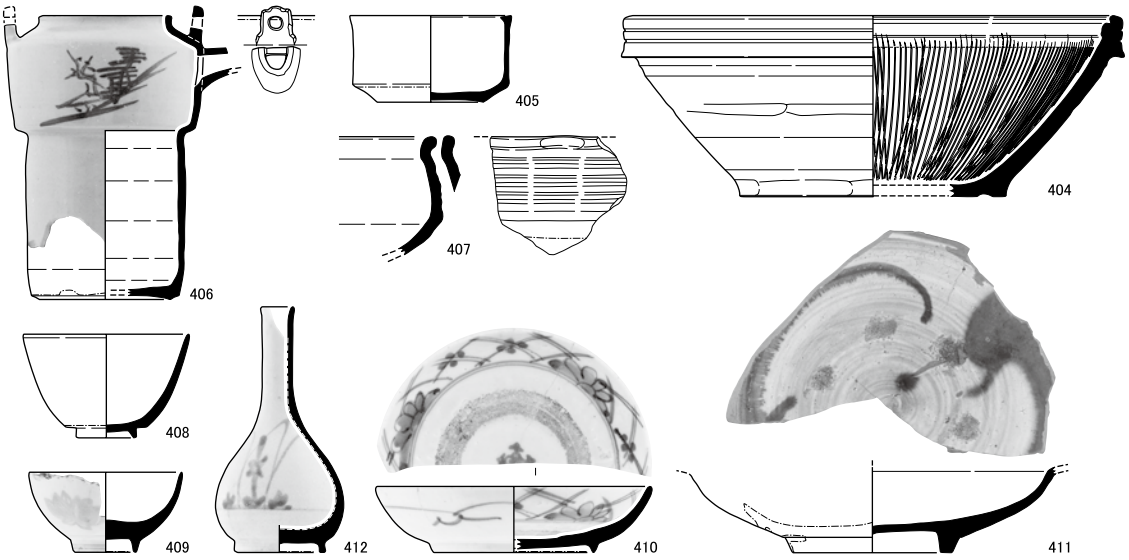


堀2350（下層）・（上層）、第１面整地層、地業2010、護岸2125出土土器実測図（１：４）

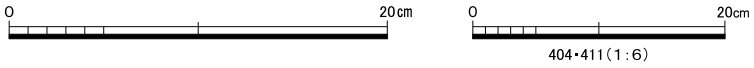
溝2140



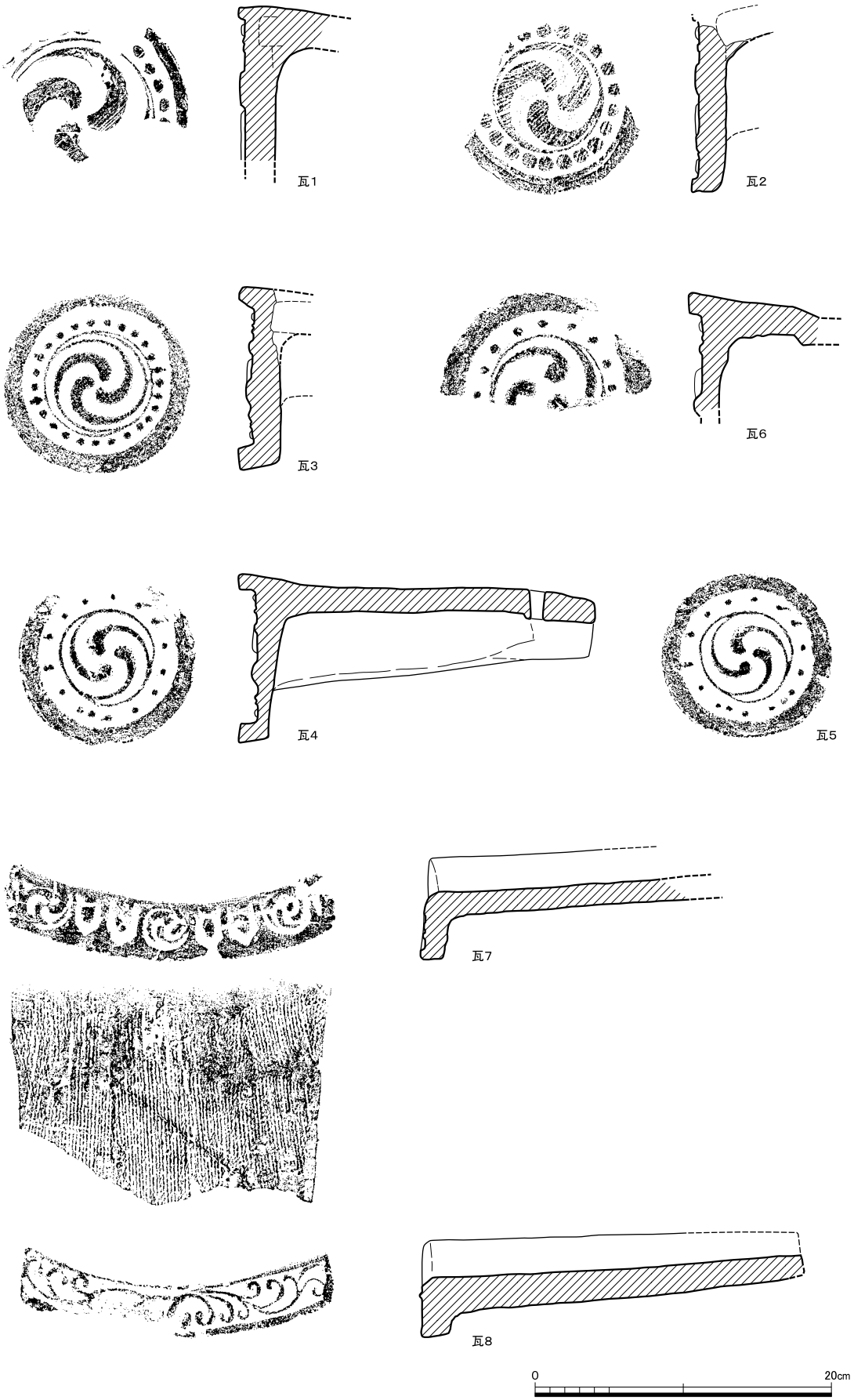
井戸2001



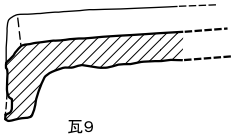
地業2135



溝2140、井戸2001、地業2135出土土器実測図（１：４、404・411のみ１：６）

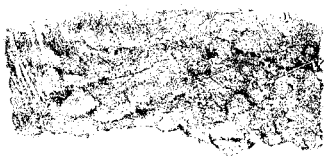


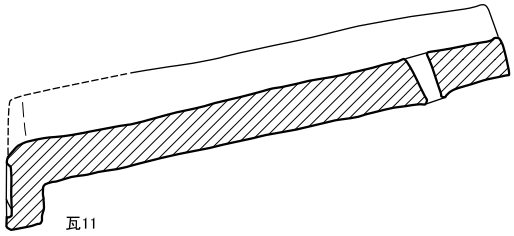
瓦類拓影及び実測図１（１：４）



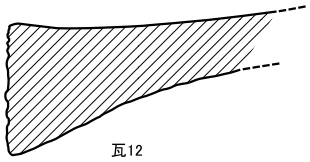
瓦9

瓦10

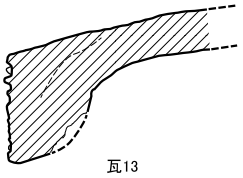




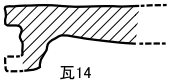
瓦11



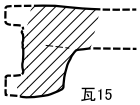
瓦12



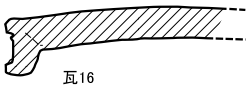
瓦13



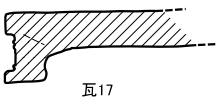
瓦14



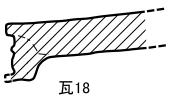
瓦15



瓦16

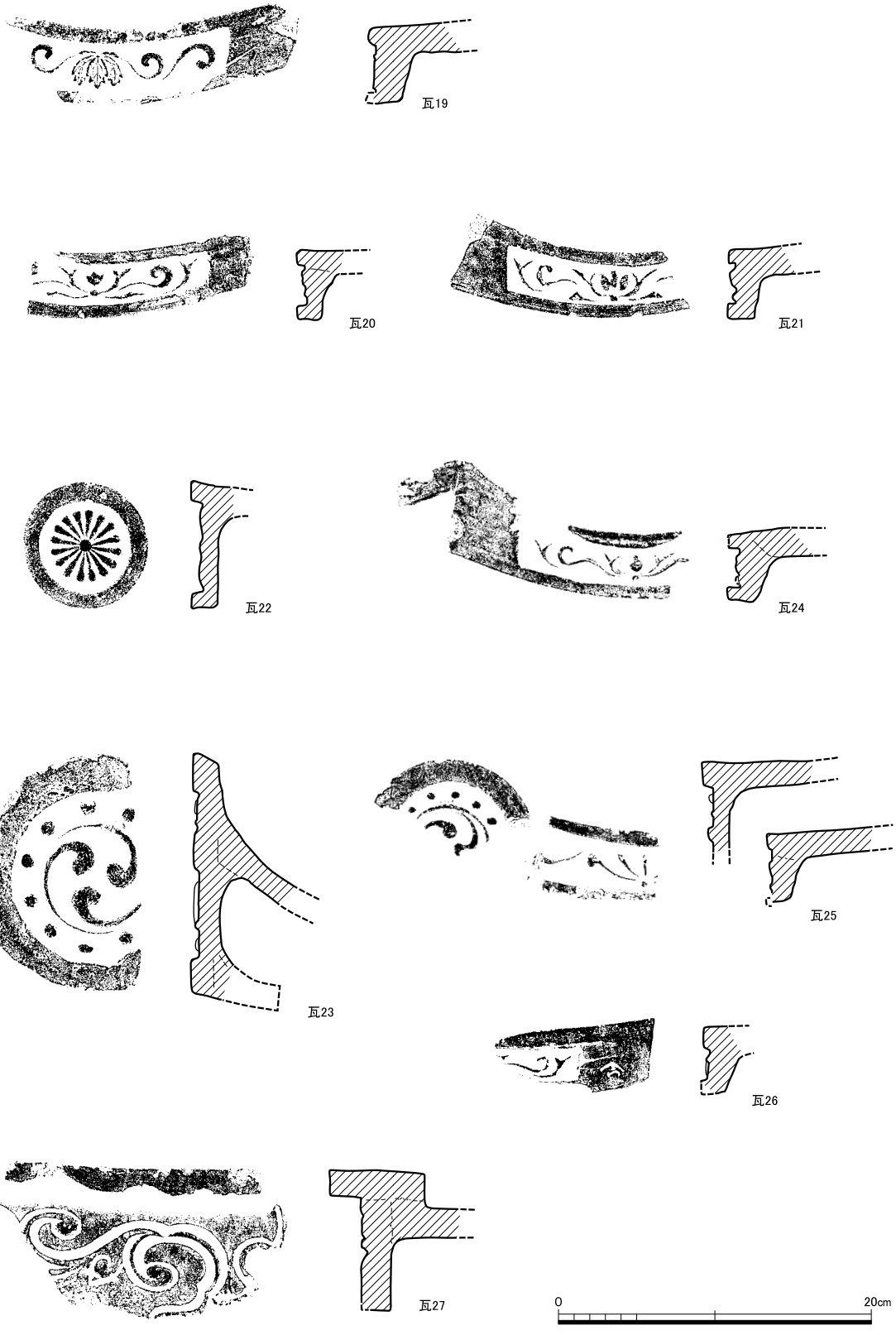


瓦17

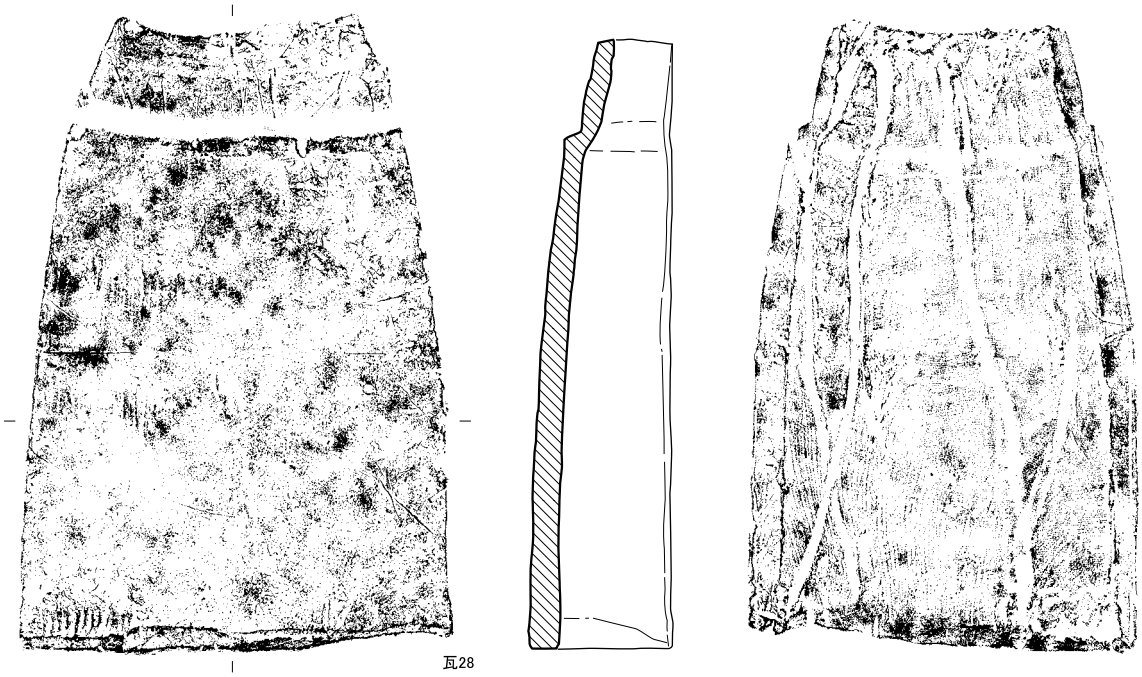


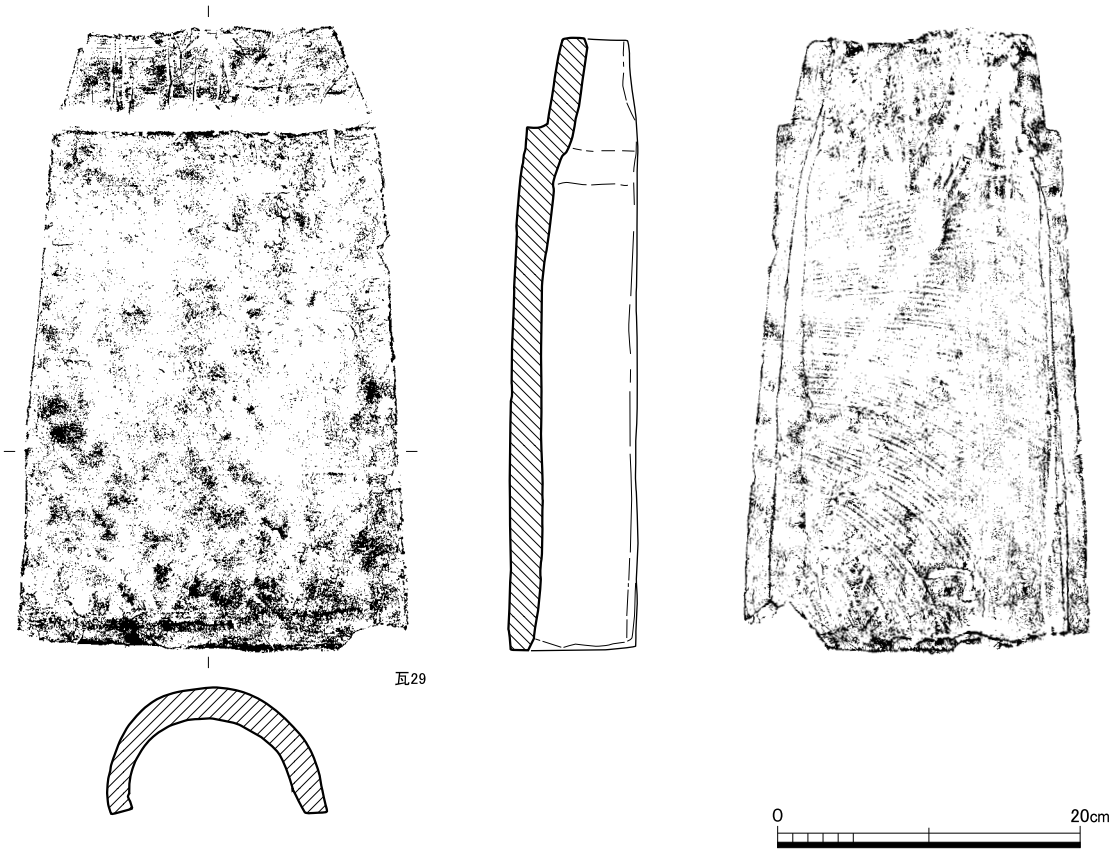
瓦18

瓦類拓影及び実測図２（１：４）

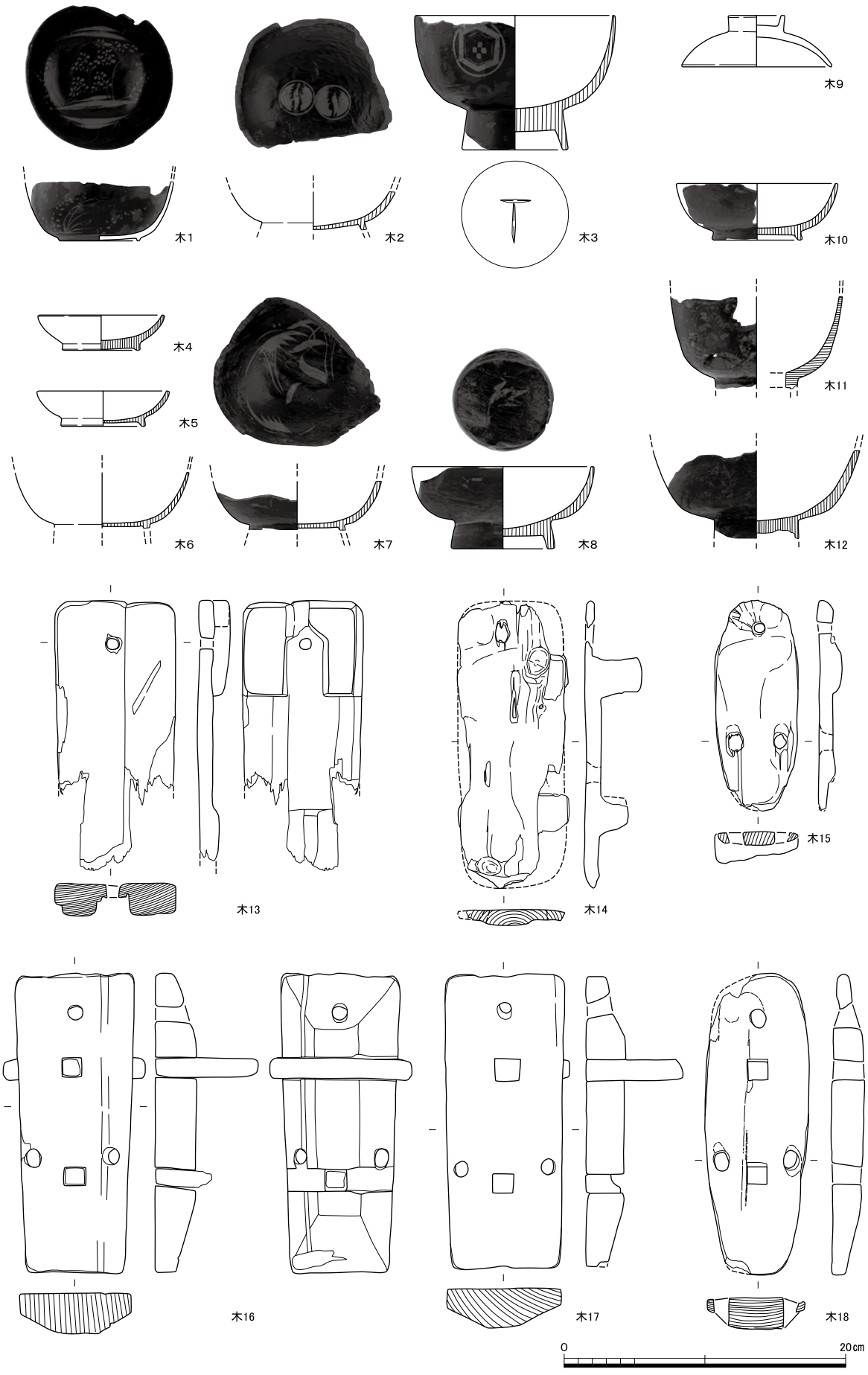


瓦類拓影及び実測図３（１：４）

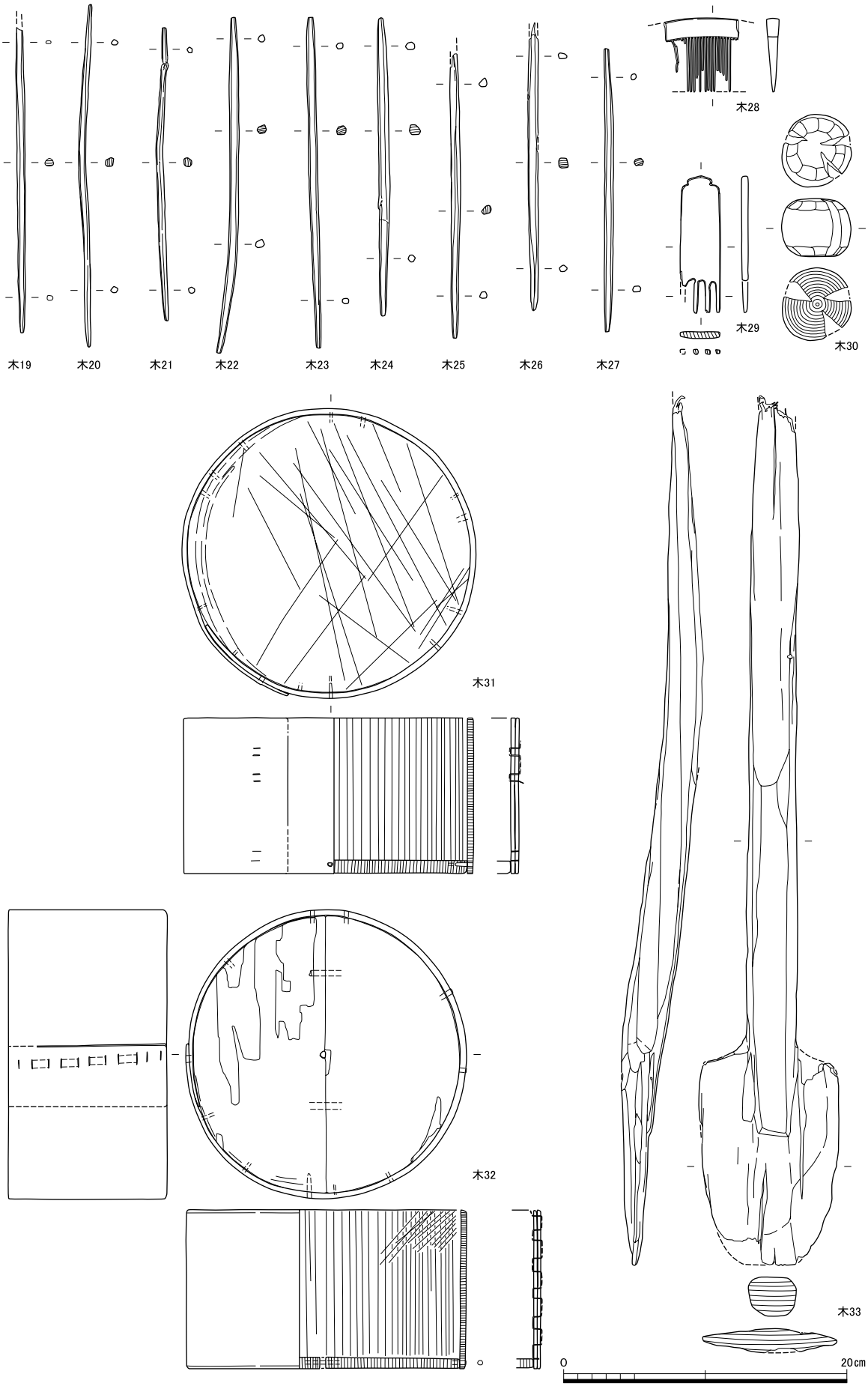




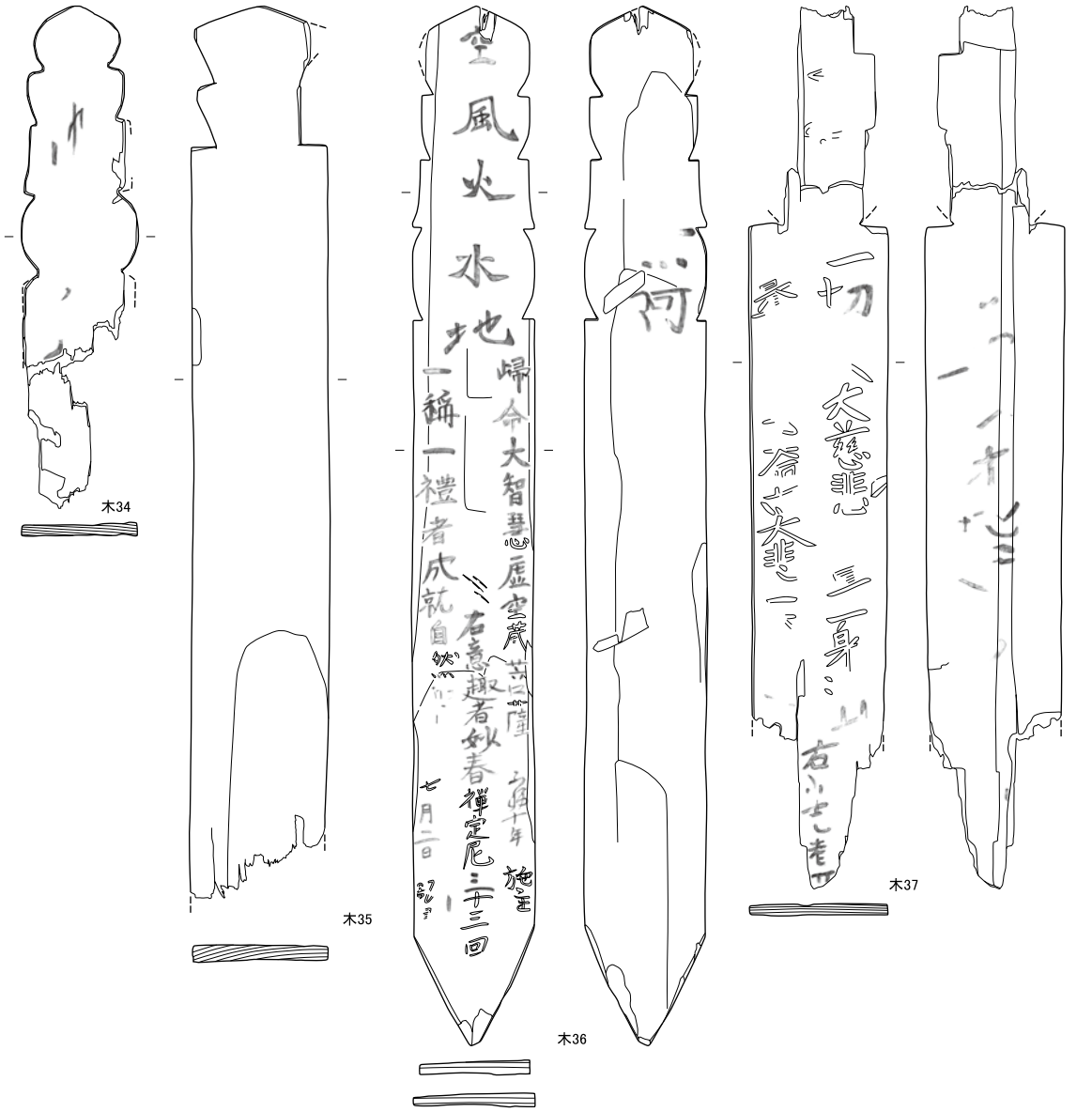
瓦類拓影及び実測図４（１：５）


木1
木2
木3
木4
木5
木6
木7
木8
木9
木10
木11
木12
木13
木14
木15
木16
木17
木18
0
20cm

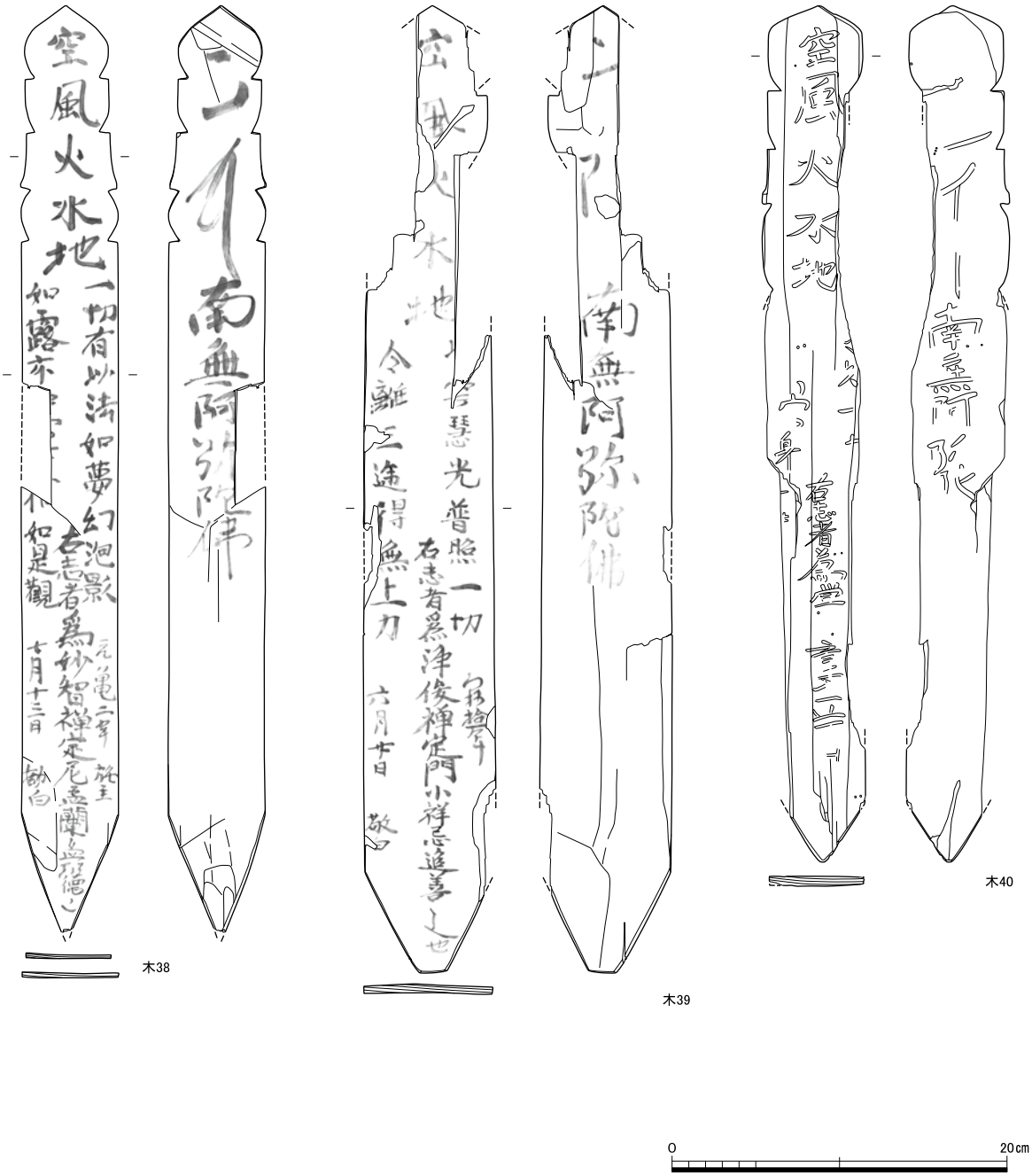
木製品実測図１（１：４）


木19
木20
木21
木22
木23
木24
木25
木26
木27
木28
木29
木30
木31
木32
木33
0
20cm

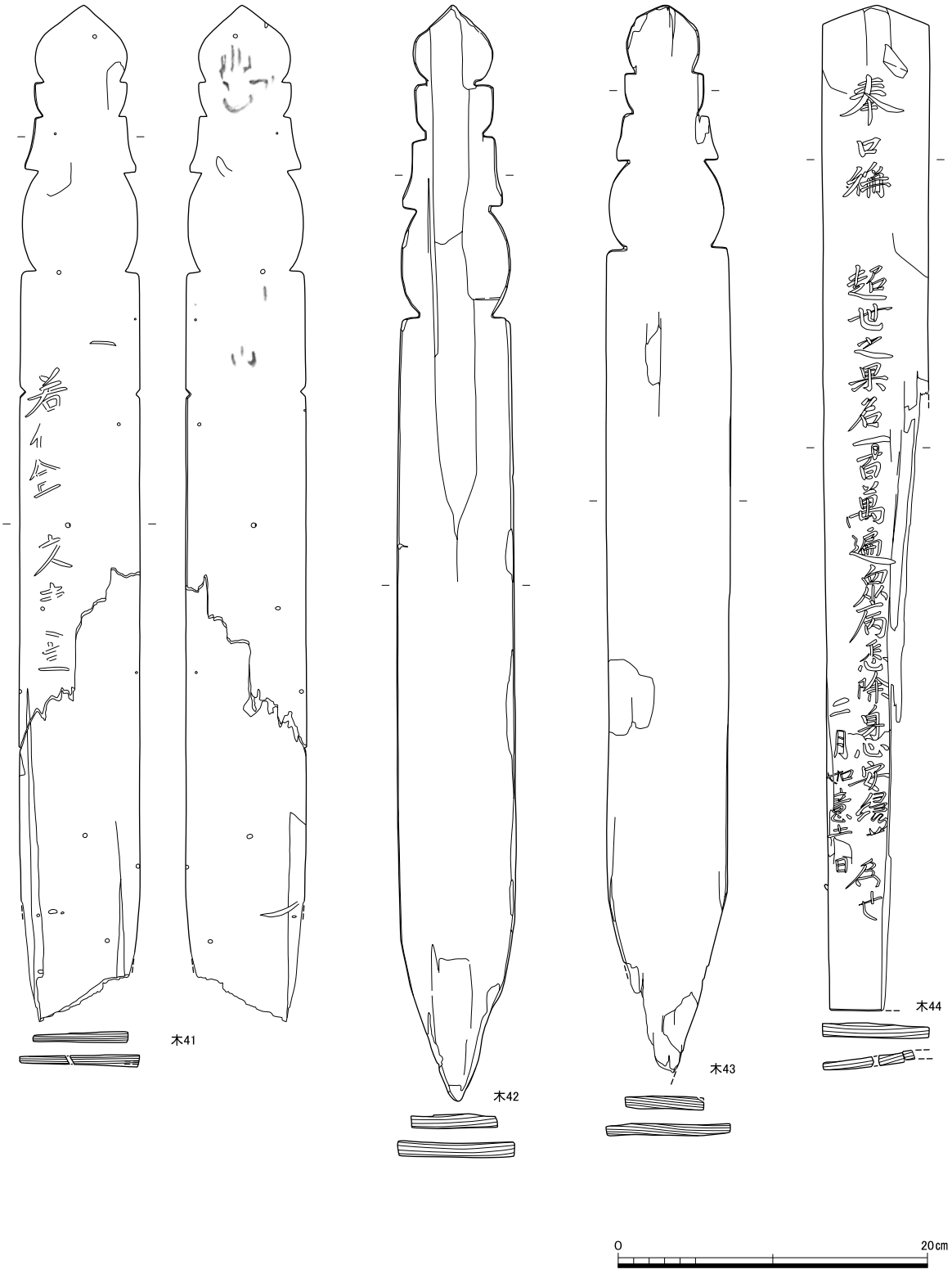
木製品実測図２（１：４）



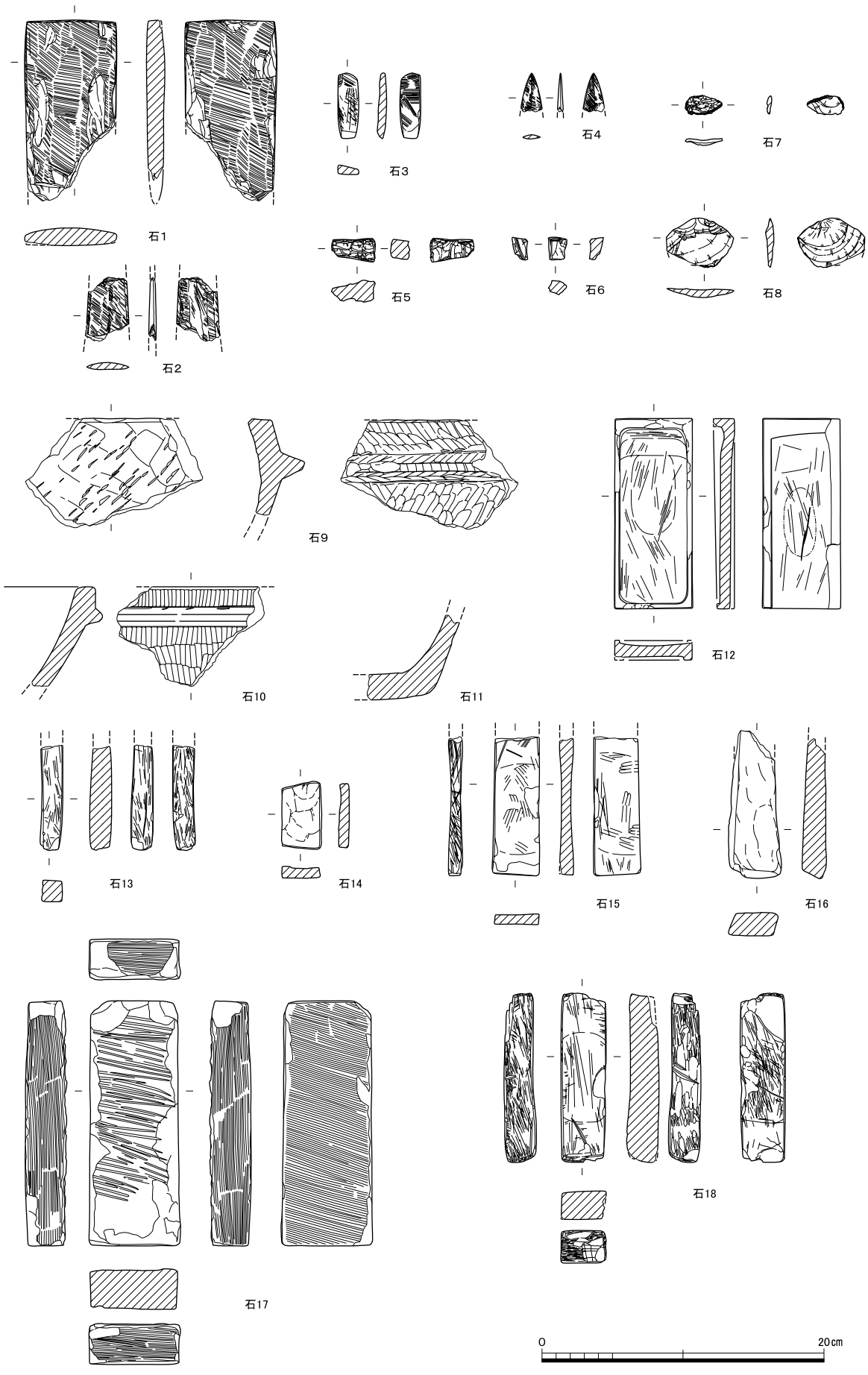
木製品実測図３（１：４）



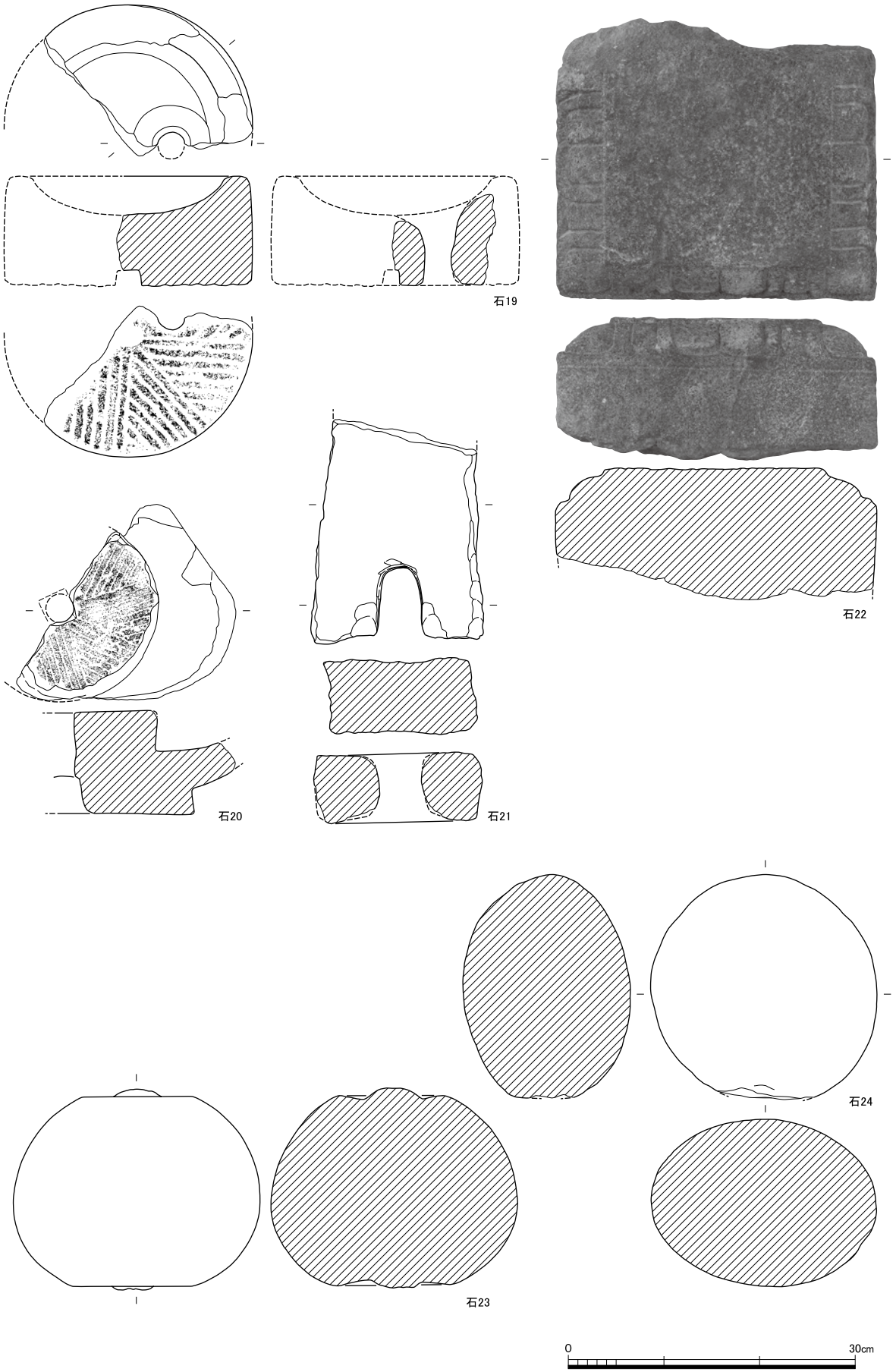
木製品実測図４（１：４）



木製品実測図５（１：４）

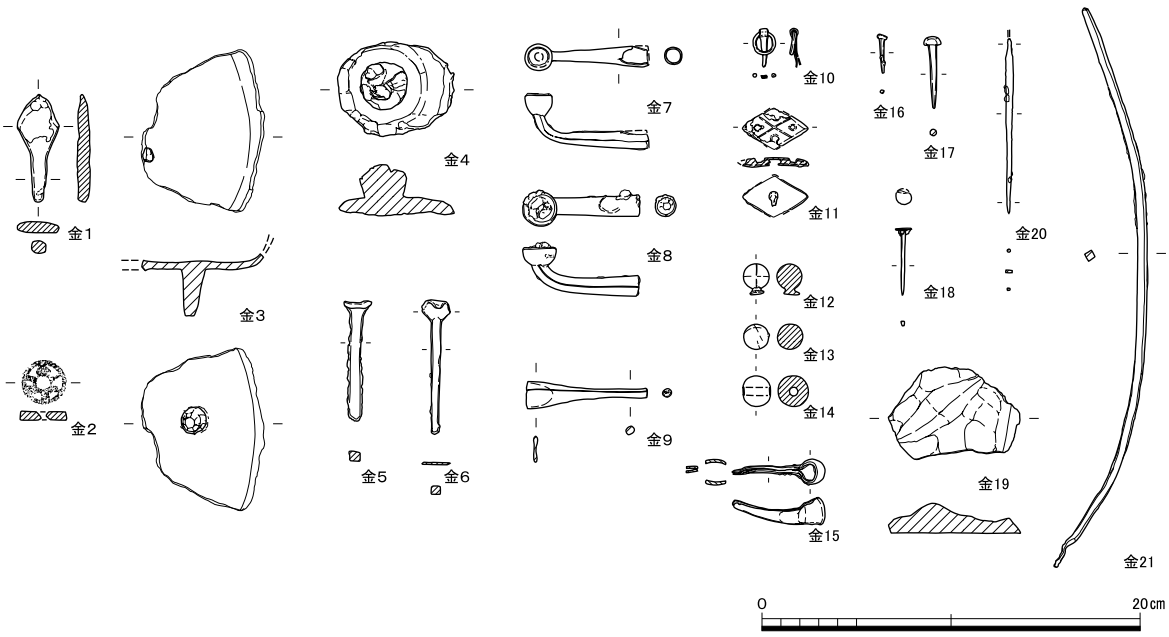

石1
石2
石3
石4
石5
石6
石7
石8
石9
石10
石11
石12
石13
石14
石15
石16
石17
石18
0
20cm

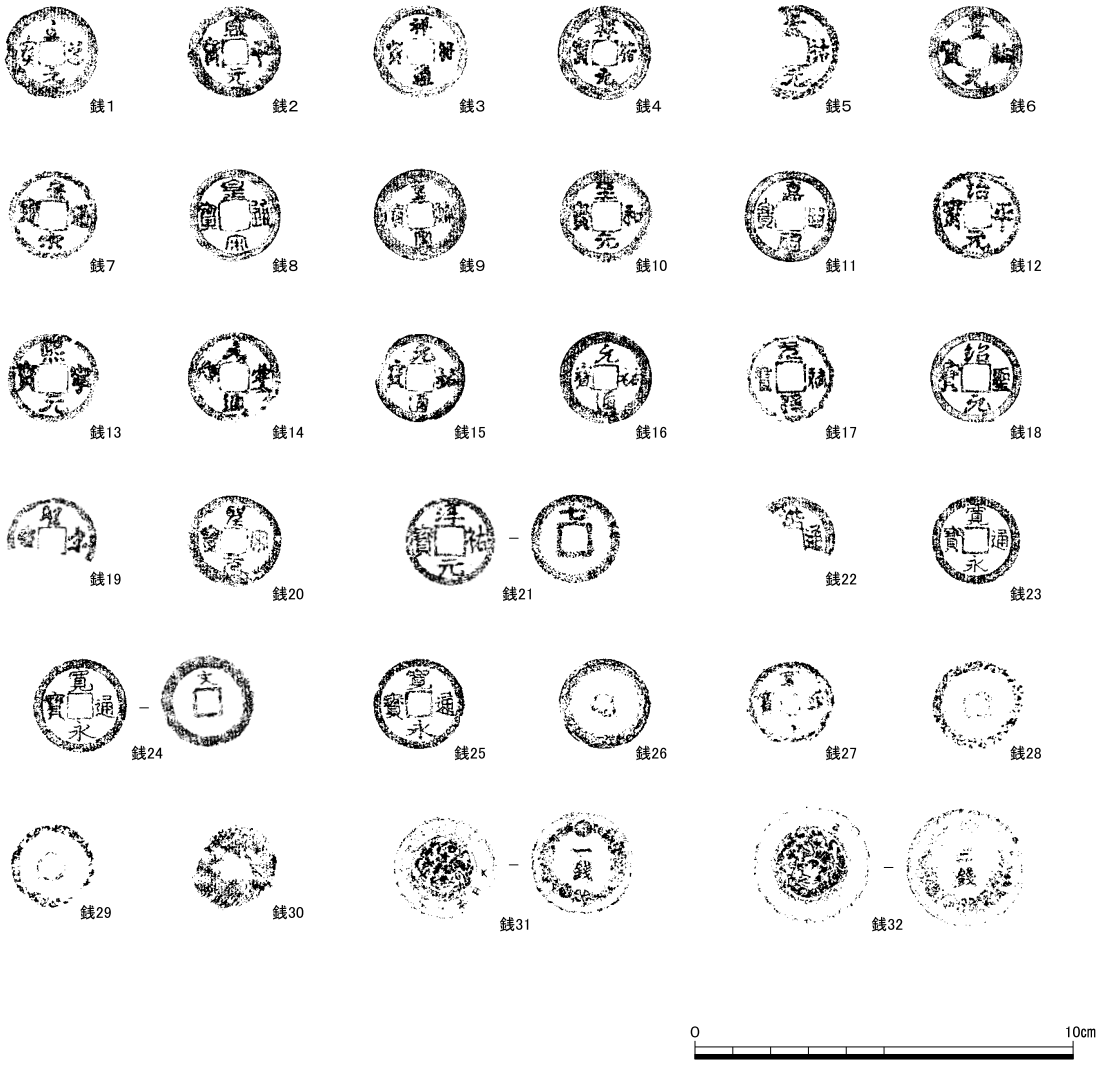
石製品実測図１（１：４）



石製品実測図２（１：６）

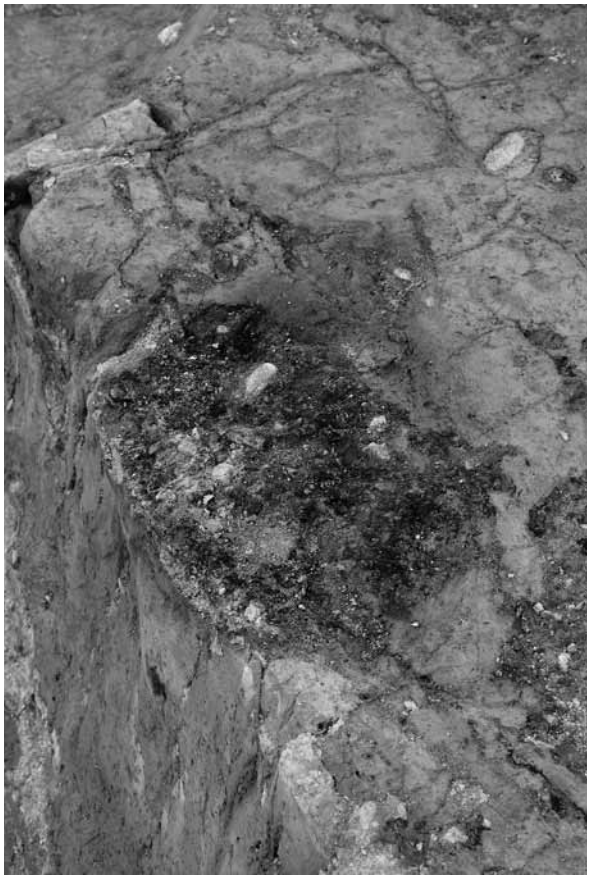
図版57　遺物





金属製品実測図（１：４）、銭貨拓影（１：２）

1　1区第2面全景（北から）

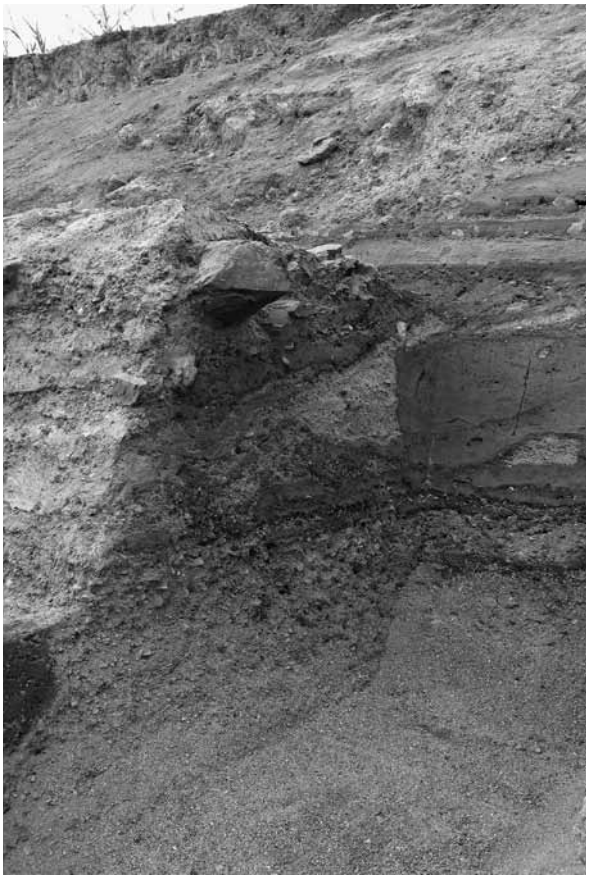


2　炉1013（北東から）

3　土坑1014鉄滓検出状況（北から）

1　1区第1面全景（北から）

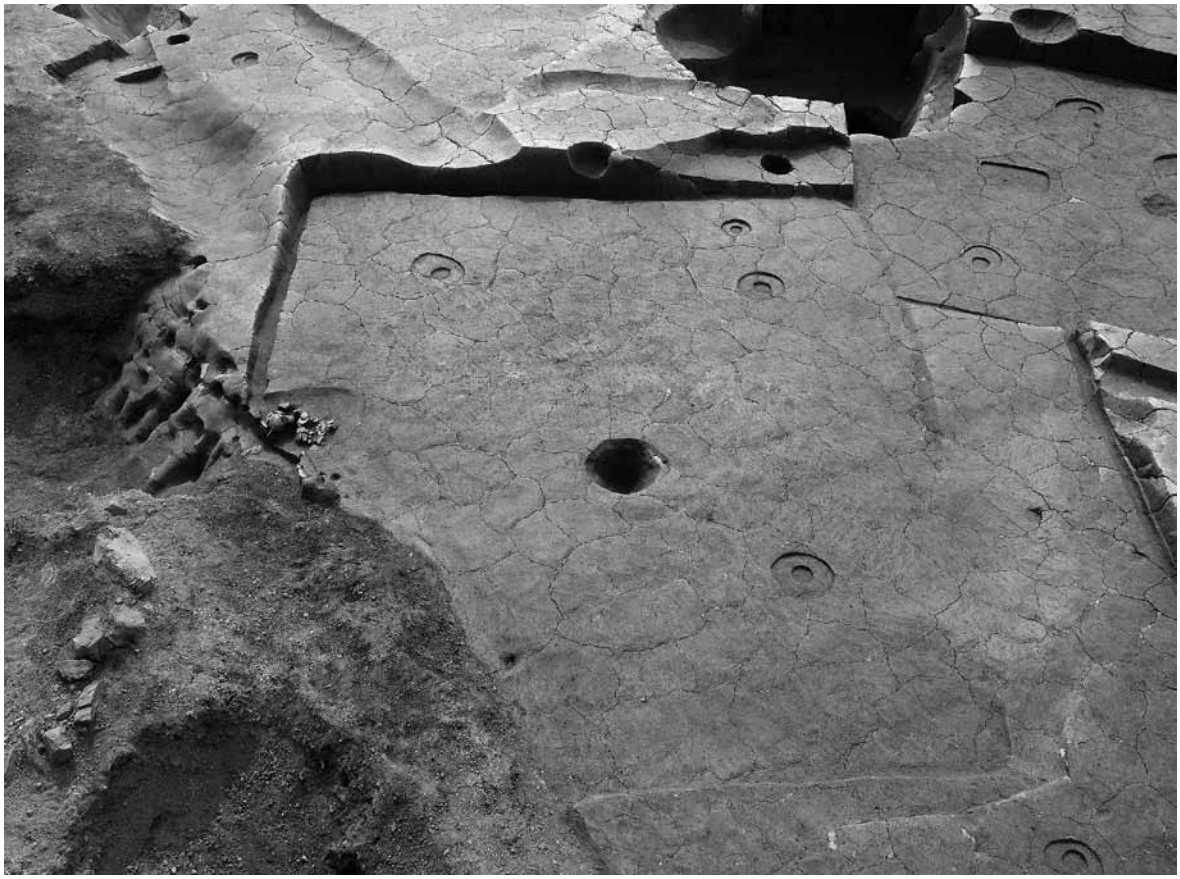
2　護岸1001（北から）



3　護岸1001断割状況（北東から）

1　２区第５面〔下段〕、第３面〔上段〕全景（北から）

2　２区第４面〔下段〕、第２面〔上段〕全景（北から）

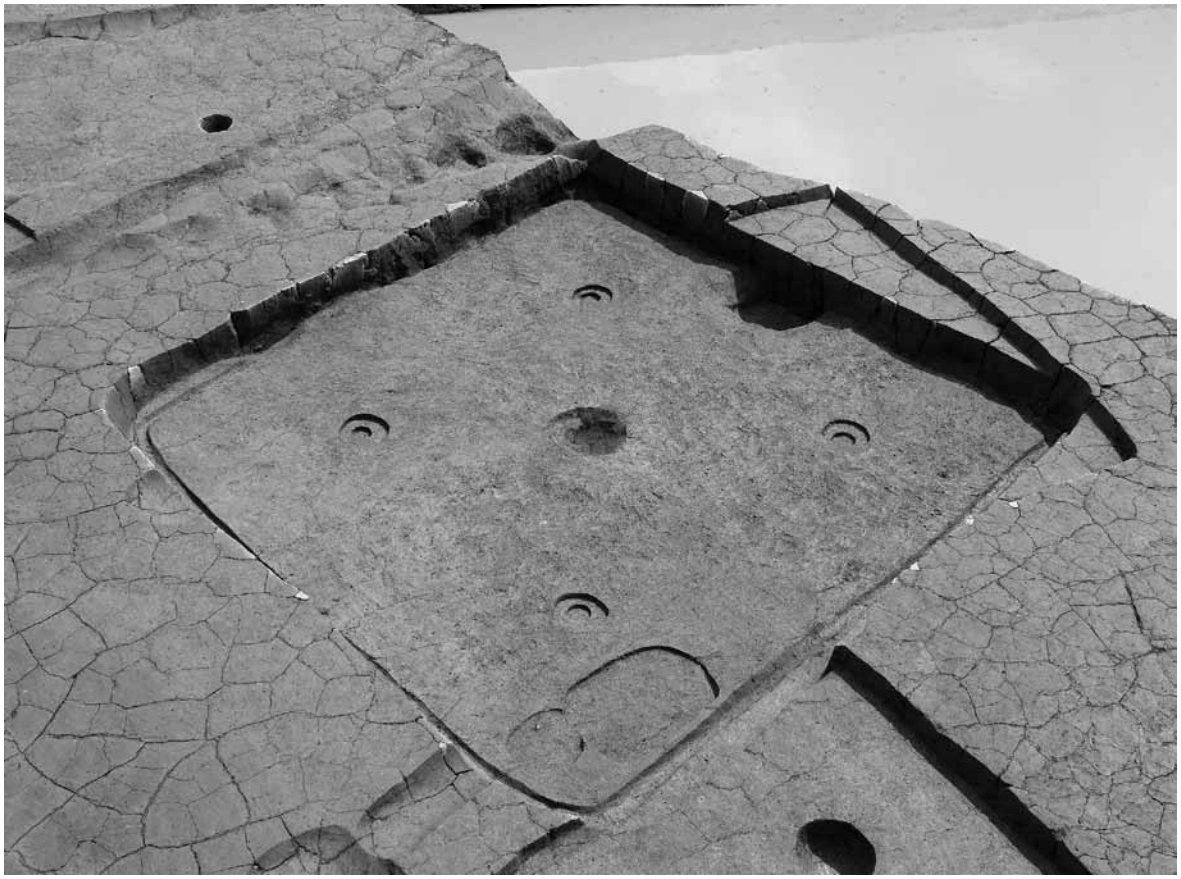


1　第５面 竪穴建物2240（北東から）

2　竪穴建物2240土器出土状況（北東から）

3　第５面 土坑2440土器出土状況（南から）

1　第５面 竪穴建物2368（北から）



2　第５面 竪穴建物2400（北西から）

1　第５面 竪穴建物2410（南西から）

2　竪穴建物2410土器出土状況（東から）

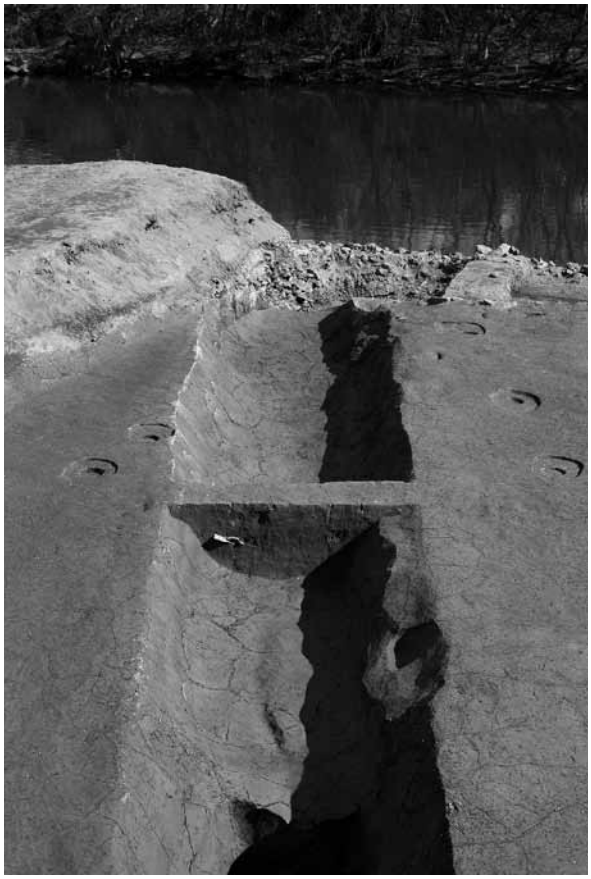
3　第５面 土坑2404土器出土状況（西から）

1　第４面 掘立柱建物2154（南西から）

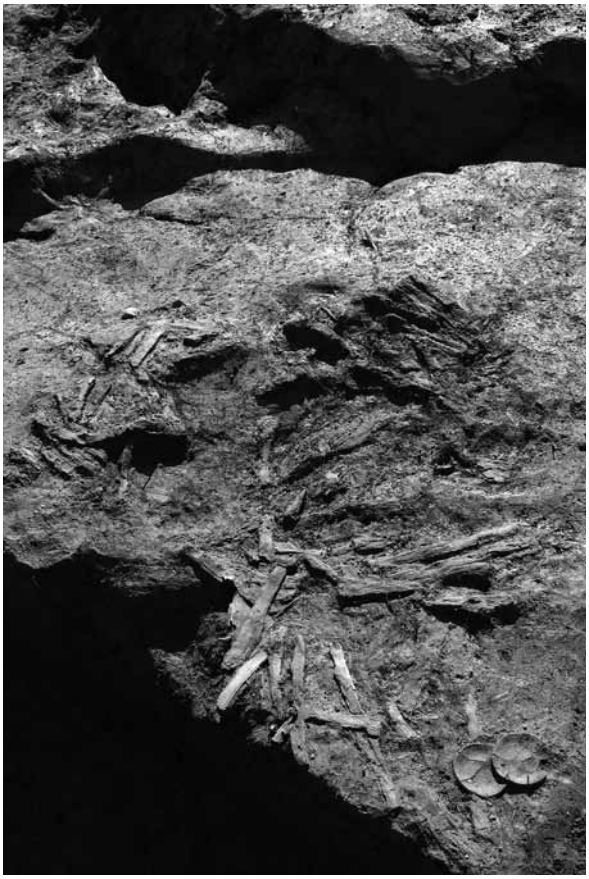
2　柱穴2162土器出土状況（北から）

3　第４面 土坑2326土器出土状況（西から）

1　第３面 堀2123・2299・2350（北東から）



2　堀2123下段部（南西から）



3　堀2123柿経出土状況（北西から）

1　第３面 井戸2225（東から）

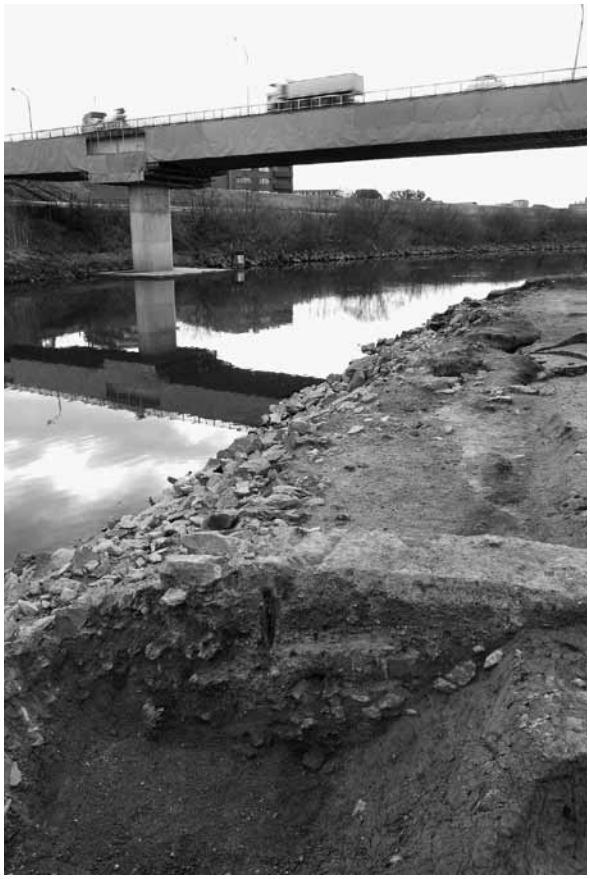
2　井戸2225瓦検出状況（北東から）

3　井戸2225板検出状況（東から）

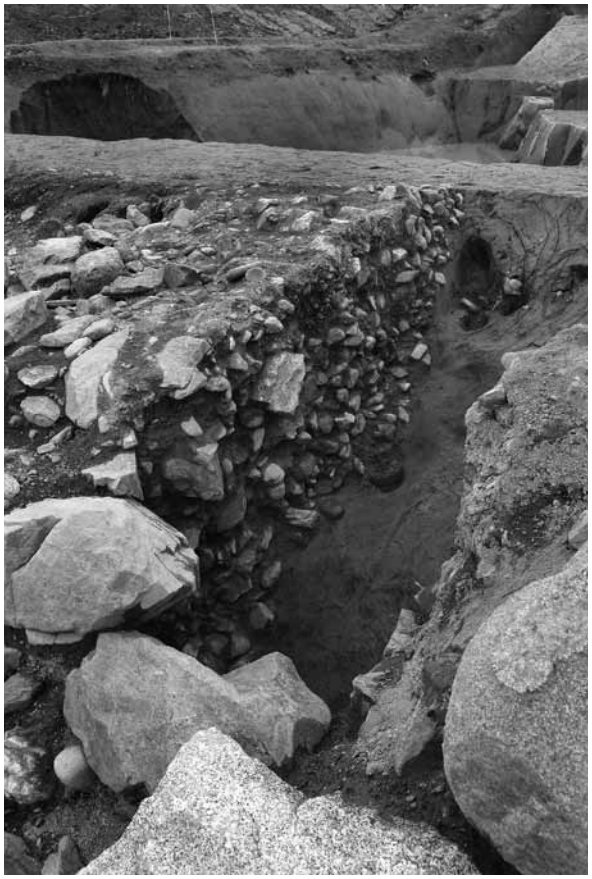
4　井戸2225木枠（北から）

1　第２面 護岸2125（北から）

2　護岸2125南部転落石除去後（北東から）

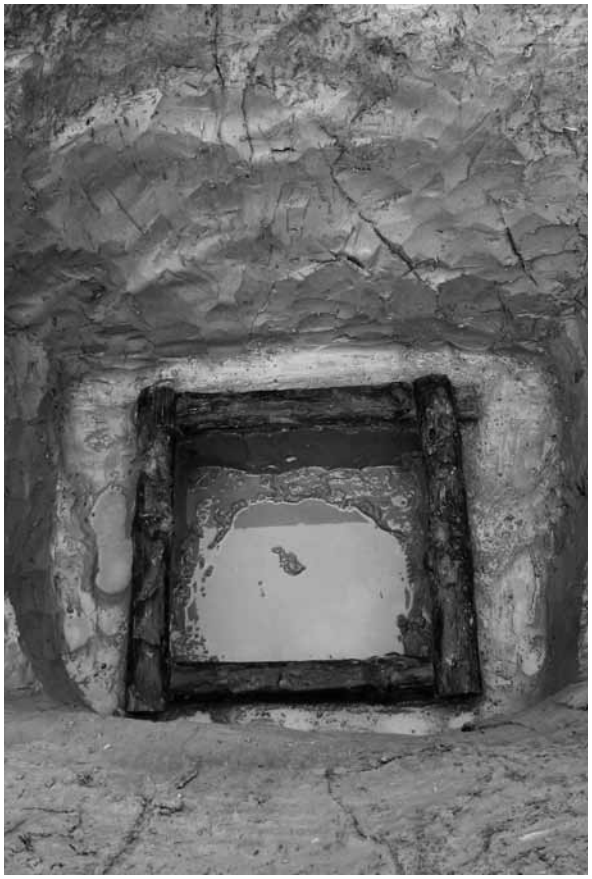


1　護岸2125南部裏込断割状況１（北から）



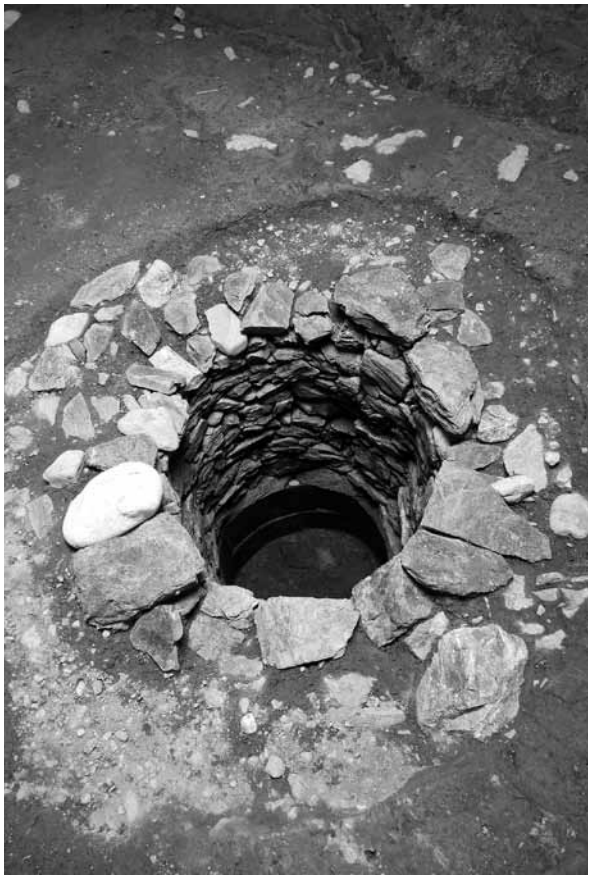
2　護岸2125南部裏込断割状況２（北東から）

3　第２面 井戸2100（北から）



4　井戸2100木枠検出状況（南から）

1　２区第１面全景（北から）



2　井戸2001（北西から）

3　井戸2001井戸瓦・多角形縦板（東から）

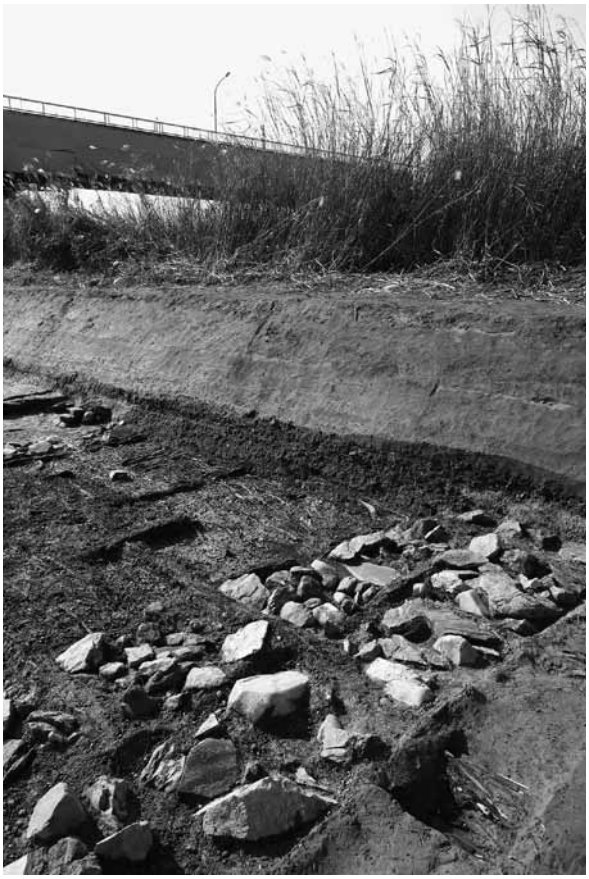
1　井戸2138（北から）

2　地業2010（北から）

3　地業2012（南西から）

1　地業2135（西から）

2　地業2135掘り下げ状況（北東から）



3　地業2135詳細（北東から）

31

45

32

52

55

42

44

64

土器類 1

60

61

65

71

73

76

78

79

82

土器類２

85

86

87

88

93

89

91

90

92

土器類３

113

121

119

126

120

129

149

131

152

134

145

156

土器類４

158

162

184

176

187

178

194

179

196

土器類５

200

204

203

205

202

201

土器類 6

206

229

210

234

211

237

215

239

218

244

220

245

248

土器類 7

252

285

262

292

266

296

269

297

273

298

277

299

279

301

283

305

土器類８

315

323

331

332

338

343

350

356

360

362

366

367

372

378

382

395

土器類９

瓦2

瓦3

瓦5

瓦25

瓦16

瓦17

瓦19

瓦20

瓦21

瓦24

瓦類 1

瓦7

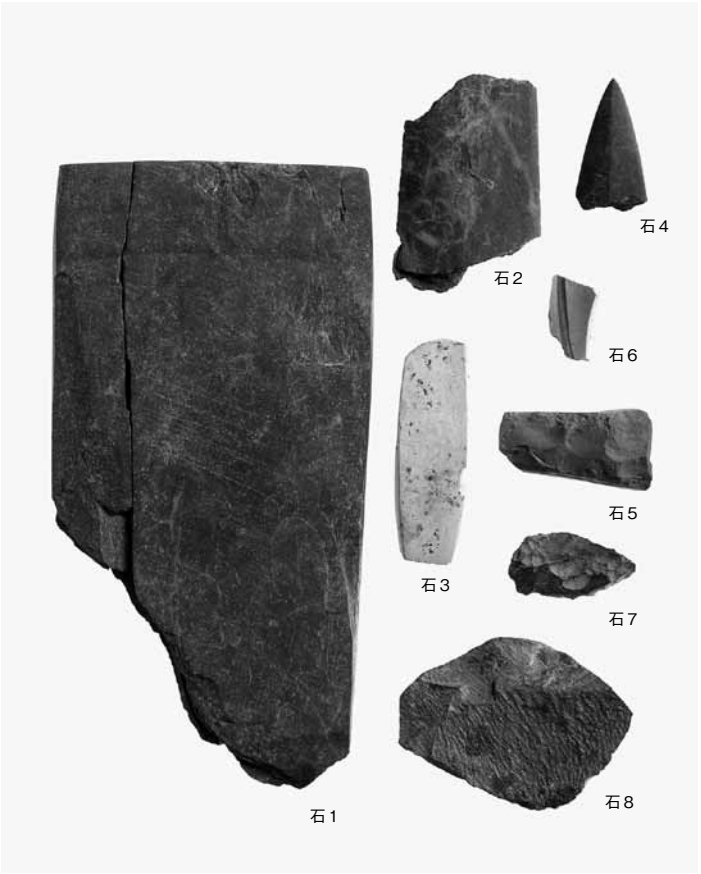
瓦8

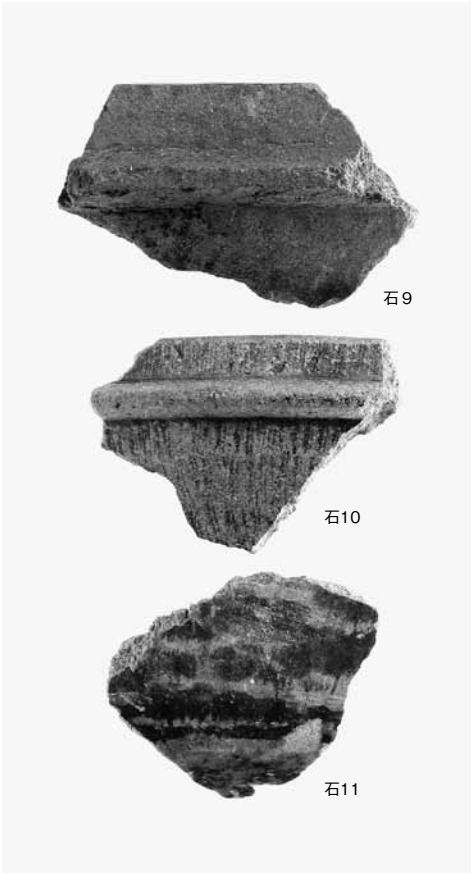
瓦9

瓦11

瓦18

瓦類２





1　石製品

2　製鉄関係遺物

柿経

報　告　書　抄　録

ふ り が な	ながおかきょうあと・よどみずたれおおしもづちょういせき
書　　名	長岡京跡・淀水垂大下津町遺跡
シ リ ー ズ 名	京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告
シリーズ番号	２０２１－１６
編 著 者 名	松永修平・柏田有香・中谷正和
編 集 機 関	公益財団法人　京都市埋蔵文化財研究所
所　在　地	京都市上京区今出川通大宮東入元伊佐町265番地の1
発　行　所	公益財団法人　京都市埋蔵文化財研究所
発 行 年 月 日	西暦2023年２月28日

所収遺跡名（ふりがな）	所在地（ふりがな）	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
長岡京跡（ながおかきょうあと） 淀水垂大下津町（よどみずたれおおしもづちょう） 遺跡（いせき）	京都市伏見区（きょうとしふしみく） 淀水垂町地内（よどみずたれちょうちない）	26100	3 1214	34度 54分 30秒	135度 42分 59秒	2021年11月 15日～2022 年３月31日	1640.5㎡	河道掘削 工事

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
長岡京跡 淀水垂大下津町遺跡	都城跡 集落跡	弥生時代	土坑、落込	弥生土器、石製品	弥生時代中期から明治時代までの間、当地に人々の生活が途切れることなく続いていたことが確認できた。 当地が淀津の一画と考えられる遺構や遺物を検出した。
		古墳時代 ～飛鳥時代	竪穴建物、落込、流路、溝	土師器、須恵器、金属製品	
		奈良時代 ～平安時代	掘立柱建物、柱列、井戸、溝、土坑	土師器、須恵器、灰釉陶器、瓦類、金属製品	
		鎌倉時代 ～室町時代	井戸、柱列、堀、溝	土師器、瓦器、焼締陶器、施釉陶器、輸入陶磁器、瓦類、木製品、石製品、金属製品	
		江戸時代 ～明治時代	井戸、地業、柱列、溝、護岸	土師器、瓦器、焼締陶器、施釉陶器、磁器、輸入陶磁器、瓦類、木製品、石製品、金属製品	

京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告　2021-16

長岡京跡・淀水垂大下津町遺跡

発行日　2023年2月28日

編　集
発　行　公益財団法人　京都市埋蔵文化財研究所

住　所　京都市上京区今出川通大宮東入元伊佐町265番地の1
〒602-8435　TEL 075-415-0521
http://www.kyoto-arc.or.jp/

印　刷　三星商事印刷株式会社

住　所　京都市中京区新町通竹屋町下る弁財天町298番地
〒604-0093　TEL 075-256-0961